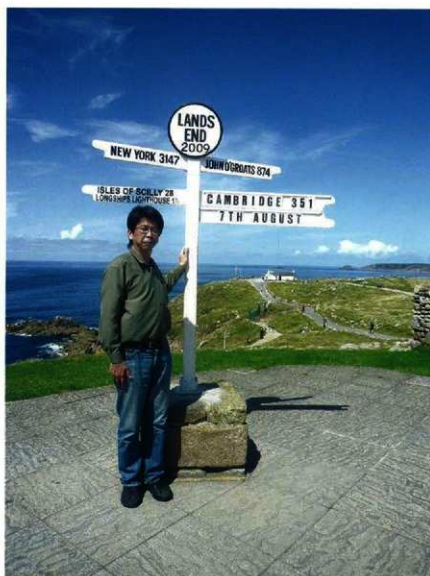


Digging Up

矢野健一先生退職記念論文集



立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻

2025

序

矢野健一先生、ご退職、おめでとうございます。若い人から見れば、定年でやめるのが、なぜ、めでたいのかと思う人もいるかもしれませんが、人生の大波小波を乗り越えて無事定年を迎えるのは、なかなか大変なことなのです。みんなで大いにお祝いしたいと思います。

矢野先生は、前任の家根祥多先生の後任として、2002年に兵庫県西宮市にある辰馬考古資料館から立命館大学文学部日本史学専攻考古学コースに着任されました。旧石器・縄文時代ゼミを担当し講義を行うかたわら、学生らを率いて幾度も、滋賀県杉沢遺跡を発掘するとともに、韓国・伝統文化大学校主催の松菊里遺跡の発掘にも参加し、多くのゼミ生、学芸員実習生、院生らを育て、2012年には、他の先生方と、文学部改革の一環として日本史研究学域に考古学・文化遺産専攻を立ちあげ、教育研究の充実を図ってられました。

一方、研究では、縄文土器研究を中心に、定住、集落、貯蔵穴、人口変動、弥生化など、縄文時代を理解するうえで基本となる諸問題に本格的に取り組みつつ、1999年には有志とともに関西縄文文化研究会を立ちあげ、一時は代表として会を牽引してられました。その功績の大きさは言うまでもありません。その甲斐あって、2013年度には「土器編年研究からみた西日本の縄文社会」で京都大学から博士号が与えられ、2017年には茅野市から優れた縄文研究者に贈られる宮坂英式記念「尖石縄文文化賞」が授与されました。

また、2008-9年にイギリスに留学される前後からは、海外の研究者とも積極的に交流し、学会などで発表されています。2012年、イギリスのサイモン・ケイナー博士と共同で「農耕の起源」をテーマに日本や欧米の研究者を立命館大学に招いてシンポジウムを催されたことや、理工学部のロボット工学の川村貞夫先生らと行っていた滋賀県葛籠尾崎湖底遺跡での水中考古学の成果を、2011年にアメリカ合衆国テキサス州での世界湖沼会議で共同発表されたことなどは、私の記憶に残る主なものです。また、2013年の世界考古学会議京都大会でも活躍されましたし、大学の環太平洋文明研究センター関係でも、学生を連れてバレーを調査訪問するなど活発に活動されています。

2016年には、急逝（2001年）した家根先生の業績を、学生とともに、まとめてくださいました（『家根祥多先生著作集』立命館大学文学部）。

有言実行とよく言いますが、普段あまり雑談しない私にとっては、矢野先生は、どちらかというと、不言実行の人で、しばしば驚かされました。

定年は長い人生の一つの節目に過ぎません。円熟期を迎え、まさに人生これからということころかと思います。体調に気を配り、お酒を飲んだ時の実に嬉しそうな気持ちで、さらにご活躍いただき、考古学人生の夢を叶えられることを期待しています。

立命館大学文学部名誉教授

和田 晴吾



杉沢遺跡の発掘調査風景（2011年）



杉沢遺跡の発掘調査風景（2023年）



考古学研究会第 57 回総会研究集会にて (2011 年)



兵庫県高砂市で開催された関西縄文研にて (2025 年)



コロナ禍におけるオンデマンド授業の風景 (2020 年)



旧石器・縄文ゼミ集合写真 (2024 年)



杉沢遺跡でかつてのゼミ生と話す (2023 年)



杉沢遺跡発掘調査の昼休み (2011 年)



杉沢遺跡発掘調査の午後休憩 (2011 年)



東北研究旅行にて (2022 年)



ゼミ遠足で訪れた沢池にて (2022 年)



研究室旅行で訪れた島根県にて① (2024 年)



研究室旅行で訪れた島根県にて② (2024 年)

矢野健一教授 略歴

1984年 3月	京都大学 文学部 考古学 卒業
1993年 3月	京都大学 考古学 博士課程 単位取得退学
2013年 3月	京都大学 博士 (文学)

職歴

1995年 4月 1日	財団法人辰馬考古資料館 学芸員
2002年 4月 1日	立命館大学 助教授 (准教授)
2007年 4月 1日	立命館大学 教授

委員会・協会等

2011年 4月	考古学研究会 常任委員 (2014年 3月まで)
2013年 4月	世界考古学会議第 8 回京都大会実行委員会 常任委員
2015年 4月	NPO 法人 WACJAPAN 理事 関西縄文文化研究会 代表

編著書

1999年 7月	『縄文世界の一万年』(『復元縄文時代のくらし ― 道具を作る』他 4 項目執筆) 集英社
2006年 8月	『関西地方の後晩期住居 弥生集落の成立と展開』
2010年	『縄文時代の考古学』同成社シリーズ 編著

論文・学会報告・講演目録

1984年 3月	「近畿地方における押型文土器前半期の編年案」『西日本縄文研究会広島大会資料』(於：広島大学) (単著)
1988年 6月	(共同調査項目)「縄文土器」他 1 項目執筆「上ノ山遺跡」(美方町文化財調査報告書 1) 美方町教育委員会 (単著)
1988年 6月	(共同調査項目)「出土遺跡」他 1 項目執筆「奈良県天理市布留遺跡縄文時代早期の調査」(『考古学調査研究中間報告 14』埋蔵文化財天理教調査団) (単著)
1989年 1月	「九州縄文文化再考」福岡県荊町町図書館にて講演 (単著)
1990年 3月	「縄文土器」『小路塚オノ木遺跡発掘調査報告書』(関宮町埋蔵文化財調査報告書 (4)) 関宮町教育委員会 (単著)
1991年 6月	「近畿からみた中四国縄文早期土器編年の現状と課題」『第 2 回中四国縄文研究会資料』中四国縄文研究会 (於：広島大学) (単著)
1992年 8月	「押型文土器の起源と変遷に関する新視点」『第 12 回三重県埋蔵文化財展研究集会資料』三重県埋蔵文化財センター (於：斎宮歴史博物館) (単著)
1993年 3月	「押型文土器の起源と変遷」『考古学雑誌 78』(単著)
1993年 3月	「美方郡村岡町福岡八幡山縄文遺跡」『但馬考古学』但馬考古学研究会 第 7 集 (共著)
1993年 3月	「縄文時代中期後葉の瀬戸内地方」『江口貝塚Ⅱ』(愛媛大学法文学部考古学研究報告書第 2 冊) (単著)
1993年 3月	「押型文土器の起源と変遷に関する新視点」『研究紀要 三重県埋蔵文化財センター (2)』(単著)
1993年 3月	「美方郡村岡町福岡八幡山縄文遺跡」高松龍輝『但馬考古学』但馬考古学研究会 第 7 集
1993年 3月	(単独調査項目)「イセ遺跡」「ヨレ遺跡 イセ遺跡 筆田遺跡」見元町教育委員会

- 1994年3月 「縄文後期における器種構成の変化」『江口貝塚Ⅱ』（愛媛大学文学部考古学研究报告第3冊）（単著）
- 1994年3月 「鳥根県イセ遺跡の紹介」『鳥根県考古学会誌』鳥根県考古学会 第11集（共著）
- 1994年4月 「北白川C式併行期の瀬戸内の土器」『古代吉備』古代吉備研究会 第16集（単著）
- 1994年9月 「沢式直後の併行関係」『表裏縄文土器から立野式土器へ』（『長野県考古学会縄文時代（早期）研究会部会資料』（単著）
- 1995年5月 「並木式・阿高式の編年親変更の意義」『日本考古学協会第61回総会研究発表要旨』（於：東海大学）（単著）
- 1996年10月 「博物館施設の災害復旧手続きに関する事例報告」平成8年度兵庫県博物館協会学会担当学芸員会議（事典項目）『神宮寺式土器』『日本土器事典』雄山閣出版
- 1996年12月 「中四国地方における押型文土器後半期の様相」『シンポジウム押型文と沈線文』長野県考古学会縄文時代（早期）部会（単著）
- 1997年1月 「中国地方における縄文時代草創期の様相」『第8回中四国縄文研究会発表資料集』（於：高知市）（単著）
- 1997年6月 「中国地方における縄文時代草創期の様相」『第8回中四国縄文研究会発表資料集』（於：高知市）（単著）
- 1997年12月 「縄文集落の定住性と定着性」『考古学研究会』考古学研究会 44（3）（共著）
- 1998年3月 「南九州縄文早期文化の評価」『南九州縄文通信』南九州縄文研究会 No.12（単著）
- 1998年10月 図録『古鏡の世界』（平成10年度秋季展の某）辰馬考古資料館
- 1999年3月 「兵庫県加西市銅坂古墳調査報告」『辰馬考古資料館考古学研究紀要3』財団法人辰馬考古資料館（共著）
- 1999年3月 「景初四年銘竜虎鏡の破損と修理」『辰馬考古資料館考古学研究紀要3』財団法人辰馬考古資料館（単著）
- 1999年6月 「1998年の考古学界的動向 — 縄文時代（近畿）」『考古学ジャーナル』ニューサイエンス社（445）（単著）
- 1999年10月 図録『銅鐸・銅剣・銅牙』（平成11年度秋季展の某）辰馬考古資料館
- 1999年10月 （辞典項目）『コロボックル説』他40項目執筆『岩波日本史辞典』岩波書店
- 1999年11月 「集落と住居 — 非環状集落地域」『季刊考古学』雄山閣出版（69）（単著）
- 2000年3月 「震災後4年間を経過して」『地震災害と考古学Ⅰ』日本考古学協会（単著）
- 2000年3月 「震災から5年」『復する。創る。伝える。震災から5年』（『阪神間ミュージアムネットワーク震災復興報告書』阪神間ミュージアムネットワーク推進実行委員会）（単著）
- 2000年3月 「出土土器に関する考察」『栗津湖底遺跡・自然流路』（『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書3-2』滋賀県教育委員会（共著）
- 2000年6月 「1999年の考古学界的動向 — 縄文時代（近畿）」『考古学ジャーナル』ニューサイエンス社（460）（単著）
- 2000年10月 図録『縄文美術』（平成12年度秋季展の某）辰馬考古資料館
- 2000年11月 「なにわの瓦漫遊展開催記録」『甲陽学院所蔵旧「宇津保文庫」考古資料目録土器編（瓦編補遺）』学校法人辰馬育英会・甲陽学院高等学校・中学校（単著）
- 2001年3月 「須玖岡本出土の館蔵銅牙」『辰馬考古資料館考古学研究紀要（4）』（単著）
- 2001年3月 「縄文時代の遺構と遺物 — 遺物」他1点執筆『神戸市東灘区西岡本遺跡』六甲山麓遺跡調査会（共著）
- 2001年5月 「西日本の縄文集落」『立命館大学考古学論集Ⅱ』立命館大学考古学論集刊行会（単著）
- 2001年10月 図録『銅鐸を観察する』（平成13年度秋季展の某）辰馬考古資料館
- 2002年11月 「中四国地方における縄文時代早期末前期初頭の土器編年」『環瀬戸内海の考古学 — 平井勝氏追悼論文集』古代吉備研究会（単著）
- 2003年2月 「北部九州地方における押型文土器出現の時期」『立命館大学』立命館大学人文学会（578）（単著）
- 2003年3月 「井向1号銅鐸の保存処理とこれに伴う調査」『辰馬考古資料館研究紀要（5）』（単著）

- 2003年 5月 『初期の「型式」と「様式」の相違 — 山内清男の「型式」と小林行雄の「様式」』『立命館大学考古学論集Ⅲ』立命館大学考古学論集刊行会（単著）
- 2004年 3月 『西日本における縄文時代住居址数の増減』『文化の多様性と比較考古学』（考古学研究会 50 周年記念論文集）（単著）
- 2004年 3月 『押型文原体の製作技法の一例 — 「ネガティブな楕円文」の原体製作実験』『考古論集（河瀬正利先生退官記念論文集）』（単著）
- 2004年12月 『磨石類の数量的検討』『縄文時代の石器Ⅲ』（単著）
- 2005年 3月 『福井県名田庄村岩の鼻遺跡出土縄文早期土器の胎土調査』『福井県立若狭歴史民俗資料館報平成 16 年度』（共著）
- 2005年 5月 『九州南部における中期前葉の土器編年』『立命館大学考古学論集Ⅳ』（単著）
- 2005年11月 『土器型式圏の広域化』『西日本縄文文化の特徴』（単著）
- 2005年11月 『定住の指標 関西縄文時代における石器・集落の諸様相』『関西縄文論集 2』（単著）
- 2006年12月 『貯蔵量から見た貯蔵穴』『関西縄文人の生業と環境』（単著）
- 2007年 2月 『人口変動からみた縄文時代の特徴』『Local Cultures and Their Interactions in Asia』（単著）
- 2007年 2月 『押型文土器出現期以前の九州地方と本州地方との地域間関係』『九州における縄文時代早期前葉の土器相』（単著）
- 2007年11月 『西日本 総論』『季刊考古学（101）』（単著）
- 2007年12月 『関西地方の突帯文土器 — 京都府の概要』『関西地方の突帯文土器（第 8 回関西縄文文化研究会資料集）』（共著）
- 2008年 5月 『縄文中期における船元式の九州南部への波及』『吾々の考古学』（単著）
- 2009年 9月 『貯蔵穴の貯蔵量からみた集団規模』『南の縄文・地域文化論考』（単著）
- 2009年10月 『向出遺跡の空間分析』『今、よみがえる向出遺跡』（単著）
- 2009年12月 『小規模集落の長期定着性』『関西縄文時代の集落と地域社会（第 10 回関西縄文文化研究会 発表要旨集・資料集）』（単著）
- 2009年12月 『イギリスの考古学の授業』『考古学研究 56』（3）（共著）
- 2010年 1月 『九州縄文中期土器編年論争の本質』『九州の縄文中期土器を考える』（第 20 回九州縄文研究会 佐賀大会発表要旨・資料集）（単著）
- 2010年 3月 『向出遺跡の空間分析』『向出遺跡評価検討委員会報告書（阪南市埋蔵文化財報告 47）』（単著）
- 2010年 7月 『付論 砂粒カウント法による縄文土器分析』『第 17 回京都府埋蔵文化財研究会資料集 京都府の縄文時代～遺跡・遺物はなぜ動くのか』（共著）
- 2011年 2月 『貯蔵穴と住居域との関係』『季刊考古学（114）』（単著）
- 2011年 3月 『埋めこまれた「原日本」— 繰り返されるミネルヴァ論争 —』『考古学研究 57』（単著）
- 2011年 6月 『縄文時代（中部）』『月刊考古学ジャーナル（615）』（共著）
- 2012年 3月 『埋めこまれた「原日本」— 繰り返されるミネルヴァ論争 —』『考古学研究 58』（単著）
- 2012年 5月 『縄文時代（中部）』『月刊考古学ジャーナル（628）』（共著）
- 2012年12月 『滋賀県東原市杉沢遺跡における縄文堆積層の調査』『第 13 回関西縄文文化研究会発表要旨集』（共著）
- 2013年 5月 『近畿地方における縄文草創期土器編年』『立命館大学考古学論集Ⅵ』（単著）
- 2013年 6月 『書評 木の考古学』『月刊考古学ジャーナル（643）』（単著）
- 2013年12月 『近畿北部縄文早期後半の土器編年』『第 14 回関西縄文文化研究会 但馬の縄文文化』（単著）
- 2014年 2月 『押型文土器遺跡数の変化』『東海地方における縄文時代早期前葉の諸問題』（単著）
- 2014年 4月 『人類はなぜ、いつ定住したか』『考古学研究会 60 周年記念誌 考古学研究 60 の論点』（単著）
- 2014年 7月 『京都盆地中西部低地、向日市寺戸川縦坑・河床堆積層の文化財科学的研究』『日本文化財科学会 第 31 回大会研究発表要旨集』（共著）
- 2015年 『Early Agriculture in Japan』『The Cambridge World History Volume II』（共著）

2017年 2 月	「縄文時代における人口問題の重要性」『環太平洋文明研究 (1)』(単著)
2017年12月	「縄文からみた弥生のはじまり」『第 24 回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集 弥生文化出現期前後の集落について』(単著)
2018年 3 月	「鳥取大学所蔵・青島遺跡出土の縄文土器について」『鳥取県立博物館研究報告 (55)』(共著)
2018年 3 月	「西日本縄文社会の「弥生化」」『環太平洋文明研究 (2)』(単著)
2019年 3 月	「水口ロボットを利用した葛籠尾崎湖底遺跡調査の成果とその意義」『環太平洋文明研究 (3)』(共著)
2020年 3 月	「縄文土器編年研究と人骨発掘」『立命館史学 (40)』(単著)
2020年 3 月	「縄文遺跡から人口動態を探る — シンポジウム「超長期的視点から見た人口・環境・社会」の発表に関連して —」『環太平洋文明研究 (4)』(単著)
2020年 3 月	「シンポジウム「超長期的視点から見た人口・環境・社会」概要報告」『立命館大学環太平洋文明研究 (4)』(単著)
2020年 9 月	「本州内陸部の宮崎遺跡から出土した成人骨と乳児骨の多元素安定同位体分析」『考古学と自然科学 (81)』(共著)
2020年12月	「南九州縄文中期前半の土器編年再考」『関西縄文時代研究の泉を拓く 関西縄文論集 4 — 泉拓良先生縄文研究 50 年記念・関西縄文文化研究会 20 年記念 —』(単著)
2021年 9 月	「漁師喜助の発見 水中遺跡が語る数千年の営み」『K (002)』(単著)
2022年 3 月	竹倉史人著『土偶を読む — 130 年間解かれなかった縄文神話の謎 —』(晶文社、二〇二一年)『立命館史学 (42)』(単著)
2022年 3 月	「垣ノ島 B 遺跡出土漆糸製品の編布復原案と復原実験中間報告」『環太平洋文明研究 (5)』(共著)
2022年12月	「辰馬考古資料館所蔵の土偶・土製品・石製品」『辰馬考古氏商館 考古研究紀要 (7)』(共著)
2023年 3 月	「土器量からみた北白川縄文遺跡群の人口動態に関する予察」『環太平洋文明研究 (7)』(共著)
2024年 3 月15日	「三内丸山遺跡出土の円筒下層式に伴う枝回転文土器の原体樹種」『特別史跡三内丸山遺跡研究紀要 (5)』(単著)
2024年 3 月	「土器量からみた人口動態研究の意義 — 京都市左京区京都大学構内遺跡群の事例研究」『環太平洋文明研究 (8)』(共著)

目 次

1. 論文

等長対数比変換と化学組成の公開データベースを用いた黒曜岩の原産地推定(1):

隠岐地区のデータ補完	上峯 篤史	1
大阪府栗生間谷遺跡の石材利用	三好 元樹	11
東海地方西部における縄文時代草創期の剥片剥離技術の一様相	田部 剛士	21
近畿地域の隆起線文土器に見る南九州地域からの影響	村上 昇	27
縄文時代早期の鹿角製装身具類について — 佐賀市東名遺跡出土資料から —	川添 和暁	35
縄文海進と先苺貝塚 — 押型文土器に付着したサンゴの年代測定 —	遠部 慎	47
近畿地方北部における縄文時代早期後半から前期前葉土器の編年	岡田 憲一	57
富山湾沿岸における縄文時代前期前葉以前の生業活動についての予察 — 上久津呂中屋遺跡出土資料の検討を基に —	納屋内高史	69
北部九州における縄文時代前期の遺跡の利用状況について一考察	小川香菜恵	81
中尾田Ⅲ類の細分 — 春日式土器から太型凹線文土器への変化の方向性 —	山中 俊樹	87
'cord mark'をめぐる研究史	高野紗奈江	97
彦崎 K2 式土器の研究 — 瀬戸内地方における縄文時代後期中葉土器群の変化とその背景 —	小泉 翔太	107
西北部九州沿岸部における縄文貝塚研究試論	福永 将大	121
施文技法からみた山陰中央部の凹線文系土器の成立過程	幡中 光輔	129
縄文時代晩期、合口土器棺の成立過程 — 棺形態分類とその機能 —	立岡 和人	141
縄文後晩期の近畿地方における小型石棒類の文様変遷	小野 大輔	153
名古屋市熱田区玉ノ井遺跡の縄文時代晩期について	伊藤 正人	163
淡輪遺跡出土土器について	森本 隆寛	175
四国吉野川流域の地形環境変化と縄文遺跡動態	湯浅 利彦	185
縄文農耕論の現状と課題 — 栽培植物の検証を中心に —	中沢 道彦	195
縄文・弥生移行期における深鉢形・甕形土器の口径変化について	西山 集	207

縄文時代から弥生時代へ ― 中四国地域を中心に ―	中村 豊	217
縄文時代から弥生時代への転換期における「住み分け」をめぐる議論について	宮地聡一郎	229
壊れた琴形木製品 ― 廃棄と再利用の背景に関する考察 ―	長谷川 愛	239
弥生時代中・後期における方形周溝墓の地域性と展開		
― 遠江・駿河・相模地域を対象に ―	塚本隼太郎	249
古市古墳群周辺における古代の状況について	新開 義夫	265
博多遺跡群の羽口について ― その変遷と方形羽口 ―	山本 晃平	273
長岡京北・平安京南、中海道遺跡周辺域の地形面区分・地形条件と人間活動履歴	中塚 良	283
紫香楽宮内裏南門の再検討	小谷 徳彦	305
徳島県川西遺跡出土木質遺物の年輪年代		
― 四国地域における暦年代情報拡充のために ―	前田 仁暉・星野 安治	315
聚楽第外堀の存在とその評価	古川 匠	321
拓本から‘ひかり拓本’へ ― 縄文資料提示技術の変革 ―	千葉 豊	333
発見された海浜部の縄文遺跡と大震災の復興	森岡 秀人	341
目的論か結果論か：序説 ― 本邦先史考古学における 1962 年問題 ―	大塚 達朗	355
なぜ文化財を保護するのか？ ― 遺跡（埋蔵文化財）の保護を中心に ―	水ノ江和同	367

2. 回想文

矢野先生と私	北 祐介	375
--------	------	-----

等長対数比変換と化学組成の公開データベースを用いた 黒曜岩の原産地推定 (1): 隠岐地区のデータ補完

上峯篤史

要 旨

化学組成にもとづく石器石材の原産地推定法において、蛍光X線分析装置による非破壊測定は汎用性と効率と精度のバランスに優れている。可搬型装置をふくむ、操作性や価格が「こなれた」装置の登場も、大いなる福音と見なせる。一方で、この方法の採用にあたって、機器導入コストに次ぐ課題となっているのが、産地推定のためのリファレンス・データの確保である。分析機器一般の例に漏れず、蛍光X線分析法による測定値は機器依存であるため、同一の機器と測定条件において、産地未知試料（遺物）と産地既知試料（原標）との化学組成的マッチングを試みなければならない。また従来の石材原産地推定では、化学組成をふくむ組成データに通常の性質（定数と制約）が考慮されておらず、数値の扱いにおいて致命的な欠陥が潜んでいる。これらの解消のため、筆者はすでに、自身の機器から得られた測定値を既往の公開データベースに載せて原産地推定するための手順、定数と制約を回避するための手順を整え、公表した。その試みでは産地推定結果の約94%を再現できたが、参照先（東京航業作成のTAS2020データベース）では一部の原産地の試料が乏しく、データの追加が必要と見ていた。この作業に着手し、隠岐地区のデータを追加・整備したのが、本研究である。まず、隠岐地区の地質環境とTAS2020における黒曜岩の化学組成との関係、判別群（化学組成のクラスター）間の区別の妥当性を検討し、いくつかの判別群を統合した。次に、装置や測定環境、試料調整の違いからくる精度（繰り返し測定時の誤差）の違いをなすため、適切な測定時間（X線照射時間）を算出し、リファレンス・データの補完を果たした。これらの手順で整えたデータセット（TAS2020+AU ver.1）を用いて、隠岐島後の加茂サカ道跡の採集資料、日本海沿岸地域の後期旧石器時代前半期の資料（上野遺跡、鳥ヶ崎遺跡）を原産地推定し、有効性を確認した。可搬型蛍光X線分析装置による分析でも、隠岐地区に複数ある判別群をいくらか区別でき、それをもとに石器群の成り立ちを論じることが可能である。

キーワード: 対象時代 後期旧石器時代前半期
対象地域 山陰地方
研究対象 蛍光X線分析法

1. 研究の背景と課題

(1) DIY 分析者の憂鬱

考古遺物の材料産地を推定する研究は、考古学・文化財科学において確たる位置をもった、さかんな研究分野である。石器研究では、岩石の資料特性によく適合したライフ・ヒストリーの視野のもと、石材原産地、製作技術、使用法がそれぞれの方法を模索しつつ探究されている。前二者は物理学の応用分野である点で近い距離にあるとも言える。しかしながら、もはや従来科学となった破壊力学の原理の一部を創い慣らし、石器観察に応用する製作技術研究に照らしてみれば、原産地推定研究が学際領域に安住している感拭えない。分析化学に関わる知識はもちろん、何よりも機器の導入と維持のコストが、原産地推定研究への参入を

阻む。実際、筆者が矢野健一先生の指導下で卒業論文研究に着手した際も、原産地推定研究は研究テーマの候補に考えなかった。機器も遺物も自身の手の届くところのない身上で原産地推定研究に関心をもっても、つまるところ、文献研究に甘んじるしかない。研究の核を他者の動きに委ねた状態で、研究者としての歩みを始めたくない。そのように考えたものである。

転じて近年では、少なくとも機器の導入に関しては、好転の兆しが見える。外部資金による大型共同研究が浸透し、潤沢な資金を手にして分析機器を導入する研究室が出てきた。行政機関でも分析機器の導入が進み、もはや分析会社委託がルーチンではなくなってきた。購入が現実的な価格と、使いやすさを備えた機器も登場し、考古学の研究者が見よう見まねで操作できるも

のようになってきた。筆者が運営する小さな研究室でも、2017年から可搬型蛍光X線分析装置の運用を続けている。さらに工業試験場や民間会社の機器レンタルサービスが拡大し、ある程度の資金（機器の購入・維持に比べればはるかに低額）を用意すれば、学生でも分析機器を操作して、自分の研究に活用できる状況が生まれてきた。高価な機器を有する一部の分析者からの託託を待たずして、遺物観察から立ち上がった動機にもとづいて、機器分析にあたる状況ができあがってきたわけである。

石材原産地推定で多用される蛍光X線分析法に関して、分析値のラボ間、機器間での非互換性がさかんにリマインドされている（大屋 2009、金井ほか 2022 など）。高い精度さと引き換えに、試料の粉碎・融解・規格化が前提となる波長分散型蛍光X線分析法（WDXRF）はともかくとして、やや大まかに、そのかわり非破壊で分析を実施するエネルギー分散型蛍光X線分析法（EDXRF）では、これらの声に耳を塞ぐわけにはいかない。使用機器が異なれば、同じ試料を測定しても得られる値は異なる。同じ試料を同じ機器で測定しても、複数回測れば毎回違った値が得られる。測定時間や測定環境、機器の設定も測定値に影響する。誤差にどうやって折り合いをつけ、機器間の違いをどうやってクリアするか。やや背伸びして機器を使っている筆者以上に、レンタル機器を運用する分析者にとってはいっそう深刻だ。分析の要となる機器が自身の管理下でないため、確認・制御できる部分は限られるよう。

一方、機器導入さえ果たせば、石材原産地研究が始められるわけではない。原産地推定は総じて、産地既知試料と産地未知試料との比較に依拠している。産地既知試料（原産地で採取した原礫等）の化学組成データがなければ、遺物を測定しても比べるものがない。分析値の機器間での非互換性が災いして、他者が公開する産地既知試料の分析値データベースは、自分が測定した遺物の原産地推定には使えない。自分でデータベースを整えざるを得ないわけだが、日本列島では黒曜岩の産出地は約 200、ガラス質安山岩の原産地は少なくとも 150 以上が計上される（杉原ほか 2006）。しかも、原産地は有害動物が生息する山中、離島、海中、神域、米軍等管理地、私有地にもおよび、すでに絶産状態となった産地もある。原礫の悉皆的収集は容易ではない。機器がもつ測定誤差を考慮しつつ、機器間の互換性とリファレンス・データを確保する。これは分析者が林立する昨今の状況のコントロールに必要なだけでなく、DIY 分析者にとって悩みの種なのである。

（2）等長対数比（ilr）変換を用いた判別分析法

自身の測定環境から得られた分析値と既存のデータベースとをマッチングさせる。筆者が試みた無精な方策が、TAS2020 を使用した判別分析法である。TAS2020 とは東京鉱業研究所地球化学分析室（2020）が整備・公開する、日本列島の黒曜岩分析値データベースである。測定試料の借り出しや測定値の提供依頼にも応じて頂けるため、すでにいくつかの利用実績がある（青木ほか 2023 など）。筆者は自身が有する黒曜岩原礫のうち、TAS2020 収録のものと同一の地質学的起源に由来すると考えられる 13 判別群を橋渡しに、検査線法によって、自身の分析値を TAS2020 に載せることを試みた（上峯 2024）。

加えて筆者が注意を払ったのが、組成データ（総和が 100% になるように規格化されたデータ）がもつ定数制約（constant-sum constraint）という制約条件である。蛍光X線分析法においては、各元素の濃度、原産地推定で用いられる元素比¹⁾は組成データである。太田（2023）が丁寧に説明するように、組成データは絶対量変動の情報を記録していない、回帰分析や相関分析などの統計手法の多くが使用できない、項目の抽出や統合をすべきでない等、科学の判断材料として致命的な欠陥をもつ（Aitchison 1986）。当然、石材原産地推定に深刻な影響を与えているはずだが、金井（2019）の指摘にも拘わらず、これに対応した研究はきわめて少ない。

定数制約の回避には対数比変換が有効で、とりわけ太田（2023）は等長対数比（isometric logratio; ilr）変換を推奨する。どの組み合わせで分母・分子を選択してもデータ構造、サンプル間距離、角度が変わらない対数比変換で、金井（2019）が採用する加法対数比変換（additive logratio; alr）に比べて、分母・分子の選択に悩まなくてよい点が優れている。筆者は以下の手順で、自身の測定環境（Bruker 社製可搬型蛍光X線分析装置 Tracer Si）による測定値を、黒曜岩の原産地推定に用いた（上峯 2024）。

まず Tracer Si から出力されたデータに対し、0 値や欠損値を各元素の検出限界値で置換し、合計が 100% になるように再計算した（乗法置換）。これを組成データの対数変換ソフト CoDaPack (ver.2.03.01) で ilr 変換した。Mn、Fe、Br、Sr、Y、Zr、Nb の 7 元素と、残余の元素の和を加えた 8 項目から、変換によって ilr₁ ~ 7 までの変数が得られた。次に、筆者が有する原礫のうち、TAS2020 掲載の判別群（化学組成のクラスター、系）との対応が明確な 13 産地の測定結果を、同

様に乗法置換、 $\ln$ 変換した。これによって、Tracer Si による測定値を TAS2020 の測定値に適合させる検量線を作成し、Tracer Si で測定した考古遺物の化学組成データを TAS2020 と直接比較できるようにした。IBM SPSS Statistics ver.15.0.1J による判別分析で、両者の統計学的マッチングを試みた。

同方法による TAS2020 の再現度（交差確認済の判別の率）は、日本全国の産地を一括解析した場合で 93.9% に達する。原産地によっては TAS2020 掲載試料が少なく、また判別群（系）の統合が必要なものも散見される。これらの課題をのこしつつも、本稿執筆直前（2024 年 6 月）では、各地の考古遺物の分析では 94% 程度と見ていた。

(3) リファレンス・データの不足

この方法の運用において懸念されるのは、TAS2020 収録データの不足である。TAS2020 では 124 もの判別群が整理され、各判別群で原則 10~12 点の基準試料が掲載されている。ただし測定の結果、基準試料から除外されたものもあるし、絶産状態の原産地は掲載試料数が極端に少ない。これらの判別群ではデータの分布範囲が正しくとらえられておらず、原産地推定に影響すると予想される。すなわち、TAS2020 に新規測定データを加えて補強する必要がある。本稿では、TAS2020 に新規測定データを加える際の測定条件や留意点、妥当性を論じる。

TAS2020 では、隠岐地区の黒曜岩として、14 の判別群が設定されていて、すべて島後で産出する（図 1-a）。それぞれの岩質および基準試料の点数は図 1-b のとおりである。藤科哲男ら（1988）は隠岐地区の黒曜岩を久見、加茂、津井に三大別するが、向井正幸（2014）は「久見Ⅰ」「久見Ⅱ」「南方」「加茂」「津井Ⅰ」「津井Ⅱ」に、隅田祥光ら（2016）は「1-1~5」、「2-1~3」「3」に区分する。基準試料の採取地と化学組成から、TAS2020 判別群との対応関係は図 1-b のように推定される。

隠岐地区では「久見林道 A」「代湾 A」「代湾 B」「福浦隧道 A」「福浦隧道 B」「加茂」「男池 B」の基準試料が少なく、判別群の範囲が正確にとらえられていない可能性がある。このうち「久見林道 A」「代湾 B」「福浦隧道 A」は石器石材として不適と見積もれるから、差し当たり重要ではない。一方で、のこりの判別群については、基準試料の追加をふくめた再検討が必要である。

2. リファレンス・データを補完する

(1) TAS2020 判別群の再検討

黒曜岩を産出する重栖層は、島後では北東部をのぞくほぼ全域に分布する新第三紀層である（図 1-a）。重栖層は流紋岩と粗面岩の溶岩からなり、同質の火砕岩を挟む。12 に細分される火砕岩の産出層準のうち、黒曜岩を含むのは島北西部では下部の火砕岩 Op2~3、中部の Op4~5、上部の Op8、12、島南部では下部の Op2b、3、中部の Op5~6 である（村上 2018）。分布範囲から火砕岩と各判別群との対応関係は、図 1-b のように推定される。

石質不良な「久見林道 A」「代湾 B」「福浦隧道 A」をのぞいて考えると、「福浦隧道 B」と「福浦湾」が Op3 から、「加茂」の一部と「箕浦海岸」「岸浜今津」が Op5 から、「愛宕山」「男池 A」「男池 B」が Op2b から産出していると見せる。TAS2020 の掲載値を見ると、「福浦隧道 B」と「福浦湾」、「箕浦海岸」と「岸浜今津」の化学組成はそれぞれよく一致しており、両者を区別する地質的・化学組成的な根拠が見当たらない。「加茂」は「箕浦海岸」「岸浜今津」と同じく Op5 の分布範囲で産出し、隅田ほか（2016）でもこれらを区別していない。一方で TAS2020 に収録された「加茂」の基準試料は 5 点と少ないものの、Sr が隠岐産黒曜岩のなかではやや多く、「箕浦海岸」と「岸浜今津」とは異なり、むしろ「愛宕山」と近似する。また筆者が加茂地区で採取した原産でも、「加茂」と同様の化学組成を示すものは稀であった。これらは Op6 に由来する可能性があるが、加茂地区の黒曜岩の量的主体ではないと考えられる。「愛宕山」「男池 A」「男池 B」は Al、P、Ca、Ti、Mn、Sr、Nb の値に違いがある。

以上の検討から、判別群を次のように変更する。

- ・「久見林道 A」「代湾 B」「福浦隧道 A」は石器石材として不適と考えられるため、判別群から除外する。
- ・「福浦隧道 B」「福浦湾」は区別できないため、「福浦隧道 B・福浦湾」判別群とする。
- ・「箕浦海岸」「岸浜今津」は区別できず、加茂地区で産出する黒曜岩の主要なものと区別できない。これらを「加茂・箕浦海岸・岸浜今津」判別群とする。

(2) 測定条件と測定誤差

筆者が採取した試料を測定し、TAS2020 の基準試料を補う。筆者は Bruker 社製の可搬型蛍光 X 線分析装置 Tracer Si (#900F4669) を使用しているが、TAS2020 ではリガク製据置型蛍光 X 線分析装置 NEXDE が使われている。また TAS2020 では基準試料の測

面を研磨している。これら測定条件の違いに関して、測定値の違いは旧稿(2024)で示した補正式で変換できるが、測定誤差の違いを考慮する必要がある。

TAS2020の条件下での測定誤差(変動係数)は、掲載されたドリフト値(東京航業研究所地球化学分析室編2020:347-353)からFe/K比で約3%、微量元素(Rb・Sr・Y・Zr)に占めるRbの割合(Rb分率)で約1%、Srの割合(Sr分率)で約2%と計算できる。ただしこれらの値は、複数の元素の比をとったもので、定数制約の影響も鑑みれば、数値のとおりにとらえることには躊躇する。目安として、変動係数を1%以下にすればTAS2020に比肩できる、と見なしておく。

図2-a・bには、和田峠の黒曜岩5点を対象に、剥片状試料(未研磨資料)と研磨済試料で測定時間(X線照射時間)を変化させた結果を示す。MnとNbでは研磨済試料の有意は明らかだが、他の元素では剥片状試料の方が変動係数が小さくなっている。得られた測定値からすれば、剥片状試料でも400秒測定すれば、TAS2020の測定誤差の目安である1%を全元素で下回ると判断できる(図2-c)。したがって、TAS2020の補完のための測定条件は、以下の通りとなる。

・剥片状試料を研磨せず、Tracer 5iで400秒測定する。

(3) 測定値の装置間互換性

測定にはBruker社製可搬型蛍光X線分析装置Tracer 5iを使用しているが、本研究の遂行途中、筆者が使用してきた正規機(#900F4669)が故障し、同一機種の後継機(#900F4452)に切りかえることとなった²⁾。両機の測定結果の互換性を、同一試料の測定結果をもとに確認しておく。

地球化学標準試料JG-1(花崗閃緑岩)、JA-2(安山岩)、JR-1(黒曜岩)、JR-2(黒曜岩)の粉末状試料を、油圧プレスで成形したものを測定に供した。管電圧・管電流の設定は、黒曜岩の成分分析に最適化された測定アプリケーションによる自動設定とし、スポット径8mmの紋りを装着して、大気雰囲気にて60秒間測定した。フィルターは100 µm Cu / 25 µm Ti / 300 µm Alが自動設定された。得られたスペクトルは内蔵アプリケーション(Obsidian工場検査線)で解析され、元素の種類と濃度が出力された。10回測定(単純繰り返し測定)によって得られた測定値から平均値を算出し、分析値とした。両機の分析値を元素ごとに比較した結果を、図3に示す。分析値そのものは若干異なるものの、直線性は高く(総体的な高低は再現度が高く)、単純な計算式によって互換性を担保できることがわかる。

(4) 隠岐産黒曜岩の追加測定

TAS2020に収録された隠岐地区の黒曜岩のうち、基準試料の不足が懸念されるのは「代湾A」「加茂」「男池B」である。これらを、以下の試料によって補完する³⁾。代湾海浜礫のうち、良質な黒曜岩6点で「代湾A」を、加茂サスカ周辺の切り通し土層から採取した礫2点で「加茂」を補う。犬来男池付近で採取した海浜礫101点のうち、Srが多い6点を「男池B」としてあつかう。

これらの試料の測定時間は400秒、剥片状試料の剥離面を研磨せずに測定した。得られたスペクトルは内蔵アプリケーション(Obsidian工場検査線)で解析され、元素の種類と濃度が出力された。これを上述した手順で処理し、Tracer 5iによる測定値とTAS2020の測定値をそれぞれ1σ変換して比較できるように整えた。ただし上述した使用機器の変更にとともない、旧稿(2024)と同じ試料の測定をもとに代替機用の補正式を作成し、測定値をTAS2020と互換性のある値に変換している⁴⁾。図3の結果に照らせば、使用機器の変更にとまらぬ差も、この補正式によって補正されていると考えられる。

「代湾A」「加茂」「男池B」を補ったTAS2020をIBM SPSS Statistics ver.15.0.1Jによる判別分析にかけて、判別群の再現度(交差確認済の判別の中率)をもとめた。日本全国の産地を一括解析した場合で94.7%となり、旧稿(2024)から若干向上した。今回作成したデータセットを、TAS2020+AU ver.1としておく。

3. 新規データセットの信頼性

(1) 隠岐地区出土遺物による検証

隠岐地区の黒曜岩のリファレンス・データを補強できたので、遺物の原産地推定に運用する場合の判別確度を確認しておこう。加茂サスカ遺跡の範囲内で採取した遺物(図4-a-1~12)を、測定時間60秒、その他は同一条件で分析した。加茂サスカ遺跡は火砕岩Op5の分布範囲内に立地し、堆積物中にも黒曜岩原礫をふくむ原産地遺跡である⁵⁾。

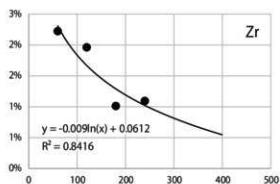
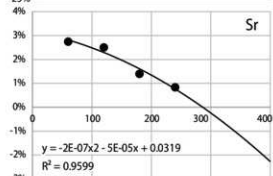
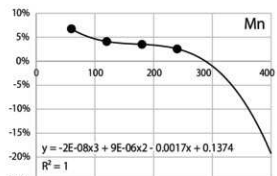
原産地推定の結果を図4-bに示す。12点中10点が「加茂・箕浦海岸・岸浜今津」系に判別され、本研究におけるデータの追加が首尾よく達成できたことがうかがえる。「久美」系に判別された2と8は、角礫由来で、原礫面の残存部も大きい。他の資料とは異なる特徴をもつため、搬入品と考えても差し支えない。

a. 剥片状試料（未研磨試料）における変動係数

測定秒数	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Nb
60	7%	2%	2%	3%	5%	2%	27%
120	4%	2%	2%	3%	4%	2%	24%
180	4%	1%	1%	1%	3%	1%	16%
240	3%	1%	1%	1%	2%	1%	13%

b. 研磨済試料における変動係数

測定秒数	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Nb
60	3%	30%	8%	6%	53%	8%	2%
120	2%	25%	7%	6%	49%	6%	2%
180	3%	16%	6%	4%	37%	4%	2%
240	2%	12%	4%	0%	25%	3%	1%



c. 未研磨試料における変動係数の回帰分析

X 軸=測定時間 (秒)

Y 軸=変動係数

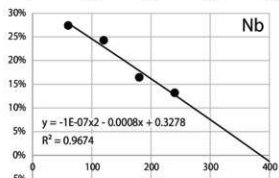
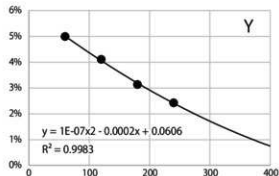
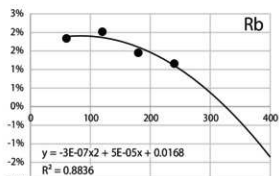
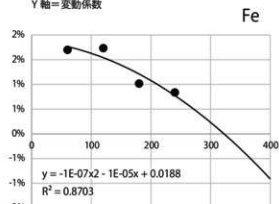


図2 Bruker Tracer 5i における試料状態と測定時間および測定値の変動係数（長野県和田峠の黒曜岩）

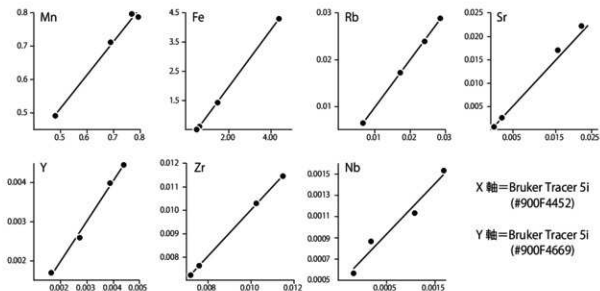


図3 Bruker Tracer Si における測定値の装置間互換性

(2) 旧石器時代遺物の原産地推定

次に、日本海沿岸地域の旧石器時代遺跡出土石器の分析を試みておこう。図4-a-13~14は京都府京丹後市上野遺跡で、筆者らが実施した2020年度発掘調査で得られた資料である。筆者らの発掘区では褐色ローム質土層中に石器の包含層準があり、周辺の露頭との対比から、石器の包含層準はAT火山灰層より下位に位置づけられる(上峯ほか2021)。13は打面の一部のみに原礫面をとどめる剥片、14は打面の一部と背面に原礫面をもつ剥片である。

これらに加え、筆者らの発掘区に北接する京都府埋蔵文化財調査研究センターの発掘区で出土した黒曜岩製遺物が5点ある(面ほか2024)。扁平小礫が1点含まれるが、この4点は剥片ないしは砕片である。

図4-a-15~17は鳥根県松江市鳥ヶ崎遺跡で、筆者らが実施した2019年度発掘調査で、地表面直下に堆積する褐色ローム質土層から出土した。この地層の堆積年代は不明である。15は複剥離面を打面として剥離された剥片の末端に、alternating retouchを施す。とりわけ背面側からの二次加工は急角度で施されており、剥片の末端部を切断するかのようである。尖頭部を作出した石器と推定する。16は原礫面を取りこんだ剥片の末端部から二次加工を施し、片側縁を背面側に向けて切断する。基部を備えた石器と推定する。17は剥片で、先鋭な打撃具で時計回りに打ち割りを進める過程で割り取られている。

原産地推定の結果を図4-bに示す。図中の「距離」はマハラノビスの平方距離で、左欄に示した「判別群」と、測定値との距離を示す値である。この値が小さい

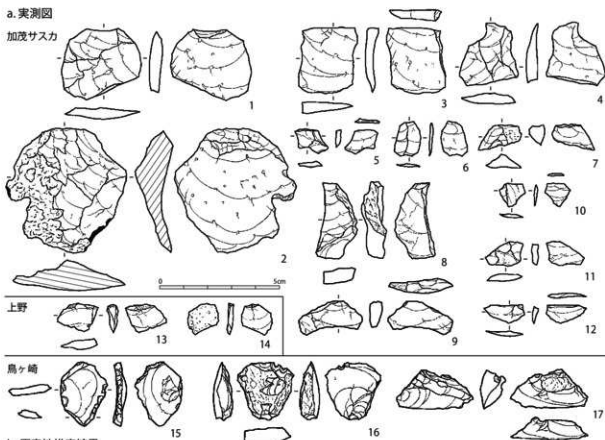
順に「判別群」を2位まで掲載している。すべての試料が隠岐地区の判別群のどれかに同定されており、黒曜岩が隠岐地区に由来することは疑いない。一方で、距離1と距離2の差が小さく、厳密な同定に躊躇する試料もある。

そのうえで注視されるのは、鳥ヶ崎遺跡と上野遺跡(上峯研調査区)はそれぞれで判別群がまとまる一方で、上野遺跡(京埋七調査区)では複数の判別群が混在することである。上野遺跡(京埋七調査区)では三つの石製遺物集中部と、散漫に石製遺物が分布する場所が視認される。それらに隣接する上峯研調査区(緩斜面の上部)において散漫に分布する石製遺物群に、異なる判別群に分類される黒曜岩製遺物がふくまれる。

上野遺跡においては、上峯研調査区の出土遺物が異地性の頁岩や流紋岩を使用した大形かつ定形性の高い石器と、遺跡周辺の海浜礫を原材料とした、加工程度や定形性が低い小形石器の二者で構成されることを確認している。一方で、京埋七調査区の出土遺物には、遺跡周辺で採取可能な石材を素材としながらも、比較的大きな石核や剥片がふくまれ、石器群の成り立ちが上峯研調査区とは異なると予想される(上峯ほか2024)。黒曜岩原産地推定の結果も、この推定を補強するものと見せる。構造の異なる石器群が近接して布置される状況からは、環状ブロック群から示唆されるような、異なる集団の一時的な集合が推定されるところである。

a. 実測図

加茂サスカ



b. 原産地推定結果

番号	遺跡名	資料番号	測定番号	器種	判別群1	距離1	判別群2	距離2
1	加茂サスカ	3	JMC1460	割片	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	12.55	久見系	13.38
2	加茂サスカ	1	JMC1456	割片	久見系	12.79	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	14.54
3	加茂サスカ	4	JMC1463	割片	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	10.30	久見系	11.28
4	加茂サスカ	5	JMC1466	割片	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	3.77	久見系	19.45
5	加茂サスカ	11	JMC1486	割片	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	11.01	久見系	41.04
6	加茂サスカ	8	JMC1477	割片	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	5.80	久見系	19.49
7	加茂サスカ	2	JMC1457	割片	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	5.08	代湾A系	18.00
8	加茂サスカ	6	JMC1471	割片	久見系	39.13	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	52.02
9	加茂サスカ	7	JMC1472	割片	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	10.24	代湾A系	29.97
10	加茂サスカ	10	JMC1482	割片	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	7.04	代湾A系	12.81
11	加茂サスカ	9	JMC1480	割片	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	7.79	久見系	18.89
12	加茂サスカ	12	JMC1489	割片	久見系	11.01	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	13.07
13	上野（上峯研）	1017	NUC6155	割片	愛宕山系	57.49	男池A系	139.95
14	上野（上峯研）	1015	NUC6154	割片	愛宕山系	55.80	男池A系	130.18
上野（京塚七）	NUC5175	割片	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	20.85	久美系	25.71		
上野（京塚七）	NUC5176	割片	久見系	36.26	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	37.45		
上野（京塚七）	NUC5177	割片	久見系	41.18	代湾A系	45.97		
上野（京塚七）	NUC5178	原礫	代湾A系	34.94	愛宕山系	46.77		
上野（京塚七）	NUC5179	割片	久見系	74.09	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	82.53		
15	鳥ヶ崎	5052	NUC6152	台形礫石器？	久見系	53.56	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	60.43
16	鳥ヶ崎	5039	NUC6150	台形礫石器？	久見系	12.04	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	26.41
17	鳥ヶ崎	5048	NUC6151	割片	久見系	27.47	加茂・真浦海岸・岸浜今津系	36.70

図4 黒曜岩製造物の原産地推定

4. 結論

以下、本稿で明らかにし得たことを整理する。

- ① 筆者が旧稿 (2024) で提案した、既存の公開データベースを活用した黒曜岩原産地推定において、不安材料であったデータベース収録試料の不足は、それぞれの環境における試料の追加測定によって補うことが可能である。追加データの獲得のためには、測定時間 (X線照射時間) を長くとる必要があり、その長さは測定環境によって異なるものの、算出可能である。
- ② 本稿で隠岐地区の黒曜岩の化学組成データを補完できたことで、隠岐地区の黒曜岩を利用していることが予想される日本海沿岸地域域の石器群の解析における不安材料が払拭できた。可搬型蛍光 X 線分析装置による分析でも、隠岐地区に複数ある判別群 (ないしは黒曜岩産出地) を区別でき、それをもとに石器群の成り立ち (構造や来歴) を論じることが可能である。

TAS2020 においてデータの補完が必要な原産地はほかにも多数ある。北海道地区、東北地区、北陸地区、九州地区に基準試料が乏しい判別群があるほか、いくらかの脱漏もある。それらの補完は別稿にて果たす。

謝辞

本研究の遂行にあたっては、Tracer 5i 代替機の使用においてジャパンマシナリー社および亀山誠さんからご厚情を賜った。本研究は、2024 年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2 の研究成果の一部である。

矢野健一先生が長年の勤務を無事に終えられることを、教え子として心よりお祝い申し上げます。私が立命館大学に入学した 2001 年は、日本考古学にとっても立命館考古学にとっても試練の時期であったと述懐しますが、当時、矢野先生が着任されると聞きつけて、期待に胸を膨らませたことを思い出します。いまでも、過去の世界に論理で立ち向かうたびに、矢野先生の鮮やかな論理展開や資料操作、仮定法を思い描きます。

註

- 1) 石器石材の原産地推定では、 $Mn^{*}100/Fe$ 、 $Log (Fe/K)$ 、 Rb 分率 ($Rb/Rb+Sr+Y+Zr$)、 Sr 分率 ($Sr/Rb+Sr+Y+Zr$)、 Zr 分率 ($Zr/Rb+Sr+Y+Zr$) が計算され、比較基準として用いられる。いわゆる望月・池谷方式 (望月ほか 1994) である。あつかっている数値が強度でなく元素濃度であれば、組成データである。微量元素の分率は、強度が元素濃度かに関わらず、組成データである。これらは定数制

制約の影響を受けている。

- 2) 代替機 (#900F4452) は、ジャパンマシナリー社の管理品で、使用に際して同社および亀山誠さんのご高配を賜った。本機は Tracer 5i の筐体でありつつも、X線検出器が $8\mu m$ のベリリウム・ウィンドウ (Tracer 5i に装着されているもの) から $1\mu m$ のグラフエン・ウィンドウ (Tracer 5g に装着されているもの) に交換されている。これによって軽元素の検出や定量可能範囲が拡大しているものの、本研究に使用する元素 (Mn 以降の原子番号) については影響がない。
- 3) 本研究で追加測定した隠岐産黒曜岩は、2015 年に渡邊貴亮さん、朝井琢也さんとともに採集したものである。
- 4) 代替機における測定値と、それと対応する TAS2020 収録データとの相関係数は、以下の通りである。

ilr.1: 0.991	ilr.2: 0.991	ilr.3: 0.976
ilr.4: 0.992	ilr.5: 0.992	ilr.6: 0.987
ilr.7: 0.984		
- 5) 加茂サスカ遺跡の発掘調査では、検出された黒曜岩製石器群に後期旧石器時代ナイフ形石器文化期と後期旧石器時代終末期～縄文時代草創期の 2 時期が想定されている (竹広 2009)。図 4-a の 2～7 は、他の資料にくらべて水和が進んでおり、表面が灰黒色を呈する。これらは後期旧石器時代ナイフ形石器文化期に、水和が進んでいない資料群を旧石器時代終末期～縄文時代草創期に年代づけるのが妥当かもしれない。

引用文献

- 青木要祐・佐々木繁喜・傍島健太 2023 「本州における白滝型細石刃石器群の石材獲得・消費戦略」『旧石器研究』19、pp.39–58。
- 上峯篤史 2024 「石材原産地判別群の同定・細分・統合——国際黒曜石会議 (IOC) 2023 遠征大会を方法論的に振り返る——」『旧石器考古学』88、pp.73–90。
- 上峯篤史・村井咲月・岡 智康 2021 「帯磁率測定による地層対比と旧石器包含層の年代決定」『日本文化財科学会第 39 回大会 研究発表資料集』、pp.98–99。
- 上峯篤史・村井咲月・吉田真優 2024 「海辺のくらし：後期旧石器時代前半期の人類-資源環境系」『日本文化財科学会第 41 回大会 研究発表資料集』、pp.88–89。

大屋道則 2009 「最新の分析手法」『月刊考古学ジャーナル』585、pp.5-8。

太田 亨 2023 『組成データ解析入門』朝倉書店。

金井拓人・池谷信之・保坂康夫 2019 「化学組成データの対数比解析を利用した黒曜石の原産地推定」『文化財科学』78、pp.37-51。

面 将道・加藤雄太・中川和哉 2024 「上野遺跡 (第1～4次調査)」『京都府遺跡調査報告集』194、京都府埋蔵文化財調査研究センター、pp.1-107。

金井拓人・池谷信之・隅田祥光 2022 「エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いた非破壊かつ装置非依存式の黒曜石原産地推定」『文化財科学』85、pp.1-14。

沢田順弘・Al-Jairani, A., 山崎博史・長尾敬介 2008 「隠岐島後、油井—長尾田地域における郡層と重栖層の火山岩類の岩石記載と全岩KA年代」『島根大学地球資源環境学術研究報告』27、pp.1-9。

杉原重夫・小林三郎 2006 「文化財の自然科学的分析による文化圏の研究—ガラス質安山岩産地データベース—」『明治大学人文科学研究所紀要』59、pp.43-94。

隅田祥光・稲田陽介・亀井淳志・及川 慎 2016 「島根

県隠岐島後における黒曜石の全岩化学組成～黒曜石製石器の原産地解析システムの構築に向けて～」『資源環境と人類』6、pp.73-86。

竹広文明 2009 「隠岐産黒曜石原産地をめぐる諸問題」『旧石器考古学』71、pp.87-97。

東京航業研究所地球化学分析室 (編) 2020 「日本の黒曜石」『研究紀要』創刊号、pp.1-328。

向井正幸 2014 「島根県隠岐の島から産出する黒曜石ガラスの化学組成」『旭川市博物館科学研究報告』6、pp.1-16。

村上 久 2018 「隠岐の地質と黒曜石」『隠岐産黒曜石の獲得と利用の研究』、pp.5-28。

望月明彦・池谷信之・小林克次・武藤由里 1994 「遺跡内における黒曜石製石器の原産地別分布について—沼津市土手遺跡BB V層の原産地推定から—」『静岡県考古学研究』26、pp.1-24。

薬科哲男・東村武信 1988 「石器原料の産地分析」『考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会、pp.447-491。

Aitchison, J. 1986 *The Statistical Analysis of Compositional Data*, Chapman and Hall.

大阪府粟生間谷遺跡の石材利用

三好元樹

要 旨

大阪府北側に位置する粟生間谷遺跡は近畿地方の縄文研究で重要な役割を果たす遺跡である。2000年代を中心とした石器石材研究の一つの到達点といえる「時期別石材組成グラフ」から、さらに検討を進める方法として、石器全点の最大長によるヒストグラムを用いることを提起し、その方法で粟生間谷遺跡について検討することとした。粟生間谷遺跡ではブロック1・3・6で遺物がまとまっているが、チャートの使用が一定量あるブロック1とブロック6を分析対象とした。ブロック1では、ナイフ形石器、剥片、石核ともにサヌカイトとチャートの違いが少ない。サヌカイトが比較的乏しくなっていることふまえると、技術を変えることなくチャートによる石器製作に移り変わっているものと捉えられる。ブロック6ではサヌカイトではナイフ形石器の大きさが大型と小形に別れ、チャートには小形の中でも最も小さい範囲のナイフ形石器しか存在しない。剥片の大きさもサヌカイトに比べてチャートは小さく、石核はサヌカイトが剥片を素材とするのに対して、チャートは分割礫を素材とする傾向があり、剥片剥離の方法自体が異なるものとなっている。チャートはサヌカイトの代替石材とはなっておらず、製品の小さい部分を補助しているに過ぎない。同じ遺跡内でおそらく石材の分布環境にも大きな違いがなかったと考えられる2つのブロックで石器製作が異なった要因は、時間的な差異とそれに伴う技術構造の違いと考えられる。ブロック6は国府石器群に近い段階の石器群と考えられ、サヌカイトを中心とした技術構造があり、補助的にチャートが利用された状況を示している。それに対して、ブロック1では石材で技術、製品に差異が少なく、国府石器群とは異なる段階の石器群と評価できる。

キーワード：対象時代 旧石器時代

対象地域 大阪府箕面市粟生間谷遺跡

研究対象 石器石材・出土石器全点・石器の最大長

はじめに

石器石材は、旧石器時代研究における主要な研究テーマの一つである。大阪平野ではサヌカイトが使用石材の主体となるが、その北部ではチャートが産出することもあり、チャートを併用する石器群が知られている。本論では、石材利用の分析方法を検討するとともに、大阪府粟生間谷遺跡を対象として石材利用について考える。

1. 粟生間谷遺跡の概要とこれまでの研究

粟生間谷遺跡は大阪府箕面市に所在する。淀川北岸の、北摂山地の南に隣接する丘陵上に立地する。都市開発に伴い、1994～2000年に発掘調査が行われ、発掘調査途中で旧石器時代のブロックの存在が明らかになり、その調査が行われた。2003年に報告書が刊行された（新海編2003）。

発掘調査では7つのブロックが確認され、特にブロック1・3・6では遺物がまとまって出土した（以下、ブ

ロック1・3・6とするものは粟生間谷遺跡のもの）。報告書作成には、当時の新進気鋭の研究者が多数携わり、多様な分析がなされた。一方で、編年的な評価は保留され、火山灰分析の結果をもとに、ブロック6がブロック3に先行する可能性を示すにとどまった。

その後、粟生間谷遺跡の石器群は、近畿地方の旧石器時代編年の主要な要素として取り上げられていくこととなる。

最初の編年の評価は伊藤栄二によってなされた。粟生間谷遺跡の石器群をひとまとめにしつつ、従来、国府石器群に後行すると考えられていた宮田山期に相当する石器群と評価し、国府石器群に先行して位置付ける「逆転編年」を提示した（伊藤2003）。

森先一貫は、小形柳葉形のナイフ形石器がまとまるブロック1を国府石器群成立の前段階に、ブロック3・6を国府石器群の段階と評価した（森先2005）。粟生間谷遺跡のブロックを個別に評価し、それぞれを編年上に位置付けた重要な成果であった。後には、プロ

ク1を七日市遺跡第Ⅳ文化層と共通すると考え南関東のⅤ層並行期に、ブロック3をⅤ層並行期に、ブロック6をⅣ層下部並行期に位置付けている(森先2010)。

藤野次史はブロック6を国府石器群と同じ第Ⅱb期に、ブロック1をナイフ形石器終末期の第Ⅲ期後半に位置付けた(藤野2006)。ブロック1の位置付けが森先とは大きく異なる。

佐藤良二・緒川一徳は、ブロック3・6を国府石器群に後続する第四段階に、ブロック1を終末期の第五段階に位置付けた(佐藤・緒川2010)。ブロック3・6とともに国府石器群に後続する段階に置く点が特徴である。ブロック3・6については、久保弘幸も国府石器群に後続し、瀬戸内技法の比率が相対的に低下するⅡb期に位置付ける編年を示している(久保2014)。

なお、後に緒川は、ブロック3・6を国府石器群と重複しつつ、より後の段階まで継続する後半1期Ⅱ群に位置づけ直している(緒川2013)。

森川実 は AT 降灰以降の石器群を検討する中で、ブロック3を国府石器群に先行するⅠb群に、ブロック6を国府石器群を含むⅡ群に位置付けている(森川2011)。

筆者はブロック6を角錐状石器が伴う5期に、ブロック3を横長剥片を素材とするナイフ形石器が主体となる6期に、ブロック1をナイフ形石器の終末期の7期に置いた(三好2014)。

このように栗生間谷遺跡の編年的な位置付けは極めて多様である。ブロック1は、森先が国府石器群に先行する段階に、そのほかナイフ形石器の終末期に位置付ける。ブロック3は、森川が国府石器群に先行する段階に、森先が国府石器群の段階に、佐藤・緒川、久保、三好が国府石器群に後続する段階に位置付けている。ブロック6は、佐藤・緒川、久保が国府石器群に後続する段階に、その他が国府石器群あるいは瀬戸内技法を有しながら角錐状石器を伴う段階に位置付けている。このように編年位置付けが様々であるのは近畿地方の編年が一致していないことによるものであり、当面はこの状況は解決しなさそうである。

こうした編年研究の一方で、報告書以降、石器群の内容について検討した研究は多くない。その中で森先によるチャート利用についての検討は重要である。森先は、大阪平野周辺の AT 降灰以降の遺跡を対象に分析を行い、チャートを多く含むⅠ類とチャートが少ないⅡ類に分類する。ブロック1とブロック6をⅠ類に、ブロック3をⅡ類に位置付けた。Ⅰ類においてはチャートとササカイトで石器製作に大きな違いがない

とした(森先2004)。

こうした研究をふまえつつ、本論では次章で示す方法で栗生間谷遺跡の石材利用を再検討したい。

2. 石器石材利用の分析方法

石器石材への着目は、日本の旧石器時代研究の初期から重要な役割を果たしてきたが、特に2000年代を席巻することとなった。これは1994年以降活発化した、蛍光X線による黒曜石の産地推定(望月ほか1994)が普及したことに加え、関東地方の悉皆的な石材調査(田村ほか2004など)が成果を上げたことで、客観的な分析が可能と認識されたことが大きな要因であろう。1990年代に盛行した文化人類学などのモデルを適用した理論考古学は科学を志向したが、科学的であることには限界があり、次第に石材研究をはじめとする客観的な分析に取って代わられた(三好2024)。

2000年代を中心とした石器石材研究の一つの到達点は、特定の地域内の主要な遺跡を時期別に並べ、石器全点の石材の割合を百分率で示した「時期別石材組成グラフ」であった。具体的には、愛鷹山麓(池谷・望月1998)、相模野台地(諏訪問2006)、中国山地(藤野2013、及川・瀬2018)などが挙げられる。

点数という客観的な属性をもとに作成された「時期別石材組成グラフ」は、地域の段階的な変化の大枠を把握するには極めて有効であった。これをもとに人々の活動の範囲やルートを分かりやすく示した成果は今でも有効である。

その一方で、「時期別石材組成グラフ」は単純に1点ごとの石材の組成を示すものであり、抜け落ちる属性は少なくない。今後の石材利用の研究では、「時期別石材組成グラフ」で明らかになったことをもとに、そこから抜け落ちた属性を拾い上げて、詳細を検討していく作業が必要となると考えられる。

ここでは「時期別石材組成グラフ」がかかえる課題の1つとして、石器の大小や器種に関わらず1点として捉えることを挙げたい。小片と石核や大型の剥片を同等に扱わざるをえなかったことにより抜け落ちた要素はあるように思われる。大きさだけであれば、点数の「時期別石材組成グラフ」とともに、重量によるものを加えればある程度問題の解消は見込めるだろう。だが、器種間の関係性までとなると難しい。

そこを検討可能とする方法として、ここでは石器の「最大長」を属性としてヒストグラムで示す方法を試みたい。ここで言う石器の最大長とは、石器の最も長くなる部位の長さである。実際に個々の石器を計測し

て求める必要があるが、作業の手間を省くため、報告書に掲載されている観察表を利用することとした。観察表には長さ、幅、厚さが掲載されているものが多く、その中で最大となるものを「最大長」とする。報告書に掲載されている観察表は、一般的には基軸や剥離軸を基準として計測した長さ、幅、厚さが示される。それと実際の最大長の間に差異はあるが、極端な違いが出ることは少ないと考え、この方法によることとした。

石器の最大長を基準とするのは、ナイフ形石器石器群の場合、石器の素材として剥片を選択する際に大きな役割を果たしていたと考えられるためである。西南日本のナイフ形石器石器群においては、よく見られる製品は、ナイフ形石器、刮器、搔器、ノッチ、鏃などに限定される。ナイフ形石器や刮器の製作については、剥片の最大長を意図的に減ずることなく、最大長を生かす方向でなされることが一般的である。

もちろん、剥片を製品に加工するかどうかの判断には、例えばナイフ形石器の場合、刃部として利用できそうな鋭い縁辺が残されているかどうかなどの個別の剥片の特徴が影響したことは間違いない。だが、そうした判断は個々の剥片を実見し、主観的に判断しなくてはならない。悉皆的な検討は容易ではないため、ここではあくまでも最大長により検討を進めることとする。また、剥片の厚さが製品の素材としての選択に影響したことは想定される。今回は取り扱うことができなかったが、今後取り組みたいと考えている。

こうした理由から、本論では石器の最大長を用いて検討を行うが、ヒストグラムを作成して可視化する。縦横に軸を持つ散布図では、一般的に漠然とその多寡を感じられるに過ぎない。ヒストグラムを用いると分布の形の認識が容易である(石井 2020)。

筆者は同様の方法で、大阪府早島遺跡の旧石器時代資料について検討した(三好(印刷中))が、そこでは石材ごとの差異については検討はできなかった。本論では粟生間谷遺跡のブロックについて石材利用とい

う視点で検討したい。

3. 粟生間谷遺跡ブロック1・3・6の使用石材

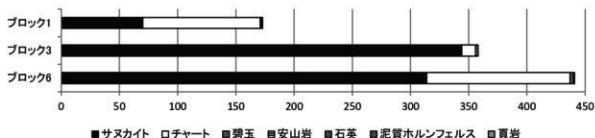
まず、ブロック1・3・6の使用石材について確認する。第1図は出土石器のうち破片を除いた石器全点の石材を示したものである。ブロック1に石英と泥質ホルンフェルスが1点ずつ、ブロック3に安山岩が2点、ブロック6に碧玉が3点、頁岩が1点含まれる以外は全てサスカイトとチャートとなっている。ブロック3ではサスカイトが大多数を占め、チャートは12点と少数である。

ブロック1はそもそも点数が少ないが、これはブロック1の大多数を占める破片が除かれているからである。サスカイトよりチャートが若干多い組成となる。ブロック6はサスカイトが主となり、チャートは客体的な存在である。チャートの点数は、ブロック1が101点、ブロック6が123点となり、概ね近い数となる。

本論では、サスカイトとチャートの石材利用の差異を検討することを目的とするが、ブロック3のチャートの点数は零であり、分析に耐えないと判断される。このため、以下ではブロック1とブロック6の石材利用について検討を進めることとする。

第1表はブロック1とブロック6の破片を除く器種組成をサスカイトとチャートに分けて示したものである。いずれも製品はナイフ形石器が主となることが分かる。あえて言えばノッチが一定量含まれるが、いずれも加工は低調で、ノッチを最終目標とした剥片剥離が行われたとは考えにくい。このことから、剥片剥離が目指したものは、多くの場合ナイフ形石器の素材であったと考えることができる。

ここで留意しなくてはならないのは、剥片剥離の最終段階においては、二次加工ある剥片や微細剥離ある剥片といった便宜的に使用される剥片の剥離が行われた可能性がある点である。こうした便宜的な石器は石器製作の中で生じた目的剥片とはならなかった剥片



第1図 ブロック1・3・6の石材組成

から選別されるのが通例であったと考えられる。だが、石核の消費が進みナイフ形石器の素材の獲得が困難となった石核を使用して、便宜的な石器に使用すべく剥片剥離が行われたことは想定しうる。遺跡に残される石核は、しばしばそういった石核消費の最終段階を示すものであり、意識しておかなくてはならない。

4. 最大長のヒストグラム

ブロック1と6についてサヌカイトとチャートに分けて、それぞれの器種の最大長をヒストグラムで表したのが第2・3図である。階級幅は5mmとした。この作図にあたっては、報告書に掲載されている観察表を使用した。観察表で計測値が抜けているものうち、報告書に図が掲載されているものは図から計測した値を使用した。また、実見により計測値を修正したところがある。碎片は全て計測値が記載されていないかったため除外することとした。

なお、ナイフ形石器については、使用・製作に伴い生じたと考えられる折れ片も出土しているが、それらを混ぜるとナイフ形石器の最大長の傾向の把握の妨げとなるため、もとの最大長が推定できないものについては除外した。

剥片については、折れていない剥片と折れている剥片を区別して表示した。これは「剥片剥離時の目的」と「製品製作時の選択」の2つを区別して確認するためである。

「剥片剥離時の目的」は折れていない剥片から判断されるべきである。剥片剥離の際には1回の加撃ごとに意図した大きさの剥片を剥離しようと試みるだろうが、その大きさを捉えるには折れた剥片の大きさを含むと妨げになる。折れていない剥片だけを対象とすることで、剥片剥離時に目的とした剥片の大きさの把握が可能である。

一方で、「製品製作時の選択」を考えるには折れた剥片を含めた全ての剥片を対象とする必要がある。製品を製作する際には、剥離された剥片全ての中から、製品に適したものが選ばれたことがあったと考えられ

る。ナイフ形石器の場合でもその剥片が折れているかは問題ではなく、大きさなどの要件がそろっていれば素材として選択されただろう。便宜的な石器には、剥離後に放置していた残滓の中から適当なものが選び出されることもあったと推察される。

とはいえ、折れていない剥片の最大長の傾向は、剥片全体の最大長の傾向と一致するように見受けられる。剥片全体の中で、折れていない剥片は最大長が大きいもので割合が多く、小さくなると割合が減じるようである。そのピークも大きく異なることはない。

5. 栗生間谷遺跡ブロック1の石材利用

ブロック1の碎片を除く石器は、チャートがサヌカイトより若干多い(第1図)。

まず、第2図でその傾向を把握する。ナイフ形石器は折れており最大長が推定できないものが多く、第2図に反映されているものは少ない。サヌカイトのナイフ形石器は21mmのもの(第4図1)が1点表示されているのみである。折れており最大長が推定できないものでも、それを大きく超えるものは無さそうである。チャートのナイフ形石器は15~25mmの階級幅に分布する。折れたナイフ形石器には現存長で27mmのもの(第4図5)があるが、復元しても30mm程度までの大きさであったと考えられる。ナイフ形石器はサヌカイト、チャートともに30mm程度までの小形のものであったと考えられる。なお、ナイフ形石器の素材は不定形な剥片が主であり、サヌカイトには横長の剥片も用いられる。チャートには縦長の剥片を素材としたもの(第4図5)もあるが、少数である。

剥片については、サヌカイトの最大値は47mmである。剥片全体のピークは10~15mm、中央値は18mmとなり、折れていない剥片のピークは15~20mm、中央値は19.5mmとなる。チャートについては最大値が45mmである。ピークは15~20mmで、中央値は剥片全体が20mm、折れていない剥片が21mmとなる。チャートについては、剥片より大きい二次加工ある剥片があり、元々はその程度の大きさ

第1表 ブロック1・6の器種組成

		ナイフ形 石器	角錐状 石器	円形掻器	ノッチ	二次加工 ある剥片	微細剥離痕 ある剥片	剥片	石核	楔形石器	合計
ブロック	サヌカイト	4						2	61	3	70
1	チャート	10			2	16	10	55	8		101
ブロック	サヌカイト	32	1	1	1	33	5	225	15	1	314
6	チャート	6			1	16	6	71	23		123

の剥片までが剥離され、便宜的な石器に使用されたと考えられる。飛び抜けて大きい62mmの微細剥離痕ある剥片(第4図7)までが遺跡内で剥離されたものかどうかは不明である。サヌカイトとチャートの剥片を比較すると、サヌカイトに小さいものが多い傾向がある。これは剥片剥離の最終段階で栗生間谷遺跡を訪れたことによるものだろう。とはいえ、ナイフ形石器の大きさを含めて、サヌカイトとチャートの大きさに大きな違いは認められない。

次いで石核について確認する。サヌカイトの石核は3点ある。いずれも剥片素材であり、特に第4図4はナイフ形石器の素材となりうる大きさの剥片と接合しており、剥片剥離の方法が、剥片素材の石核に拠っていたことを示す。なお、石核のうち最も薄い7mm(第

4図4)より厚い剥片(例えば第4図2)については、石核素材となる剥片の剥離段階に生じたものである可能性が考えられる。チャートの石核は8点ある。剥離が進行し、判断が付きづらいものが多いが、分割離を用いたものを含みつつ、剥片を素材とするものが主となる。剥片素材の石核のうち最も薄い第4図6が9mmであり、それよりも厚い剥片(例えば第4図8)は石核の素材となる剥片の剥離段階に生じたものである可能性がある。

ブロック1の石器製作についてまとめると、ナイフ形石器、剥片、石核ともにサヌカイトとチャートの差異が少なくなることがうかがえる。サヌカイトの剥片の中央値の低さからうかがえるように、サヌカイトが比較的乏しくなっている状況であったと考えられるが、大

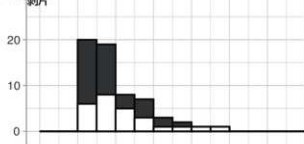
ブロック1(サヌカイト)



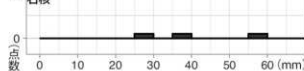
二次加工ある剥片



剥片



石核



ブロック1(チャート)



ブツ



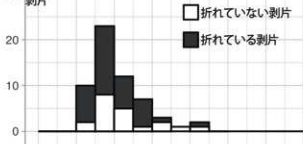
二次加工ある剥片



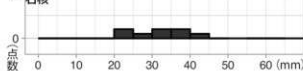
微細剥離痕ある剥片



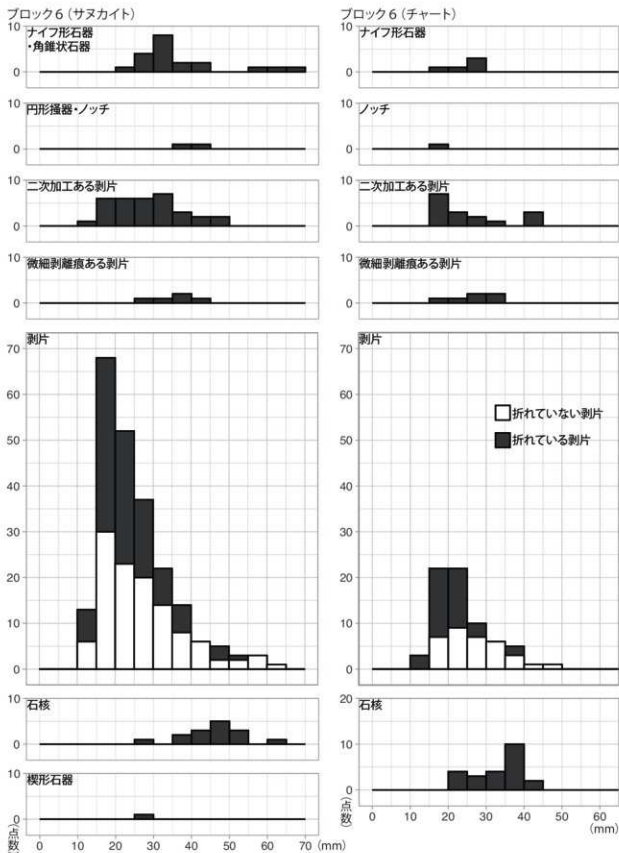
剥片



石核

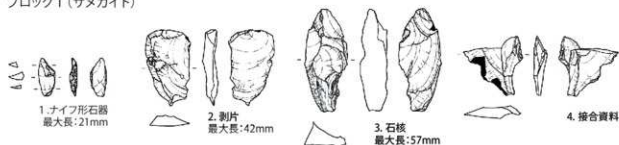


第2図 ブロック1の石器の最大長



第3図 ブロック6の石器の最大長

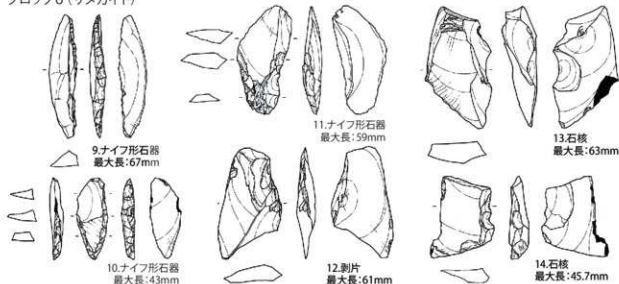
ブロック1 (サヌカイト)



ブロック1 (チャート)



ブロック6 (サヌカイト)



ブロック6 (チャート)



第4図 ブロック1・6の石器 (図は新海編 2003 より)

きく技術を変えることなくチャートによる石器製作に移り変わっているものと捉えられる。これは森先が示した石器群のⅠ類の特徴（森先 2004）と合致する。

6. 栗生間谷遺跡ブロック6の石材利用

ブロック6の碎片を除く石器は、サヌカイトが主体となり、チャートの利用は客体的である（第1図）。

まず、第3図からナイフ形石器の最大長を検討する。サヌカイトのナイフ形石器は最大値が67mm（第4図9）となり、大きいものを一定量含む。45～55mmの階級幅には分布が認められず、45mm以下のものとは性格を異にする可能性がある。大型のものについては、遺跡外で製作されて持ち込まれた可能性も想定すべきだろう。国府型ナイフ形石器（第4図9）とともに、翼状剥片石核かと考えられる石核をナイフ形石器に転用したもの（第4図11）が含まれており、国府石器群の痕跡が断片的に認められる。ピークは30～35mmにある。一方、チャートのナイフ形石器は30mm（第4図15）が最大となっており、サヌカイトと比べて小さい。サヌカイトのナイフ形石器の最も小さい範囲にあたり、その範囲のみを補助していたと考えられる。

剥片については、サヌカイトは最大値が61mm（第4図12）である。ピークは15～20mmで、中央値は剥片全体が23mm、折れていない剥片が25mmとなる。ナイフ形石器と比べると、大型の一群の範囲まではカバーできておらず、大型のナイフ形石器が搬入による可能性を示唆する。チャートは最大値が46mm（第4図19）に接合している石刃）である。ただし、接合して59.5mmとなる石刃（第4図18）も確認されており、その程度までは少ないながら剥片が存在した可能性はある。剥片全体のピークは15～25mm、中央値は22mmとなり、折れていない剥片のピークは20～25mm、中央値は26.5mmとなる。チャートは20mm以下の比較的小さい剥片が少ないが、原因は不明である。サヌカイトと比べると、チャートの最大長は小さく、ナイフ形石器の最大長と連動するようである。

石核については、サヌカイトは15点ある。多くが剥片を素材とすると考えられる。剥片の腹面から剥片剥離を開始し、場合によっては求心状に、さらにそれが両面に及ぶような剥離の順序となるものが多い。剥片素材の石核で最も薄い10.7mm（第4図14）より厚い剥片については、石核素材となる剥片の剥離段階に生じたものである可能性がある。チャートは23点あり、剥離が進んで判断が難しいものがあるが、分割剥離を用いるものが主体となる。サヌカイトに大きい石核が多

く、チャートは小さいものが多い。剥片の大きさと連動するように見受けられる。

なお、サヌカイト・チャートともに剥片の中には石刃と考えられるものを含んでいる。連続的にどれだけ剥離が行われたかは分からないが、第4図18の接合資料からはナイフ形石器の素材も提供しえたことがうかがわれる。第4図19では、小口面で石刃の剥離が行われるが、その後の剥片剥離が進行する中で、その痕跡は失われ、石核には石刃を剥離したと判断できる痕跡は残されていない。そうした状況がほかの一部の石核では生じている可能性がある。

ブロック6の石器製作についてまとめると、ナイフ形石器、剥片、石核ともにサヌカイトとチャートの石材利用の差が大きい。サヌカイトの石器全体の小さい部分を補助する形でチャートは用いられており、石核の用い方も異なっている。チャートはサヌカイトの代替石材とは見なされておらず、役割を異にするものと認識されていたと考えられる。

7. ブロック1・6の石材利用の差異とその評価

以上で確認したように、ブロック1とブロック6では、同じくらの数のチャートが用いられているにもかかわらず、そのあり方は大きく異なることが明らかになった。

ブロック1ではサヌカイトと大きく変わらない方法で剥片剥離が行われ、サヌカイトで製作する製品全体を代替するようにチャートが用いられている。一方、ブロック6では、剥片剥離の方法自体がサヌカイトと異なっており、製品もサヌカイトで製作されるナイフ形石器の最も小さい部分を随っているに過ぎないことが分かった。

同じ遺跡内で、おそらく周辺の石材の分布にも大きな違いがなかったと考えられるブロック1とブロック6で、これほど石器製作が異なっている要因は、時間的な差異とそれに伴う技術構造の違いと考えられる。ブロック6は偏年的な評価にずれはあれども、角雫状石器とともに国府型ナイフ形石器を有しており、国府石器群に近い段階の石器群と考えて間違いなさだろう。瀬戸内技法はサヌカイトと密接に結びつき、サヌカイトの消費に適した技術として成立している。瀬戸内技法は「石器製作工程の異所展開」（山口 1991）と呼ばれる石材の運用に示されるように、広域の移動をサヌカイトの消費によって支えることを可能にした。ブロック6の様相は、こうした国府石器群に近い時期に、あくまでもサヌカイトを中心とした技術構造があり、そ

れに補助的にチャートが利用されたあり方を示している。

それに対して、ブロック 1 では石材で技術、製品に差異が少ない。石材利用がサヌカイト中心とはならない、国府石器群とは異なる段階の石器群と評価できる。ブロック 1 の石器製作は同一段階の剥片剥離で得られた剥片を製品あるいは石核の素材として段階的に消費していく後期旧石器時代前半期の隠岐産黒曜石の石材消費（森本 2016）に類似する。ブロック 1 については国府石器群に先行する段階とナイフ形石器の終末期に位置付ける考えが示されているが、ナイフ形石器終末期の石器群の剥片剥離技術が十分明らかにされていないこともあり、今回明らかになった石器製作技術に基づく編年の位置付けの検討については今後の課題としたい。

おわりに

本論では、2000 年代を中心とした石器石材研究の一つの到達点といえる「時期別石材組成グラフ」から、さらに検討を進める方法として、石器全点の最大長によるヒストグラムを用いることを提起した。それに基づき、粟生間谷遺跡のブロック 1 とブロック 6 を対比的に検討し、ブロック 1 はサヌカイトとチャートの石材利用に差が少なく、ブロック 6 はサヌカイトを主とし、チャートはその最も小さい部分を補助するに過ぎないことを示した。これは、ブロック 6 がサヌカイトへの依存を強めた国府石器群に近い時期のものであるためと考えた。

本論で検討できなかった課題も少なくない。ナイフ形石器、剥片、石核の厚さの関係については、剥片剥離技術の分析を補助しうる要素と考えられるが、ここでは十分に検討できなかった。また、ブロック 3 はチャートの点数が少ないため本論では取り上げなかったが、併せて検討することで粟生間谷遺跡の評価を深められると考えられる。今後取り組むことができればと考えている。

矢野健一先生と最も深く関わったのは 2008～2010 年度の考古学研究会常任委員会でした。ともに、今は改組されて無くなった平和・歴史教育委員会に所属しており、熱のこもったメールをいただくこともありました。お世話になりました。今後のご活躍をお祈りいたします。

本論執筆にあたり、永野仁氏、笹栗拓氏のご協力の下、大阪府文化財センターには報告書掲載の観察表の

デジタルデータをご提供いただきました。粟生間谷遺跡の資料調査にあたって、大阪府教育庁文化財保護課、竹原信次氏のお世話になりました。また、稲田孝司先生には分析の方法と分析結果の解釈について有益なご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 池谷信之・望月明彦 1998 「愛鷹山麓における石材組成の変遷」『静岡県考古学研究』No.30 静岡県考古学会
- 石井淳平 2020 「考古学のためのデータビジュアライゼーション」『デジタル技術による文化財情報の記録と活用 2』奈良文化財研究所研究報告第 24 冊
- 伊藤栄二 2003 「近畿中央部における AT 上位石器群の編年の研究」『東海石器研究』第 1 号 東海石器研究会
- 及川穰・瀧友佳 2018 「山陰・中国山地における後期旧石器時代の黒曜石利用」『隠岐産黒曜石の獲得と利用の研究』鳥根県古代文化センター研究論集第 19 集
- 緒川一徳 2013 「瀬戸内技法の成立と展開」『九州旧石器』第 17 号 九州旧石器文化研究会
- 久保弘幸 2014 「西日本後期旧石器文化の編年と瀬戸内技法」『旧石器考古学』79 旧石器文化談話会
- 佐藤良二・緒川一徳 2010 「近畿地方」『講座日本の考古学 1：旧石器時代（上）』青木書房
- 新海正博編 2003 「粟生間谷遺跡—旧石器・縄文時代編—」大阪府文化財センター
- 諏訪間順 2006 「相模野台地における黒曜石利用の変遷」『黒曜石文化研究』第 4 号 明治大学博物館
- 田村隆・国武貞克・吉野真如 2004 「旧石器時代石器石材写真集」『千葉県歴史資料編考古 4 千葉県歴史資料』千葉県歴史資料館
- 藤野次史 2006 「中・四国地方、近畿地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年の研究』同成社
- 藤野次史 2013 「中・四国地方における石器石材利用の時期別動向と地域性」『中・四国旧石器文化談話会 30 周年記念シンポジウム予稿集・資料集』
- 三好元樹 2014 「近畿・中四国における旧石器時代の年代と編年」『旧石器研究』第 10 号 日本旧石器学会
- 三好元樹 2024 「旧石器時代・縄文時代と民族学」『考古学研究会 70 周年記念誌 考古学の輪郭』
- 三好元樹（印刷中）「出土石器全点を対象とした素材選択性についての分析方法の検討—早島遺跡出土石器を対象に—」『待兼山考古学論集Ⅳ』大阪大

学考古学研究室

- 望月明彦・池谷信之・小林克次・武藤由里 1994「遺跡内における黒曜石製石器の原産地別分布について」『静岡県考古学研究』No.26 静岡県考古学会
- 森川実 2011「AT 降灰以降における横剥ぎナイフ形石器の変遷」『旧石器考古学』74 旧石器文化談話会
- 森先一貴 2004「大阪平野周辺における石器石材の利用行動ーチャート石材から見た石材運用論の再検討ー」『旧石器考古学』65 旧石器文化談話会
- 森先一貴 2005「国府石器群の成立」『待兼山考古学論

集』大阪大学考古学研究室

- 森先一貴 2010『旧石器社会の構造的変化と地域適応』六一書房
- 森本直人 2016「後期旧石器時代前半期の隠岐産黒曜石利用の様相ー岡山県野原遺跡群早風 A 地点・島根県原田遺跡を対象にー」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室 50 周年記念論文集・文集』
- 山口卓也 1991「近畿地方における旧石器時代遺跡の立地ー遺跡立地の差と地域性の発生についてー」『関西大学考古学等資料室紀要』第 8 号

東海地方西部における縄文時代草創期の剥片剥離技術の一樣相

田部剛士

要 旨

三重県いなべ市下平大野 A 遺跡では、放射性炭素年代測定の結果から縄文草創期に相当する大型土坑（堅穴住居と報告されている）が検出され、その埋土及び周辺にはチャート製の石礫や石匙をはじめ、剥片等がややまとまって出土している。これらの剥片はいずれも平坦な単剥離面上もしくは自然面上を打面として選択しており、かつ背面構成はほぼ主要剥離面と同一方向のもので占められることから、下平大野 A 遺跡の石器は非常に単純な内容の石器群であり、東海地方西部における縄文時代草創期のチャート製石器の代表的な剥片剥離技術の一つとして提示できる。

キーワード：縄文時代草創期、チャート、石器、剥片剥離技術

はじめに

縄文時代草創期の石器製作に関する技術的な分析は、尖頭器あるいは有形尖頭器などの両面加工体の製作址の事例以外にはあまり知られていない。石材の原産地以外で旧石器時代のような大規模なブロックがみられないことから（このこと自体が、縄文時代以降の特徴なのだが）、特定の製品の量や形態から分析されることが多い傾向は否めない。

その中で、三重県いなべ市北勢町の下平大野 A 遺跡の報告書が刊行された（新名 2024）。一見すると石器しか出土していない小規模な縄文の報告書として扱われるものであろうが、筆者にはチャートでまとまり剥片の点数まできちんと報告され、かつ ^{14}C 年代測定値もある、極めて資料性の高い石器群だと捉えられた。

1. 下平大野 A 遺跡の位置と概要

本稿で対象とする下平大野 A 遺跡は三重県いなべ市北勢町に位置する（図 1）。近隣には前期後半の空堀遺跡や北野遺跡のほか、中期末から後期の上惣作遺跡、後期の覚正垣内遺跡、晩期の権現坂遺跡、宮山遺跡などの縄文遺跡が知られており、県下でも柳田川流域に次いで縄文遺跡の多い地域だといえる。なお、やや離れた位置であるが、草創期として著名な菰野町西江野 A 遺跡が約 18km 南に位置している。また、東近江市の相谷熊原遺跡とも鈴鹿山脈を挟むものの直線距離では 25km 程度しか離れていない。

下平大野 A 遺跡では土器は 1 点も出土していないが、堅穴住居と報告されている大型土坑 SH08 を中心として包含層などからサヌカイト 1 点とチャート製の石器



図 1 遺跡の位置 (S=1/20,000)

- 1 下平大野 A 遺跡 2 西江野 A 遺跡 3 粥井尻遺跡
4 相谷熊原遺跡

53 点が出土している。SH08 から採取された炭化材 2 点は ^{14}C 年代測定の結果、 $10,125 \pm 35^{14}\text{CBP}$ と $10,242 \pm 31^{14}\text{CBP}$ という年代値が示されている。これらは較正年代で $12,000 \sim 11,500\text{calBP}$ となり、縄文時代草創期末、更新世最終段階に該当することとなる。当該期における東海地方西部の土器は明瞭でないが、一般的に表裏縄文土器や撫余土器の存在が指摘されている。出土遺物を全点観察した結果縄文土器は破片レベルでさ

え1点も出土していなかった。また、この時期の北勢ではサスカイトが十分に流通していなかったため、在地で採取可能とされるチャートが用いられることが知られており（田部 2002）、出土遺物と年代値とは非常に整合的だと判断できた。

なお、報告書には出土石器のカラー図版が掲載されており、写真で見える限り母岩が2~3種と少ないようにみえた。また、石鏝とスクレイパーの製品が少数でかつ剥片がまとまった内容であったので、小規模な石器製作所であり、草創期の接合資料が得られるのではないかと期待した。資料を実見した結果、接合資料は得られず、近似した特徴をもつ母岩が11個体以上あるという想定外の結論に至ったが、よりコンパクトで一括性の高い資料との理解を深めたため、東海地方西部における草創期末のチャート製石器の様相として提示しておきたい。

2. 下平大野 A 遺跡の出土石器の分析

(1) 母岩の個体数

先述したように下平大野 A 遺跡の石器観察の最大の目的は接合資料が得られないかどうかであった。そこで、まず、母岩の識別から着手した。以下、報告書に掲載された遺物 26 点の内、25 点を対象とする。

最も目についたのは黒灰色から灰白色を呈し透明感のあるもので、これは玻璃質の強いものを母岩①、母岩①に近似するが透明感のないものを母岩②とした。母岩①が5点、②が3点ある。この母岩①と②は同一母岩の部位の差異である可能性もあるが、同一する根拠に乏しいため別母岩として認識した。次いで明らかに異なる母岩として目についたのが、赤色系のチャートである。これには褐色の縞が入る特徴があり、母岩③とし、5点を確認した。なお、報告番号16のみ玻璃質が特に強いので別の母岩とすべきかもしれないが、ここは一つにまとめておいた。これら以外は1・2点のみのものばかりであり、母岩④~⑪とした。この細分は黒灰色系の石材の中の偏差であり、それほど有意とはいえないかもしれないが、黒色系と白~灰透明色とが存在するようである。中でも母岩⑥は、不純物を一切含まず緻密で、最も良質な石材であった。

以上の分類結果を表1示した。石器は26点しかないものの、母岩数は11個体以上に及ぶことが明らかとなった。当初の目論見が見事に外れた結果となったが、大きくみると黒灰から灰白色系と赤色系に二大別される¹⁾。筆者はチャートの色調や質と産出地の関係性についての知識に乏しいが、下平大野 A 遺跡では

石材の供給が多岐に及ぶものでなく、ある程度固定であったと理解している。

(2) 自然面の付着状況

自然面（原礫面）を有する資料は当初の想定よりも少なかった。背面構成が自然面のみで構成されるもの、すなわち剥片生産の最初に生じるものは皆無で、そもそも背面に自然面を残すもの自体がほとんど存在しなかった。自然面の付着位置で目に付いたのは、打面を中心に両側縁にあるものであった。

これらことは、素材剥片の獲得が遺跡外で行われていた可能性が高いことを示している。残された剥片が

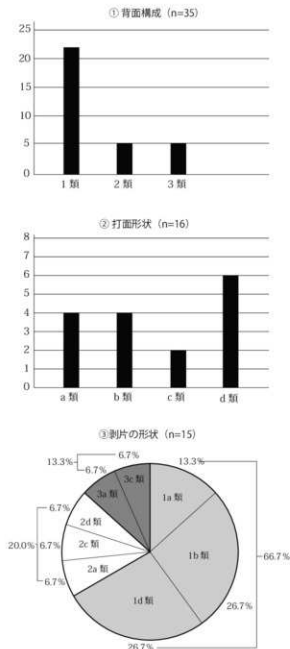


図2 剥片の分析

表1 下平大野 A 遺跡出土石器観察表

報告 番号	グリッド	出土遺構 / 層位	報告者 の器種	筆者の 認定器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	母岩	母岩の特徴	背面構成 の分類	打面の 分類	備考
1	D-p15	S H 8	石鏃	石鏃	チャート	1.95	(1.3)	0.2	(0.5)	②	①より透明感がない	-	-	
2	D-p15	S H 8	石鏃	石鏃	チャート	(2.8)	(1.6)	0.35	(1.0)	②	灰黒に乳白色が混入に混じる	-	-	
3	D-p15	S H 8	石鏃	石鏃	チャート	(2.75)	(1.9)	0.35	(1.0)	⑥	緑黒、不純物を一切含まず緻密、最も良質	-	-	
4	D-p14	S H 8 上面	スクレイパー	スクレイパー	チャート	4.25	2.9	0.85	10.6	①	黒灰～灰白、玻璃質強い	1	b	完形
5	D-p15	S H 8 上面	スクレイパー	スクレイパー	チャート	5.2	4.0	0.9	17.6	⑦	暗黄緑	1	a	完形
6	D-p15	S K 6	有舌刃器?	石鏃未製品	チャート	(2.8)	(1.8)	0.5	(2.1)	④	灰黒に乳白色が混入に混じる	-	-	
7	D-p15	S K 6	剥片	剥片	チャート	2.9	1.4	0.6	(1.8)	④	緑黒、不純物を一切含まず緻密、最も良質	2	d	
8	D-p15	S K 7	剥片	R F	チャート	2.65	1.25	0.35	1.6	②	①より透明感がない	1	d	
9	D-p15	S K 7	剥片	剥片	チャート	2.7	2.15	0.75	3.9	①	黒灰～灰白、玻璃質強い	3	c	
10	D-p15	S K 7	剥片	スクレイパー	チャート	4.9	1.15	0.7	5.7	①	黒灰～灰白、玻璃質強い	2	c	完形
11	D-p15	S X 2 周溝	剥片	剥片	チャート	3.9	2.3	0.4	3.8	⑥	くすんだ灰色、不純物を含まず緻密、玻璃質強い	3	a	
12	D-p15	S X 2 周溝	R F	R F	チャート	3.75	2.85	0.9	9.0	①	黒灰～灰白、玻璃質強い	1	d	
13	D-p14	包含層	剥片	石鏃未製品	チャート	2.4	1.45	0.4	1.5	③	赤色、褐色の端が入る	-	-	
14	D-p15	包含層	剥片	砕片	チャート	4.2	0.9	0.4	1.5	⑨	黒青、不純物を含まず均質、玻璃質あまりない	-	-	
15	D-p14	包含層	砕片	砕片	チャート	4.75	1.4	0.6	5.4	④	灰色に乳白色が混入に混じる	-	-	
16	D-p14	包含層	剥片 (R F)	R F	チャート	3.4	2.0	0.3	3.3	③	赤色、褐色の端が入る、玻璃質強い	1	b	
17	D-p14	包含層	剥片 (R F)	剥片	チャート	2.8	2.05	0.4	2.3	③	赤色、褐色の端が入る	1	b	
18	D-p15	包含層	剥片	石核	チャート	3.65	2.8	0.6	5.7	⑤	黒灰～緑黒、母岩⑤ほど玻璃質が強い	-	d	
19	D-p15	包含層	剥片	剥片	チャート	2.9	2.35	0.7	6.1	①	黒灰～灰白、玻璃質強い	1	a	
20	T1	表土その他	石鏃	石鏃	チャート	1.7	(1.4)	0.3	(0.7)	⑩	白透明～灰透明で褐色の端が入る	-	-	
21	D-p15	根裡乱	石鏃	石鏃	チャート	1.9	(1.25)	0.15	(0.4)	②	①より透明感がない	-	-	
22	D-p15	根裡乱	剥片 (R F)	R F	チャート	2.85	2.45	0.4	3.4	③	赤色、褐色の端が入る	1	d	石鏃未製品 だろう
23	D-p15	根裡乱	剥片	砕片	サスカイト	3.1	1.15	0.35	0.9	Sa	灰黒、風化する	-	-	
24	D-p19	風割木根	剥片 (R F)	R F	チャート	2.95	2.8	0.75	6.1	③	赤色、褐色の端が入る	2	a	
25	D-m17	風割木根	剥片	剥片	チャート	3.4	3.2	0.7	7.1	⑪	乳白色	1	d	
26	-	表採	剥片	剥片	チャート	3.35	2.9	0.8	8.2	⑤	黒灰～緑黒、母岩⑤ほど玻璃質が強い	1	b	

※ () は残存している値

5cm 以下と小さいことから、素材剥片のような状態で遺跡内に持ち込まれたと考えられる。下平大野 A 遺跡内では専ら製品化の工程が行われていたであろう。

あるいは、剥片の側縁や末端に自然面あるいは石理面を残す例（報告番号の 4 や 5 など）から、そもそもの母岩の大きさが拳大より少し大きい程度であって、小型の原石を持ち込んで直接剥片生産していたとも考えられる。

（3）剥片の生産

報告書に掲載されている資料の内、石鏃等を除き剥

片の形状が判断できるものは 16 点あった。これを上記の分類に基づいて観察した結果は表 1 及び図 2～4 のとおりである。また、報告書の掲載遺物以外にも 17 点の石器を観察し、それらの背面構成は 1 類が 12 点、2 類 2 点、3 類 3 点あった。以下、これらの資料を基に分析を進める。

①背面構成の分類

剥片形状の判断できるものを、背面構成のあり方から以下に分類する。なお、背面に自然面を大きく残すものは存在しなかった（図 2-①）。

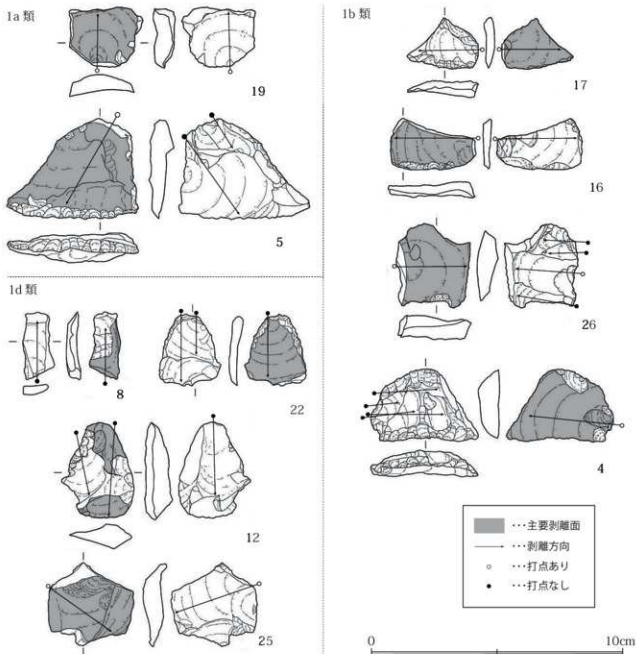


図3 下平大野 A 遺跡出土石器の分類 (1 類) (S=2/3)

- 1 類…背面構成が主要剥離面の剥離方向とほぼ同方向の剥離のみで構成されるもの。
- 2 類…背面構成が主要剥離面の剥離方向と同一方向の剥離に加え、 180° 反対からの剥離面で構成されるもの。
- 3 類…背面構成が主要剥離面の剥離方向と同方向の剥離に加え、 90° 程度した転移した剥離面で構成されるもの。

②打面形状の分類

下平大野 A 遺跡において、剥片生産時の打面の形状が判断できるものを、以下のとおり分類する(図 2-②)。

- a 類…自然面を打面とするもの。
- b 類…単剥離面打面、もしくは、石理面を打面とするもの。
- c 類…点状、もしくは線状に打面がつぶれているもの。
- d 類…欠損等により打面が確認できないもの。

③剥片生産

生産された剥片の打面を観察できるものは、欠損等により打面形状が判断できない d 類 6 点を除くと、10 点中 a 類 4 点、b 類 4 点、c 類 2 点であった。線状、点状となっている c 類が 2 割存在するものの低率である。実際には、自然面 (a 類) ないし剥離面・石理面 (b 類) の別を意識しているというよりは、平坦な打面を好んでいることが窺えた。目的剥片の生産にあたって入念に打面調整をして獲得しようという旧石器時代に特徴的な意識は一切窺えなかった。

また、背面構成は 18 点中、1 類が 12 点、2 類が 3 点、3 類が 3 点であった。報告書に掲載されていない剥片を含めると、その数は 35 点中、1 類が 24 点、2 類が 5 点、3 類が 6 点となる。1 類が 2/3 以上を占め圧倒的であることが明らかで、2・3 類は副次的であった(図 2-③)。

これらの分類から、下平大野 A 遺跡の剥片生産は、かなり固定的で単純なあり方であることが判明する。すなわち、平坦面の打面を選択し、それを固定したまま順次後退させながら連続的に生産していく姿が復原

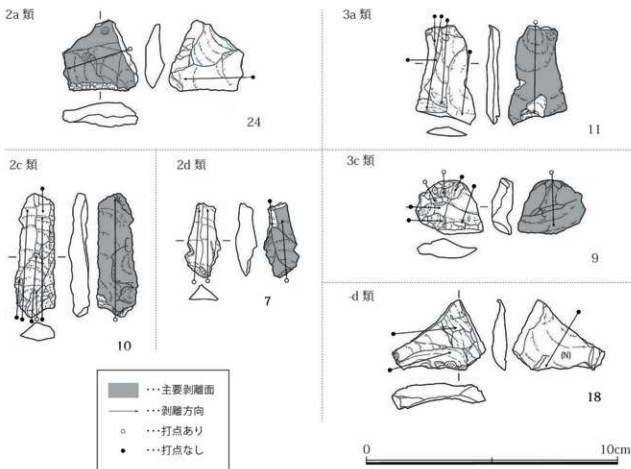


図 4 下平大野 A 遺跡出土石器の分類 (2:3 類) (S=2/3)

できる。このような生産方法を進めていくと、その過程で母岩の縁がやや凸状に取り残されることが間々生じてくる。この際に最大限効率的に剥片を獲得しながら、母岩の歪み補正していくために行われる副次的な工程が、90°～180°程度の打面転移であり、2・3類として表れているものと想定可能である。ただし、2類は打面が欠損しているd類との相関が高いので、一部剥片生産（母岩が保持でなくなった最終段階など）にあたって両極打撃が用いられた可能性が考えられる。

3. 下平大野 A 遺跡の評価

前述までの分析結果から、下平大野 A 遺跡の石器には以下のことが指摘できる。

- ・母岩の色調は黒灰から灰白色系と赤色系の二者が主体を占めながらも母岩数が多いことから、近隣に石材の採取場所があったと考えられること。
- ・石核や敲石類が存在しないことや背面に多くの自然面を残すような剥片が存在しないことから、母岩から素材剥片の生産を行う工程は遺跡外で行われていたか、あるいは小型原石を直接持ち込んでいた可能性が高いこと。
- ・自然面の平坦な箇所を選択し、限りなく打面を固定しながら連続的に剥片を生産していること。これはほぼ全ての母岩でも同じであるため、該期に特有な剥片生産技術であったと考えられること。
- ・いわゆるチップの回収は少ないが2～3cmの小型剥片が出土していること、石礫の未製品が存在することから、必要に応じて製品化していたと推定できること。

また、下平大野 A 遺跡の石器組成をみると、製品は石礫やスクレイパーに偏っており、磨石・石皿は一切出土していない。このことから、堅果類への適応は窺えず、狩猟生活に重点があったと想定できる。下平大野遺跡では定住生活の目安の一つとされる、堅穴住居と想定される大型土坑が検出されている。同じように松阪市の粥身井尻遺跡でも堅穴住居はあるものの、磨石・石皿はなく狩猟具に偏った石器組成している。一方、滋賀県東近江市の相谷熊原遺跡では堅穴建物から石礫と石皿・磨石がともに出土しており、三重県と滋賀県では異なった様相が窺える。三重県では、堅穴住居と堅果類の利用の開始が一致しない可能性が示唆されるため、今後注意して検討する必要がある。

おわりに

草創期の剥片剥離技術が窺えるような石核や剥片が

得られている遺跡は県下にほばないが、草創期の土偶が出土したことで知られる松阪市の粥身井尻遺跡では、草創期の遺構面の下位から大型の剥片等が86点出土しているという。これらの資料は2点が図示されているのみで、詳細不明となっている²⁾が、対比資料として今後検討していきたい。

謝辞

本稿の執筆に当たっては、下記の方々ならびに機関からご協力いただいた。感謝申し上げます。

新名 強、水谷 豊、石井智大、中村法道、三重県埋蔵文化財センター

矢野先生のご退官、お慶び申し上げます。先生とは大学生の頃にお会いして以来、関西縄文文化研究会などで発表の機会を与えていただいたり、論文執筆のお話をいただくなど、様々な機会でご案内いただきました。縄文時代の研究を志す者として精進いたしますので、今後ともご指導ください。退官されましても、矢野先生のますますのご活躍を祈念しております。

補注

- 1) 報告番号5のスクレイパーは唯一の母岩⑦である。明らかに特徴の異なる暗黄色の石材であり、他所で生産されたものが製品として持ち込まれた可能性が考えられる。
- 2) 草創期の堅穴住居等の遺構面の下位ということが判明しているだけで、どこまで遡る資料かは不明である。旧石器時代のものかもしれないし、そもそも人工造物かどうかさえ疑わしいため、実見した後に評価したい。

参考・引用文献

- 新名 強 2024 「下平大野 A 遺跡発掘調査報告書」
三重県埋蔵文化財センター
- 高木宏和・三島美奈子 2008 「渡会川北遺跡」 美濃市教育委員会
- 田部剛士 2002 「縄文時代草創期・早期の石材利用」 『縄文時代の石器—関西の縄文草創期・早期—』 関西縄文文化研究会
- 中川 明 1997 「粥身井尻遺跡発掘調査報告」 三重県埋蔵文化財センター
- 松室孝樹 2014 「相谷熊原遺跡 I」 滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会

近畿地域の隆起線文土器に見る南九州地域からの影響

村上 昇

要 旨

奈良県山添村の桐山和田遺跡と北野ウチカタビロ遺跡は、近畿地域では数少ない縄文時代草創期の遺構と遺物が確認された遺跡である。中でも、横走隆起線の上下に連続する圧痕が残る土器については、南九州地域との繋がりが指摘されてきた。また、桐山和田遺跡の発掘調査報告書では、隆起線文土器を2期に区分し、それぞれに無文土器が伴うとされたが、隆起線文土器と無文土器の時期差を指摘する見解がある。

本稿では、改めて個体識別した上で、報告書で示された類型ごとに土器の出土層位と位置を検証した。桐山和田遺跡では隆起線文土器は2期に区分出来、無文土器とは時期差があることを再確認すると共に、無文土器にも時期差が認められた。北野ウチカタビロ遺跡においては、隆起線文土器の細分と無文土器の時期差が追認出来た。

出土土器の内、横走隆起線の上下に連続する圧痕が残る土器は逆位の土器扱いで施文されており、南九州地域の施文手法の影響が認められる。近畿地域とその周辺に類例は分布し、北野ウチカタビロ遺跡で確認された宮崎県堂地西遺跡出土例に酷似した土器の存在を考えると、その影響は直接的であり、かつ、一過性のものとは考え難い。南九州地域と近畿地域およびその周辺は互いに異なる土器製作技術を用いる別個の地域であり、地域を跨いで施文手法の影響がもたらされた結果、近畿地域およびその周辺では丸底の土器を作る製作技術を維持しながら、南九州地域の施文手法を受容したと考えられる。また、近畿地域における施文手法の受容と変容・定着を経て、より東の地域へその影響が波及した可能性が考えられる。

キーワード: 縄文時代草創期、近畿地域およびその周辺、南九州地域、土器、逆位の土器扱い

はじめに

奈良県山添村の桐山和田遺跡と北野ウチカタビロ遺跡は、近畿地域では数少ない縄文時代草創期の遺構と遺物が確認された遺跡である。中でも、隆起線文土器については南九州地域との繋がりが指摘されている。本稿では、両遺跡における土器の変遷と、当該期の近畿地域の隆起線文土器に認められる南九州地域からの影響及びその波及について検討する。

1. 研究略史と残された課題

大和高原を流れる布目川の河岸段丘上に立地する桐山和田遺跡と北野ウチカタビロ遺跡は、布目ダム建設に伴い現地発掘調査が行われた。桐山和田遺跡の調査概報では、間層(5d層)を抜き、草創期包含層(5e層)と早期遺物包含層(5a～c層)が分離されると報告された(松田・近江1989)。1990年3月開催のシンポジウムでは、調査担当者の松田真一より、同様の土層堆積は北野ウチカタビロ遺跡でも認められると報告されると共に、北野ウチカタビロ遺跡出土の連続する圧痕が残る隆起線文土器と宮崎県堂地西遺跡例(面高ほか1985)との関連が指摘された(松田1994)。翌年刊行

の北野ウチカタビロ遺跡の調査概報では、5層にバックされた自然流路から草創期の遺物が出土し、間層とされた5d層が早期と草創期の混在層と報告された(松田・近江1991)。その後、松田は、近畿地域周辺の主要資料と比較して、両遺跡の隆起線文土器を隆起線文土器群の後半段階に位置付け、これに無文土器が伴うとした(松田1998)。

2002年刊行の桐山和田遺跡報告書では、草創期から早期にかけての堆積層(5a～e層)が認識出来ない、あるいは層が困難な地点があったとして、改めて5e層が草創期の包含層であるとされた(松田編2002)。また、草創期の土器は第1表のように分類された。これを基に、出土した隆起線文土器はA-2・3類とA-1類の2期に区分され、それぞれに無文土器が伴うとされた(松田2002)。この内、A-1類については南九州地域との関係性が指摘されている。また、共に胎土に顕著な繊維痕を残すA-6類とC-7類については近縁性が指摘されながらも、編年上の位置付けは保留されている。

続いて、2003年に刊行された北野ウチカタビロ遺跡の報告書(遺構編)では、草創期資料が出土した自

第1表 桐山和田遺跡発掘調査報告書の土器分類

A類	隆起線文土器
A-1類	横走隆起線の上下に連続する圧痕が残る。
A-2類	横走隆起線の圧痕が目立たず、口縁端部がやや外反する。垂下隆起線を伴う。
A-3類	横走隆起線の圧痕が目立たず、口縁端部が内湾気味に外傾。
A-4類	口縁端部よりやや下がった位置に横走隆起線を配する。口縁端部が外傾気味。
A-5類	口縁端部より4cm以下下がった位置に横走隆起線を配する。口縁端部が直立する。
A-6類	小豆状の浮文を有し、厚手で胎土に多量の繊維痕が残る。
A'類	部位不明で分類困難なもの。
B類	斜格子沈線文土器
C類	無文土器
C-1類	口縁部が緩やかに外反し、端部が尖り気味。
C-2類	口縁部が外傾気味で、端部が小さく外反。
C-3類	C-2類に似るが、口縁部がより薄手で、端部を細く収める。
C-4類	口縁部が直線的に外傾。
C-5類	口縁端部を小さく外傾に屈折。
C-6類	口縁部が外傾し、厚手で端部を丸く収める。
C-7類	口縁部がやや外傾し、厚手で端部を尖り気味に収める。胎土に繊維痕が顕著に残る。
C-8類	口縁部がやや外反し、厚手で端部が平坦。

然流路を5d層がバックしていると報告された(松田 編2003)。

以上の隆起線文土器に無文土器が伴うという見解に対し、矢野健一は隆起線文土器の時期差を追認した上で、隆起線文土器と無文土器との時期差を指摘する(矢野 2013)。矢野は報告書の記載から土器の個体識別を復元し、出土位置と層位から両者の時期差を導き出す。

以上を踏まえ、筆者は次の点を課題と考える。

第1点目は、隆起線文土器および無文土器の時期差の検証である。松田は出土位置の差を補完的な根拠としつつ、形態的特徴の違いと類似例の編年上の位置付けを基に桐山和田遺跡におけるA-1類とA-2・3類との時期差を想定し、それぞれに無文土器が伴うとする(松田 2002)。矢野から疑義が示されている(矢

野 2013)。また、近縁性が指摘されたA-6類とC-7類については、出土位置と層位の検討が十分ではない。一方、矢野は、帰属時期が草創期およびその可能性のある無文土器を抽出し一括して扱う(矢野 2013)、無文土器の類型ごとに出土地点と層位を確認した上で、各類型の時期差を検証する必要がある。

第2点目は、他地域由来の土器の編年上の位置付けと土器製作における受容過程の解明である。特に、連続する圧痕を残す隆起線文土器について南九州地域との関連が指摘されてきたものの、断定的な判断は避けられ、広域編年上の位置付けも不明確なままである。当該資料は南九州地域の土器とは異なる点もあり、南九州地域からの影響と近畿地域における土器製作上の受容について検証が必要である。

2. 桐山和田遺跡における出土位置と層位の検証

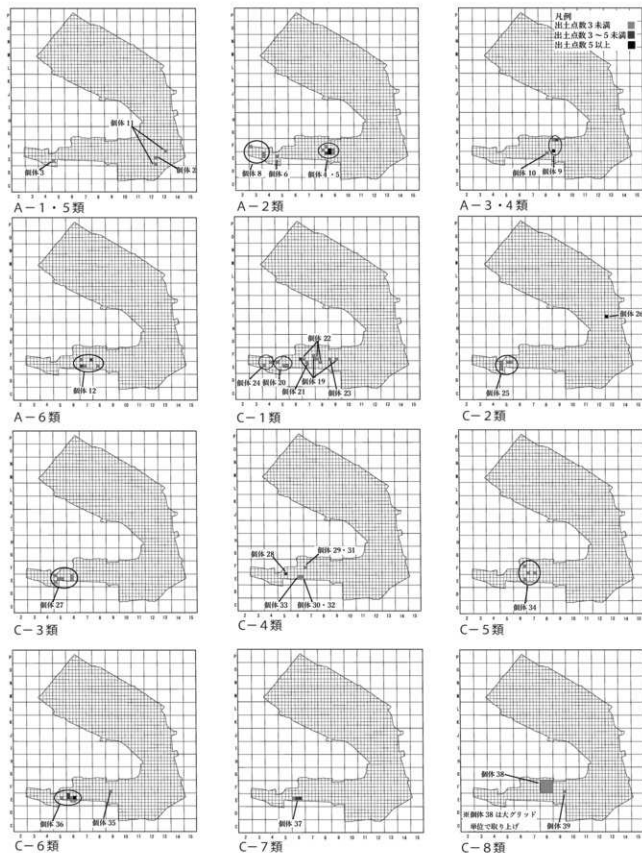
矢野が復元した個体識別(矢野 2013)を基に、改めて桐山和田遺跡出土土器の個体識別を行い(第2表)、類型別の出土地点と層位について検討する。なお、分類が不明確なA'・C'類と早期包含層出土のB類は対象から除く。紙面の都合から、実測図は報告書を参照願う。

まず出土層位を確認する。A-1~5類は、一部を除いて草創期包含層と報告された5e層が最も下層の出土層位である。A-6類は5e層からも出土するが、A-1~5類と比較して5c・d層から出土する傾向が強い。C類は類型毎に出土層位の傾向が異なる。C-3~6類は5e層が最も下層の出土層位となる個体が多いが、C-1・2類はC-3~6類と比較して5d層より上層から出土する傾向が認められる。C-7類は早期の遺物包含層から出土しており、C-8類は全破片が5d層から出土している。以上から、出土層位については、5e層から出土するA-1~5類とC-3~6類、5e層よりも上層から出土する傾向が強いA-6類とC-1・2類、5d層から出土するC-8類、早期に属するC-7類に時期区分出来る。

続いて出土位置を確認する(第1図)。調査区南部に一定の広がりをもって出土するA-6類とC-1類を除くと、各個体とも出土位置がまとまる傾向があり、廃棄地点から大きく移動していないと考えられる。一方、A-6類とC-1類は、布目川の水流を受けて廃棄地点から移動していると考えられる(矢野 2014)¹⁾。隆起線文土器の出土位置は、A-2~4類、A-1・5類、A-6類のまとまりに分かれる。無文土器の出土位置は、C-2・3類が5E区に、C-6・7類が6E区に、C-8

第2表 桐山和田遺跡における草創期土器個体識別

個体 No.	大塚2013 発掘層	調査 位置	分類	出土 高さ	出土 形状	土主	色調	備考	個体 No.	大塚2013 発掘層	調査 位置	分類	出土 高さ	出土 形状	土主	色調	備考
1	1-1	A-1	9B12	5a	線形	にじみ黄褐色	細面滑面土主		27	20121	C-1	9P1	5c.5a	中台盤	黄褐色		
2	2-1	A-1	1212	5a.5a	中台盤	にじみ黄褐色			28	20122	C-1	9P1	5a	中台盤	黄褐色		
3	3-2	A-1	915	5a.5a	線形	黄褐色			29	20123	C-1	1P1	5a	中台盤	黄褐色		
4	4-24	A-2	9C13	5a	線形	にじみ黄褐色			23	21124	C-1	9P1	5a	中台盤	黄褐色		
5	29-32+36+ 38+40	A-2	9P1	5a	線形	にじみ黄褐色			24	22125	C-1	4C15	5d	瓶口	にじみ黄褐色		
6	4-26+34+35	A-2	9C13	5a	線形	にじみ黄褐色			24	22126	C-1	4C15	5a	瓶口	にじみ黄褐色		
7	4-27	A-2	9C14	5a.5a	線形	にじみ黄褐色			24	22127	C-1	4C15	5a	瓶口	にじみ黄褐色		
8	4-28	A-2	9C13	5a.5a	線形	にじみ黄褐色			25	23128+129	C-2	5C5	5a	中台盤	にじみ黄褐色		
9	4-29	A-2	9C16	5c.5a	線形	にじみ黄褐色			25	23130	C-2	5C13	5a	中台盤	黄褐色		
10	4-30	A-2	9P1	5a	線形	にじみ黄褐色	位置不明		25	23132	C-2	9C11	5a	中台盤	にじみ黄褐色		
11	4-31	A-2	9P1	5a	線形	にじみ黄褐色	9P1 面貼?		25	23133+135	C-2	9C16	5a	中台盤	にじみ黄褐色		
12	4-33	A-2	9P13	5a.5a	線形	にじみ黄褐色			25	23134	C-2	9C13	5a	中台盤	にじみ黄褐色		
13	4-37	A-2	9P13	5a	線形	にじみ黄褐色			26	24136+139	C-2	13C5	5d	線形	にじみ黄褐色		
14	4-39	A-2	9P1	5a	線形	にじみ黄褐色	大塚に近い		26	24140	C-2	13C5	---	線形	にじみ黄褐色	山本繁茂報告書に収載なし	
15	5-41	A-2	9P13	5a	線形	黄褐色	より通?		26	26143	C-2	13C5	5a	線形	にじみ黄褐色		
16	5-42	A-2	9P13	5a.5a	線形	黄褐色			27	25142	C-3	5C11	5c.5a	線形	黄褐色		
17	5-43	A-2	9P13	5a	線形	黄褐色			27	25143	C-3	5C14	5a	線形	黄褐色		
18	5-44	A-2	9C16	5a.5a	線形	黄褐色			27	25144+145	C-3	5C13	5a	線形	黄褐色		
19	5-45	A-2	9P18	5a	線形	にじみ黄褐色			27	25146	C-3	5C13	5a+6	線形	黄褐色		
20	5-47	A-2	9P13	5a	線形	黄褐色			27	25147	C-3	9C10	5c.5a	線形	黄褐色		
21	5-48+49	A-2	9P1	5a	線形	にじみ黄褐色			27	25148	C-3	5C15	5a.5a	線形	黄褐色		
22	5-50	A-2	9C13	5a	線形	にじみ黄褐色	胴部下平		28	26149+151	C-4	5C15	5a	線形	黄褐色		
23	5-51+52	A-2	9C13	5a	線形	にじみ黄褐色			28	27152	C-4	9P1	5a.5a	線形	にじみ黄褐色		
24	5-53	A-2	9P1	5a	線形	にじみ黄褐色			29	28153	C-4	9C17	5c.5a	中台盤	にじみ黄褐色		
25	5-55+56+58	A-2	9C13	5a	線形	にじみ黄褐色			31	29154	C-4	9P1	5c.5a	線形	黄褐色		
26	5-56	A-2	9P1	5a	線形	にじみ黄褐色	内面割線に一段段のナミ		32	30155	C-4	9C12	5c.5a	中台盤	黄褐色		
27	5-57	A-2	9C16	5a	線形	にじみ黄褐色			33	31156	C-4	9C13	5a.5a	線形	黄褐色		
28	5-60	A-2	9P1	5a	線形	にじみ黄褐色			34	32157	C-5	7P1	5a	線形	黄褐色		
29	5-61	A-2	9P1	5a	線形	にじみ黄褐色			34	32158	C-5	7P1	5a	線形	黄褐色		
30	5-62	A-2	9P1	5a	線形	にじみ黄褐色			34	32159+161	C-5	9C12	5c.5a	線形	黄褐色		
31	5-63	A-2	9C16	5a.5a	線形	にじみ黄褐色			34	32160	C-5	9P1	5c.5a	線形	黄褐色		
32	5-65	A-2	5C5	5a	線形	黄褐色	扁平短形		35	32162	C-6	9P1	5a	線形	黄褐色		
33	6-63	A-2	10P46	5a.5a	線形	にじみ黄褐色			36	33163	C-6	4C13	5a	中台盤	黄褐色		
34	7-64	A-2P	3P4	5a.5a	線形	黄褐色	斜行する扁平短形		36	33164	C-6	9C16	5a	線形	黄褐色		
35	7-65	A-2P	4C13	5a.5a	線形	黄褐色			36	33165	C-6	9C14	5a	線形	黄褐色		
36	7-66	A-2P	4P19	5a	線形	黄褐色			36	33166+167	C-6	5C11	5c.5a	線形	黄褐色		
37	8-67+69+71+76+77+78	A-3	9P1	5a	線形	にじみ黄褐色			36	33168	C-6	9C16	5c.5a	線形	黄褐色		
38	8-69+72	A-3	9P14	5a	線形	にじみ黄褐色			36	33169+172	C-6	9C17	5c.5a	線形	黄褐色		
39	8-73	A-3	9P13	5a	線形	にじみ黄褐色			36	33174+176	C-6	9C17	5c.5a	線形	黄褐色		
40	8-74	A-3	9C13	5a	線形	にじみ黄褐色			36	33170	C-6	9C19	5c.5a	線形	黄褐色		
41	8-75	A-3	9C13	5a	線形	にじみ黄褐色			36	33171	C-6	9C13	5a	線形	黄褐色		
42	8-76	A-3	9C13	5a.5a	線形	にじみ黄褐色			36	33173	C-6	9C17	5a	線形	黄褐色		
43	8-79	A-3	9C14	5a	線形	にじみ黄褐色			36	33175	C-6	9C19	5c.5a	線形	黄褐色		平直底部?
44	9-81	A-4	9C11	5c.5a	線形	にじみ黄褐色			37	34177+181	C-7	9C19	5a.5a	中台盤	黄褐色		
45	10-83	A-5	13P19	5c.5a	線形	にじみ黄褐色			37	34178	C-7	9C19	5a	中台盤	黄褐色		
46	10-83	A-5	12C4	5c.5a	線形	にじみ黄褐色			37	34179+180+181	C-7	9C11	5a.5a	中台盤	黄褐色		
47	11-84+85	A-6	7C19	5a.5a	線形	にじみ黄褐色			37	34185	C-7	9C11	5a.5a	中台盤	黄褐色		
48	11-86+87	A-6	7P4	5a	中台盤	にじみ黄褐色			37	34182	C-7	9C16	5a	中台盤	黄褐色		
49	11-88	A-6	7C19	5a.5a	中台盤	にじみ黄褐色	縁部ない?		37	34183	C-7	9C11	5a	中台盤	黄褐色		
50	11-89	A-6	7C1	5a.5a	中台盤	にじみ黄褐色			37	34184	C-7	9C19	5c	中台盤	黄褐色		
51	11-90	A-6	7P10	5a	中台盤	にじみ黄褐色	早期製造品		37	34180	C-7	9C16	5a	中台盤	黄褐色		
52	11-91-1	A-6	7P4	5a.5a	中台盤	にじみ黄褐色			38	35187+206	C-8	9P1	5d	瓶口	黄褐色		
53	11-91-2	A-6	9C10	5c.5a	中台盤	にじみ黄褐色			39	36197	C-8	9P4	5	線形	にじみ黄褐色		
54	11-91-3	A-6	9P1	5c.5a	中台盤	にじみ黄褐色			40	37198+210+211+213+214+216+218	C-	13P5	5c.5a	線形	にじみ黄褐色		
55	12-92-93	A-	12C7	5c.5a	線形	にじみ黄褐色			40	37199	C-	13C1	5c.5a	線形	黄褐色		
56	12-95	A-	13C15	5c.5a	線形	にじみ黄褐色			40	37212	C-	13C12	5c.5a	線形	にじみ黄褐色		
57	12-96	A-	12C7	5c.5a	線形	にじみ黄褐色			40	37215	C-	12C7	5c.5a	線形	にじみ黄褐色		
58	12-94	A-	13C5	5a	線形	にじみ黄褐色			40	37216	C-	13C1	5c.5a	線形	黄褐色		
59	12-97	A-	13C15	5a	線形	にじみ黄褐色			40	37217	C-	13C12	5c.5a	線形	にじみ黄褐色		
60	13-98	A-	13C15	5c.5a	線形	黄褐色			40	37219	C-	12C7	5c.5a	線形	にじみ黄褐色		
61	14-99+100	A-	4C12	5a.5a	中台盤	にじみ黄褐色			41	3719+220+221+222	C-	13C1	5d	線形	にじみ黄褐色		
62	14-101	A-	4C12	5a	中台盤	くすんだ黄褐色			41	381221+224+227	C-	13C12	5d	線形	にじみ黄褐色		
63	14-102	A-	4C18	5a	中台盤	くすんだ黄褐色			41	381221+224+227	C-	13C12	5d	線形	にじみ黄褐色		
64	14-103	A-	4C18	5a	中台盤	くすんだ黄褐色			41	381221+224+227	C-	13C12	5d	線形	にじみ黄褐色		
65	14-104	A-	4C18	5a	中台盤	くすんだ黄褐色			41	381221+224+227	C-	13C12	5d	線形	にじみ黄褐色		
66	14-105	A-	4C18	5a	中台盤	くすんだ黄褐色			41	381221+224+227	C-	13C12	5d	線形	にじみ黄褐色		
67	15-106+107+109	A-	5C15	5a.5a	線形	にじみ黄褐色			42	381221+224+227	C-	9P2	5a	中台盤	にじみ黄褐色		
68	15-108	A-	5C15	5a	線形	にじみ黄褐色			42	381221+224+227	C-	9P2	5d	中台盤	にじみ黄褐色		
69	16-110	A-	7C16	5a	中台盤	黄褐色			42	381221+224+227	C-	9P2	5d	中台盤	にじみ黄褐色		
70	17-111+112	C-1	9P14	5a	中台盤	黄褐色			43	40123	C-	9C13	5a	線形	にじみ黄褐色		
71	17-113	C-1	9P14	5a	中台盤	黄褐色			43	40123+143	C-	4C16	5a	線形	にじみ黄褐色		
72	17-114	C-1	9P14	5a	中台盤	黄褐色			43	40140	C-	5C19	5a	線形	にじみ黄褐色		
73	17-115	C-1	9P14	5a.5a	線形	黄褐色			43	40141	C-	9C14	5a+6	線形	にじみ黄褐色		
74	17-116	C-1	7P10	5a	中台盤	黄褐色			43	40142	C-	5C19	5a	線形	にじみ黄褐色		
75	18-117	C-1	9C13	5a	線形	にじみ黄褐色			44	41244	C-	9C14	5a	線形	にじみ黄褐色		
76	18-118	C-1	9C13	5a.5a	線形	にじみ黄褐色			44	41245	C-	9C14	5a	線形	にじみ黄褐色		
77	18-119	C-1	5C12	5c.5a	線形	にじみ黄褐色			44	41246	C-	9C16	5a	線形	にじみ黄褐色		
78	19-120	C-1	7C14	5a.5a	線形	にじみ黄褐色			45	42147	C-	9P1	5a	線形	にじみ黄褐色		
79	19-121	C-1	7C14	5a.5a	線形	にじみ黄褐色			46	42148	C-	9P10	5d	瓶口	にじみ黄褐色		



第1図 桐山和田遺跡における各類型土器の分布(松田編 2002 改変)

類が 8F 区にまとまるのに対し、C-4 類は 5E 区から 6E・7F 区にかけて、C-5 類は 6EF 区から 7F 区にかけて広がる。また、C-1 類の内、個体 19・22 は 6～9F 区にかけて広がる。A-6 類と C-1 類の分布が重なるものの、これを除く隆起線文土器と無文土器の分布は排他的であり、矢野が指摘するように同時期のものとは言えない(矢野 2014)。

ここで出土層位に立ち返る。5e 層から出土した A-1・5 類、A-2・4 類、C-3・6 類は互いに出土地点が異なることから、時期差が想定される。無文土器を隆起線文土器より遡る時期に位置付けることは難しいため、これらの中では C-3・6 類が最も新相に位置付けられる。残る A-1・5 類と A-2・4 類の新旧関係はどうか。静岡県大鹿窪遺跡では鹿兒島県掃除山遺跡・梅ノ原遺跡・志風頭遺跡の各例に併行する土器が、本州東部の所謂「微隆起線文土器」(村上 2007b IV 期)に併行する(第 2 図 16・17、村上投稿中)。A-1 類は、逆位の土器扱いにより、隆起線文を連続して描き出すことで貼付しており、後述するように堂地西遺跡例から影響を受けたものと考えられる。掃除山遺跡他の例よりも堂地西遺跡例の方が後出と考えられること(村上 2007b)、A-2・4 類が本州東部の所謂「細隆起線文土器」(村上 2007b III 期)に相当することから、A-1 類よりも A-2・4 類の方が古く位置付けられる。ただし、A-1 類が拙稿 2007b IV 期に収まるかは検討を要する。なお、A-5 類は A-1 類の主体である個体 1 と出土位置が異なるため、両者の時期は異なる可能性が高い。

5e 層よりも上層からの出土傾向が強まる A-6 類と C-1 類は 6～8EF 区にかけて分布しており、布目川の水流の影響を受けた可能性がある。そのため、C-2 類を含め、出土地点差から時期差を導き出すことは困難である。また、小豆状の浮文が貼付されている A-6 類は、隆起線文土器とは認められない(矢野 2013)。時期差は判然としなが、A-6 類と C-1・2 類は C-3・6 類よりも後出と理解したい。

5d 層から出土する C-8 類は、A-6 類および C-1・2 類よりも新しい。早期包含層より下層で出土していることから、早期大川式新段階よりも古く位置付けられる。早期包含層より出土する C-7 類は、大川式新段階以降に位置付けられようか。

以上をまとめると、「A-2・4 類⇒A-1(・5)類⇒C-3・6 類⇒A-6 類・C-1・2 類⇒C-8 類⇒C-7 類(早期)」という新旧関係となり、A-1 類は南九州地域の堂地西遺跡例と併行する。

3. 北野ウチカタビロ遺跡出土土器の検討

北野ウチカタビロ遺跡では、草創期の遺物は自然流路 5④・⑤層を中心に出土し、部分的に確認された 5⑥層からも出土している(松田編 2003)。

5⑥層からは、桐山和田遺跡 A-2 類に相当する土器が出土している(第 2 図 1・2)。第 2 図 2 には隆起線の上に左方向に進むナデ痕が残る、逆位の土器扱いによる施文と分かる³⁾。

5⑤層からは、桐山和田遺跡 A-1 類類似の土器(第 2 図 3)と、胎土に繊維痕を残す隆起線文土器(第 2 図 4)が出土している。

5④層からは、桐山和田遺跡 C-7 類に相当する、胎土に顕著な繊維痕を残す厚手の無文土器(第 2 図 5)が出土している。桐山和田遺跡 C-7 類は早期(大川式新段階以降)に位置付けられることから、5④層は早期前葉に堆積した可能性がある。

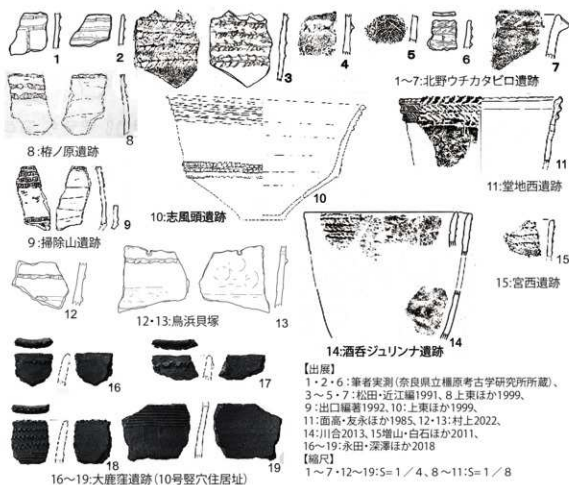
この他、遺構外の 5d 層から、逆位の土器扱いにより連続して描き出すことで貼付した隆起線文を口縁部に密集させる土器が出土している(第 2 図 6)。口縁端部を肥厚させないものの、逆位の連続描き込みにより隆起線文を密着施文する点が類似しており、堂地西遺跡例(第 2 図 11)の製作技術に精通した作り手によるものである。層位的な裏付けを欠くものの、型式学的に桐山和田遺跡 A-1 類とその類似例の祖型と考えて良い。南九州地域もしくはその近辺から近畿地域へ直接的な影響が及んだことを示す資料である。

以上から、北野ウチカタビロ遺跡土器の新旧関係は、「桐山和田遺跡 A-2 類相当(第 2 図 1・2)⇒桐山和田遺跡 A-1 類類似資料(第 2 図 3)およびその祖型(第 2 図 6)⇒桐山和田遺跡 C-7 類相当資料(第 2 図 5)」とまとめることが出来る。

4. 南九州地域からの影響の受容と波及

以上の検討結果を基に桐山和田遺跡と北野ウチカタビロ遺跡の土器を軸に編年を組むと、第 3 表のようになる。両遺跡は長期間に及ぶ集団の回帰的移動の累積により形成されたと理解されるが(光石 2001)、隆起線文土器だけではなく、無文土器についても時期差が認められる。ただし、隆起線文土器から無文土器にかけての土器の変遷、および無文土器の併行関係については、本稿では検証に至らなかった。

さて、これまで北野ウチカタビロ遺跡出土の連続する圧痕が残る隆起線文土器(第 2 図 3)および桐山和田遺跡 A-1 類には、南九州地域との関係が指摘されてきた。福岡県浜貝塚にも類例があることから(第



第2図 各遺跡から出土した土器 (S=1/4・1/8)

第3表 桐山和田遺跡を軸にした併行関係

	南九州地域	近畿地域	近畿地域周辺	愛知県域	静岡県東部	日本列島東部
隆起線文土器		桐山和田A・2・3類				村上2007aⅢ期
	掃除山				大鹿窪10号竪穴住居址	村上2007aⅣ期
	堂地西	桐山和田A-1類	鳥浜下層式	酒吞ジュリンナ、宮西		村上2007aⅣ期?
無文土器		桐山和田C-1・2類				
		桐山和田C-8類				
		桐山和田C-7類				

※本表は、隆起線文土器と無文土器それぞれの併行関係を示したものである。隆起線文土器と無文土器とは、新旧関係にあるが、必ずしも、その連続性を意図しているものではない。

2図12・13)、近畿地域とその周辺に分布すると考えられる。鳥浜貝塚例(鳥浜下層式)に対しては南九州地域との繋がりが指摘されてきたが(大塚1990など)、近畿地域の土器製作技術との関わりについては実態が不明であった。北野ウチカタビロ遺跡において堂地西遺跡例の製作技術を熟知した作り手による土器が確認され(第2図6)、同様の施文手法による類例が近畿地域とその周辺に認められることから、南九州地域からの影響は一過性のものとは考え難い。むしろ、南九

州地域から施文手法の情報がかなり直接的に持ち込まれ、これが近畿地域とその周辺で受容されたという文脈で理解出来る。ただし、桐山和田遺跡A-1類とその類例には、堂地西遺跡例と異なる点が認められる。堂地西遺跡例は丸味を帯びた平底を持つバツツ形を呈し、口縁部に逆位の連続摘まみによる隆起線文を密着させる(第2図11)。これに対し、桐山和田遺跡A-1類は丸底であり、鳥浜貝塚例は隆起線文が間隔を空けて横走する(第2図12・13)。北野ウチカタビロ遺

跡例は、間隔を空けて潰れた隆起線が横走するが、胴部からやや丸みを帯びて丸底に繋がると考えられ、器形の上では本州東部の隆起線土器に近い(第2図3)。当該期の南九州地域において、間隔を空けて逆位の土器扱いによる連続描き込みで複数の隆起線文を横走させるのは稀であり、器形が異なることから、近畿地域とその周辺では、従来の間隔を空けて隆起線文が横走する丸底土器の製作技術も受け継いだと考えられる。つまり、南九州地域と近畿地域およびその周辺は互いに異なる土器製作技術を用いる別個の地域であり、地域を跨いで施文手法の影響がもたらされた結果、近畿地域およびその周辺では南九州地域の施文手法を受容しながらも、丸底の土器を作る製作技術を維持したと考えられる。その時期は、日本列島東部における所謂「微隆起線土器」(村上 2007a IV期)以降に位置付けられる。

最後にさらに東へ視点を移す。隆起線の間あるいはその上を連続して押圧する土器が愛知県域に見られる(第2図14・15)。同様の施文手法は本州東部では稀なため、近畿地域で定着した隆起線を連続して描き込む施文手法が痕跡化したものと考えられる。資料数が限られるため更なる検討を要するが、南九州地域に由来する逆位の連続描き込みによる隆起線文の施文手法が近畿地域における受容と変容・定着(桐山和田遺跡 A-1 類とその類似例)を経て、より東の地域へ波及した可能性が考えられる。

おわりに

以上、桐山和田・北野ウチカタビロ岡遺跡における出土地点と層位の検証を軸に、隆起線土器と無文土器の変遷と、隆起線土器における地域間の影響関係と併行関係を検討した。特に、南九州地域から本州への影響は、直接的かつ大きなものだったと考えて良い。地域により土器製作技術が異なり、かつ影響し合う背景に、どのような社会の在り様を想定すべきか。課題は尽きない。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、奈良県立橿原考古学研究所には資料の図化についてご高配頂きました。また、松田真一、岡田憲一、杉山拓己、増山嶺之、長井謙治の各氏(順不同)には、ご助言とご助力を頂きました。特に記して、謝意を表します。

註

- 1) 矢野は堆積層の傾斜が変化することから、草創期から早期にかけて布目川の流路が遠ざかった可能性を指摘する(矢野 2013)。また、調査区北東部でも布目川の近くでは 5d 層の堆積が認められないため、5d 層堆積後に布目川が調査区より東側へ移動したと考えられる。遺構の集中と併せ、当時の生活の場が水辺付近であったことが窺われる。
- 2) 製作者が右利きの場合の施文作業を例に挙げると、「正位の土器扱い」は、土器を正位に据える、あるいは口縁部が向う側、底部が手前側になるように据える場合が想定される(大塚 2000)。「逆位の土器扱い」は、土器と作り手の位置関係の特定が難しいものの、土器を逆位に据える、あるいは口縁部を手前に、底部を向う側になるように据える場合などが想定される。
- 3) このため、桐山和田遺跡 A-1 類よりも前に、九州地域からの影響が近畿地域に及んでいた可能性がある。

参考文献

- 大塚達朗 1990 「隆起線の比較から見た九州と本州一序章」『縄文時代』第 1 号 縄文時代文化研究会
- 大塚達朗 1992 「縄紋草創期と九州地方」『季刊考古学』第 38 号 雄山閣
- 大塚達朗 2000 『縄紋土器研究の新展開』同成社
- 面高哲郎・友永良典ほか 1985 『蒲田遺跡 入料遺跡 堂地西遺跡 平堀遺跡 堂地東遺跡 熊野原遺跡』宮崎県教育委員会
- 橿原考古学研究所編 1994 「一万年前を掘る」吉川弘文館
- 川合剛 2013 「36 酒呑ジュリナ遺跡」『新修豊田市史 資料編考古 I 旧石器・縄文』新修豊田市史編さん委員会編 豊田市
- 永田悠紀・深澤麻衣ほか 2018 「史跡大鹿窪遺跡発掘調査総括報告書」富士宮市教育委員会
- 増山嶺之・白石浩之ほか 2012 「宮西遺跡 (1)」田原市教育委員会
- 松田真一 1994 「桐山和田・北野ウチカタビロ遺跡の調査成果」『一万年前を掘る』橿原考古学研究所編 吉川弘文館
- 松田真一 1998 「近畿地方における縄文時代草創期の編年と様相」『橿原考古学研究所論集』第十三 橿原考古学研究所編 吉川弘文館

松田真一 2002『桐山和田遺跡草創期の土器の様相』『桐山和田遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
 松田真一編 2002『桐山和田遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
 松田真一編 2003『北野ウチカタビロ遺跡（遺構編）』奈良県立橿原考古学研究所
 松田真一・近江俊秀 1989『山添村 布目川流域の遺跡 5』『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）1988 年度』奈良県立橿原考古学研究所
 松田真一・近江俊秀 1991『山添村 布目川流域の遺跡 6』『奈良県遺跡調査概報 1990 年度』奈良県立橿原考古学研究所
 光石鳴巳 2001『縄文文化の起源を探索』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

村上昇 2007a『日本列島東部における縄文時代草創期隆起縄文土器の編年—関東地域を中心に—』『古代』第 20 号 早稲田大学考古学会
 村上昇 2007b『日本列島西部における縄文時代草創期土器編年—南九州地域を中心に—』『日本考古学』第 24 号 日本考古学協会
 村上昇 2022『鳥浜貝塚出土の縄文時代草創期土器の報告』『鳥浜貝塚研究』6 福岡県立若狭歴史博物館
 村上昇（投稿中）『駿河湾周辺地域の隆起縄文土器と他地域との併行関係の検討』『立命館文学』第 691 号 立命館大学人文学会
 矢野健一 2013『近畿地方における縄文草創期土器編年』『立命館大学考古学論集Ⅵ』立命館大学考古学論集刊行会

研究論文

縄文時代早期の鹿角製装身具類について

— 佐賀市東名遺跡出土資料から —

川添和暁

要 旨

佐賀市東名遺跡の調査では、遺跡形成過程、形成時期、遺跡規模、豊度が多彩な出土資料などによって、縄文時代早期末を考える上で極めて重要な情報が多数提供された。本稿では、東名遺跡を代表する列点文装身具と言われる鹿角製装身具を中心に、骨角製装身具類について再検討を実施した。分析では、主に素材取りや加工、欠損状況について検討し、筆者視点での本資料の特殊性と性格について可能な限りの言及をした。特に(1)装飾の主体が鹿角素材表面側ではなくて、鹿角髄側に施されている点、(2)列点文装身具といわれる装飾が施された「完成品」と考えられるものには、二又部を経由して弧状を呈しているものが現状では認められない点が、注目できるとした。このことは、現在知られている列点文装身具が製作当初の形ではない可能性があり、装身具類として使用している間に欠損もしくは切断などとして、現在知られている形になった可能性を提示した。東名遺跡出土資料については、その他素材資料にも触れつつ、川添前稿では詳細に触れることができなかった、愛知県入海貝塚資料や、神奈川県吉井城山第1・第2貝塚資料についても比較し、骨角製装身具類についても広域的な類似性と、地域的な独自性が認められることを指摘した。地域的な独自性に関しては、同一素材についての利器・工具としての使用機種との対比が必要であると考えられ、その見解の一端を示した。

キーワード：縄文時代早期、骨角製装身具類、東名遺跡

はじめに

骨角器は、骨・角・牙のほか、場合によっては貝製の動物性素材で作られた道具の総称であり、各時代を通じた利用の様相が研究されている。製作状況であるとして、(1)製品器種と、(2)製作関連器種に二分され、(1)の製作関連器種をさらに機能・用途的な観点で見ると、大きく(a)利器・工具類と、(b)装身具・儀器類に二分される(図1)。石素材の考古資料であれば、前者は石器、後者は石製品と呼称されるものに当たる。骨角器というと(a)・(b)のような(1)製品器種の印象が強いものと思われるが、実際に遺跡から出土する資料群では、加工により切断廃棄されたものや加工途上品などの(2)製作関連器種も多数確認される場合がある。

筆者は、これまで(b)について列島規模での調査検討を実施している途上にある。本稿では縄文時代の初めの頃の様相を見るために、西日本での良好な資料数を有する佐賀市東名遺跡の資料について再検討を試みる訳であるが、今回は特に調査を進めた鹿角製を中心に骨角牙製品について検討を進めていくこととする。

1. 東名遺跡について

東名遺跡については、これまでの発掘調査報告書に加えて、佐賀市教育委員会による一般向け解説書も刊行されている(西田ほか2017)。これらを参考に、東名遺跡について概略をまとめておく。

東名遺跡は、佐賀平野の北側、背振山地から伸びる丘陵麓の低地内に当たる、佐賀市金立町内に位置する。工事前は水田が広がる景観で、当時の地表の標高は2mほどであった。遺跡東側には巨勢川(戦前は徳永川)が南流し、遺跡の南は北西から南東に流れ込む複数の流路が合流する地点となっていた。東名遺跡では、巨勢川調整池建設に伴い、平成5年から19年(1993



図1 日本列島先史時代の骨角器器種の大別

～2007年）の間に複数回にわたる発掘調査が実施された。平成5年から8年（1993～1996）の第1次調査では居住域が調査されたが、平成15（2003）年の掘削工事により新たに貝塚が発見され、第2次調査が開始される契機になったという。この第2次調査によって、この貝塚は、縄文海進の堆積層（最大層厚5mの粘土層）によって埋堆した湿地性貝塚であったことが明らかとなり、動物性遺物のみならず、カゴなどの編組製品を代表とする植物性遺物も豊富に出土した。このように、遺跡形成過程、形成時期、遺跡規模、豊富で多彩な出土資料などによって、東名遺跡が一躍有名な遺跡となり、平成28（2016）年10月に国史跡に指定されることになった。

東名遺跡は、弧状を呈する微高地上に形成された居住域と西側低地部分に形成された貝塚とで構成される遺跡であるとされている。現在、貝塚は、第1貝塚から第6貝塚まで点在した状況が確認されており、その範囲は南北500mわたる。微高地は、東名遺跡の西側に別に存在していたとされており、その末端には久富二本杉遺跡として貝層が確認されている。貝層が確認された微高地上には調査は及んでいないようであるが、当地一帯に縄文時代早期末の活動域（集落跡）が展開していたことを想定させるものかもしれない。

2. 東名遺跡出土資料の様相

東名遺跡で貝塚の調査がなされたのは第2次調査で、第2貝塚が調査された。現在知られている資料は、この第2貝塚出土資料である。貝層を形成する貝層は、ヤマトシジミを主体としてマガキが混じるとされる。

この第2次調査では、多数の骨角器資料が出土しており、縄文時代早期末の様相を何う上で、欠かせない資料となっている。報告では総点数288点とあるが、報告後に追加の整理で確認されたものも加えると、300点は超えるであろう。288点中、筆者のいうところの製作関連器種は約42%を占めるとのことから、製品器種は全体の6割弱である。この中で、鹿角素材の遺物は最も多く、さまざまな加工段階の資料が出土している。まずは鹿角に関わる器種から見ていこう。

東名遺跡の装身具類で最も著名なものに、列点文装身具と言われるもの（西田編2009）があり、出土点数は13点に及ぶ（図4の1～9）。その装飾性から、東名遺跡出土遺物を代表するものとして位置づけられる。使用部位は鹿角二又部が圧倒的に多く、角枝端部を用いたものは一点に過ぎない（9）。細かい凹みによって文様を表現するモノで、ネガティブに直線や鋸歯文を描くものも多く、弧線状のものもある。この細かい凹みは、回転穿孔の技法によって施されているもので、貫通させることなく途中で終了することによって凹みとしているものである。凹みを詳細に観察すると、回転時に生じた極めて整った螺旋状の線状痕が残されている（図4右下写真）。この器種では、文様は髄を除去した鹿角内面側を主体とすることを大きな特徴とする。また、当初の形を保った完存品はなく、欠損資料が多い。一点、端部に施溝＋折り取りで切断がなされているものがあるが、この切断は、細かい凹みの施された後に実施されており、端部に三箇所ある貫通孔も同様である。最終結果として、このような形になったものと考えられる。



図2 東名遺跡および縄文時代早期骨角器出土遺跡の位置

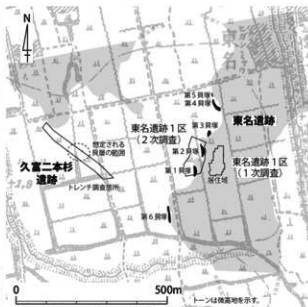


図3 東名遺跡の位置（旧陸軍陸地測量部 大正6年2万5千分1地形図「佐賀北部」をもとに西田編2009を参考に作成）



図4 縄文時代早期後葉骨角器1【東名遺跡】(西田編 2009 より加筆修正)

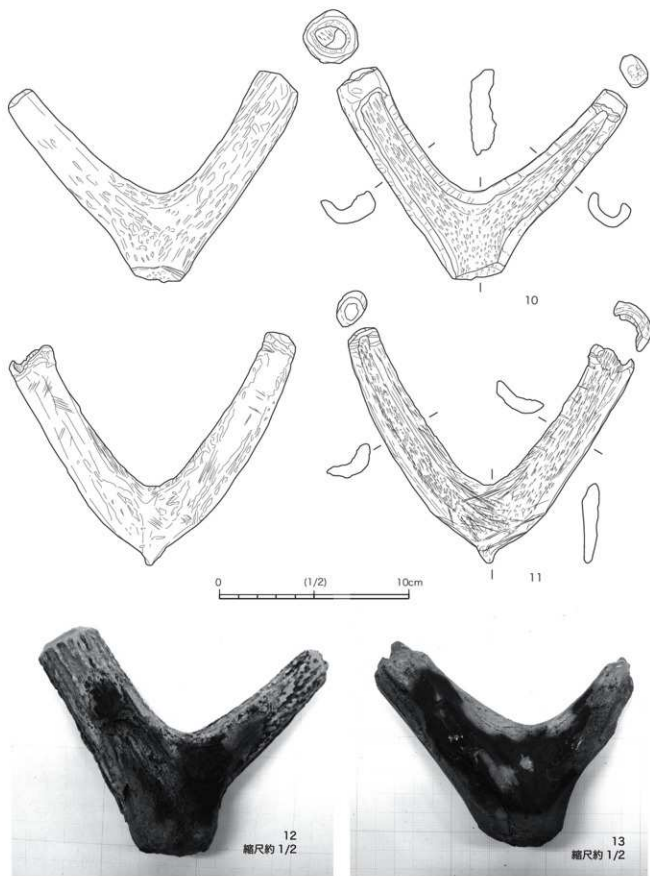


図5 縄文時代早期後葉骨角器2【東名遺跡】(西田編 2009 より加筆修正)

東名遺跡から出土した鹿角は、大多数に人為的な加工使用などがあり、何かの形で利用されていたと思われる。切断は、二又部や角座などでの輪切り状の分割が主体であり、短冊状を意図した加工は行われていない。輪切り状の切断は、周囲からの打ち込み+折り取りと、施溝+折り取り（いわゆる擦り切り）の2つの方法が認められる。出土資料からでは、両者の選択原理を推測することはできなかった。なかには、同一資料の中で、両者が共存しているものもあった。

なお、周囲からの打ち込み+折り取りに対応する工具には磨製石斧、施溝+折り取り（擦り切り）のに対応するものには剥片（石器）が想定される。表面の調整は、砥石による研磨もあるが、剥片（石器）によるケズリによる加工痕も多く認められた。ケズリの過程で加工進行方向とは垂直方向に連続した段の形成が認められるものもあったが、これはごく少数であった。

さて、列点文装身具と関連する器種として、二又部を中心に枝側と幹側に「くの字」状につながった加工品が報告されている（図5）。非半載状態の材の片側から深く挟るように加工を施すもので、幹側の端は環状に、枝側の端は閉じて箱状となっているものが多い。挟む際には石斧などの工具で敲打・打ち込みして削り取っていくようであるが、その部分が被熱によって黒色化してはじけた状態になっているものを確認した（図5の12・13）。その視点で見ると、局所的に黒色化してはじけているものを多く確認することができた。骨角器製作において、火の使用は想定されるところではあるが、縄文時代早期の事例で明確に残存している事例は希有だと思われる。低地性の貝塚であったことから、このような状態がよく保存されたのであろう。

列点文装身具に関しては、東名遺跡の骨角器および動物遺存体の報告・分析を行った丸山真史・永井理恵らによって、詳細な製作工程の復元案が図6のように示されている（丸山・永井・松井2009）。このなかでは、筆者が触れた製作に火を使用した可能性なども明確に触れられており、きわめて詳細な記述となっている。換言すれば、筆者の観察所見でも、丸山・永井の分析成果を追認するところが多かったこととなる。

また、この東名遺跡出土の列点文装身具については、設楽博巳による論考が知られている（設楽2016・2017）。設楽は列点という文様表現をもとに、韓半島から日本列島全体へ、さらに時代も縄文時代早期から前期、そして中期までを対象に関連づけるものであった。列点文装飾について、西から東への広がりを指摘したものといる。器種は腰飾りを想定している。

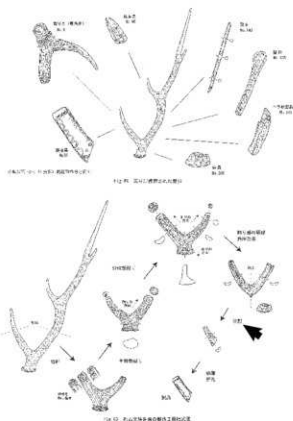


図6 東名遺跡出土鹿角製品素材使用部位（上）と列点文装身具の製作工程模式図（下）（丸山・永井・松井2009より）

一方、水ノ江和同は縄文時代早期末葉の装身具文様のひとつとして列点文に注目する（水ノ江2021）。縄文時代早期後葉の文様としては、線刻による鋸歯文も特徴的であるが、それを含めて早期末葉から前期前期には韓半島南部から関東地域にかけて展開していたことを指摘している。

設楽・水ノ江の両者の論考に共通している点は、佐賀県東名遺跡出土資料は、当該時期の骨角器資料として最も充実しているばかりではなく、広域的な共通性を持った意匠の広がりを見出す起点になる資料である、という点であろう。

さて、これら上記の先学の研究動向に対して、筆者が最も注目している点は、以下の2点である。

- (1) 装飾の主体が鹿角素材表面側ではなくて、鹿角側面に施されている点。
- (2) 列点文装身具といわれる装飾が施された「完成品」と考えられるものには、二又部を経由して弧状を呈しているものが、現状では認められない点。

(1)に関しては、縄文全時代を通して見た場合、類例が稀少な極めて特異な事例であることを指摘してお

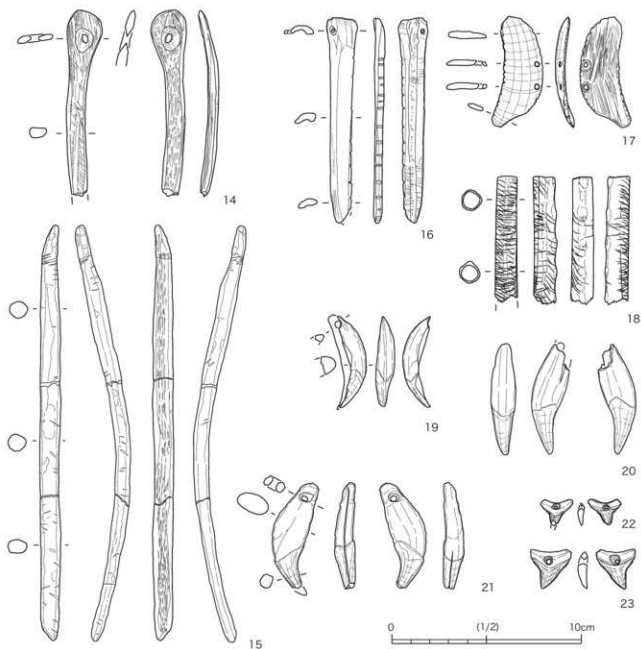


図7 縄文時代早期後葉骨角器3【東名遺跡】(西田編2009より加筆修正)

きたい。これは、当時のヒトによる表面が、この装飾のある面だとするならば、特殊な事情がない限り、この面を可視する側にしていたと想定される。特に鹿角に関しては、管見に及ぶ限り、本例のような集中した出土事例はほぼ見当たらない。

(2) に関しては、この製品の来歴の検討が必要であることを示しており、具体的には図6の太矢印(筆者加筆)の検討を行うことを意味する。実際には、以下のように(A)～(C)の三通りの可能性が考えられる。

(A) 図6のように、一旦、枝側と幹側が「くの字」状につながった加工品を製作し、そこから分割し、細かい凹み装飾が施され、列点文装身具が完成した。

(B) 枝側と幹側が「くの字」状につながった加工品の状態で、細かい凹み装飾が施された列点文装身具が存在していた。しかし、使用などで欠損し、破損部の再加工の結果、分割された状態となった。

(C) 枝側と幹側が「くの字」状につながった加工品と、列点文装身具とは全く別器種で、製作上の系譜でもつながらないものである。

さて、出土資料に戻ると、1・2・6・7では、細かい凹み装飾が、現存する資料端部で半欠状態となっているものを見ることができる。出土資料は、いずれも細かい凹み装飾が施された当初の状態を示しているとは言えず、いずれも欠損、あるいは欠損部分を再調整

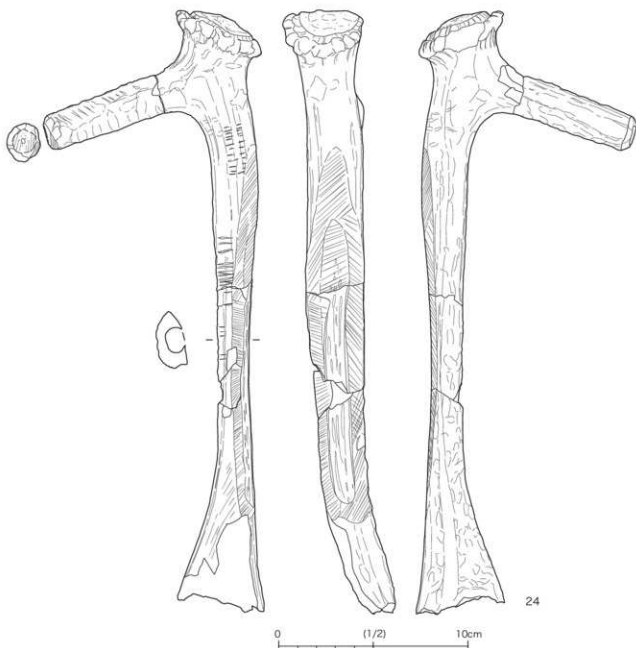


図8 縄文時代早期後葉骨角器4【入海貝塚】

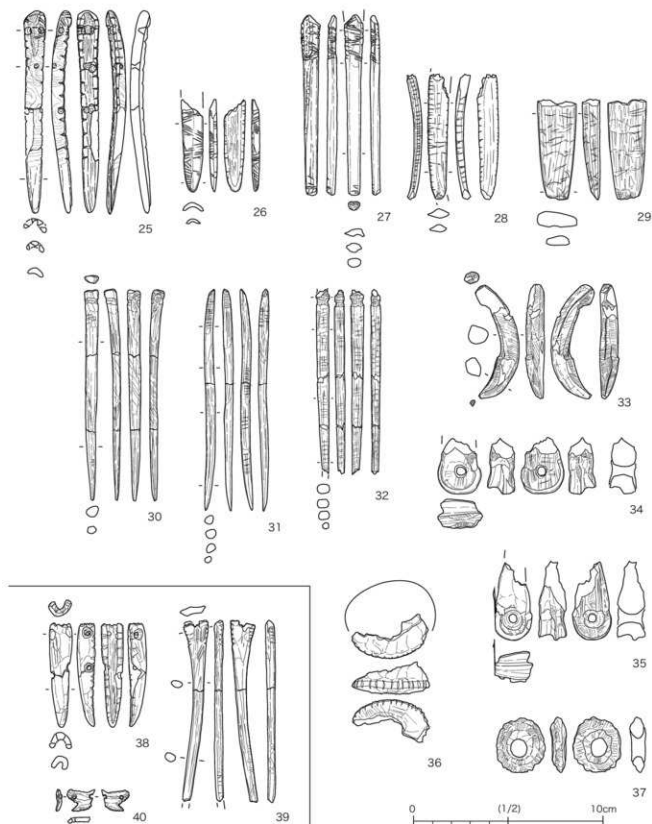
したもの可能性が高いと思われる。このことから、筆者は(B)の可能性が高いのではないかと考えており、本来は二又状を呈する製品器種であったものが、使用により欠損し部分となって遺跡に廃棄されたのではないかと考えられるのである。もしかしら、祭祀行為など何かの意図で、意識的に分割された可能性も考えられる。

列点文装身具は、本遺跡を代表する鹿角製装身具類であり、東名遺跡の集団を象徴する器種(道具)であった可能性が高い。この器種は、遺跡(集落)内で製作され、そして使用されたものであり、東名遺跡が列点文装身具を製作・使用する中心的な位置を占めていた

といえる。

以下、東名遺跡出土の他骨角製装身具類についても簡単に言及しておく(図7)。

東名遺跡では、刺突具状の製品器種も多く報告されている。鹿角のほか、管状骨製も多い。鹿角製の中で長さ15cmを超える最も長いものは、半截状態ではあるが、丸太材状態から削り出して作られた可能性がある(15)。その他の資料を見ても端部が鋭く尖っているものと、丸みを帯びた状態のものがある。前部が尖っているものは端部が稜線が磨滅しているものもあり、使用されてこの状態であると考えられる。そうすると、



25～37：吉井城山第一、38～40：吉井城山第二

図9 縄文時代早期後葉骨角器5【吉井城山第1貝塚・第2貝塚】

全部ではないにしても、多くはヘアピンであった可能性が高いのでは考えられるのである。

牙製垂飾では、イノシシ雄犬歯製が数量的に多い。半載状態となっているもの、部分的に半載状態になっているものが認められるが、弧状を呈する中央に近接して二箇所に穿孔を施すものが主体である(17)。側面端部に細かい刻目が連続して施すのは、素材を越えて共通した装飾方法であったと思われる(16・17)。器面調整は、砥石による研磨が多い。

その他の牙製垂飾では、オオカミ1点(19)・ツキノワグマ2点(20・21)・イヌ科1点・ネズミザメ科2点(22・23)を見た。注目すべき資料に、イヌ科のものがある。前面側に、横方法の連続した短い刻みが施されているものであるが、形状から、イヌあるいはキツネの可能性がある。仮にイヌだとすると、イヌの牙製垂飾としては、列島内での最古例となると考えられる。

鳥骨製では、大型鳥の管状骨製のものが2点確認されている。そのうち1点は、細い線刻によって文様が施されていた(18)。

軟骨魚類では、脊椎骨中央が貫通した穿孔した資料が大量に出土している。流量から、エイ類やネコザメなど小型の魚種に対応する。その他、クジラ骨製の穿孔品が出土している。そのうちの1点は、脊椎骨の表面の盤状になった部分の中央に穿孔が施されていた。

3. 縄文時代早期の鹿角製装身具類の関連資料について

筆者は、かつて「東海地域・関西地域における縄文時代早期骨角器の様相」[考古学フォーラム 24] (川添 2018、以下「前稿」とする)を著したことがある。縄文時代早期後葉(日本列島の早期末葉)の骨角器の様相を見ると、広域にわたる共通性を有する器種・文様がありつつ、遺跡や地域の特性が認められるとした。

ここでは、前稿で筆者の調査成果を掲載できなかった遺跡資料のなかで、鹿角製装身具類が出土している遺跡について、簡単に追記しておきたい。

1. 愛知県入海貝塚出土資料

入海貝塚は、愛知県知多郡東浦町の衣浦湾に注ぐ境川・逢妻川などが集まる河口付近、境川へと注ぐ小河川の南岸、標高10mほどの段丘上に立地する。貝層は、径50m程度の段丘周辺に、最大幅10m程度の環状に形成されており、北東端の傾斜地での残存が良好である。これまで4度の発掘調査が行われたものの、南

山大学の調査のみが報告されている(中山ほか1955)。

南山大学の調査では縄文土器のほか、石鏃など石器・土偶が出土した。貝層の貝種の主体はハイガイであり、動物骨としては、シカ・イノシシが報告されている。骨角器は、骨製では刺突器2点・ヘラ1点、鹿角では加工品1点、貝製では貝輪3点が報告されている。

本稿では、そのうち鹿角の加工品(18)について述べておく。18は1トレンチの地表下70cmのレベラから出土した資料である。落角状態の鹿角右を素材として、現存で長さ31.8cm・幅11.7cm・厚さ6.0cmを測る。角座から第一枝と角幹部分で構成されており、第二枝分岐点(二叉部)で、角幹および角枝側が欠失しており、全形を窺うことはできない。第一枝先端は面取りによる加工が施されており、最終調整は研磨である。第一枝自体、断面形状が正円に近くやや不自然な形状を呈しているものの、表面風化が激しく、これが人為的加工によるものかは不明である。一方、角幹部の側面には、身部に向かって大きく削ぐような加工が施されている。全体的に研磨による面の形成がなされており、素材の髄部分にまで深く達している。また、表面には動物の歯痕もあるものの、それとは様相の異なる細かい横方向の連続した刻みが施されており、図中の上半から中央に向かって展開している。

2. 神奈川県吉井城山第1・第2貝塚

吉井城山貝塚は、横須賀市吉井町に所在する遺跡で、発見当時は第1貝塚から第3貝塚まで確認されたという。京浜急行の工事に伴って、遺跡の範囲に掘削が及ぶことが明らかとなったこともあり、昭和35年に、横須賀市自然・人文博物館が横須賀考古学会の支援を受けて、第1貝塚の調査が実施された。その後、平成に入って周辺を含めて史跡整備に伴う調査が実施されている(野内編1999)。

出土した骨角製装身具類の中で、主要なものを示しておく(図8)。25~37が第1貝塚出土(神沢1962)、38~40が第2貝塚出土資料である。骨角器全体を見ると、幅の若干広いもの、細いものを問わなければ、細いヘラ状、あるいは針(棒)状の資料が著しく多い。頭部の作り出されているものや線刻が施されているものなどを参考にとすると、これらのある一定数が装身具類で、おそらく器種としてはヘアピンが多いのではないかと推定される。

図8の中で、鹿角製は25・26・36~38である。このうち、25・26・38は角枝部の使用、36・37は角座部分の加工品である。25は長さ10.7cm・幅1.2cm・

厚さ 1.1 cm を測るもので、半載状を呈する素材の髄部分を除去して櫛状にし、肩部には回転穿孔による装飾が一定間隔で施されており、側面端部には連続した刻目が認められる。25 の類似資料は 38 である。38 は長さ 5.5 cm・幅 1.2 cm・厚さ 1.0 cm と、25 に比べて半分ほどの法量であるが、半載状を呈する素材の髄部分を除去して櫛状にする点、肩部への回転穿孔による装飾、さらには側面端部への連続した刻目と共通要素が多い。両資料での大きな違いは肩部への穿孔の施行面であり、25 は素材裏髄側より表面側へ、38 は素材表面から素材髄側に向かって施されている。また、25 では貫通しない凹み状を呈しているものもあり、東名遺跡の列点文装身具のような顕著な状態ではないものの、素材髄側がこの製品器種では表面であった可能性も考えられる。36 はシカ角座部分を輪切り状にして、端部に連続した刻目を入れたものである。37 もシカ角座部分を輪切り状にして中央に大きな穿孔をして環状にしている。いずれも幼獣・若獣を素材にしたものであろう。

25～28・36・38・39 は加飾性の高い資料と言えるであろうが、このうち鹿角でないものは、27・28・39 である。27 は鋸歯状の集合沈線状の線刻が施されたものでイノシシ腓骨製、28 は側部の連続した刻目のある獣骨肋骨製である。39 も側部の連続した刻目のあるものでシカ中手足骨製と思われる。このように、装飾は側部の連続した刻目と鋸歯状の集合沈線状の線刻が主体で、剥片石器によって施されたものであろう。

その他、垂飾として、シカ中足骨の遠位端の滑車形状部を半分に割り、滑車部中央に穿孔を加えたものも 2 点存在している (34・35)。イノシシ雄上顎牙の加工品は、弧の内側に段が形成されたものであった (33)。表面の調整痕を見ると、イノシシ雄牙製は全面砥石による研磨であったが、それ以外の器面最終調整は、剥片石器などによるケズリが主体と思われた。特に、ヘアピンと考えられる資料や、シカ中足骨の遠位端滑車形製品に、その痕跡をよくみることができた。ヘアピンの頭部装飾の挟りも、緩やかな形状を呈していることから、擦切切断のような施溝によるものではなく、ケズリによって施された可能性が高いと考えられる。

4. 鹿角製装身具の広域性と地域性

以上のように、骨角製装身具類の中でも本稿では鹿角素材を中心に見てきた。鹿角は当時一般的に入手可能で、広く使用された素材であるものの、遺跡からの出土資料で見ると、鹿角を用いた装身具類が稀少な場

合、また利器・工具類を含めても鹿角製品自体の出土が稀少である場合など、現状では遺跡による偏差もある。利器・工具類では、当時一般的に広く使用されていた器種として、鹿角斧が候補に挙がる (川添 2018・2019、坂垣 2020)。特に大型の鹿角素材は土掘り具として多用されたと考えられ、打製石斧が出現する前の縄文時代早期においては、特に重宝されたであろう。入海貝塚の事例は、大型の素材に加工を加えたもので、この鹿角斧素材使用に対応するものかもしれない。

吉井城山第 1 貝塚・第 2 貝塚では、鹿角半載材に対応する器種として、角幹部ではペン先形の刺突具、二又部では釣針が主体をなしていた。この資料群での鹿角素材の装身具類を見ると、角幹部分にしても角座部分にしても、幼児・若獣の個体を素材としており、利器・工具類とは素材使用の原理が異なっていたことが想定される。

一方、東名遺跡の様相は、上記とは大きく異なるようである。多量の鹿角素材が出土しているにも関わらず、鹿角斧の出土数が極めて少ないことが特徴としてあげられよう。製作関連器種でみると、施溝や敲打など、鹿角素材に対して分割する意図が多く認められ、その有り様は、鹿角斧としての製作・使用とは異なる加工が、随所に認められると言える。但し、東名遺跡では、鹿角素材を細く (薄く) する際には、縄文時代後期以降に多用される分割による方法ではなく、非半載状態の素材もとから火を使用するなどをしてケズリ取ることによって素材を獲得している傾向が強いようである。

文様について見ていくと、やはり列点文が目されるが、同時に器種側面に施される連続した刻目も、当該時期の骨角製装身具類に多用される装飾であるといえる。これは鹿角のみではなく、骨製・牙製にもあつて、動物性素材であれば素材の種類に関係なく広く認められる特徴であった。その刻目は細かく連続するものが多い。前稿で取りあげた天神山遺跡例のように複数を一単位として施される場合もあるようである (川添 2018)。

以上、鹿角製を中心に骨角製装身具類を俯瞰すると、広域的に共通する要素と同時に、地域的な特徴が表出している点も確認できる。換言すれば、当時の集団間の活動や移動、情報の広がりにおいて、時代・時期的志向性が働いていた一方で、地域的な適応をみることができるといえる。今後も縄文時代早期後葉の社会的な広域ネットワークを考える好例として、継続した検討が必要であろう。

本稿を草するにあたり、以下の機関および方々からご配慮およびご教示を賜った。謝意を表する次第である。

佐賀市教育委員会、南山大学人類学博物館、横須賀市教育委員会

設楽博己・西田巖・丸山真史・水ノ江和同・野内秀明

なお本稿は、JSPS 科研費【課題番号 20K01080】「骨角製装身具類の包括的検討からみた縄文から弥生への時代変遷の解明」、【課題番号 24K04355】「骨角製装身具類着装原理からみた縄文／弥生社会の解明」、いずれも基盤研究 (C) (研究代表者 川添和晩) の成果の一部である。

参考文献

- 板垣優河 2020 「縄文時代の鹿角斧について」『古代文化』72-2 72～84 頁 公益財団法人古代学協会
川添和晩 2018 「東海地域・関西地域における縄文時代早期骨角器の様相」『考古学フォーラム』24. 33～51 頁 考古学フォーラム編集部
川添和晩 2019 「打製石斧とその周辺」『東海石器研究』9 10～19 頁 東海石器研究会

神沢勇一 1962 「横須賀市吉井城山第一貝塚出土の骨角牙器・貝製品 (一)」『横須賀市博物館研究報告 (人文科学)』6 57～68 頁 横須賀市博物館。

設楽博己 2016 「東名遺跡からみえる証文時代早期の精神文化」『東名遺跡群Ⅳ 東名遺跡群総括報告書 第4分冊』132～143 頁 佐賀市埋蔵文化財調査報告書 100

設楽博己 2017 「縄文人のこころと祈り」『縄文の奇跡! 東名遺跡』172～179 頁 雄山閣

中山英司ほか 1955 「入海貝塚」東浦町教育委員会
西田 巖編 2009 「東名遺跡Ⅱ 第4分冊」佐賀市埋蔵文化財調査報告書第40集

西田 巖ほか (佐賀市教育委員会編) 2017 「縄文の奇跡! 東名遺跡」雄山閣

丸山真史・永井理恵・松井 章 2009 「骨角製品の製作と加工技術」『東名遺跡群Ⅱ 第6分冊』187～199 頁 佐賀市埋蔵文化財調査報告書第40集

水ノ江和同 2020 「縄文時代早期末葉の装身具類」『遺跡学研究の地平—吉留秀敏氏追悼論文集—』223～231 頁 吉留秀敏氏追悼論文集刊行会

野内秀明編 1999 「吉井城山」横須賀市文化財調査報告書第34集

研究論文

縄文海進と先苅貝塚

— 押型文土器に附着したサンゴの年代測定 —

遠部 慎

要 旨

縄文時代は温暖化が進み、現在の日本列島が形成された時代である。つまり、縄文人はかなりの環境変化に適応する形でこの日本列島で生活していた。そうした適応化の過程を理解するうえで著名な愛知県南知多町先苅貝塚の所在地についての検討を行った。

これまで先苅貝塚では $8330 \pm 260\text{BP}$ というハイガイの測定値がよく知られていた。そしてその測定値とともに縄文海進を裏付ける根拠として、「現在の沖積層面が縄文時代の地表面と全く違っていることをはっきりと物語っている」(今村 1978) という言説に対して、水没否定説も存在していた。

そこで包含層を被覆される時期について年代学的分析を行い、貝塚を覆う海成層の年代として、より蓋然性が高いと考えられる土器に附着したサンゴの年代を得て、貝塚形成後に比較的短期間に海成層に覆われていることを確認した。その結果に基づきつつ、高山寺式土器の土器付着物の年代や共伴すると考えられる貝類の年代とが、遺跡を覆う海成層の年代は矛盾せず、調和的にとらえた。

そのうえで、東海地方から瀬戸内海にかけての年代測定の実施された押型文土器期の貝塚の貝類組成や立地などに着目し、先苅貝塚と同じ類型のものとして高山寺貝塚などの尾根上の斜面貝塚との類似性を指摘した。そして、貝塚の性格として従来よく指摘されてきた海進に伴う側面とは異なる解釈の方が、全体的には整合するものと判断した。

キーワード：対象時代 縄文時代

対象地域 西日本

研究対象 土器、年代測定、縄文海進

はじめに

近年、自然災害に対する関心は分野にかかわらず高い。先史時代においても関連する議論が行われている。ただし、遺跡形成論などと組み合わさる視点は少ないのが現状である。

1948 年黄島貝塚の発掘調査で貝層がヤマトシジミからハイガイに変化することが確認されてから、海進

とそれに伴う環境変化や考古学的な変化を示す例として、きわめて多くの文献で指摘されている(川越 1986、河瀬 1998)。完新世の押型文土器期に海洋環境が変化したことを示す事例として、である。

ところでこうした早期貝塚の出現と年代について、1970 年代以降議論は沈静化していた。江坂輝弥の『地理 22-2』に発表された論考でも新規の早期遺跡がみ

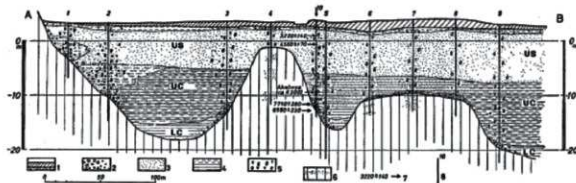


図1 サンゴの採取土層(前田ほか 1982 より作成)

つっていないことが述べられている（江坂 1970）が、こうした予言ともとれる、江坂の記述を経て、本稿で分析対象とする先貝塚の発見に繋がる。

愛知県南知多町先貝塚の発見について、これまで多くの記述があるが（山下 1978、南知多町教育委員会 1980、松島ほか 1982ab）、年代学上において長期編年・短期編年をほぼ終結させることに一役を担ったという意味で、大きなエポックとされている（渡邊 2002）。先貝塚の与えた影響を端的示す書評は、今村啓爾によるものであろう（今村 1981）。この書評は、先貝塚が年代研究の学史に明確に刻まれたものと考えられる。いわゆる長期／短期編年論争を急速に終焉にむかわせた側面は、この書評から十分に伝わってくる。さらには『Prehistoric JAPAN』（Imamura 1996）でも大きく扱われ、海外に発信された日本の Archeological Site としてもよく知られている。

さて、こうした高い評価を受ける先貝塚であるが、その評価をめぐっては、対立する見解があることはあまり知られていない。特に、解決していない問題、調査では明らかにならなかった「所在地」に起因する問題がある。つまり、著名な先貝塚ではあるが、その場所は内海駅周辺という事以外は不明なのである。

そこで先貝塚がどのように埋没したのか、その時期を絞り込み、そのうえで本貝塚の諸問題について、考古学的な観点から考察する。限られた紙面ではあるが、先貝塚の立地等に関する知見を概観し、埋没時期等に関する新たなデータを示し、それらに基づいた分析を行うこととしたい。

1. 分析対象の位置と方法

1978 年に先貝塚は内海駅の開発に伴って発見された。発見当初『考古学ジャーナル』154 の「発掘・調査ニュース」に東海地方最古の貝塚として、「縄文海進以前の自然・生活環境の解明に役立つものであり、今後の調査結果が期待される」（山下 1978）と指摘され、その方針に従って調査が行われた。

先貝塚からは縄文時代早期のほぼ高山寺式土器を中心とする土器群が確認されている。出土土器を指標とした貝層の年代について、松島らによって、以下の分析が行われている（図 1）。

①埋土および耕作土層、厚さ約 2 m、②上部砂層（US）、約 8 m、③上部泥層（UC）約 3 m、④基盤岩層（LC）の順であるが、遺物包含層の黒色泥貝土層の厚さや正確な所在については不明である（図 1）。ただし、UC 層中にアカホヤ火山灰が確認されており、西側の

表 1 先貝塚に関する既存の年代分析

測定対象	測定機関 番号	分析対象	測定値 (BP)	δ13C 値	文献
US 上部砂層 (+0.70~1.00m)	GAK-7946	ハマグリ	3220±140		南知多町教育 委員会 1980
US 上部砂層 (-0.50~0.70m)	GAK-7947	ハマグリ	4560±170		南知多町教育 委員会 1980
UC 下部砂層 (-11.50~11.60m)	GAK-7948	土壌	7710±280		南知多町教育 委員会 1980
UC 下部砂層 (-12.85~13.00m)	GAK-7949	土壌	8590±230		南知多町教育 委員会 1980
先貝塚	GAK-7950	ハイガイ	8330±260		南知多町教育 委員会 1980

埋没谷にも貝層がある。これらのうち上部砂層、下部砂層は海成層とされた。

それらを踏まえ、年代測定もあわせて学習院大学によって実施され（表 1）、「貝塚の形成された波食台西側にみられる-13 m 付近の貝殻まじりシルトの 14C 年代測定値が 8590±230 yrB.P.（Gak-7949）であることと対応する。したがって約 8300 年前の先貝塚は、当時の-13 m 前後にあった海面より 3~4 m 高い場所につくられていたことになる。貝塚を直接おおう海成シルト層の 14C 年代値は 7710±280 yr B.P.（Gak-7948）であり、貝塚から出土した土器や獣骨片の表面にはマガキ、フジツボ類、石サング類などの付着しているものもかなり見つかった。これらの点は、先貝塚が約 7700 年前に早くも水没したことを示唆する。当時の海岸線近くの低い位置にあった貝塚は、縄文海進で上昇してきた海水によって短期間のうちに海面下に没し、その上を海成沖積層が厚くおった、この先貝塚の発見は、縄文海進の海面変動を直接に確認できた考古学事例の一つで、重要な物的証拠である」（松嶋 1983）とされ、ボーリングデータや周辺遺跡の状況などから、古内海湾の海水順変動なども示された（図 2）。

松嶋らが分析した、海成層の測定値は層順に含まれる Peat である。そのため、連続した層的推移からは妥当ととらえられるが、より詳細なタイムスケールを検討したい場合、やや不確定要素が残る。そこで、遺物に付着したサングの年代測定を行い、より確実に貝塚形成後に海成層が堆積した年代を検討するための参考値とする。

分析対象は、先貝塚で得られた土器に付着しているイシサングであり（図 3）、太陽光のよく届く範囲、つまり浅瀬に生息する（西平・Veron 1995）ものと考えられる。このサングが付着している段階には確実に海水層の影響を受けている、と判断される。

外縁部から分析を採取して測定試料とした。最初に

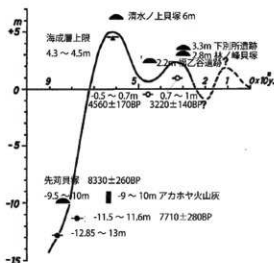


図2 内海低地に於ける約15000年以後の相対的海面変化曲線 (松嶋 1983 を改編)



図3 先刃貝塚のサンゴ

表面に付着した土壌などを除去した後、0.1Mの塩酸で重量の10～30%を溶解することで、土壌埋没後に沈着の可能性がある炭酸塩を除去した。

次に洗浄したサンゴから約10mgを錫製カップに秤量し、元素分析計(ドイツ・エレメンタル社製 Vario EL III)を用いて二酸化炭素を精製し、液体窒素

温度に冷却したトラップに捕集した。こうして得られた二酸化炭素を石英ガラス製のグラファイト反応容器に水素および触媒(鉄粉)とともに封入し、加熱する。これによって、鉄粉上に約1.2mgのグラファイト結晶が析出するので、それを良く攪拌してからアルミニウム製サンプルホルダーに充填してAMS測定に供した。分析結果は以下である。

なお、分析状況は、分析量77.54mg、A処理後重量:13.99mg、ガス化重量:10.01mg、炭素含有量:0.85mgである。

3. 測定結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}C$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した14C年代を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代(yrBP)の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、および半減期の違い(14Cの半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C年代の暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

14C/12Cの測定は、(株)パレオ・ラボが所有する加速器質量分析装置を用いて行われた。誤差は14Cの

計数に係る統計誤差と標準物質で観察された測定に係る誤差のうち、大きいものを1回の測定にともなう誤差として計算している。測定は約10分間の測定を数回くり返し、それを合算した結果から濃度既知の標準物質を基準として14C/12C比を求めた。

そのうえで、測定値を校正曲線 IntCal20 (14C年代を暦年代に修正するためのデータベース、2020年版) (Reimer et al 2020)と比較することによって暦年代(実年代)を推定する。両者に統計誤差があるため、統計数値的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と校正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。本分析で対象とするのは海産物であり、marinecalを用いる。

海水性であるサンゴの14C年代について、海洋資料用のデータ (Marine20; Stuiver et al, 2020)を用いて校正14C年代を推定した。ここでは、地域や年代による変動は考慮していない。

図4に先苺貝塚のサンゴ資料について推定された校正14C年代を示す。Marinecalによると、実年代で7270~6890calBCに含まれる。

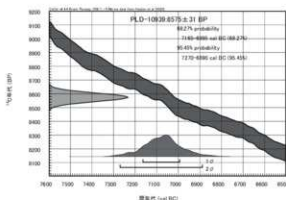


図4 先苺貝塚のサンゴの校正曲線

4. 考察

先苺貝塚の土器に付着したサンゴのAMS年代測定からは7270~6890calBCという値が得られた。この測定値との考古学的な時期、つまり先苺貝塚の主体を占める高山寺式土器の時期を比較する必要がある。リザーバー効果の見積が不明確であるが、周辺の事例を踏まえ、サンゴの年代値と土器型式の単位でいつくらいにあたるか、おおまかに考察する。

先苺貝塚の高山寺式については年代測定例があり(遠部2014ab)、関連する岐阜県恵那市東千町遺跡からも土器付着炭化物の測定値が得られている(遠部ほか2008)(図5)。それらは概ね8300~8000BP代であり、前後の土器型式の測定値とも調和的である。実年代では概ね7400~7200calBCと推定される(遠部2011)¹⁾。また貝類についても、関連資料などとあわせてハイガイの測定を行っているが(遠部2011)、大きな意味で土器付着炭化物とは整合的と考える(図6)²⁾。これに対し、サンゴの推定値は高山寺式ないしはそれ以降と考えられ、場合によっては押型土器終末期(穂谷式等)以降の段階にまで年代的に下る可能性がある。

いずれにせよローカルなリザーバー効果の見積が不明確な可能性があるが、早期後半以降の土器付着炭化物(遠部ほか2007)や周辺の貝塚の年代測定値などは連続的な推移が確認されており、相対式くらいまでの

表2 先苺貝塚の測定試料

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年代修正 年代	^{14}C 年代 (yrBP ± 1σ)	^{14}C 年代を暦年代に 校正した年代範囲
				1σ暦年代 2σ暦年代
PLD-10939				範囲 範囲
.ACCT-K1	(-3.87 ± 0.13)	8575 ± 31	8575 ± 30	Marine20: 7165-6995 cal BC (68.27%) Marine20: 7270-6890 cal BC (95.45%)



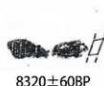
先苺貝塚



8040 ± 140BP



8060 ± 90BP



8320 ± 60BP

東千町遺跡

図5 先苺貝塚の土器付着物の年代と参考例



時間幅の中にはおさまる可能性が高い。そうすると松島(1986)らが推定した、先苅貝塚は、きわめて短期間に海成層に覆われた仮説の蓋然性は高い、と判断される。

つまり、遺跡を海成層に覆った時期については、松嶋らの説を補強する結果が得られた、と考えたい。さて、遺跡の所在地を考える上で、遺跡を覆う海成層の年代は概ね定まった、といえる。そのことを踏まえ、遺跡の立地(標高)をめぐるいくつかの言説について言及したい。

山下や松島らの見解は、今村啓爾によって支持されたことを受けたことは(今村1982、Imamura1996)、先述したとおりである。松島らは、先苅貝塚の位置を概ね10m前後とらえている(松島1983)。やや深く位置づけられているのは、『愛知県史』などによる渡邊誠の記述で「重要なことは、本貝塚は現地表面下約13mに位置し、その上を縄文海進による砂泥層によって厚く覆われて水没し、後に現状のように陸化するのであるが、この後永期の海進によって水没した遺跡の調査された例としては、世界でも最初の遺跡である」(渡邊2002)とする。

これに対し、岡本東三は先苅貝塚の成果が事実とすれば、「当時の海岸線は数キロメートル先になり、高山寺式以降早期末から前期にかけて海水面が十数メートル上昇する縄文海進が想定できよう。しかし貝塚の位置が明確でない現在、アトランティック期のフランドル海進と対比することは早計のようである。なぜならば、ほぼ同

じ時期とみられる日本海側の福井県鳥浜貝塚ではこうした海進の兆候がみられないのである」(岡本1982)と述べ、日本海側との状況の違いについて問題視した。土肥孝についても(帝塚山考古学研究所1987)、鳥浜貝塚などの事例から疑問視する見解を示している。

また、鈴木正博は、今村啓爾の書評等を批判し、斜面が崩壊した微地形を人類活動の拠点としているとして、貝層下土層に明確な文化層の確認されない斜面貝塚を「テラス状斜面貝塚」と呼び、「貝塚崩壊」に基づく事例ととらえた(鈴木2005)。また、ヤマトシジミとカワナガが存在することから、破線の部分を汽水域ととらえたのである(図7)。

以上を踏まえると、「現在の沖積層面が縄文時代の地表面と全く違っているということをはっきりと物語っている」(今村1982)という今村に代表される見解に対し、問題視する岡本、土肥、鈴木らの指摘を考える必要がある、ということであろうか。「こうした縄文海進による水没説を否定する意見もある」という岩瀬彰利の指摘(2008)をやや単純化すれば、水没派とその否定派となる。

これらの問題を解決していくうえで、海岸に位置する年代測定を実施してあり³⁾、かつ貝塚の帰属年代が概ね明らかな押型文土器期の貝塚を中心とした事例をもとに、貝塚類型について整理し、筆者の見解を述べたい。

押型文土器の出土する遺跡の立地に関する問題については三森定男(1938)をはじめ、江坂輝弥によって指摘された瀬戸内海島嶼部の遺跡群の例など(江坂1972、川越1986、河瀬1998)、古くから指摘されている。そのため、屋上屋を重ねるくらいはあるが、ここでは富岡直人、畑山智史の分析(2006)や山崎京美(1998)のデータベースなどに、田嶋正憲、幸泉満夫の貝塚類型、地形分類(田嶋2014、幸泉2016)、筆者らの年代分析(遠部2011、藤原・白神1986)などを加え、基礎情報を整理すると以下ようになる(図8、表3)。

押型文土器期の貝塚群は大きく、山形文期(札田崎貝塚)→黄島式期(黒島貝塚、黄島貝塚、大島貝塚、小島貝塚)→高山寺式期(高山寺貝塚、先苅貝塚)といった推移を示す。

そうした中で、島嶼部の地形の貝塚は比較的単純な貝類組成を示し、尾根上の貝塚は多様な貝類組成であることが伺われる。つまり、先苅貝塚は高山寺貝塚とその類似性が指摘されるのである。

先苅貝塚はよく知られる通り、貝類は107種みられ、



図7 内海湾の推定(鈴木2005を改変)



図 8 関連遺跡

このうち食料とされたのは巻貝 26 種、角貝 1 種、二枚貝 22 種の 49 種である。このうち主になるのは、スガイ・ウミナシ・ムシロガイ類・ヤカドツノガイ・ハイガイ・サルボウ・マガキ・イタボガキ・ヤマトシジミ・オキシジミ・アサリなどでこれらの多くは、湾奥部潮間帯の砂泥底に分布する種である（南知多町教育委員会 1980）。さらには動物骨は哺乳類は、イノシシ・シカ・イヌなど、動物遺体としては、他にフジツボ類・カニ類・ウニ類・ヘビ類も少量みられる。さらには魚類や人骨も確認されている。

和歌山県紀伊田辺市高山寺貝塚ではハイガイ、ヒメガイ、カキなどのほかにイノシシ・シカなどの動物類が確認され、多様な状況が見て取れ（吉永 2021）、地形を含め先苅貝塚と類似した状況が看取される。

こうした状況に対し、瀬戸内海に所在する貝塚群は、ほぼヤマトシジミやハイガイに限られる。さらには立地も島嶼部（丘陵）で、先苅貝塚などとは異なった様相ととらえられる。ただし、小島貝塚のみが、ハマ

グリ、ハイガイ、マガキ、ツメタガイ、ウミナシなど多様な貝類が確認され、動物骨も存在する（遠部 2014c）。

小島貝塚は、現在の地形は島嶼部であるが、海岸線からの距離は 1 km 以内であり、現在も砂州がかなり残されており、旧地形としては浜部の貝塚に分類される可能性が高い。これらの状況は、周辺環境によって貝類採取の状況が異なることを示している。また、動物資源の利用という観点からは、かなり瀬戸内海島嶼部に位置する貝塚としては、差異があることが明瞭に読み取れる。

こうした点から、先苅貝塚・高山寺貝塚・小島貝塚に共通する部分をあげると、多様な貝類とあわせて動物資源の利用が一定量認められ、島嶼部貝塚とは異なる可能性が高い。つまり、資源利用の幅の広さから、陸地に近い斜面貝塚ととらえる方が実態に近い、と考えられる。

以上のことから、現在地表化に埋没している状況を肯定的にとらえるのではなく、旧地形がかなり異なっているものととらえた方が無難にとらえておきたい。ということは、否定派という意見が現段階での結論となる。

資源利用については今後も検討を重ねていくが、貝殻成長線分析を参考にすれば犬島貝塚や黄島貝塚の段階では、瀬戸内海島嶼部の事例を見る限り、周年的な貝採取が組み込まれた可能性が高いことが指摘されている（畑山 2023）⁴⁾。先苅貝塚などは、瀬戸内海島嶼部の単純な貝類組成の貝塚よりも周年性が高く、おそらくは回帰性も高かった、と考えられる。

5. まとめ

「現在の沖積層面が縄文時代の地表面と全く違っているということをはっきりと物語っている」（今村 1978）という今村の指摘に対し、問題を投げかけた岡本、土肥、鈴木らの指摘を受け、包含層を被覆される時期

表 3 貝塚の種類

遺跡名	貝類の年代値	立地	貝類	動物・魚類	人骨
先苅貝塚	約 8300BP	尾根上（斜面）	多様	○	○
高山寺貝塚	約 8300BP	尾根上（斜面）	多様	○	
黒島貝塚	約 8600BP	島嶼部（段丘）	単純（ハイガイ・ヤマトシジミ）		
黄島貝塚	約 8500BP	島嶼部（段丘）	単純（ハイガイ・ヤマトシジミ）		
犬島貝塚	約 8700BP	島嶼部（段丘）	単純（ハイガイ・ヤマトシジミ）		○
礼田崎貝塚	約 8800BP	島嶼部（段丘）	単純（ヤマトシジミ）		
小島貝塚	約 8500BP	浜部（段丘上）	多様	○	

の年代を得ることで、まず1つの定点を得た。その結果に基づきつつ、高山寺式土器の土器付着物の年代や共存すると考えられる貝類の年代とが、遺跡を覆う海成層の年代は矛盾せず、調和的にとらえた。

そのうえで、東海地方から瀬戸内海にかけての年代測定の実施された押型文土器期の貝塚の貝類組成や立地などに着目し、先奇貝塚と同じ類型のものとして高山寺貝塚を挙げた。つまり、尾根上の斜面貝塚と類似すると考え、本貝塚の性格として従来よく指摘されてきた海進に伴う側面とは異なる解釈の方が、全体的には整合するものと判断した。また、貝塚形成後、数型式の間（大きく見積もっても500年以内）に海成層の影響下となったと考えられた。

今後、さらに検討を行う上で、早期後半については特に中四国、東海地方にはまだ年代測定値の蓄積が十分でなく（小林編2007、小林2017、2019）、今後も継続的な作業が必要である。そして、当該時期に様々な地形変化を伴う現象が起きていることに注意を払う必要があることは指摘しておきたい。

現在、私達が暮らす社会は、災害について敏感になっている。その災害と先史時代人の対応を明らかにするには、様々なプロセスやアプローチが必要であるが、予測として先史社会は柔軟かつ、多様な社会であった可能性が高い。それらを読み解くうえで、年代測定は有効なツールと考えられるが、分析実践例については検討の余地が多い⁵⁾。またそれは縄文時代に限ったことではない（遠部2023）。

以上、先奇貝塚の発見から半世紀を少し前にしてさまざまな再検討を行ったが、早期研究等を行う上でながしかの参考となれば幸いである。

おわりに

限られた期間と紙面で、何を論点にすべきか、非常に悩んだ。思えば、縄文時代早期の押型文土器、無文土器の問題や前期や中期の年代・併行関係、洞穴遺跡など矢野健一先生から受けた学思は計り知れない。押型文土器人とも言われ、引っ越しが多い自分だが、そのたびに部屋を整理して、重複する矢野先生の論文コピーの多いこと。多かったのは、「中四国地方における押型文土器後半期の様相」「縄文集落の定住性と定着性」のコピー。学生時代にはじめて長野で発表を聞いた器種交渉の結果、描かれた高山寺式土器成立に繋がる仮説。それらと正面から向きあえていないことを心よりお詫びしたい。

矢野先生が2008年に「総覧縄文土器」で示した高

山寺土器期の年代値は先奇貝塚の1点だけであった（矢野2008）。そのことから立ち上げる議論は、おそらく自分しか扱わないテーマやデータのはずであり、それを示すことが自分らしさでもある、と思い小文を起草し、可能な限り短くまとめることにした。関連する学史や諸研究については改めて論じることにしたい。

分析にあたり国立歴史民俗博物館・学術創成研究グループ、パレオ・ラボ、大島貝塚調査保護プロジェクトチーム、故山下勝利、増子康真、山口早苗氏には現地での調査から実験を含め、多大な協力をいただいた。また、資料調査や位置づけ、現地踏査や文献の収集について、岡本東三、小林謙一、鈴木正博、畑山智史、村上昇の諸先生、諸氏に御協力、御教示を賜った。心より感謝したい。

なお本稿は、平成16-20年度科学研究費補助金（学術創成研究）「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築—」（研究代表 西本豊弘 課題番号16GS0118）、平成19-20年度科学研究費補助金「先史時代における貝塚出現期の年代学的研究」、「国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）19KK0017 ユーラシアにおける土器出現の生歴史」代表小林謙一）を利用した。

註

- 1) あくまで筆者が分析した事例をもとにしている。
例えば、豊橋市多里畑遺跡などでも土器付着炭化物の測定値が報告されているが、筆者の実験では結果が得られなかったことを明記しておきたい。
- 2) 80年代初頭に示された先奇貝塚の年代（8330±230BP；GAK-7950）は、松島義章・前田保夫による「先史時代の自然環境」（1985）などに代表されるように多くの著作でも引用され、8000BPは押型文土器期の年代という理解が通常であった。そのせいか、年代測定に対しては消極的な側面もあった。
- 3) 豊橋市高山蛇穴遺跡のように、貝類と動物骨の同時性について担保されないケースもあり（畑山ほか2015）、全く年代測定値のない事例については判断を保留しておきたい。
- 4) 層序によって、季節性の偏りが存在することも指摘されており、今後さらに分析を重ねていきたい。
- 5) 海水準変動に照らした遺跡形成等の検討については（マイケルR2012）、稿を改めたい。

参考・引用文献

- 井岡弘太郎、森脇広、スチュアート ヘンリ、太田陽子 1982「前田・山下・松島・渡辺論文に対する論評」『第四紀研究』22-3, p. 223-227, 日本第四紀学会
- 今村啓爾 1982「書評 南知多町教育委員会『先莉貝塚』」『考古学雑誌』67-3, pp.119-124, 日本考古学会
- 今村峰雄 2007「炭素 14 年代較正ソフト RHC3.2 について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 137 集, pp.79-88, 国立歴史民俗博物館
- 岩瀬彰利 2008「東海の貝塚」『日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集』pp.47-68, 日本考古学協会 2008 年度愛知大会実行委員会
- 江坂輝弥 1970「縄文時代の自然環境」『地理』22-2, pp.9-18, 国土書院
- 江坂輝弥 1972「自然環境の変貌—縄文土器文化における—」『第四紀研究』第 2 巻第 3 号, pp.135-141, 日本第四紀学会
- 奥谷喬司 編 2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会
- 岡本東三 1982「日本の美術 189 縄文時代 I (早期・前期)」至文堂
- 遠部 慎 2011「西日本における押型文土器群の年代とその環境」『押型文土器期の諸相』pp.707-717, 関西縄文文化研究会
- 遠部 慎 2014a「東海地方における押型文土器期の年代測定値集成」『第 10 回東海縄文研究会研究会東海地方における縄文時代早期前葉の諸問題発表要旨集研究論文集』pp.63-72, 東海縄文研究会
- 遠部 慎 2014b「南知多町内における縄文時代前半期の炭素 14 年代測定」『伊勢湾考古』23, pp.31-38, 南知多文化研究会
- 遠部 慎 2014c「四国の縄文時代早期の貝塚」『続・上黒岩岩跡遺跡とその時代』pp.146-147, 愛媛県歴史文化博物館
- 遠部 慎 2023「鳥島部における古墳研究の新視点」『季刊邪馬台国』143, pp.66-71, 梓書院
- 遠部 慎・畑山智史 2021.3「利根川流域の縄文早期貝塚の年代測定」『飛ノ台史跡公園博物館紀要』15, pp.19-32, 飛ノ台史跡公園博物館
- 遠部 慎、宮田佳樹、増子康典 2008「岐阜県恵那市内の炭素 14 年代測定」『古代人』68, pp.33-45, 名古屋考古学会
- 川越哲志 1986「岡山平野における縄文貝塚と弥生遺跡の立地」『瀬戸内海地域における完新世海水準変動と地形変化』pp.56-59, 藤原健蔵
- 河瀬正利 1998「瀬戸内海北岸部の縄文低地遺跡と海水準変化」『列島の考古学—渡辺誠先生還暦記念論集—渡辺誠先生還暦記念論集』pp.595-602, 渡辺誠先生還暦記念論集刊行会
- 幸泉満夫 2016「中国・四国地方における縄文時代貝塚の多様性に関する基礎的考察」『法文学部論集人文科学編』40, pp.75-118, 愛媛大学法文学部
- 小林謙一編 2007「AMS 炭素 14 年代測定を利用した東日本縄文時代前半期の実年代の研究 平成 17 年～18 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (1) 研究成果報告書 (課題番号: 17520529)」国立歴史民俗博物館
- 小林謙一 2017「縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素 14 年代—」同成社
- 小林謙一 2019「縄文時代の実年代講座」同成社
- 鈴木茂之 2004「岡山平野における最終氷期最盛期以降の海水準変動」『岡山大学地球科学研究報告』11-1, pp.33-38, 岡山大学理学部地球科学教室
- 鈴木正博 2007「先列 (ママ) 貝塚のヤマトシジミとカワニナ」『斜面崩落』による貝塚形成と縄文式海進による「貝塚崩壊」——『異貌』25, pp.24-43, 共同体研究会
- 田嶋正憲 2014「縄文貝塚群から見た古備先史社会素描」『半田山地理考古』2, pp.23-45, 岡山理科大学地理考古学研究会
- 帝塚山考古学研究所 1987「高山寺式土器をめぐる—縄文早期の諸問題—」『縄文文化研究部会紀要』1 帝塚山考古学研究所
- 富岡直人・畑山智史 2008「瀬戸内海海進期における水産動物遺存体からみた古海況の特徴」『第 25 回日本文化財科学会研究発表要旨集』, pp.74-75, 日本文化財科学会
- 中村俊夫 1999「放射性炭素年代測定法」『考古学のための年代測定学入門』pp.1-36, 古今書院
- 西平守孝・VeronJEN1995『日本の造礁サンゴ類』海遊社
- 畑山智史 2023「縄文時代早期の貝採取季節に関する研究の現状と課題」『飛ノ台史跡公園博物館紀要』19, pp.1-20, 飛ノ台史跡公園博物館
- 畑山智史、遠部慎、村上昇 2015「岡山蛇穴における基礎的研究・その 1 —調査研究史の整理と自然遺物の分析—」『豊橋市美術博物館研究紀要』18, pp.15-44, 豊橋市美術博物館
- 藤原健蔵・白神宏 1986「岡山平野中部の沖積層と海

- 水準変化—瀬戸内海沿岸平野の古地理変遷に関する研究(2)—」『瀬戸内海地域における完新世海水準変動と地形変化』pp.36-55、藤原健蔵
- マイケル R. ウォータース 2012『ジオアーケオロジー—地学にもとづく考古学』朝倉書店
- 前田保夫、山下勝年、松島義章、渡辺誠 1982a『愛知県先貝塚と縄文海進』『第四紀研究』22-3、pp. 213-222、日本第四紀学会
- 前田保夫、山下勝年、松島義章、渡辺誠 1982b『論評に対する原著者の回答』『第四紀研究』22-2、pp.228-229、日本第四紀学会
- 松島義章 1983『小規模なおほれ谷に残されていた縄文海進の記録』『海洋科学』15、pp.11-16、海洋出版
- 松島義章・前田保夫 1985『先史時代の自然環境』ニューサイエンス社
- 三森定男 1938『西部日本に於ける押型土器』『人類学先史学講座』2、pp.35-57、雄山閣
- 山崎京美 1988『遺跡出土の動物遺存体に関する基礎的研究』文部科学省研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書
- 山下勝年 1978『知多半島で押型土器を伴う貝塚を発見』『考古学ジャーナル』154、pp.33-34、ニューサイエンス社
- 山下勝年 1984『先貝塚が提起する問題(上)』『知多古文化研究』1、pp.29-47、知多古文化研究会
- 山下勝年 1986『先貝塚が提起する問題(中)』『知多古文化研究』2、pp.43-60、知多古文化研究会
- 矢野健一 2008『押型文系土器(高山寺式・穂谷式土器)』『縄文土器総覧』pp.168-173、アムプロモーション
- 矢野健一 2016『土器編年にみる西日本の縄文社会』同成社
- 横山祐介 2009『海水準変動と気候、海進・海退』『縄文時代の考古学3 大地と森の中で—縄文時代の古生態系—』pp.13-23、雄山閣
- 吉永聖紀子 2021『和歌山県高山寺貝塚における縄文時代の動物資源利用』『紀伊半島をめぐる海の道と文化交流予稿集・論考集』pp.51-55、和歌山県立風土記の丘
- 渡邊 誠 2002『先貝塚』『愛知県史資料編1 考古1 旧石器・縄文』pp.228-233、愛知県史編さん委員会
- Imamura, K. (1996) Prehistoric Japan, London University
- Reimer, P.J. William E N Austin, Edouard Bard, Alex Bayliss, Paul G Blackwell, Christopher Bronk Ramsey, Martin Butzin, Hai Cheng, R Lawrence Edwards, Michael Friedrich, Pieter M Grootes, Thomas P Guilderson, Irka Hajdas, Timothy J Heaton, Alan G Hogg, Konrad A Hughen, Bernd Kromer, Sturt W Manning, Raimund Muscheler, Jonathan G Palmer, Charlotte Pearson, Johannes van der Plicht, Ron W Reimer, David A Richards, E Marian Scott, John R Southon, Christian S M Turney, Lukas Wacker, Florian Adolphi, Ulf Büntgen, Manuela Capano, Simon M Fahrni, Alexandra Fogtmann-Schulz, Ronny Friedrich, Peter Köhler, Sabrina Kudsk, Fusa Miyake, Jesper Olsen, Frederick Reinig, Minoru Sakamoto, Adam Sookdeo and Sahra Talamo. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), Radiocarbon 62 (4), 725-757
- Yoneda, M., Y. Shibata, A. Tanaka, T. Uchiro, M. Morita, M. Uchida, T. Kobayashi, C. Kobayashi, R. Suzuki and K. Miyamoto (2004). AMS 14C measurement and preparative techniques at NIES-TERRA. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 223-224, 116-123.

近畿地方北部における縄文時代早期後半から前期前葉土器の編年

岡田憲一

要 旨

近畿地方北部における縄文時代早期後半から前期前葉の土器編年を見渡すと、前期後半の土器型式として、宮ノ下Ⅰ式、同Ⅱ式のみが設定され、その後、前期の羽島下層Ⅱ式までの間は未解明の部分が多い。本稿では、この部分の解明を、既存の資料に加え、新たに調査報告された資料をもって型式学的に検討し、当該期土器編年の整備を図る。

検討の結果、近畿地方北部の縄文時代早期後半から前期前葉の土器は、大別 7 時期、細別含め 9 時期として型式学的に把握できることを示した。具体的には、寄倉 12 層式に続く 1 期の宮ノ下Ⅰ式、2 期の広井上ノ山式、3 期の宮ノ下Ⅱ式と、2 期と 3 期を繋ぐ未明の段階、そして 4 期古相の裏陰式と新相の杉ヶ沢式、5 期の志高最下層式と型式学的に円滑に変遷し、6 期には山陰地方の西川津式と北越地方に由来する類布目型とに交替する。7 期は西川津式の系譜下にある仮称「三河宮の下式」、類布目型から変化した松ヶ崎下層式にそれぞれ変遷し、その後、勝山式を経て、定型的で広域的な分布を見せる羽島下層Ⅱ式へと遷移する。なお、このうち早期と前期の境界は、東海地方との年代的併行関係から、5 期の頃にあると考えられる。

以上の編年観と型式学的展開を要旨とするならば、早期後半の 1 期から 5 期までは、山陰地方から近畿地方北部を経て、北陸地方までを緩やかに結ぶ繊維土器の広域的な類似性を認めることができるが、前期前葉の 6 期になると、東西からの影響を受けて、それが明確に断絶する状況を看取できる。その後、西川津式が在地的变化を遂げた仮称「三河宮の下式」を経て、勝山式、羽島下層Ⅱ式へと型式学的に円滑に変遷をたどれることを考えると、列島西部における西川津式の果たした影響がいかに大きいものであったのか伺い知ることができよう。

キーワード：縄文時代、近畿地方北部、編年、繊維土器、縄文条痕文土器、西川津式、仮称「三河宮の下式」、羽島下層Ⅱ式

1. 研究の背景

近畿地方における縄文時代早期後半土器編年の基準は、滋賀県石山貝塚と京都府宮ノ下遺跡における層位的出土資料である。そのうち前者の報告は、基本的に東海地方の編年に準拠するが、「縄文ノ施サレタ土器」として掲げられた土器があって、報告者の坪井清足(1956)は、「明確に何式に伴うとも指摘出来なかった、粕畑式から入海式までの各層に小量ずつ混入している」と記す。また、胎土中の繊維含有、羽状縄文や表裏縄文といった特徴を指摘し、「他地方からの移入品であったと思われる」とする。坪井は、この「他地方」が具体的に何処を指すのか明確にしていないが、おそらく有力な候補は山陰地方であつたろう。同地方の早期後半に位置づけられる「菱根式」は、石山報告で指摘された「縄文ノ施サレタ土器」と同様、繊維含有、表裏縄文土器といった特徴を有しており、その標式たる菱根遺跡の報告(同志社大学出雲古文化調査団 1959)は、石山報告刊行の 3 年後であるものの、調査は 1954 年 7 月であつて、それは石山貝塚第 3 回調査の半月程前となる。なお、菱根遺跡の報告で吉誌仲男と石部正志

は、「菱根式」と仮称した土器と密接に関連するものとして石山貝塚の当該土器をあげ、その編年の位置を推定するほか、両者の縄文原体の撚り本数の相違を指摘しているが、その註で「土器文様の調査に関しては佐原真の教示を得た点が多い」と記していることからすると、第 2・3 回目の石山貝塚の調査にも参加した佐原真が、両遺跡を比較する上での情報の橋渡しをした可能性が高い。

石山報告の翌年、1957 年 6 月に宮ノ下貝塚が同志社大学によって調査され、同年 11 月にはその速報がなされる。そこで岡田茂弘(1957)は、土器の出土層位に注意を払いながら類別記載し、後の「宮ノ下Ⅰ式」および同「Ⅱ式」の分別を導く。速報の時点では、石山貝塚との関連について、「高山寺系(中略)以降の時期には第七類(茅山式に類似するもの：筆者註)の土器をのぞいて関係が切れてしまう事実」を指摘し、「黒色粘土層上部にのみ存する」という「第六類 C」とした表裏縄文土器が「明らかに菱根遺跡のそれと類似する」と記述する。そして、近畿地方における当該期の「文化圏を考える上に甚だ興味深い」とまとめている

ることから、少なくとも近畿地方北部においては、石山貝塚に見る東海地方諸型式とは異なる土器群が展開するという腹案があったのであろう。岡田茂弘(1965)が、はじめて「宮ノ下式」の名とその細分案を示した『日本の考古学』の近畿編年で、宮ノ下貝塚の層位的事実を強調し、「宮ノ下Ⅰ式」、同「Ⅱ式」の別を記載したのは、太平洋沿岸の東海地方から関東地方まで連なる東海系条痕文土器群に対し、山陰、北近畿、北陸を結ぶ日本海沿岸の「文化圏」を確立するという、明確な意図があったことだと推察できる。

宮ノ下式2細別の際に重視された同貝塚の層位的出土状況は、それを再検討した大石雅典(2021)が明らかにしたように、根拠とするには不十分である。しかしながら、岡田の「宮ノ下式」設定とその細別の意義が失われることはない。何故ならその意義は、早期後半の近畿地方北部を中心として、東海地方とは異なる土器型式の主體的な存立可能性を説いたこと、そして、それに類する土器の石山貝塚における複数層位にわたる伴出という事態を参照して、当該土器が複数型式に分けられる可能性を具体的に提示したことにあるためである。今日的には、こうした「状況」の不在を受け、単に解体、批判するのではなく、むしろ型式論的に再構築し、新たに「状況」に問い直す姿勢が必要であろう¹⁾。

ところで、押型文土器以降、北白川下層式までの近畿地方北部の編年は、その後、しばらく進展が見られなかった。その20年後に至っても、「日本海沿岸地域では石山諸型式に併行して表裏縄文土器が分布するが、細かな併行関係は未解決といわざるをえない」とされている(泉1985)。一方、近畿地方中央部から東部では、「石山諸型式」から北白川下層式の間を補填すべく、泉拓良(1984)により滋賀県栗津湖底遺跡における「SZ1群土器」という石山式類似の押し引き沈線文を主とする未命名型式の存在とその重要性が指摘された。また、宮本一夫(1987)は、岡田(1965)が「時期未詳の早期遺物」として掲げ、「数型式に細分できるとおもわれるが、資料不足のためしばらくおく」として保留した、京都府一乗寺向畑町遺跡南部地区下層出土の土器を型式学的に検討し、東海地方の清水ノ上Ⅰ式併行の前期初頭に位置するとした。宮本の検討は、山陰地方および瀬戸内地方を包括するもので、後に井上智博(1991)によって設定される山陰地方の長山式、西川津式の基底となる。なお、この時点での宮本の編年観によると、泉の栗津SZ1群は石山式以後、羽島下層Ⅱ式以前の近畿地方東南部の型式で、同西南部の

「一乗寺南地点Ⅰ・Ⅱ式」のうち、「Ⅰ式」を年代的な下限とする併行関係が考えられている。その後、京都大学文学部博物館で開催された『先史時代の北白川』の編年表(千葉・菱田編1991)にもこの考えは踏襲されるが、他地域との年代的な関係については、「(栗津SZ1)」が東海地方の天神山式から清水ノ上Ⅰ式の複数型式に、「(一乗寺南下層)」が瀬戸内地方の羽島下層Ⅰ式とともに、東海地方の清水ノ上Ⅰ式に併行するよう配置され、両者ともに末端は同じくしつつも、相対的には前者が古く、後者が新しいかのように位置づけられている。

これに対し筆者は、滋賀県下においても石山式に後続する天神山式が多く分布することから、少なくとも石山式以後、天神山式までの間に栗津湖底遺跡のSZ1群土器が入る余地はないと言及した(岡田2002)。当然ながら、そう考えた場合、栗津SZ1群の由来は石山式から離れ、宮本(1987)が指摘した「D類」、すなわち、西川津式で多用される押し引き刺突文との関係だけが問われることになる。また、宮本が「A類」として着目した「1条の隆帯」を口縁部に貼付する土器、すなわち、近畿地方の一乗寺南地点Ⅰ・Ⅱ式、山陰地方の長山式、瀬戸内地方の羽島下層Ⅰ式が、およそその同時性を示すものとして重要であることを肯定すれば、『先史時代の北白川』で示された「(一乗寺南下層)」と「(栗津SZ1)」の関係は逆転し、相対的に前者が古く、後者が新しく位置づけられることは自明である。そして、こうして古く位置づけ可能となった「1条の隆帯」を口縁部に貼付する土器が、西日本の枠を超え、北陸や東海地方を介して関東地方西部の神之木台式まで射程に入られれば、広域編年の大綱は定まるであろうとの考えが生じたわけである(小林2000、岡田2001)。この観点をとる場合に障害となるのは、宮本が一乗寺南地点、栗津SZ1群とともに、東海地方の清水ノ上Ⅰ式併行とした点であるが、これについては、東海地方における編年研究の進展とともに、愛知県桶瀬間貝塚で、天神山式から分離された桶瀬間式に、神之木台式、一乗寺南地点類似の土器が伴出したことで解決したと考えてよい(山下2003・2005)。その後、一乗寺南地点、栗津SZ1群土器を集成し、その編年の位置づけを検討した横澤慈(2006)の「早期末～前期初頭土器編年模式表」は、以上の経緯を整理した現時点での近畿地方中央部における編年観の大枠を示している。

近畿地方北部に目を戻そう。宮ノ下式設定以降、資料の増加がなかったわけではない。先の『先史時代の北白川』編年表にも、宮ノ下式に後出し、「(一乗寺南

下層」および羽鳥下層Ⅰ式に先行する位置に、特に説明なく「(志高下層)」が挿入されている。これは京都府志高遺跡の最下層にあたる12・13層出土土器が相当する(肥後・三好1989)。羽鳥下層Ⅱ式が出土する9・10層より下に、0.5 m程の厚さの砂層を挟んで出土したもので、葬B式に類する完形個体があることで注目された。その内容は、条痕施文土器のほか、縄文施文、爪形刺突文の3種の土器からなっており、報告者である三好博喜(1991)がその位置づけを詳説している。すなわち、葬B式に類するものは宮本の検討した山陰地方の土器(後の西川津式)と対照可能であり、縄文施文土器は宮ノ下Ⅱ式と関連してその直後、そして爪形刺突文土器は新潟県布目遺跡等出土の土器と対比され、北越地域の布目式、ひいては関東地方の花壇下層式からニツ木式との併行関係に展望を与えることとなった。このほかにも三好は清水ノ上Ⅰ式との近似も指摘しているが、その評価を妥当とするならば、『先史時代の北白川』編年表の「(志高下層)」の位置づけは、宮ノ下式より後はよいとしても、「(一乗寺南下層)」や羽鳥下層Ⅰ式より古く配置されるべきではない。さらに付け加えるならば、ここでは不問とされた志高遺跡最下層出土土器の多様な構成をどのように理解し、その年代幅をどの程度見積もるかという課題が残されていた。

1990年代後半には、京都府松ヶ崎遺跡、浦入遺跡で、志高遺跡最下層の前後を補填するような資料の出土があった。松ヶ崎遺跡は報告段階(戸原・堀井1998)では編年的な位置づけが保留されたが、その後、報告者の戸原和人(2001)が、同遺跡12層および17・18層出土の土器を志高遺跡最下層の土器群と羽鳥下層Ⅱ式の間に位置づけている。浦入遺跡は、京都府埋蔵文化財調査研究センターと舞鶴市教育委員会が異なる地点を調査し、それぞれ報告書が刊行され(田代・筒井2001、吉岡・松本2002)。前者のN地点出土土器の整理は筆者が担当し、宮ノ下Ⅱ式の竹管状工具の施文手法による年代的細別可能性を示唆した。また、この頃、柳浦俊一、鈴木康二。筆者が主導した西日本縄文土器見学会『早期末から前期初頭の土器様相と並行関係』(2001年9月22日、於島根県埋蔵文化財調査センター)において、日本海側を通じての当該期の編年を議論するとともにその大枠を共有した。そうした経緯を踏まえつつ、『総覧縄文土器』では、中国地方山間部および山陰地方における既往の研究史を導線として、近畿地方北部の早期後半編年の概略もあわせて整備した(岡田2008)。しかし、そこでは対象とする時空が限られ

ていたこともあって、舞鶴市調査の浦入遺跡P2地点における、宮ノ下式から北白川下層式までの重要な層位的成果を活用できていない。本稿では、こうした近畿地方北部の層位的出土資料に依拠しつつ、型式学的検討を行うことにより地域編年の再整備を図る。

2. 層位的検討

(1) 検討対象

検討対象は、京都府舞鶴市浦入遺跡N地点(田代・筒井2001)、同P2地点(吉岡・松本2002)、志高遺跡(肥後・三好1989)、京丹後市松ヶ崎遺跡(戸原・堀井1998)、宮ノ下遺跡(伊藤1984、釋・林1997、水ノ江・大石2020)、裏陰遺跡(長谷川・杉原1979)といった丹後地域に加え、兵庫県豊岡市山宮遺跡(池田1998)、美父市杉ヶ沢遺跡(渡辺・久保1991)、美万郡香美町上ノ山遺跡(高松・矢野1989)といった但馬地域の遺跡を参照する。

このうち層位的出土状況が確認された遺跡に、浦入遺跡P2地点および志高遺跡、松ヶ崎遺跡、宮ノ下遺跡があるが、前述のとおり、宮ノ下遺跡は積極的に支持できる状況になく、松ヶ崎遺跡も評価が難しい。また、杉ヶ沢遺跡第14地点は、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)堆積層の直上で土器が検出されている。

(2) 浦入遺跡P2地点の層位的出土状況

まず浦入遺跡P2地点の層位的出土資料をもとに、全体的な傾向を概観する。当該期土器の報告を担当した和泉大樹は、地文およびその他の施文種別に着眼して、縄文地文の第1群、条痕地文の第2群、縄文及び条痕地文の第3群、ナデ地の第4群と分類し、有文のものは、縄文地文の第5群、爪形刺突文の第6群、竹管ないし半載竹管状工具による押し引き施文の第7群、刺突文の第8群とする。これらは分類群を構成する要素が一貫していないことから明らかなように、既往の宮ノ下式や志高最下層の爪形刺突文土器、羽鳥下層Ⅱ式および北白川下層式の特徴を強く意識したものとしてよい。なお、これらに加え、他地域の要素をもつものを第9群と一括する。

この分類を出土層準別に表1に一覧した。ここからはオリブ灰色粘質土層を境に地文は縄文主体から条痕主体へ移行し、文様は、火山灰包含層で竹管及び半載竹管状工具施文(第5群)が出現、その後、オリブ灰色粘質土層で爪形刺突文(第6群)と原体不明の刺突文(8F類)が加わり、黒灰色粘土層で羽鳥下層Ⅱ式の特徴づける2連規制の刺突文(8A・B・C類)が加

2期:1期と同じく平底の縄文条痕文土器からなるが、胴部下半の内面にも縄文施文のある表裏縄文土器が出現する。示準資料は上ノ山遺跡にある。

3期:平底から尖底への移行期と目される、口縁部から胴部内面にまで縄文施文のある表裏縄文土器が主体となる。竹管状工具による刺突文等が施される。単純な示準資料はないが、宮ノ下遺跡が参考となる。

4期:尖底ないし九底で平底は伴わない。表裏縄文土器が主体である。竹管状工具による施文や、凸帯貼付を伴う施文例がある。示準資料は浦入遺跡 P2 地点火山灰包含層および N 地点包含層 III、杉ヶ沢遺跡第 14 地点である。

5期:尖底ないし九底で、4期同様、竹管状工具による施文、凸帯貼付を伴う施文があるものの、表裏縄文土器ではない。示準資料は志高遺跡 12・13 層の一部である。

6期:尖底ないし九底で、竹管状工具による施文のほかに人爪による爪形刺突文を多用する。示準資料としては、志高遺跡第 12・13 層の一部、浦入遺跡 P2 地点オリブ灰色粘質土層の一部、松ヶ崎遺跡 12 層および 17・18 層がある。布目式や西川津式が伴出する。

7期:尖底ないし九底で、栗津 SZ1 群や勝川式同様の押し引き刺突文が施される。竹管状工具による刺突文および爪形刺突文が伴うかは不明。示準資料は浦入遺跡 P2 地点オリブ灰色粘質土層の一部である。

3. 型式学的検討

(1) 各時期土器の典型的把握

主要属性の遺跡内集合から大別時期を把握したところで、次に具体的な土器個体にもとづく典型的把握をおこなう。

1期の基調をなすのは、平底の砲弾形を呈する縄文条痕文土器で、内面に縄文を施文せず、条痕調整ないしはナデとするものであるが、破片資料の場合は特徴に乏しい。ただし、器壁の厚さと胎土中の繊維混和量で相対化は可能である。1期の示準とした浦入遺跡 P2 地点黒色粘質土層出土土器の器壁厚は、中央値 9.1 mm で、上位の火山灰包含層より明らかに厚手である(表 3)。これに近い値をとるものに、杉ヶ沢遺跡第 2 地点および第 13 地点、それに山宮遺跡がある。山宮遺跡は年代幅があるものの、単節斜縄文で繊維混和量の多いⅡ B 類、羽状縄文施文のⅡ C 類、無節縄文のⅡ D 類、それに繊維の多いⅦ B 類やⅦ類が厚手であるのに対し、繊維の少ない単節斜縄文のⅡ A 類、表裏縄文施文のⅡ E 類はやや薄く相対化される。こうした特徴をも

表 3 各遺跡における土器文様および文様属性

	遺跡名	遺跡内 集合										計 2 期			山宮
		新橋台	栗津	宮ノ下	山宮	志高	浦入	杉ヶ沢	松ヶ崎	上ノ山	下ノ山	2 期	3 期	4 期	
羽状	A1 類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	A2 類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	A3 類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	A4 類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	A5 類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	A6 類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	A7 類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
文様	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
無文様	a	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	c	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	d	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	e	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	f	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	g	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
文様合計	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
縄文	1 (羽状)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
無節	1 (羽状)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
単節	1 (羽状)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
複節	1 (羽状)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
無節	1 (羽状)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
単節	1 (羽状)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
複節	1 (羽状)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

(注) 1. 表裏両面文字の属性は、各属性「羽状」・「単節」に別ける属性は省略する。
2. 表裏両面に文字がある属性は、各属性「羽状」・「単節」に別ける属性は省略する。

つものを旧稿(岡田 2001)では「I 群」とし、底部形態は平底で、縄文の節も相対的に大きい傾向があるとした。以上のような属性の集合からなるものを、研究史をふまえた上で、岡田茂弘(1965)提唱の「宮ノ下 I 式」と呼称する。なお、繊維混和量が多く、器壁が厚手で、羽状縄文施文をもつものは、山宮遺跡のⅡ C 類のほか、杉ヶ沢遺跡第 2 地点、浦入遺跡 P2 地点黒色粘質土層、宮ノ下遺跡に認められる。特に山宮遺跡では、器壁が屈曲し、口縁部に押し引き刺突文のある個体、横位の整った羽状縄文が認められるものがあるが、これは別途、寄倉 12 層式(井上 1996)に比定するのが適当であり、一方の宮ノ下 I 式は、基本的に縄文、条痕文以外の文様がないものと把握する。

2 期の上ノ山遺跡出土資料は、すべて厚手で繊維混和量が多く、外面単節斜縄文施文の平底土器が主体で、基本的には上記の宮ノ下 I 式と同じである。そうした特徴をもつ土器のうち、一部の個体の胴部内面に縄文施文が認められることから分期したが、そうしたものをここでは「広井上ノ山式」と呼称する。完形に復元できる事例がないものの、内面の縄文施文は胴部下半に局所的で、口縁部内面には施されない。

3 期と 4 期は一括して検討する。3、4 期は、九底な

表4 文様属性相関と繊維量および器壁厚

	文様	施文法	文様部位	繊維量	器壁厚 (mm)	XQ1	XQ2	XQ3	XQ4	XQ5	XQ6	XQ7	XQ8	XQ9	XQ10	XQ11	XQ12	XQ13	XQ14	XQ15	XQ16	XQ17	XQ18	XQ19	XQ20	XQ21	XQ22	XQ23	XQ24	XQ25	XQ26	XQ27	XQ28	XQ29	XQ30	XQ31	XQ32	XQ33	XQ34	XQ35	XQ36	XQ37	XQ38	XQ39	XQ40	XQ41	XQ42	XQ43	XQ44	XQ45	XQ46	XQ47	XQ48	XQ49	XQ50	XQ51	XQ52	XQ53	XQ54	XQ55	XQ56	XQ57	XQ58	XQ59	XQ60	XQ61	XQ62	XQ63	XQ64	XQ65	XQ66	XQ67	XQ68	XQ69	XQ70	XQ71	XQ72	XQ73	XQ74	XQ75	XQ76	XQ77	XQ78	XQ79	XQ80	XQ81	XQ82	XQ83	XQ84	XQ85	XQ86	XQ87	XQ88	XQ89	XQ90	XQ91	XQ92	XQ93	XQ94	XQ95	XQ96	XQ97	XQ98	XQ99	XQ100	XQ101	XQ102	XQ103	XQ104	XQ105	XQ106	XQ107	XQ108	XQ109	XQ110	XQ111	XQ112	XQ113	XQ114	XQ115	XQ116	XQ117	XQ118	XQ119	XQ120	XQ121	XQ122	XQ123	XQ124	XQ125	XQ126	XQ127	XQ128	XQ129	XQ130	XQ131	XQ132	XQ133	XQ134	XQ135	XQ136	XQ137	XQ138	XQ139	XQ140	XQ141	XQ142	XQ143	XQ144	XQ145	XQ146	XQ147	XQ148	XQ149	XQ150	XQ151	XQ152	XQ153	XQ154	XQ155	XQ156	XQ157	XQ158	XQ159	XQ160	XQ161	XQ162	XQ163	XQ164	XQ165	XQ166	XQ167	XQ168	XQ169	XQ170	XQ171	XQ172	XQ173	XQ174	XQ175	XQ176	XQ177	XQ178	XQ179	XQ180	XQ181	XQ182	XQ183	XQ184	XQ185	XQ186	XQ187	XQ188	XQ189	XQ190	XQ191	XQ192	XQ193	XQ194	XQ195	XQ196	XQ197	XQ198	XQ199	XQ200	XQ201	XQ202	XQ203	XQ204	XQ205	XQ206	XQ207	XQ208	XQ209	XQ210	XQ211	XQ212	XQ213	XQ214	XQ215	XQ216	XQ217	XQ218	XQ219	XQ220	XQ221	XQ222	XQ223	XQ224	XQ225	XQ226	XQ227	XQ228	XQ229	XQ230	XQ231	XQ232	XQ233	XQ234	XQ235	XQ236	XQ237	XQ238	XQ239	XQ240	XQ241	XQ242	XQ243	XQ244	XQ245	XQ246	XQ247	XQ248	XQ249	XQ250	XQ251	XQ252	XQ253	XQ254	XQ255	XQ256	XQ257	XQ258	XQ259	XQ260	XQ261	XQ262	XQ263	XQ264	XQ265	XQ266	XQ267	XQ268	XQ269	XQ270	XQ271	XQ272	XQ273	XQ274	XQ275	XQ276	XQ277	XQ278	XQ279	XQ280	XQ281	XQ282	XQ283	XQ284	XQ285	XQ286	XQ287	XQ288	XQ289	XQ290	XQ291	XQ292	XQ293	XQ294	XQ295	XQ296	XQ297	XQ298	XQ299	XQ300	XQ301	XQ302	XQ303	XQ304	XQ305	XQ306	XQ307	XQ308	XQ309	XQ310	XQ311	XQ312	XQ313	XQ314	XQ315	XQ316	XQ317	XQ318	XQ319	XQ320	XQ321	XQ322	XQ323	XQ324	XQ325	XQ326	XQ327	XQ328	XQ329	XQ330	XQ331	XQ332	XQ333	XQ334	XQ335	XQ336	XQ337	XQ338	XQ339	XQ340	XQ341	XQ342	XQ343	XQ344	XQ345	XQ346	XQ347	XQ348	XQ349	XQ350	XQ351	XQ352	XQ353	XQ354	XQ355	XQ356	XQ357	XQ358	XQ359	XQ360	XQ361	XQ362	XQ363	XQ364	XQ365	XQ366	XQ367	XQ368	XQ369	XQ370	XQ371	XQ372	XQ373	XQ374	XQ375	XQ376	XQ377	XQ378	XQ379	XQ380	XQ381	XQ382	XQ383	XQ384	XQ385	XQ386	XQ387	XQ388	XQ389	XQ390	XQ391	XQ392	XQ393	XQ394	XQ395	XQ396	XQ397	XQ398	XQ399	XQ400	XQ401	XQ402	XQ403	XQ404	XQ405	XQ406	XQ407	XQ408	XQ409	XQ410	XQ411	XQ412	XQ413	XQ414	XQ415	XQ416	XQ417	XQ418	XQ419	XQ420	XQ421	XQ422	XQ423	XQ424	XQ425	XQ426	XQ427	XQ428	XQ429	XQ430	XQ431	XQ432	XQ433	XQ434	XQ435	XQ436	XQ437	XQ438	XQ439	XQ440	XQ441	XQ442	XQ443	XQ444	XQ445	XQ446	XQ447	XQ448	XQ449	XQ450	XQ451	XQ452	XQ453	XQ454	XQ455	XQ456	XQ457	XQ458	XQ459	XQ460	XQ461	XQ462	XQ463	XQ464	XQ465	XQ466	XQ467	XQ468	XQ469	XQ470	XQ471	XQ472	XQ473	XQ474	XQ475	XQ476	XQ477	XQ478	XQ479	XQ480	XQ481	XQ482	XQ483	XQ484	XQ485	XQ486	XQ487	XQ488	XQ489	XQ490	XQ491	XQ492	XQ493	XQ494	XQ495	XQ496	XQ497	XQ498	XQ499	XQ500	XQ501	XQ502	XQ503	XQ504	XQ505	XQ506	XQ507	XQ508	XQ509	XQ510	XQ511	XQ512	XQ513	XQ514	XQ515	XQ516	XQ517	XQ518	XQ519	XQ520	XQ521	XQ522	XQ523	XQ524	XQ525	XQ526	XQ527	XQ528	XQ529	XQ530	XQ531	XQ532	XQ533	XQ534	XQ535	XQ536	XQ537	XQ538	XQ539	XQ540	XQ541	XQ542	XQ543	XQ544	XQ545	XQ546	XQ547	XQ548	XQ549	XQ550	XQ551	XQ552	XQ553	XQ554	XQ555	XQ556	XQ557	XQ558	XQ559	XQ560	XQ561	XQ562	XQ563	XQ564	XQ565	XQ566	XQ567	XQ568	XQ569	XQ570	XQ571	XQ572	XQ573	XQ574	XQ575	XQ576	XQ577	XQ578	XQ579	XQ580	XQ581	XQ582	XQ583	XQ584	XQ585	XQ586	XQ587	XQ588	XQ589	XQ590	XQ591	XQ592	XQ593	XQ594	XQ595	XQ596	XQ597	XQ598	XQ599	XQ600	XQ601	XQ602	XQ603	XQ604	XQ605	XQ606	XQ607	XQ608	XQ609	XQ610	XQ611	XQ612	XQ613	XQ614	XQ615	XQ616	XQ617	XQ618	XQ619	XQ620	XQ621	XQ622	XQ623	XQ624	XQ625	XQ626	XQ627	XQ628	XQ629	XQ630	XQ631	XQ632	XQ633	XQ634	XQ635	XQ636	XQ637	XQ638	XQ639	XQ640	XQ641	XQ642	XQ643	XQ644	XQ645	XQ646	XQ647	XQ648	XQ649	XQ650	XQ651	XQ652	XQ653	XQ654	XQ655	XQ656	XQ657	XQ658	XQ659	XQ660	XQ661	XQ662	XQ663	XQ664	XQ665	XQ666	XQ667	XQ668	XQ669	XQ670	XQ671	XQ672	XQ673	XQ674	XQ675	XQ676	XQ677	XQ678	XQ679	XQ680	XQ681	XQ682	XQ683	XQ684	XQ685	XQ686	XQ687	XQ688	XQ689	XQ690	XQ691	XQ692	XQ693	XQ694	XQ695	XQ696	XQ697	XQ698	XQ699	XQ700	XQ701	XQ702	XQ703	XQ704	XQ705	XQ706	XQ707	XQ708	XQ709	XQ710	XQ711	XQ712	XQ713	XQ714	XQ715	XQ716	XQ717	XQ718	XQ719	XQ720	XQ721	XQ722	XQ723	XQ724	XQ725	XQ726	XQ727	XQ728	XQ729	XQ730	XQ731	XQ732	XQ733	XQ734	XQ735	XQ736	XQ737	XQ738	XQ739	XQ740	XQ741	XQ742	XQ743	XQ744	XQ745	XQ746	XQ747	XQ748	XQ749	XQ750	XQ751	XQ752	XQ753	XQ754	XQ755	XQ756	XQ757	XQ758	XQ759	XQ760	XQ761	XQ762	XQ763	XQ764	XQ765	XQ766	XQ767	XQ768	XQ769	XQ770	XQ771	XQ772	XQ773	XQ774	XQ775	XQ776	XQ777	XQ778	XQ779	XQ780	XQ781	XQ782	XQ783	XQ784	XQ785	XQ786	XQ787	XQ788	XQ789	XQ790	XQ791	XQ792	XQ793	XQ794	XQ795	XQ796	XQ797	XQ798	XQ799	XQ800	XQ801	XQ802	XQ803	XQ804	XQ805	XQ806	XQ807	XQ808	XQ809	XQ810	XQ811	XQ812	XQ813	XQ814	XQ815	XQ816	XQ817	XQ818	XQ819	XQ820	XQ821	XQ822	XQ823	XQ824	XQ825	XQ826	XQ827	XQ828	XQ829	XQ830	XQ831	XQ832	XQ833	XQ834	XQ835	XQ836	XQ837	XQ838	XQ839	XQ840	XQ841	XQ842	XQ843	XQ844	XQ845	XQ846	XQ847	XQ848	XQ849	XQ850	XQ851	XQ852	XQ853	XQ854	XQ855	XQ856	XQ857	XQ858	XQ859	XQ860	XQ861	XQ862	XQ863	XQ864	XQ865	XQ866	XQ867	XQ868	XQ869	XQ870	XQ871	XQ872	XQ873	XQ874	XQ875	XQ876	XQ877	XQ878	XQ879	XQ880	XQ881	XQ882	XQ883	XQ884	XQ885	XQ886	XQ887	XQ888	XQ889	XQ890	XQ891	XQ892	XQ893	XQ894	XQ895	XQ896	XQ897	XQ898	XQ899	XQ900	XQ901	XQ902	XQ903	XQ904	XQ905	XQ906	XQ907	XQ908	XQ909	XQ910	XQ911	XQ912	XQ913	XQ914	XQ915	XQ916	XQ917	XQ918	XQ919	XQ920	XQ921	XQ922	XQ923	XQ924	XQ925	XQ926	XQ927	XQ928	XQ929	XQ930	XQ931	XQ932	XQ933	XQ934	XQ935	XQ936	XQ937	XQ938	XQ939	XQ940	XQ941	XQ942	XQ943	XQ944	XQ945	XQ946	XQ947	XQ948	XQ949	XQ950	XQ951	XQ952	XQ953	XQ954	XQ955	XQ956	XQ957	XQ958	XQ959	XQ960	XQ961	XQ962	XQ963	XQ964	XQ965	XQ966	XQ967	XQ968	XQ969	XQ970	XQ971	XQ972	XQ973	XQ974	XQ975	XQ976	XQ977	XQ978	XQ979	XQ980	XQ981	XQ982	XQ983	XQ984	XQ985	XQ986	XQ987	XQ988	XQ989	XQ990	XQ991	XQ992	XQ993	XQ994	XQ995	XQ996	XQ997	XQ998	XQ999	XQ1000
文様	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1</																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										

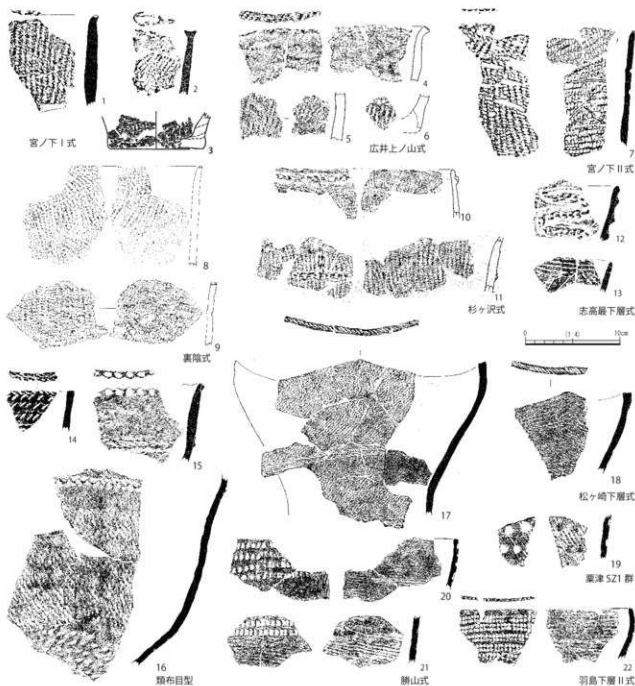


図1 近畿地方北部縄文時代早期後半から前期前葉までの各類型(1:4)

1,2,7 宮ノ下(岡田1957、伊藤1984)、3 山宮(池田1998)、4-6 上ノ山(高松・矢野1989)、8,9 裏陰(長谷川・杉原1979)、10,11 杉ヶ沢(渡辺・久保1991)、12-15 志高(肥後・三好1989)、16,19-22 浦入(吉岡・松本2002)、17,18 松ヶ崎(戸原・堀井1998)

爪形刺突文が施されることが特徴的であるのに対し、後者の口頭部界には爪形刺突文が施されるものの形態上の区画はなく、底部周囲の爪形刺突文も認められない。前者は北陸東部方面の布目式に見られる特徴であることから「類布目型」、後者はこの遺跡に独特なため「松ヶ崎下層式」と呼称しよう。志高遺跡では、上記の志高最下層式と類布目型とがあるのに対し、松ヶ崎遺跡には類布目型が含まれないことから、6期とし

たうちでも、類布目型は松ヶ崎下層式より古く位置づけられる。ただし、先に5期とした志高最下層式と類布目型とが、厳密に年代差として区分できる証拠は、現時点では得られていない。

7期の栗津SZ1群や勝山式同様の押引き刺突文は、示準資料とした浦入遺跡P2地点黒灰色結質土層では、類布目型とともに出土している。栗津SZ1群は基本的に砲弾形で口縁部が緩くひろく器形が特徴的で、頸

部に施文帯があるのに対し、勝山式は内彎する口縁部と、くびれた頸部と胴部の境に施文帯を有する点に差異がある。後者の器形は後出の羽島下層Ⅱ式と共通するので、より新しく位置づけられよう。少なくとも浦入遺跡 P2 地点のオリブ灰色粘質土層では、類布目型と松ヶ崎下層式があって、栗津 SZ1 群と勝山式が含まれないので、その間に年代差を看取することは可能であるが、6 期とした松ヶ崎下層式にも、勝山式同様、頸部を無文とし、口縁部と胴部に施文帯を配するものが認められるので、この二者の年代的関係を単純に前後としてよい判断は難しい。

(2) 各類型の関係

上記の各類型それぞれを系統的に把握する。

第一の系統は、従来「繊維土器」とされたもので、寄倉 12 層式に引き続き、1 期から 5 期にかけて、宮ノ下Ⅰ式、広井上ノ山式、宮ノ下Ⅱ式、裏陰式、杉沢式、志高最下層式と型式学的な変遷をたどる。平底から丸底への変化、内面縄文施文の採用は、山陰地方の寄倉 12 層式から菱根式への変化と同様に展開するが、菱根式にない特徴として押し引き刺突文の採用とその施文具の変化がある。宮ノ下Ⅱ式に認められる押し引き刺突文の文様意匠は単調であるのに対し、北陸地方では筆者が仮称「六橋式」²⁾ (岡田 2008) とした矢羽状文などの文様意匠をもつものが多数ある。福井県の桑野遺跡に間に挟むことで、近畿地方北部に向かって文様意匠の多様性と施文率の減衰が認められることから、仮称「六橋式」の文様意匠が近畿地方北部に派生することで、宮ノ下Ⅱ式の意匠が成立したと推測可能である。ここまで各類型を連繋する型式学的変遷に大きな断絶を認めることはできない。この後、凸帯文の出現、内面縄文の消失という遷移が認められるが、その展開は山陰地方の島大構内式から福呂Ⅰ式の変遷に通ずる。

これに対し、5 期から 6 期の変化は型式学的に大きな断絶である。爪形刺突文を特徴とする類布目型から松ヶ崎下層式への変遷は系統的に認められるものの、類布目型の出現は唐突で、その系譜が北越方面で展開する布目式に求められることからしても、他地域からの強い影響を想定するほかはない。また、7 期とした栗津 SZ1 群や勝山式の押し引き刺突文は、5 期までに系統的に展開する所謂繊維土器のそれとも、6 期の爪形刺突文とも異なるもので、ここにも型式学的な断絶を認めざるを得ない。すなわち、この地域においては、5 期以降、類布目型および松ヶ崎下層式、それと栗津



図2 京都府三河宮の下遺跡出土土器 (1-4)

京都府埋蔵文化財調査研究センター所蔵 (筆者実測、竹原 1982)

SZ1 群や勝山式とが、それまでの主体的系統から交替して出現することになる。

もう一つ忘れてはならないのが、山陰地方の西川津式に由来するものの存在である。5 期から 6 期の志高遺跡 12・13 層、松ヶ崎遺跡で確認されており、京都府福知山市三河宮の下遺跡にも、典型的な西川津式が認められる (竹原 1982、図 2)。包含層資料中に混在する形ではあるものの、本稿で対象とする時期にあたるものは、宮ノ下Ⅱ式 (1) や類布目型 (2、3)、それに東海地方の上ノ山Ⅱ式と思われるもの (8) があり、屈曲した胴部上半に重弧線状の押し引き刺突文の施される西川津式に比定すべきものがある (4)。このほか図示した 5~7 は、いずれも口縁部に沿って幅広の押し引き刺突文が施されるもので、頸部は条痕地のままでそれが施されない。さらに 5、7 は口縁部が内彎気味であることから、全体にキャリバー形の器形を呈することが窺われる。そうした観点からは、勝山式に極めて近いものと見なすことができよう。ただし、勝山式やその後の羽島下層Ⅱ式が平行線状の意匠を基調とするのに対し、5 の弧線状に施された押し引き刺突文は、西川津式のそれに通じることから、その両者の中間的様相を示すものと理解するのが妥当であろう。本稿ではこうした一群の土器を「三河宮の下式」と仮称し³⁾、押し引き刺突文を有する西川津式からこの仮称「三河宮の下式」を介し、勝山式への変遷を仮定したい。

表5 近畿地方北部を中心とした縄文時代早期後半から前期前葉の土器編年

本編 期区分	西日本縄文 条痕文土器 (岡田2008)	山陰地方	近畿地方北部		近畿地方中央部	東海地方	参 考
-	Ⅰa期	寄倉12層式			元野式		
1期	Ⅰb期	(4)	宮ノ下Ⅰ式		八ツ崎Ⅰ式/粕畑式		
2期	Ⅱa期		広井上ノ山式		上ノ山式		
		(上長浜)	(4)		入海Ⅰ・Ⅱ式		「穴橋式」(北陸)
3期	Ⅱb期	菱根式	宮ノ下Ⅱ式		石山式		
4期	Ⅲa期	(島根大学橋下層)	裏陰式		天神山式		
	Ⅲb期	(4)	杉ヶ沢式		一乗寺南地点Ⅰ・Ⅱ式		橋脚間式
5期	Ⅲc期	福呂Ⅰ式	志高最下層式				
		長山南麓式/羽島下層Ⅰ式					
6期		西川津式		(船倉井型)	西川津式	堀原式	布目式、二ツ木式
		西川津式	「三河宮の下式」	松ヶ崎下層式	(栗津SZ1群)	上ノ山Ⅱ式	
7期			勝山式			清水ノ上Ⅰ式	
-			羽島下層Ⅱ式			清水ノ上Ⅱ式	

4. 縄文時代早期後半から前期前葉の土器編年

これまでの型式学的検討を踏まえ、近畿地方北部における縄文時代早期後半から前期前葉の土器編年を整理する(表5)。

寄倉12層式に後続する1期は、宮ノ下Ⅰ式を標式とする時期である。「縄文条痕文土器(西日本)」(岡田2008)としたうちの「Ⅰb期」にあたる。浦入遺跡P2地点の伴行関係から、東海地方の八ツ崎Ⅰ式や粕畑式が概ね併行すると考えられる。

続く2期は、広井上ノ山式を標式とする時期である。「縄文条痕文土器(西日本)」の「Ⅱa期」に相当するが、内面縄文施文は限られることから、そのうちでも相対的に古く位置づけられる。伴行関係がなく明確でないものの、東海地方の上ノ山式に併行する可能性が高い。

3期は宮ノ下Ⅱ式を標式とする時期である。「縄文条痕文土器(西日本)」の「Ⅱb期」に相当する。ただし、平底で内面縄文施文の限られた2期の広井上ノ山式と、丸底で内面縄文施文の卓越した宮ノ下Ⅱ式の型式学的距離は小さくない。先に広井上ノ山式を2期でも古く位置づけられるとしたように、この間を連繫する資料の出現が今後期待される。島根県上長浜遺跡の菱根式や、北陸地方の仮称「六橋式」がこれに併行し、北陸地方での伴行関係から東海地方の入海Ⅰ・Ⅱ式が併行する可能性が高い。そして、これに続く宮ノ下Ⅱ式は概ね石山式との併行関係が考えられる。

4期は裏陰式と杉ヶ沢式を標式とする時期である。このうち裏陰式は、3期と同じく「縄文条痕文土器(西日本)」の「Ⅱb期」に相当するが、杉ヶ沢式は「Ⅲa期」にあたり、2時期に分別可能と考える。なお、杉ヶ

沢遺跡第14地点では、杉ヶ沢式の土器が鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)層直上から出土している。

5期は志高最下層式を標式とする時期である。「縄文条痕文土器(西日本)」の「Ⅲb期」ないし「Ⅲc期」に相当し、山陰地方の福呂Ⅰ式ないし長山馬籠式に併行すると考えてよい。また、長山馬籠式に併行すると考えられる瀬戸内地方の羽島下層Ⅰ式、近畿地方中央部から南部の一乗寺南地点Ⅰ・Ⅱ式、さらには東海地方の橋脚間式との併行関係も推測可能である。

6期は、類布目型、松ヶ崎下層式を標式とする時期で、その型式学的特徴と遺跡の引き算から、2時期に細別することができるが、新しく位置づけられる松ヶ崎下層式は、後述の通り、6期から切り離される可能性がある。6期は、山陰地方の西川津式に併行するほか、類布目型の元となる布目式の位置づけを敷衍するならば、関東地方の花積下層式の後半から二ツ木式との併行が考えられる。

7期は、栗津SZ1群と勝山式の押引き刺突文を有する土器の時期であり、羽島下層Ⅱ式の直前に位置づけられる。型式学的に西川津式と勝山式との間に位置づけられる仮称「三河宮の下式」、それに後続する勝山式が相当するので2時期に分けられる。ただし、仮称「三河宮の下式」は、6期とした類布目型、松ヶ崎下層式の型式学的組列と異なりながらも、それらとの正確な併行関係が不明であるため、こうした文様属性の相違を即年代差と見なすことには問題がある。志高遺跡最下層には類布目型と押引き刺突文の典型的な西川津式があって、松ヶ崎下層式がそのうちの前者、仮称「三河宮の下式」が後者からの型式学的組列をそれぞれたどれると考えるならば、この両者は年代的に併行する

可能性は十分に考えられる。特に器形と施文帯の配置が、両者とも勝山式、そしてそれ以降の羽島下層Ⅱ式に共通することは、その観点を傍証しよう。したがって、ここでは先に6期とした松ヶ崎下層式の位置づけをあらため、7期を仮称「三河宮の下式」の段階と勝山式の2時期に細分したうちの、仮称「三河宮の下式」を標式とする7期の古い段階に併行するものとしておきたい。なお、三河宮の下遺跡の出土例をもって強弁すれば、この7期の古い段階は、東海地方の上ノ山Ⅱ式との併行関係が推測され、新しい段階の勝山式は東海地方の清水ノ上Ⅰ式との併行関係が期待される。

5. おわりに

本稿では、標式資料の再報告ならびに新しい資料の増加を受けて、近畿地方北部における縄文時代早期後半から前期前葉の土器編年の再整備を試みた。その結果、早期後半においては、従来「繊維土器」として把握されてきた土器群が、寄倉12層式から宮ノ下Ⅰ式、広井上ノ山式、宮ノ下Ⅱ式、裏陰式、杉ヶ沢式、志高最下層式と型式学的に変遷するものとした。このうち志高最下層式は、東海地方との併行関係から、早期末前期初頭に位置づけられる可能性が高い。これに後続する前期前葉の近畿地方北部には、西川津式と布目式の影響を強く受けた土器群が成立する。このうち後者は、類布目型、松ヶ崎下層式と型式学的に変遷するものの、その後引き続き状況は認められない。主体となるのは西川津式から仮称「三河宮の下式」、勝山式へと変遷する型式学的組列であり、これが広域的な分布を見せる羽島下層Ⅱ式へと連なる。その意味では、山陰地方に発する西川津式の影響の大きさがうかがえる。本稿では、仮称「三河宮の下式」を認識することにより、西川津式分布の東の縁辺となる地域においても、その影響が小さくなかったことを明らかにした。今後、西川津式の影響が、列島西部のその他の地域においてどのように発現したのか具体的に究明することで、前期中葉以降の土器群の実態把握が可能となろう。

学生の時、矢野さんのお誘いあって、鳥根県見町まで土器を見に行ったことがある。夕方、辰馬考古館にお邪魔して、近くのご自宅で仮眠をとって深夜に出発。矢野さん運転の車で2人旅だった。その時見たのがまさに早期の繊維土器。あれ以来、あまり検討が進められていなかったが、せっかく頂いた機会なので、ここになんとか形にしてみました。これからいろいろと続けて議論させていただけますと幸いです。

註

- 1) 近年、福井県桑野遺跡出土資料をもって、渋谷昌彦(2022)によって「桑野式」が提唱された。それがまとまった有意義な資料であることは認めるが、筆者がそれを実見した印象は宮ノ下Ⅱ式のものであり、あえて新形式として名称を与える必要は感じていない。
- 2) 仮称「六橋式」は、石川県六橋遺跡出土の表裏縄文施文で、底部が突出して平底になり、外面に竹管状工具外側刻突による矢羽状文施文の特徴的な土器をもって把握した。矢羽状文の由来が問題となるが、北陸地方で共伴例の多くある入海Ⅱ式が候補になると考える。
- 3) ここで仮称「三河宮の下式」としたものは、2021年6月の関西縄文文化研究会のオンライン研究集会で、栗津SZ1群と仮称「勝山式」を連繫するものと説明した奈良県八条北遺跡出土土器個体に近く、型式学的により勝山式に近い位置にあるものと判断できる。「三河宮の下式」は、栗津SZ1群とともに西川津式の影響による押し引き刺突文を特徴的に有するが、器形の変化が少ない栗津SZ1群や頸部から胴部にのみ施文のある八条北遺跡出土個体と異なり、キャリパー形を呈するものがあり、口縁部に施文のある点で相対化される。この特徴は、布目式と接触のある近畿地方北部に固有のものである可能性が考えられる。

引用文献

- 網谷克彦 2004 「帝釈峡遺跡群に磯ノ森式は存在するか」『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報 XVII』広島大学大学院文学研究科
- 池田征弘 1998 「山宮遺跡」兵庫県教育委員会
- 泉 拓良 1984 「遺文(縄文土器)」『粟津湖底遺跡』滋賀県教育委員会
- 泉 拓良 1985 「滋賀県石山貝塚」『探訪縄文の遺跡 西日本編』有斐閣
- 伊藤今日子 1984 「宮ノ下遺跡出土の土器」『京都考古』35
- 井上智博 1991 「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相」『考古学研究』38(2)
- 井上智博 1996 「山陰・西川津式土器の土器型式構造と恩原2遺跡土器群のしめる位置」『恩原2遺跡』恩原遺跡発掘調査団
- 大石雅典 2021 「宮ノ下遺跡出土土器の再評価」『京都府埋蔵文化財論集第8集』京都府埋蔵文化財調査研

究センター

- 岡田憲一 2001『平底土器の終焉、あるいは再生』『太
灘考古』16
- 岡田憲一 2002『縄文時代前期以前の土器』『縄文時代
の石器—関西の縄文草創期・早期—』関西縄文文
化研究会
- 岡田憲一 2008a『縄文条痕文系土器（西日本）』『総覧
縄文土器』アム・プロモーション
- 岡田憲一 2008b『編年研究の現状と課題④近畿・中国・
四国地方』『縄文時代の考古学 2』同成社
- 岡田茂弘 1957『京都府宮ノ下遺跡出土の土器』『貝塚』
70
- 岡田茂弘 1965『近畿』『日本の考古学Ⅱ縄文時代』河
出書房新社
- 川上 稔・湯村 功 1996『上長浜貝塚』出雲市教育委
員会
- 小林青樹 2000『縄文時代早期末葉から前期前葉土器
群に関する問題』『福呂遺跡 1』岡山大学埋蔵文化財
調査研究センター
- 潮見 浩 1985『帝釈峡遺跡群の繊維土器』『論集日本
原史』吉川弘文館
- 渋谷昌彦 2022『桑野式土器の設定』『モノ・構造・社
会の考古学』今福利恵博士追悼論文集刊行委員会
- 釋 龍雄・林 和廣 1997『丹後の縄文遺跡』丹後古代
文化研究会
- 高松龍暉・矢野健一 1989『上ノ山遺跡』美方町教育委
員会
- 竹原一彦 編 1982『三河宮の下遺跡発掘調査概要』『京
都府遺跡調査概報第 2 冊』京都府埋蔵文化財調査研
究センター
- 谷藤保彦 1999『花積下層Ⅰ式土器とその周辺』『縄文
土器論集』縄文セミナーの会
- 田代 弘・筒井崇史 編 2001『浦入遺跡』京都府埋蔵
文化財調査研究センター
- 千葉 豊・菱田哲郎 編 1991『先史時代の北白川』京

都大学文学部博物館

- 坪井清足 1956『石山貝塚』平安学園考古学クラブ
- 同志社大学出雲文化調査団 1959『島根県斐根遺跡
発掘調査報告』『同志社大学人文科学研究紀要』2
- 戸原和人・堀井泰樹 1998『松ヶ崎遺跡第 5 次発掘調
査概要』『京都府遺跡調査概報第 82 冊』京都府埋蔵
文化財調査研究センター
- 戸原和人 2001『網野町松ヶ崎遺跡下層遺物の研究』『京
都府埋蔵文化財論集第 4 集』京都府埋蔵文化財調査
研究センター
- 長谷川達・杉原和雄 1979『裏除遺跡発掘調査概報』大
宮町教育委員会
- 肥後弘幸・三好博喜 編 1989『志高遺跡』京都府埋蔵
文化財調査研究センター
- 水ノ江和同・大石雅典 編 2020『宮ノ下遺跡』同志社
大学文学部文化史学科
- 宮本一夫 1987『近畿・中国地方における縄文前期初
頭の土器細分』『京都大学構内遺跡調査研究年報昭
和 59 年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 三好博喜 1991『若狭湾中西部地域における縄文前期
初頭の一様相』『京都府埋蔵文化財論集第 2 集』京都
府埋蔵文化財調査研究センター
- 矢野健一 2002『中四国地方における縄文時代早期末
前期初頭の土器編年』『環瀬戸内の考古学』古代吉備
研究会
- 山下勝年 2003『天神山式土器の終焉と塩屋式土器の
成立』『伊勢湾考古』17
- 山下勝年 2005『楠廻間貝塚出土の縄文土器について』
『楠廻間貝塚』知多市教育委員会
- 横澤 慈 2006『近畿地方縄文時代早期末～前期初頭
の土器編年』『往還する考古学』近江貝塚研究会
- 吉岡博之・松本達也 編 2002『浦入遺跡群発掘調査
報告書』舞鶴市教育委員会
- 渡辺 昇・久保弘幸 1991『杉ヶ沢遺跡』兵庫県教育委
員会

研究論文

富山湾沿岸における縄文時代前期前葉以前の生業活動についての予察

— 上久津呂中屋遺跡出土資料の検討を基に —

納屋内高史

要 旨

北陸地域における縄文時代の生業研究は、縄文時代早期～中期の貝塚出土動物遺存体を中心とした研究と後・晩期の石器組成を中心とした研究を主として進んできたが、特に前期前葉以前の状況が不明確な状況にある。本稿では早期後葉から中期末にかけて層位的な資料が得られている富山県永見市上久津呂中屋遺跡出土資料のうち、早期後葉から末葉の包含層と早期末葉から前期前葉の貝層から出土した動物遺存体と石器・骨角器を分析した。そして、それにより北陸地域における縄文時代前期前葉以前の生業活動のうち、特に早期後葉から前期前葉の狩猟・漁労活動について予察的検討を行った。資料分析の結果、本遺跡の周辺環境は早期後葉から前期前葉にかけて、直面する水域環境に大きな変化はなかったと推定されるものの、早期末を画期としてそれまでの獲得対象種のうち、遺跡近傍に生息し獲得効率の高い種類の利用が活発化することによって、資源獲得総量が増加してゆく傾向が明らかとなり、中期初頭まで続く生業形態を確立するに至ったと考えられた。このような生業変化の背景として人口の増加の可能性を指摘するとともに、本遺跡の貝塚の発現時期が周辺における遺跡の増加期や北陸地域における貝塚形成の初現期と一致する点や、石器組成の変化が北陸地域における早期から前期の傾向と一致する点、近隣の三引遺跡の調査結果も踏まえ、今回の分析結果が少なくとも富山湾周辺の早期後葉から前期前葉までの生業活動について、ある程度普適性を持つ可能性を示した。

キーワード：北陸地域、貝塚、縄文時代早期末葉、縄文時代前期前葉、狩猟、漁労

はじめに

北陸地域における縄文時代の生業研究は、縄文時代早期～中期の貝塚出土動物遺存体を中心とした研究（平口 1985 等）と後・晩期の石器組成を中心とした研究（麻柄 1984 等）を主として進んできた。また、鳥浜貝塚や桑剣下遺跡の研究のように、動植物遺存体や石器を中心とした道具類の分析を融合させ、一つのモデルを提示した研究もみられる（西田 1984、渡辺編 1975）。特に 1990 年代後半～2000 年代にかけて三引遺跡や上久津呂中屋遺跡、小竹貝塚、鳥浜貝塚といった、縄文時代早・前期の貝塚を伴う集落遺跡の調査・研究事例が蓄積され、縄文時代前半期の状況の解明が大きく進んだ（金山編 2004、島田他編 2013、町田編 2014、吉川他 2016 等）。しかし、解明が進んでいるのは、特に縄文時代前期後半の状況であり、前期前葉以前の状況は不明確な状況にある。

筆者は以前、北陸地域の縄文時代の貝塚を伴う集落遺跡の中でも、早期後葉から中期末の層位的な資料の得られている富山県上久津呂中屋遺跡出土資料のうち、早期末から中期末の貝塚出土資料を用いて、北陸地域における縄文時代早期末～中期末にかけての生業動態

について検討を行った。そして、早期末～中期初頭にかけて周辺環境が変化しても生業の基本的志向性を維持し続ける傾向を指摘した（納屋内 2016）。今回はこのような状況を鑑みて、本遺跡出土資料のうち、縄文時代早期後葉～前期前葉の動物遺存体、石器・骨角器の分析を中心に、特に富山湾沿岸における早期後葉から前期前葉の狩猟・漁労活動を中心とした生業活動の変遷を考えたい。

1. 上久津呂中屋遺跡について

上久津呂中屋遺跡は、富山県永見市上久津呂に所在する縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。遺跡は、能登半島南部の東側に位置し、宝達山から伸びる氷見南部丘陵裾部から東側の低地部ににかけて広がり、現在の海岸線からは 5km ほど離れた場所に立地している。遺跡の東側に広がる低地には、縄文時代から中世にかけて水域が広がっていたことが推定されており、古代には「布勢水海」と呼ばれる潟湖の広がっていたことが文献などで知られている。縄文時代から中世にかけての本遺跡は、入江や潟湖のごく近傍に立地する集落であったと考えられる（図 1）。

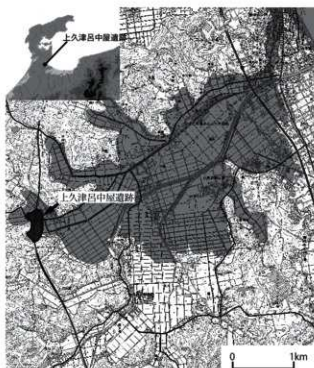


図1 上久津呂中層遺跡の位置（ は縄文時代の湖沼の範囲）
（湖沼の範囲は川崎（2021）を基に標高3mを当時の海水準と想定して作図。
遺跡範囲は富山県GISサイトより）

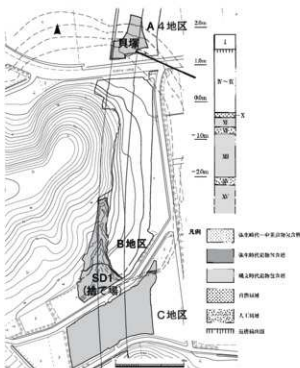


図2 上久津呂中層遺跡検出縄文時代遺構全体図と
貝塚部分の基本層序（島田他編（2013）を改変）

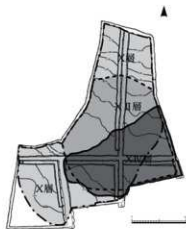


図3 A4地区検出貝塚の検出状況と
各貝層の分布範囲
（島田他編（2013）を改変）

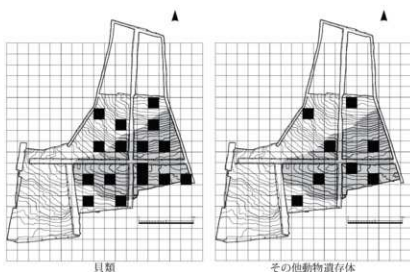


図4 A4地区XIV層における分析対象資料採取位置
（島田他編（2013）を改変）

2005年度に能越自動車道の建設に伴い調査が行われ、弥生時代～近世の遺構面の下層、地表下3mから縄文時代早期後葉～後期前葉の「捨て場」と早期末～中期末の貝塚が検出された（図2、3）。このうち、貝塚については、調査地点の北側A4地区で検出され、早期後～末葉の捨て場と考えられる包含層（XV層）の上に早期末葉～前期前葉（XIV層）、前期末葉～中期初頭（XII層）、中期前半～中期末（X層）の3枚の貝層が間層を挟んで断続的に形成されたものである。また、

貝塚検出地点から丘陵尾根を挟んで南側の谷部に形成された「捨て場」からは、早期後葉～後期前葉の遺物が混在した状態で出土している。

珪藻分析によれば、これらの遺構が検出された地点は、縄文時代段階では全ての地点で鹹水性の干潟や内湾に生息する種が目立ち、早期後葉から後期前葉にかけて鹹水性の入江のような状態を呈していた「布勢水海」の縁辺部に形成された干潟や低湿地であったと考えられる。本稿では前期前葉以前の生業活動について

検討することを目的とするため、貝塚出土資料のうち早期末葉～前期前葉の貝層（XⅣ層）出土資料と貝塚下の早期後～末葉の包含層（XⅤ層）出土資料を分析対象とする。

2. 分析資料の出土状況とその概要

早期後～末葉包含層（以下XⅤ層）は、A4地区に形成されていた貝塚の下層全面に広がる形で検出された（図2、3）。上面の検出標高は-2.0～+0.3mで、諸般の事情から完掘できなかったものの、確認できた部分で層の厚さは最大2mを計る。土質は黒色粗砂であり、珪藻分析の結果、内湾指標種群を中心に、外海指標種群や海水砂質干潟指標種群等の海生種が検出されていることから、内湾に面した波打ち際から干潟のような場所に堆積した層と推定される。この層の中から土器を中心に、石器、動物遺存体、人骨など様々な遺物が混在した状態で多量に出土している。堆積層の状態や遺物量を加味するならば、干潟にモノを廃棄することにより形成された「捨て場」の堆積と考えられる。包含層の時期について、出土土器は早期末～前期初頭の佐波・極楽寺式を主体とするが、動物遺存体のAMS年代測定値は最下層から出土した貝類で7260±

40～7390±40yrBPとやや古く（加速器分析研究所2013）、それを加味すると早期後～末葉が主体と推定される。資料の取り上げは、調査時に目視により行われ、篩を用いた遺物の取り上げは行われていない。

早期末葉～前期前葉貝層（以下XⅣ層）は、A4地区のXⅤ層の上に断続的に形成された3枚の貝層から成る貝塚の最下層に形成されていた貝層である（図2、3）。上面の検出標高は-2.0～+0.4mで、検出された面積は202.8㎡、厚さは10～20cmを計る。土質は黒色砂を主体とする混貝土層であり、珪藻分析では内湾指標種群を中心に海水泥質干潟指標種群などの海生種が検出されている。また、出土した貝類は後述するように人為的に採取されたものと廃棄された場所の堆積物に由来するものとが混在していると考えられるほか、非食用貝類は干潟群集や内湾岩礁性群集、内湾砂底群集に属するものが主体を成す。これらの点からこの時期の遺跡周辺は干潟や岩礁を中心に様々な環境が混在する状態であったと推定される（納屋内2016）。前時期同様に内湾に面した波打ち際から干潟のような場所に貝類をはじめ土器や石器、動物遺存体等の「モノ」が投棄されることにより形成された層と推定される。貝層の時期について、出土土器はそのほとんどが佐波・

表1 A4地区XⅣ層出土貝類の組成

食用種	生息域	出土個体数	%
サルボウガイ	内湾砂底	5495	27.01%
シラオガイ	内湾砂底	3503	17.22%
アサリ	内湾砂底	627	3.08%
マカキ	干潟/内湾岩礁性	2477	12.17%
オノノガイ	内湾砂底	896	4.40%
ヒメカノコアサリ	内湾砂底	3	0.01%
ハマグリ	内湾砂底	609	2.99%
カミガイ	内湾砂底	598	2.94%
ヤマトシジミ	感潮域	482	2.37%
ハヤガイ	干潟	142	0.70%
ハカガイ	沿岸砂底	74	0.36%
オキシジミ	干潟	45	0.22%
シオフキ	内湾砂底	22	0.11%
イセシラガイ	内湾砂底	19	0.09%
チュウセンハマグリ	沿岸砂底	10	0.05%
カリガネエガイ	内湾岩礁性	4	0.02%
サトウガイ	沿岸砂底	4	0.02%
トリガイ	内湾砂底	3	0.01%
イタボガキ	砂礫底	2	0.01%
コタマガイ	沿岸砂底	1	0.00%
イボウミナ	干潟	4907	24.12%
ウミナ	干潟	250	1.23%
アカシ	内湾泥底	76	0.37%
スガイ	内湾岩礁性	49	0.24%
ツメタガイ	内湾砂底	29	0.14%
ハイ	沿岸砂底	5	0.02%
レイシガイ	内湾岩礁性	4	0.02%
ネコガイ	干潟	4	0.02%
コシダカカンガ	外海岩礁性	4	0.02%
サザエ	外海岩礁性	3	0.01%
合計		20347	100.00%

非食用種	生息域	出土個体数	%
ウメノハナガイ	内湾砂底	3	0.27%
ナミガシワ	内湾岩礁性	96	8.53%
キクザル	内湾岩礁性	24	2.13%
ヒメシラトリ	内湾泥底	4	0.36%
クチベニガイ	内湾砂底	1	0.09%
アラムシロ	干潟	212	18.84%
カワア	干潟	173	15.38%
ヒメヨウラク	内湾岩礁性	310	27.56%
ムシロガイ	内湾砂底	179	15.91%
ムギガイ	内湾岩礁性	41	3.64%
コロモガイ	内湾泥底	35	3.11%
コベルトカニモリ	外海岩礁性	17	1.51%
シラガガイ	外海岩礁性	1	0.09%
ヤカドツガイ	沿岸砂底	29	2.58%
合計		1125	100.00%

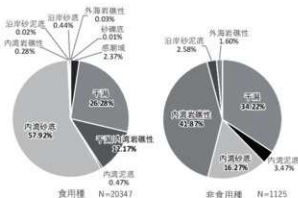


図5 A4地区XⅣ層出土貝類の生息域別組成（貝類の生息域分類は松島（1985）に基づく）

極楽寺式で占められ、動物遺存体の AMS 年代測定値も $6130 \pm 30 \sim 6770 \pm 40 \text{yrBP}$ と早期末～前期初頭の年代を示すことから（加速器分析研究所 2013）、早期末～前期初頭が主体と推定される。資料の取り上げは、貝層分布範囲に $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリッドを割り付けた上でグリッドごとに貝層土壌を全量採取し、5mm、2.5mm、1mm の篩を用いた水洗選別により行われたほか、調査時に目視により採取されたものは 5mm 篩で採取されたものと一括された。また、動物遺存体分析はこれらのグリッドの内、17 グリッドを対象に行われた（図 4）。

以上のように分析対象とする X V 層と X IV 層では資料採取方法に違いがあることから、ここではそれらの資料採取基準をできるだけ近づけるため、X V 層出土資料について 5mm 篩採取資料のみを分析対象とする。

3. 出土動物遺存体の分析

(1) 貝類

X V 層は、詳細な分析、報告がなされていないが、マガキ、オオノガイ、カガミガイ、シラオガイ、サルボウ、ハイガイ等が若干量出土しており、内湾砂底群集や干潟群集に属するものが多く出土しているようである。X IV 層は、サルボウ、イボウミナ、マガキ、シラオガイを主体とする貝層を形成する。出土したサルボウの殻長分布がごく小型のものと大型のものとで双峰形を成すことから、「人為的に廃棄されたもの」と「廃棄された場所の堆積物に由来するもの」とが混在していると考え（納屋内 2016）。

出土した貝類の内、食用種について見てみるとサルボウガイを筆頭にイボウミナ、シラオガイ、マガキが 12～27% ずつ出土しており、比較的多様性の高いあり方を示す（表 1）。これらの生息域別組成では、内湾砂底群集に属するものが過半数を占め、干潟群集に属するものが約 26% とこれに次ぐ¹⁾（図 5）。そのため、遺跡近傍の干潟状の低湿地や砂浜での採取を主としていたが、特定の種類にあまり特化せずに採取していたと考えられる。また、出土したヤマトシジミを対象とした貝殻成長線分析の結果では、周年的な採取が行われていた可能性が指摘されている（金井 2013、畑山 2016）。

珪藻分析と X IV 層の非食用種の分析の結果も踏まえると、X V 層から X IV 層にかけての時期には、遺跡付近に時期を通じて干潟状の低湿地や砂浜を主とした水域環境が広がり、特に X IV 層の段階には、それを主としながらも様々な水域環境が入り混じるような景観が広がっていたと推定される。このような周辺環境の下、

表 2 A4 地区 X V・X IV 層出土土魚類の組成

	X V 層		X IV 層	
	NISP	%	NISP	%
ボウ科		0.00%	18	0.33%
スズキ	10	1.00%	97	1.76%
スズキ?	4	0.40%		0.00%
クロダイ属	153	15.32%	1524	27.65%
マダイ・チダイ	284	28.43%	1550	28.12%
ハタ科		0.00%	15	0.27%
カワハギ科	54	5.41%	505	9.16%
フグ科	2	0.20%	0	0.00%
ヒラメ	1	0.10%	32	0.58%
コナシ	1	0.10%	17	0.31%
ニシン科		0.00%	26	0.47%
アジ科		0.00%	5	0.09%
ブリ属	8	0.80%	3	0.05%
サバ属	3	0.30%	382	6.93%
カゴ	12	1.20%	260	4.72%
マクロ属	428	42.84%	190	3.45%
カツオ/マクロ属	18	1.80%	542	9.83%
ソウダゴツオ属		0.00%	184	3.34%
サハ		0.00%	89	1.61%
板鰈属	18	1.80%	64	1.16%
その他	3	0.30%	9	0.16%
合計	999	100.00%	5512	100.00%

（出土魚類の内、属は不明のタイ科魚類については、クロダイ属、マダイ・チダイの出土比率を基に同様に比配した）

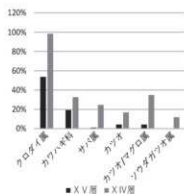


図 6 マダイ・チダイの出土量を基準とした X V・X IV 層出土土魚類の組成中・小型魚類出土比率

（カツオ/マクロ属としたものは、カツオまたはマクロ属の幼魚と考えられるが保存状態の問題により判別できなかったもの）

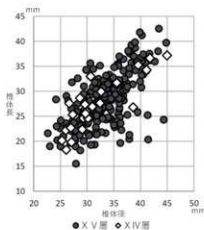


図 8 X V・X IV 層出土土魚類の骨の長さ

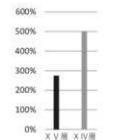


図 7 イサの出土量を基準とした X V・X IV 層出土土魚類の組成

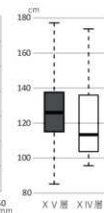


図 9 X V・X IV 層出土土魚類の推定体長の分布

貝類採取は、食用種の出土傾向を見た場合、XV層の段階では低調であり、XIV層の段階になると特定の種類に特化しないながらも、ある程度の貝層を形成する程度に周年的かつ集約的に行われるようになったことを示す。

(2) 魚類

XV層では999点が同定されており、マグロ類が約43%と組成のおよそ半数を占め、マダイ・チダイが約28%、クロダイ属が約15%と続く。内湾～沿岸域で獲得可能なものと沖合で獲得可能なものが組成のほとんどを占め、特にマグロ類への強い偏りが見られる。XIV層では5512点が同定され、出土している種類相はXV層と大きく変わらないものの、マグロ類の比率は大きく減少し、マダイ・チダイ、クロダイ属がそれぞれ約28%とタイ類が主体を占めるようになる(表2)。特に内湾や大陸棚内縁部に多く生息するクロダイ属の比率が大きく増加する。また、サバ類、ソウダガツオ属、カツオ等、沿岸性であるがマグロ類よりも岸に近い水域で獲得可能な中・小型サバ科魚類が増加する。

このようなXV層とXIV層の出土傾向の差は、特に魚類のような法量の小さな資料の場合、資料取り上げ時の篩の使用の有無やサンプルサイズの違いの影響が大きく反映されている可能性がある。そのため、ここではXV層、XIV層から出土した主要魚種の内、時期を通じて組成の中での位置づけが大きく変化せず利用頻度が安定しており、かつ、他の主要魚種と資料の大きさが同程度で調査時の回収率があまり大きく変わらないと推定されるものを基準とし、基準となる魚種に対する割合を比較することにより、出土傾向の差が組成及び獲得頻度の実態として有意かどうかを検討する。

まず、タイ科魚類、中・小型サバ科魚類については、時期を通じて28%前後の比率を占め、資料の大きさもそれと同程度のものでも占められるマダイ・チダイの出土量を基準とし、それに対する各魚種の割合を比較した。マグロ類については、資料の大きさが他の魚種と比較して大きく、出土魚種の中に基準として適当なものがいないため、哺乳類の中で資料の大きさがマグロ類と比較的近く、組成比率も後述するように23～27%と比較的安定しているイヌの出土量を基準とし、それに対する割合を比較した。その結果、クロダイ属、中・小型サバ科魚類ともにXIV層はXV層に対して大きく増加しているほか(図6)、マグロ類もXIV層はXV層と比較して増加していることが明らかとなった(図7)。

このことから、XIV層におけるクロダイ属、中・小型サバ科魚類の組成比の増加は、組成の実態を反映していると考えられるほか、マグロ類については、組成比の上ではXIV層で大きく減少するものの、実際の獲得頻度は増加していた可能性がある。

また、マグロ類について、出土した椎骨の法量から獲得対象となった個体の推定体長を分析すると、出土した椎骨はXV層、XIV層ともに椎体長・椎体径20～40mmを計り、体長1.2～1.4m程度的大型個体が主体と推定される²⁾(図8、9)。マグロ類は沖合の表層を回遊する魚であり、現在の富山湾沿岸でも1mを超える大型のものは、海岸から2～4km離れた大陸棚中央

表3 A4地区XV・XIV層出土鳥類の組成

	XV層		XIV層	
	NISP	%	NISP	%
アヒ科	15	20.00%	3	25.00%
カイツブリ科	6	8.00%	1	8.33%
ウ科	39	52.00%	7	58.33%
カモ科	11	14.67%		0.00%
カモメ科	3	4.00%		0.00%
キジ科		0.00%	1	8.33%
サギ科	1	1.33%		0.00%
合計	75	100.00%	12	100.00%

表4 A4地区XV・XIV層出土哺乳類の組成

	XV層		XIV層	
	NISP	%	NISP	%
モグラ属		0.00%	1	0.61%
ムササビ	1	0.17%		0.00%
ノウサギ	3	0.51%	1	0.61%
テン	2	0.34%	4	2.42%
ニホンカワウソ		0.00%	1	0.61%
タヌキ	11	1.87%	13	7.88%
キツネ	6	1.02%	1	0.61%
イヌ	156	26.49%	38	23.03%
イノシシ	23	3.90%	11	6.67%
ニホンジカ	341	57.89%	67	40.61%
クジラ目	34	5.77%	20	12.12%
熊脚類	7	1.19%		0.00%
その他	5	0.85%	8	4.85%
合計	589	100.00%	165	100.00%

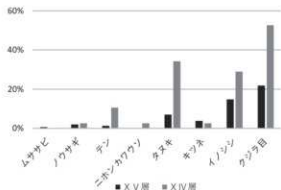


図10 イヌの出土量を基準としたXV・XIV層出土中・小型哺乳類、イノシシ、イルカ類の出土比率

部～縁辺部に設置された定置網で捕獲される（富山県水産試験場編 2005）。そのため、出土したマグロ類も岸から離れた大陸棚中央部～外縁部で主に捕獲されたと推定される。

これらのことから、XV層からXIV層にかけての時期は、大陸棚内縁部から縁辺部に生息する種類を主対象に、特に岸から離れた沖合に生息するマグロ類を強く指向する漁労活動を維持しながら、内湾や大陸棚内縁部といった岸に近い海域に生息する種類に軸足を移した漁労活動へ変化していったと考えられる。出土したマグロ類の推定体長が両資料ともに同程度であることもマグロ類の獲得活動に大きな変化がなかったことを裏付けるだろう。

(3) 鳥・獣類

鳥類についてはXV層から165点同定され、ウ科、アビ科といった海鳥が主体を占め、特に岩礁を好むウ科が多い。XIV層からは12点同定され、ウ科が最も多く、アビ科がそれに次ぎ、種類相、組成比ともに前時期とほぼ同様な傾向を示す（表3）。

哺乳類については、XV層からは586点が出土し、ニホンジカが約58%と過半数を占め、イヌが約27%出土しているほかは皆10%以下の出土量にとどまる。XIV層からは165点が出土し、種類相の面では前時期とほぼ同様である。しかし、組成面ではニホンジカが半数近くを占め、イヌが23%とそれに次ぐ点では共通するものの、イルカ類とイノシシのほか、タヌキ、テン等の中型哺乳類の比率が増加する（表4）。

出土した鳥・獣類は、XV層、XIV層ともに主要四肢骨など大型の部位が多く、資料の取り上げにおける篩の使用の有無の組成に対する影響はあまり大きくないと考えられる。しかし、各層出土資料の資料数の違いが大きく、サンプルサイズの違いの影響が反映されている可能性もある。そのため、特に組成比に変化が認められたイルカ類とイノシシ、中型哺乳類について、これらの変化の有意性を組成比が23～27%と比較的安定しているイヌの出土量を基準に、魚類と同様な方法により検討した。その結果、比較を行った種類の多くでXV層からXIV層の時期にかけて増加していることが確認され、組成差は組成の実態を概ね反映していると考えられる（図10）。

これらのことから、まず、鳥類は種類相を踏まえれば、時期を通じて大きな変化はなく、干潟の発達した遺跡付近からやや離れた、岩礁の発達した海岸部で主に捕獲されていたと言える。資料の出土量の少なさや

表5 A4地区XV・XIV層出土石器の組成

	XV層		XIV層	
	出土数	%	出土数	%
石槌	3	2.65%	119	47.04%
石棒	56	49.56%	71	28.06%
石器	1	0.88%	1	0.40%
石皿		0.00%	1	0.40%
磨石		0.00%	1	0.40%
凹石	1	0.88%		0.00%
敲石	21	18.58%	21	8.30%
台石	1	0.88%	2	0.79%
石匙	7	6.19%	3	1.19%
石鏝	3	2.65%	6	2.37%
磨製石斧	3	2.65%	1	0.40%
板形石鏝	4	3.54%	8	3.16%
砥石	3	2.65%	2	0.79%
R.F.	10	8.85%	7	2.77%
球状耳飾		0.00%	5	1.98%
磨石		0.00%	2	0.79%
磨石		0.00%	2	0.79%
異形石器		0.00%	1	0.40%
合計	113	100.00%	253	100.00%

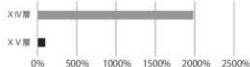


図11 石鏝の出土量を基準としたXV・XIV層出土石器の出土比率

表6 A4地区XV・XIV層出土石器の重量分布 表7 A4地区XV・XIV層出土石器の重量分布

重量	XV層	XIV層	重量	XV層	XIV層
0.5g未満	0	10	50g未満	0	0
0.5～1.0g	63	5	50～100g	3	5
1.0～1.5g	18	4	100～150g	7	4
1.5～2.0g	1	8	150～200g	5	8
2.0～2.5g	0	0	200～250g	6	12
2.5～3.0g	0	1	250～300g	6	7
3.0～3.5g	0	1	300～350g	7	4
3.5～4.0g	0	0	350～400g	9	8
4.0～4.5g	0	0	400～450g	0	3
4.5～5.0g	0	0	450～500g	4	3
5.0～5.5g	0	0	500～550g	2	2
5.5～6.0g	1	0	550～600g	0	5
6.0～6.5g	0	0	600～650g	0	1
6.5～7.0g	0	0	650～700g	1	1
7.0g以上	1	0	700g以上	1	3

表8 A4地区XV・XIV層出土骨角器の組成

	XV層		XIV層	
	出土数	%	出土数	%
刺突具Ⅰ	9	23.08%	36	26.87%
ヤス状刺突具	2	5.13%	16	11.94%
刺突具Ⅱ	4	10.26%	14	10.45%
簪針	20	51.28%	27	20.15%
単式釣針		0.00%	13	9.70%
歯状歯牙製品	2	5.13%	9	6.72%
貝輪		0.00%	7	5.22%
腕輪		0.00%	4	2.99%
鹿角製品	2	5.13%	4	2.99%
歯状歯牙製品		0.00%	3	2.24%
ヘラ		0.00%	1	0.75%
合計	39	100.00%	134	100.00%

出土魚類相が時期を通じて沿岸域へ沖合を志向することを踏まえれば、鳥類類は漁労の際に副次的に行われるものであったことも考えられる。

哺乳類は、時期を通じてニホンジカに偏った狩猟が行われ、イヌを用いた狩猟が盛んに行われていたことが示唆される他、XIV層の時期にはイルカ類とイノシシ、中型哺乳類の増加が見られた。イノシシはニホンジカと比べ、より開けた場所を好む傾向があり、ニホンジカよりもヒトの居住地付近で獲得しやすい種類である。また、中型哺乳類は狩猟対象としてみた場合、イノシシ、ニホンジカなどの大型獣と比較してより安全に獲得が可能な種類である。そのため、陸獣類についてはXIV層の時期に、それまでのニホンジカ狩猟の在り方を維持しながら、近傍で獲得できるものや獲得リスクの少ない種類の獲得が活発化したのであろう。また、イルカ類の増加については、真脇遺跡などの富山湾沿岸の縄文時代遺跡におけるイルカ漁の研究で、沿岸域へ回遊してきたものを入江等に追い込んで捕獲していたことが指摘されており（平口 2006）、出土魚類に見られた岸に近い海域での活動の高まりと関わる可能性が指摘できる。

（4）石器・骨角器

ここでは出土した土器を除く道具類のうち、石器・骨角器を対象に、その組成等を分析する。

まず、石器については、XV層から出土したものは113点に上り、組成は石鏃が約50%を占めるが、狩猟具と考えられるものは、石鏃が約3%出土しているのみと僅少である。XIV層から出土したものは253点に上り、組成は石鏃が47%と半数近くを占めるようになり、石鏃が28.1%とこれに続く（表5）。

石鏃については、資料の大きさが小さく、資料取り上げ時の篩の使用の有無が組成比に大きく影響すると考えられるため、石鏃と同程度の大きさで、組成比が2.4~2.7%と安定している石鏃の出土量を基準に、魚類と同様な手法で組成比の差の有意性を検討した。その結果、石鏃の石鏃に対する割合は、XV層からXIV層にかけて大きく増加していることが確認され、組成比の変化は組成の実態を反映していると考えられる（図11）。

狩猟・漁労具と考えられる石鏃、石鏃について、その機能を決定する最も大きな属性である重量に着目すると、まず、石鏃は、XV層から出土したものは1.8~29.3gと大型のものが含まれ、機能的には槍が含まれる可能性がある。これに対して、XIV層から出土し

たものは0.4~0.7gに重量分布のピークを持ち、1.3g以上のものは少なく、機能的に鏃と見なしうるものばかりである（表6）。

石鏃は、XV層、XIV層ともに100~400gの範囲にまとまる傾向が見られるが、XIV層は350g以上のものの出土量が大きく増加する（表7）。

骨角器については、XV層から出土したものは39点に上り、組成は髪針が約51%を占める。狩猟・漁労具に分類されるものについて、ヤス状を含む刺突具が約39%を占めるが、釣針の出土は見られない。XIV層から出土したものは134点に上り、組成はヤス状を含む刺突具が約49%を占め、髪針が約20%と続く。狩猟・漁労具に分類されるものについて、前時期と比べ刺突具の比率が増加するほか、新たに釣針が9.7%含まれるようになる（表8）。

これらのことから、石器・骨角器から見た場合、XV層からXIV層にかけての時期は、時期を通じて石鏃を用いた内湾～沿岸域における網漁、刺突具を用いた刺突漁が盛んに行われていたと言えよう。しかし、釣漁や石鏃を用いた弓矢猟は、XV層の時期ではなくXIV層の時期に至って活発化したと考えられる。このうち石鏃を用いた弓矢猟については、長谷川（2022）において、日本列島における草創期以降の石鏃の出現がイノシシの利用増加と関連する可能性が指摘されている。本遺跡においてもイノシシはXV層からXIV層にかけて1.7倍に増加しており、石鏃を用いた弓矢猟の活発化はイノシシの利用の増加と関連している可能性がある。また、網漁についてはXIV層の時期に石鏃の重量分布の拡大がみられるが、民俗例では漁網の重さは、使用場所の水深や潮流の強さ、対象魚種等に応じて変化することが知られる。このことを踏まえれば、出土した石鏃が漁網として用いられたと考えた場合、XIV層の時期における重量分布の拡大は、網を使用する環境や対象魚種が広がったことを示す可能性がある。

4. 考察

上記の分析結果から、上久津呂中屋遺跡における早期後葉～前期末の狩猟・漁労活動は以下のように捉えることができる。

第1段階（XV層期、早期後葉～末葉）

遺跡のごく近傍の環境は、干潟状の低湿地や砂浜が主として広がる状態を呈する。このような周辺環境にあるものの、出土動物遺存体から見た貝類採取は低調である。

この時期の漁労活動は、遺跡近傍の沿岸域や大陸棚

中央部～縁辺部での刺突漁や網漁を基本とし、特に岸から離れた大陸棚中央部～縁辺部で採れるマグロ類への強い志向性を持っていた。

狩猟活動は、鳥類類は漁労の際に副次的に行われ、陸獣類はニホンジカを主たる対象としたイヌ使用猟を中心とし、石鏃を用いた弓矢猟は低調であった。

第2段階（XIV層、早期末葉～前期前半）

遺跡の近くの環境は、干潟状の低湿地や砂浜を主として、様々な水域環境が入り混じる状態を呈する。このような周辺環境の下で、貝塚の出現にみられる遺跡付近の干潟における周年的で、ある程度集約的な貝類採取が開始される。

この時期の漁労活動は、前時期同様に遺跡近傍の沿岸域や沖合で基本的に行われるが、従来の沖合でのマグロ漁の頻度を減らすに、大陸棚内縁付近等のより岸に近い水域での活動が活発化し、岸に近い水域へその軸足を移していった。これに伴って、釣漁などの新たな漁法の開始や漁網の使用領域の拡大など既存の漁労具の改良、多様化も行われたと考えられる。

狩猟活動については、対象は鳥類、陸獣ともに前時期と大局的な傾向に大きな変化はないが、陸獣についてイノシシとタヌキなどの中型哺乳類の捕獲量が増加し、より居住域近傍で獲得しやすい種類や獲得リスクの少ない種類の利用の活発化が見られる。また、これに伴って石鏃を用いた弓矢猟が活発化した可能性がある。

以上のようにまず本遺跡の周辺環境は、佳渚分析や出土貝類分析の結果を踏まえると、時期を通じて干潟状の低湿地や砂浜が主として広がる状態であったと考えられる。筆者は先の論考で本遺跡周辺の海進のピークが早期末葉～前期にあることを指摘したが（納屋内2016）、このことは、早期後葉～末葉段階も周辺環境は早期末葉～前期と大きく違わなかった可能性を示すとともに、貝類採取に適した環境がすでに成立していた可能性も示す。

このような比較的安定した周辺環境の下で、本遺跡の第1段階から第2段階にかけての生業活動において、漁労活動では「漁場の岸付近への近接化」と「貝塚の形成にみられる貝類の集約的な利用の開始」、狩猟活動では「利用対象の拡大」と「石鏃を用いた弓矢猟の活発化」という変化がみられる。納屋内（2016）では、本遺跡の生業活動は早期末から中期初頭にかけて周辺環境が大きく変化するにもかかわらず、生業の基本的志向性が維持され続けることを指摘したが、今回の分析結果は、早期末から中期初頭にかけての生業の基本

的志向性が早期末を期として、環境変化以外の要因も加わって成立したことを示唆する。「動物遺存体の組成」と「土器以外の道具立て」、「石鏃の重量分布」における変化が、既存の資源獲得傾向に上積みする形で起こっていると評価できる点や、居住域のより近傍で利用できる種類やより獲得リスクの少ない種類の利用の増加により起こっていると考えられる点を踏まえれば、このような変化は既存の生業活動のうち、より少ない労力で獲得できる、獲得効率の高い種類の利用を活発化させ、資源獲得総量が増加したことにより起こっているとみなせる。貝塚の形成開始にみられる貝類の集約的な利用の開始もこのような流れの中で理解することも可能であろう。

資源獲得総量の増加要因としてまず考えられるのは、人口の増加である。富山湾周辺の縄文時代遺跡の動態を概観すると、早期から前期にかけて遺跡数が増加することが知られ、特に早期末段階には能登地域を中心に遺跡数が大きく増加する（橋本1985、町田2010、泉2023）。本遺跡も含め、富山湾周辺の早期遺跡は遺構の検出例が少なく、早期段階の詳細な人口動態をうかがうことは難しいが、このことは、早期末に人口増加が起きていたことを示唆する。

これらのことから、本遺跡の生業活動は、早期末段階に環境変化のほか何らかの要因により資源獲得を効率化し、獲得量を増加させる必要に迫られ、それによって中期初頭まで続く生業の基本的志向性が成立した可能性が考えられる。そして、その要因の一つとして人口の増加を指摘したい。

縄文時代早期の生業はこれまでの研究で、特に瀬戸内海島嶼部において早期中葉を境に遊動型狩猟採集社会から定住型狩猟採集社会へ移行してゆくことが指摘されている（畑山2023）。また、関東・中部高地においては、早期後半を境に漁労活動の主体が沿岸にシフトするとともに狩猟活動もイノシシ・ニホンジカ類に収斂してゆくことが指摘されている（橋本2023）。本遺跡で貝塚が形成されはじめる早期末葉～前期前葉は、本遺跡のほかに石川県七尾市三引遺跡や福井県福井市北堀貝塚、同あわら市桑野遺跡等で貝塚の形成が見られ、北陸地域における貝塚形成の初現期と位置付けられる時期であるほか（町田2006、納屋内2013、泉2023）、石器組成についても、北陸地方では石鏃が卓越するようになることが指摘されており、それ以前の段階は石鏃の出土は少ないようである（麻柄2020）。これらの点と先に述べたこの時期の遺跡数の増加傾向を踏まえれば、今回の分析結果は少なくとも富山湾周

辺における一般的な生業の変遷と貝塚の発現過程を示唆するのではなからうか。北陸地域の貝塚は、前期以前のものは地下深くに埋没し、発見が困難であることが指摘されているが(町田・杉山 2006、町田 2020)、本遺跡と同じく富山湾周辺に所在し、早期末葉、AMS年代測定値で $6280 \pm 130\text{yrBP}$ の段階に貝塚形成が開始される三引遺跡では、貝塚形成以前の早期後葉段階、AMS年代測定値で $7070 \pm 130\text{yrBP}$ の段階で鹹水～汽水性の干潟が既に遺跡周辺に形成されていたことが明らかにされている(金山福 2004、山形 2004)。このことは本遺跡と同じく貝塚の発現が貝類資源の獲得に適し得る環境の成立と一致しないことを示すとともに、本遺跡の分析結果が少なくとも富山湾周辺においてある程度の普遍性を持つ可能性を示し、北陸地域における遺跡型狩猟採集社会から定住型狩猟採集社会への移行期の一様相を示す可能性を持つと言えるだろう。

おわりに

以上、上久津呂中屋遺跡のXV層とXIV層から出土した資料の分析を通じて、早期後葉～前期前葉にかけての本遺跡の生業活動、特に狩猟・漁労活動の変化について分析を行ってきた。分析の結果、本遺跡の早期後～末葉段階では、マグロ類を強く志向する岸から離れた水域での獲得を重視した漁労活動とそれに伴う鳥類類、ニホンジカを主たる対象としたイヌ使用除敵が行われていたことが明らかとなった。このような生業形態は、早期末を画期として変化し、それまでの生業活動のうち、獲得効率の高い種類の利用を活性化させ、資源獲得総量が増加することにより、中期初頭まで続く生業形態の確立したことが考えられた。そして、このような生業形態の変化の背景として、人口の増加を可能性として提示した。また、本遺跡の貝塚の発現時期が周辺における遺跡の増加期や北陸地域における貝塚形成の初現期と一致する点、石器組成の変化が北陸地域における早期から前期の傾向と一致する点、近隣の三引遺跡の調査結果から、今回の分析結果が少なくとも富山湾周辺の早期後葉から前期前葉の生業活動について、ある程度の普遍性を持つ可能性を示した。

本稿では、上久津呂中屋遺跡の分析結果を基に、北陸地域における早期後葉から前期前葉にかけての生業変化について一つの見通しを示したが、今後、これが実際にどこまで妥当性、普遍性を持つのか検証してゆかねばならない。そのためには、本稿のような生業関連遺物の分析を他の遺跡でも積み重ねてゆくことが必要であるほか、周辺環境や遺跡立地、生活形態の変化

など生業の背景となったものの変化の分析も更に進めてゆく必要がある。特に本遺跡の調査データだけでは早期末以前の周辺の水域環境がどのような状態であったのか十分な検討ができなかったが、今後、周辺の遺跡調査データやボーリングデータ等を用いて更に検討することが必要である。

また、今回は、早期末における生業の画期の要因について、環境変化以外に人口の増加をあくまで仮説として提示するにとどめた。北陸地域の中でも富山湾周辺は、特に早期段階の遺構の検出率が少なく、人口動態を検討する場合、遺物の出土量、出土比率が重要になってくる。しかし、特に石器の出土量が明らかにされている事例が少なく、この時期の人口動態を検討するためには、石器組成や遺物出土量についての基礎データの収集が必要である。また、本稿や納屋内(2016)では生業の時期的変化に重点を置いて分析を行ったが、それとともに、同時期における生業の空間的な共通性と多様性についても分析を進め、北陸地域における多様性、多元性を明らかにしてゆく必要がある。

註：

- 1) 貝類の生息域の分類は、松島(1985)に基づく。
- 2) 体長推定には、相川・加藤(1938)の椎体半径からの推定式を用い、現在、富山湾で最も漁獲量の多いクロマグロを想定して推定した。

謝辞

本稿は、2023年12月に行われた近江貝塚研究会での口頭発表の一部を基にしているが、発表に際し、瀬口眞司氏、中沢道彦氏、佐野隆氏をはじめとする近江貝塚研究会の諸氏に有益な御批判、御助言をいただいた。また、執筆に当たり、平口哲夫氏(金沢医科大学名誉教授)、町田賢一氏(富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課)、畑山智史氏(船橋市立飛ノ台考古資料館)には、本文に目を通していただき、有益な助言をいただいた。末筆ながら御礼申し上げます。

付記

大学二回生の実習入門で矢野健一先生と出会って以来、早二十数年。振り返れば、迷いながらも懸命に学生を導こうとされていた赴任当初の先生の姿がつい先日のことの様に思い出されます。ゼミ生として関わった2年間を通じて、先生にはマクロ的な視点から論点を定めて、ミクロ的なデータを積み上げてそれを解明

してゆく研究手法を一貫して指導していただき、私の研究者としての基礎を形作っていただきました。また、大学卒業後も様々な面でお世話になりました。これまでの多大な学恩に心より感謝申し上げるとともに、今後の益々のご健勝を祈念したいと思います。

【参考文献】

- 相川廣次・加藤益夫 1938「魚類の年齢査定（豫報Ⅰ）」『日本水産学会誌』7-2, 日本水産学会, pp.79-88.
- 泉拓良 2023「日本列島の縄文遺跡から見た真脇遺跡」『真脇遺跡Ⅲ—史跡真脇遺跡整備事業に関わる第3～20 次発掘調査総括報告書—』能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団, pp.271-298.
- 金井慎司 2013「貝殻成長線分析」『上久津呂中屋遺跡発掘調査報告書—能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書X 第3分冊—』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書55, 公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所, pp.180-190.
- 加速器分析研究所 2013「放射性炭素年代測定」『上久津呂中屋遺跡発掘調査報告書—能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書X 第3分冊—』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書55, 公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所, pp.290-295.
- 金山哲哉編 2004「田鶴浜町三引遺跡Ⅲ（下層編）——一般国道470号線（能越自動車道）改良工事及び主要地方道水見田鶴浜線建設工事に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書8—」, 財団法人石川県埋蔵文化財センター, 458pp.
- 川崎一郎 2021「立山の賦—地球科学から—」桂書房, 347pp.
- 島田美佐子・朝田亜紀子・町田賢一編 2013「上久津呂中屋遺跡発掘調査報告書—能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書X—』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書55, 公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所, 315pp.
- 田中義文・馬場健司・松元美由紀・伊藤良水 2013「貝塚の自然科学分析」『上久津呂中屋遺跡発掘調査報告書—能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書X 第3分冊—』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書55, 公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所, pp.30-63.
- 橘泉岳二 2023「縄文早期の動物遺存体から見た生業」『縄文土器の用途解明に関する学際的研究—特定資源の利用強化と縄文土器の用途—』, 明治大学資源

- 利用史研究クラスター, pp.5-8.
- 富山県水産試験場編 2005「富山湾を科学する」, 北日本新聞社, pp.119.
- 納屋内高史・金子浩昌・金井慎司 2013「骨貝類同定」『上久津呂中屋遺跡発掘調査報告書—能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書X 第3分冊—』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書55, 公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所, pp.64-139.
- 納屋内高史 2013「北陸地域における縄文時代貝塚の動態」『立命館大学考古学論集6—和田晴吾先生定年退職記念論集—』立命館大学考古学論集刊行会, pp.31-40.
- 納屋内高史 2016「縄文時代貝塚・貝層から見た北陸地域における生業活動の変遷—上久津呂中屋遺跡で検出された貝層の検討を中心に—」『古代文化』68-2, 古代学協会, pp.166-183.
- 西田正規 1984「定住革命—新石器時代の人類史的意味」『季刊人類学』15-1, 京都大学人類学研究会, pp.3-35.
- 橋本澄夫 1985「北陸地方における縄文世界の動態に関するノート」『石川考古学研究会々誌』28, pp.1-34.
- 畑山智史 2016「北陸北東部の貝塚遺跡から見た季節活動と遺跡利用に関する一考察」『日本アジア研究』13, 埼玉大学大学院文化科学研究科, pp.1-14.
- 畑山智史 2023「縄文時代早期の貝採取季節に関する研究の現状と課題」『飛ノ台史跡公園博物館紀要』19, 船橋市立飛ノ台史跡公園博物館, pp.1-20.
- 長谷川豊 2022「縄文時代早期前・中葉における陸生哺乳動物の捕獲について：資料集成と若干の検討」『史峰』50, 新進考古学同人会, pp.31-46.
- 平口哲夫 1985「北陸における縄文時代の動物遺存体出土遺跡と水環境—上山田貝塚の立地分析を中心に—」『石川考古学研究会々誌』28, 石川考古学研究会, pp.57-78.
- 平口哲夫 1986「富山湾における縄文時代のイルカ捕獲活動」『大境』10, 富山考古学会, pp.51-68.
- 平口哲夫 2006「海獣類①クジラ・イルカ」『縄文時代の考古学 4—人と動物の関わりあい—食料資源と生業圏』, 同成社, pp.80-187.
- 麻柄一志 1984「縄文時代の石器組成と植生—いわゆる「ナラ林文化論」へのアプローチとして—」『大境』8, 富山考古学会, pp.25-44.
- 麻柄一志 2020「北陸地方」『縄文石器提要』ニュー・

- サイエンス社, pp.
- 町田賢一・杉山大晋 2006『北陸地方における貝塚のあり方』『紀要 富山考古学研究』9, 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所, pp.1-16.
- 町田賢一 2010『富山県における縄文遺跡のあり方—地形分類図から見た遺跡分布—』『紀要 富山考古学研究』12, 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所, pp.1-10.
- 町田賢一編 2014『小竹貝塚発掘調査報告書 北陸新幹線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書 60, 公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 町田賢一 2020『北陸の貝塚』『縄文時代』31, 縄文時代文化研究会, pp.103-122.
- 松島義章 1985『おはれ谷の誕生と貝類の区分』『先史時代の自然環境 縄文時代の自然史』考古学シリーズ 21, 東京美術, pp.69-88.
- 山形秀樹 2004『放射性炭素年代測定』『田鶴浜町三引遺跡Ⅲ(下層編)—一般国道 470 号線(能越自動車道)改良工事及び主要地方道氷見田鶴浜線建設工事に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 8—』, 財団法人石川県埋蔵文化財センター, pp.407-412.
- 吉川昌伸・吉川純子・能城修一・工藤雄一郎・佐々木由香・鈴木三男・網谷克彦・鯉本真友美 2016『福井県鳥浜貝塚周辺における 縄文時代草創期から前期の植生史と植物利用』『植生史研究』24-2, 日本植生史学会, pp.69-82.
- 渡辺誠編 1975『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』, 舞鶴市教育委員会, 327pp.

北部九州における縄文時代前期の遺跡の利用状況について一考察

小川香菜恵

要 約

九州における縄文前期の連続する3つの土器型式(轟B式・西唐津式・曾畑式)が出土する遺跡を、出土状況別に4つのパターンに分類し、ひとつの遺跡における土器型式の変遷を評価することで、土器の伝播や遺跡の利用状況について考察を行った。今回の調査では佐賀県・長崎県・福岡県・大分県の4県を対象としたが、各県で分類結果に微妙な違いが見られた。西唐津式は良好な出土事例に恵まれず、編年上の取り扱いについて議論があるが、本稿では出土している事実を重きを置いて出土状況を捉えた結果、西唐津式を出土する遺跡は4県とも3型式全てを出土するものが多いことがわかった。また、そのような3型式とも出土する遺跡は基本的に分布に偏りがなく、各地に存在することから、3型式を出土する遺跡が拠点となって土器が伝播していったのではないかと推測した。今回の出土パターンの分析には、細分型式の時間幅を考慮しておらず、土器型式が編年上で共存する可能性もあることから課題はあるが、遺跡の利用状況やその性格について新しい視点で臨むものである。

キーワード: 縄文前期・九州・轟B式・西唐津式・曾畑式

はじめに

九州地方の縄文前期の土器として轟B式と曾畑式が時期的に連続して存在する。この2型式には文様に大きな隔りがあり、両者の中間的な特徴を持つ西唐津式が介在することで、型式学的変遷をスムーズに捉えることができるようになっている。しかしながら、西唐津式はこれまでに一括資料や層位的に分類できるような良好な出土事例がなく、研究者によっては轟B式、曾畑式と同時期に共存するとの意見もあり、編年上の位置づけについては見解が分かれている。

本稿では、西唐津式は一時期を形成していたかどうか、ということにはこだわらず、出土している事実を重きを置いた。後に述べるが、西唐津式は単独で出土した遺跡が轟B式や曾畑式に比べて極端に少なく、出土量を見てもその場所において一時期を形成したとは判断しがたい。西唐津式の出土事例のほとんどが、轟B式・曾畑式のどちらか一方もしくはその両方とともに出土している。このことが時期的な段階設定を難しくしている要因のひとつであるが、一時期を形成してはいるものの、類型化可能な文様等の特徴を共通して有している土器がわずかながら各地に分布していることについて、その出土状況を考察することは土器の伝播や遺跡の利用状況を探る上で有用であると考えられる。土器編年研究とは違った視点で当時の様相について試験的な検討を行ってみたい。

1. 遺跡の分類

長崎県・佐賀県・福岡県・大分県を調査範囲として、出土する土器型式の組み合わせ別に遺跡を分類した。調査対象遺跡は九州縄文研究会2013・2014をもとに抽出した(表6)。表6中の「?」は、出土が確認できるものの、出土量が少なかったり、細分可能な良好な資料に恵まれなかった例を表わしている。「?」については参考事例として原文のまま掲載し、表1~5では[]内にその数値(遺跡数)を記した。また、本文中に記した遺跡数は特段の言及が無いものは「○」の数のみをカウントしている。なお、表1・3~5中で、2型式以上出土している遺跡をカウントする際、どれかに「?」が含まれる場合、「?」として扱った。

3型式のうち1型式のみを出土する単独出土の遺跡、連続する2型式(轟B式と西唐津式、もしくは、西唐津式と曾畑式)を出土する遺跡、連続しない2型式(轟B式と曾畑式)を出土する遺跡、3型式とも出土する遺跡の4パターンに分けた。単独出土が一時期の利用であるのに対し、複数型式が出土するということは、その間遺跡が継続して利用されたととらえることができる。また西唐津式や曾畑式の単独遺跡とは、轟B式期以降新しく形成された遺跡として、居住地の変更や新規開拓などが想定できる。

2. 各地の様相

今回の調査範囲では、西唐津式の単独遺跡は福岡県で1カ所、大分県で2カ所確認できたが、西唐津式を出土する遺跡数に占める割合は低い。すなわち、西唐津式を出土する遺跡のほとんどが前後の型式のいずれか一方もしくは両方を出土していることになる。中でも、3型式とも出土する遺跡の割合が県内で高くなっている（表4）。ちなみに、単独遺跡における出土量はわずかであり、藤B式や曾畑式のそれと比較しても一定期間継続していたとは考えにくい。また、西唐津式が出土する遺跡が集中するエリアというのは、後述する佐賀県の一部を除いて特に該当はなかった。

長崎県では、前期の遺跡が60カ所あるのに対し、藤B式が出土する遺跡が37カ所、西唐津式が出土する遺跡が18カ所、曾畑式が出土する遺跡が59カ所を数え、時期が下るにつれ遺跡数が増えていることがわかる（表2）。藤B式・西唐津式・曾畑式の3型式が全て出土する遺跡が16カ所あり、4県のなかでも多い。藤B式を出土する遺跡のほとんどから曾畑式が出土しており、藤B式の単独遺跡が少ない（表3）。反対に、曾畑式は単独遺跡の割合が高く、「？」の遺跡を加えると半数を超える。曾畑式期になって新しく遺跡が形成される傾向にあったことが推察できる（表5）。

佐賀県では、前期の遺跡数が24カ所となっており他県と比べても少ないが、長崎県と同様に藤B式と曾畑式では後者を出土する遺跡が増えている（表2）。藤B式の単独遺跡がなく、前期遺跡の多くが複数時期を跨いで継続利用されている。西唐津式を出土する遺跡は12カ所あり、県内の前期遺跡数に対する割合は他県に比べて高くなっている（表2）。

先に述べたように、佐賀県内では西唐津式を含む3型式が全て出土する遺跡の立地に特徴があり、西唐津

式の標式遺跡である西唐津海底遺跡の所在する唐津湾に面した一帯と、佐賀市富士町にある嘉瀬川ダム建設に伴う調査で発見された山間部の一帯に集中する。地形的に限定されたエリアに出土例がまとまっている点は注目すべきである。

福岡県では、藤B式と曾畑式の出土遺跡数が同程度であり、長崎・佐賀とは通期の状況が違って増減はほぼないといえる。しかし、藤B式、曾畑式ともに単独出土の割合が高く、継続利用を上回るのが特徴である（表3・5）。このことについて、県内の型式別分布状況をみると、県東北部の筑豊地域での西唐津式、曾畑式の出土例が少なく、各型式の分布に偏りがあることが見て取れ、前期間中の広範囲にわたる居住地の移動が想起される。また、藤B式、曾畑式の遺跡が一時期の利用を示す単独出土であるのに対し、西唐津式が出土するのは3型式全てが出土する長期継続利用が想定できる遺跡に多い点に違いが見られた（表4）。

大分県では、藤B式が43カ所、西唐津式が12カ所、曾畑式が23カ所から出土しており、藤B式から曾畑式にかけて遺跡数が少なくなる傾向が見られる。藤B式の単独出土の割合が高いが、曾畑式にもそれがわずかに見られることから（表3・5）、単純にもともとあった遺跡が無くなっていったのではなく、時期が下るにつれ遺跡数全体が縮小傾向にありながらも曾畑式期においても新しい場所に遺跡が形成されたことがわかる。他県と同様に、西唐津式の出土遺跡数は少なく、3型式全てが出土するパターンが多いことは共通する。消えていく遺跡がある中で、一部だけが継続的に利用されていたといえる。

表1 各県における前期遺跡の出土パターン別の状況

	単独	藤Bと西唐津	藤Bと西唐津・ 西唐津と曾畑	3型式全て	計
佐賀県	10 [1]	5 [1]	3 [1]	6 [3]	24 [6]
	42%	21%	13%	25%	100%
長崎県	30 [25]	12 [6]	2 [0]	16 [1]	60 [32]
	50%	20%	3%	27%	100%
福岡県	76 [4]	22 [2]	3 [0]	12 [2]	113 [8]
	67%	19%	3%	11%	100%
大分県	32 [6]	9 [0]	3 [0]	7 [1]	51 [7]
	63%	18%	6%	14%	100%
計	148 [36]	48 [9]	11 [1]	41 [7]	248 [53]
	60%	19%	4%	17%	100%

* []内は「？」の数。割合は「○」の数で算出した

表2 各県における前期遺跡総数に対する
土器型式別の遺跡数の割合

	前期遺跡数	藤B	西唐津	曾畑
佐賀県	24 [6]	16 [1]	12 [1]	24 [4]
		67%	50%	100%
長崎県	60 [32]	37 [0]	18 [1]	59 [31]
		62%	30%	98%
福岡県	113 [8]	78 [1]	16 [3]	73 [5]
		69%	14%	65%
大分県	51 [7]	43 [5]	12 [1]	23 [2]
		84%	24%	45%

* []内は「？」の数。割合は「○」の数で算出した

3. 出土パターンからの一考察

西唐津式を出土する遺跡の状況に注目してみると、
 轟 B 式と西唐津式ないし西唐津式と曾畑式の 2 型式
 を出土する遺跡よりも 3 型式全てが出土する遺跡が割
 合として高く、それが 4 県に共通している。それぞれの
 遺跡の立地をみても、3 型式全てが揃う遺跡という

表 3 轟 B 式土器を出土する遺跡

	単独	轟 B と曾畑	轟 B と西唐津	3 型式全て	計
佐賀県	0[0]	5[1]	2[0]	6[3]	13[4]
	0%	38%	15%	46%	100%
長崎県	2[0]	12[6]	0[0]	16[1]	30[7]
	7%	40%	0%	53%	100%
福岡県	38[0]	22[2]	3[0]	12[2]	75[4]
	51%	29%	4%	16%	100%
大分県	23[5]	9[0]	3[0]	7[1]	42[6]
	55%	21%	7%	17%	100%
計	63[5]	48[9]	8[0]	41[7]	160[21]
	39%	30%	5%	26%	100%

* [] 内は「?」の数、割合は「[]」の数で算出した。

表 4 西唐津式土器を出土する遺跡

	単独	轟 B と西唐津 西唐津と曾畑	3 型式全て	計
佐賀県	0[0]	3[1]	6[3]	9[4]
	0%	33%	67%	100%
長崎県	0[0]	2[0]	16[1]	18[1]
	0%	11%	89%	100%
福岡県	1[1]	3[0]	12[2]	16[3]
	6%	19%	75%	100%
大分県	2[0]	3[0]	7[1]	12[1]
	17%	25%	58%	100%
計	3[1]	11[1]	41[7]	55[9]
	5%	20%	75%	100%

* [] 内は「?」の数、割合は「[]」の数で算出した。

表 5 曾畑式土器を出土する遺跡

	単独	轟 B と曾畑	西唐津と曾畑	3 型式全て	計
佐賀県	10[1]	5[1]	1[1]	6[3]	22[6]
	45%	23%	5%	27%	100%
長崎県	28[25]	12[6]	2[0]	16[1]	58[32]
	48%	21%	3%	28%	100%
福岡県	37[3]	22[2]	0[0]	12[2]	71[7]
	52%	31%	0%	17%	100%
大分県	7[1]	9[0]	0[0]	7[1]	23[2]
	30%	39%	0%	30%	100%
計	82[30]	48[9]	3[1]	41[7]	174[47]
	47%	28%	2%	24%	100%

* [] 内は「?」の数、割合は「[]」の数で算出した。

のは各地に存在しており、4 県下では西唐津式が狭い
 地域限定で分布した様子というのは認められない。分
 布に偏りがみられないということは、押し並べてどの
 遺跡にも 3 型式全てが流入してはおかしくないのだ
 が、実際はそうはなっていない。この点に 3 型式全て
 が出土する遺跡の、その他の遺跡に対する優位性が感
 じられる。新形式の発源地域に近い遺跡から満遍な
 く土器が拡がっていったのではなく、各地にある遺跡
 のまとまったエリアに、まず小規模に西唐津式が流入
 して来たが、その後エリア内の他の遺跡には十分に枝
 分かれしていかず、絶えたあるいは浸透する前に次代
 である曾畑式期を迎えてしまったというような状況が
 推察される。しかし佐賀県で見られた 3 型式が出土す
 る遺跡の集合地では、限られた地形が作用してエリア
 内で網羅的に西唐津式が共有されたものと思われる。
 このような事例を除いて、新しい土器の第 1 の流入先
 として 3 型式が出土する遺跡が特別な役割（性格）を
 有していたように思われる。

長崎と佐賀では、曾畑式期になり遺跡数が増える状
 況があると述べたが、遺跡の出土パターンをみると轟
 B 式の単独遺跡が双方とも少ないのに対し、曾畑式
 においては長崎で単独遺跡が半数近くを占め、一方で佐
 賀では単独遺跡もあるが、轟 B 式や西唐津式期から
 曾畑式期まで継続する遺跡の割合が多いことがわかる。
 長崎では曾畑式の細分や断定が難しい「?」の遺跡が
 単独遺跡に多く、これらが単独遺跡としてカウントさ
 れるならば、県内での単独遺跡の優位性が高まり、佐
 賀とは異なる様相が現れる。すなわち、長崎では曾畑
 式期になって新しい土地にも積極的に遺跡が築かれた
 のに対し、佐賀では以前と変わらない場所を利用し続
 けることが多かったという居住スタイルの差があった
 ことが推察できる。長崎県では深堀遺跡の調査で轟 B
 式以前に海進・海退が起こり、その影響で陸化した土
 地に遺跡利用が始まり、その後風成砂丘が形成され、
 西唐津式・曾畑式期に人々の生活が営まれていったこ
 とが明らかにされている。すなわち、西唐津式期以降、
 安定した土地を確保した人々が新天地での生活を拓い
 ていった様子は、今回の調査結果と矛盾しない。

おわりに

遺跡の性格や役割を考える上で、明確な遺構が残っ
 ておらず、土器以外の特別な遺物もない場合、それを
 特定するのは難易度が高い。そのような遺跡は土器を
 もって大まかな形成の時期を判定して、同時代の遺跡
 数にカウントされ分布地図上にポイントを打たれる。

今回の出土パターン別の分類では、出土土器型式の連続性・非連続性に焦点を当て、新しい視点で遺跡を評価した。出土パターンの分類には細分型式の時間幅を考慮しておらず、型式が共存する可能性もあることから時間軸の面で課題はある。一方で、3型式がほぼ変わらない時期に存在していたとして、同時期の同地域内で複数の型式の土器が出土する遺跡とそうでない遺跡が共存することになるが、それはそれで興味深い差が発現することになり、おもしろい。今後、各型式とも良好な出土事例に恵まれれば偏年は発展し、篠のかかった当時の暮らしのイメージはよりクリアになる。それまでは既存の発掘成果をさまざまな角度で捉え直す試みを続けたい。

参考文献

- 岩永勇亮 2015 「東九州の西唐津式土器・曾畑式土器—宮崎県域における様相とその伝播に関する一考察—」『本田道輝先生退職記念論文集』、本田道輝先生退職記念事業会
- 九州縄文研究会編 2013 『曾畑式土器とその前後を考える』（第23回九州縄文研究会沖縄大会発表要旨・資料集）
- 九州縄文研究会編 2014 『九州における縄文時代早期末～前期前葉の土器様相』（第24回九州縄文研究会大分大会発表要旨・資料集）
- 田中聡一 2018 「日韓縄文・新石器時代土器交流の一例相—曾畑式土器の成立と櫛目文土器との関係」『海峽を通じた文化交流』（第13回九州考古学会・嶺南考古学会合同考古学大会資料集）、九州考古学会
- 長崎市教育委員会 1984 『長崎市立深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 廣瀬雅一 2013 「西唐津式土器再論」『佐賀県立名護屋城博物館研究紀要』第19集、佐賀県立名護屋城博物館

表6 調査対象遺跡一覧（九州考古学会 2013・2014 をもとに作成）

遺跡名	所在地	島B式	西唐津式	曾畑式
越前尾崎遺跡	対馬市	○	○	○
夫地石遺跡	対馬市			○
松崎遺跡	豊後市	○	○	○
名切遺跡	豊後市	○		○
藤崎海岸遺跡	豊後市			○
長崎島F遺跡	佐世保市			?
宮ノ首遺跡	佐世保市			○
柳遺跡	小値賀町			?
矢野海岸遺跡	小値賀町			○
船崎遺跡	小値賀町			○
野首遺跡	小値賀町	○	○	○
西ノ股遺跡	新上五島町	○		○
立石遺跡	新上五島町	○		○
頭ヶ島島泊遺跡	新上五島町	○		○
頭ヶ島白浜遺跡	新上五島町	○	○	○
池澤遺跡	五島市			?
宇多尾遺跡	五島市			?
堀江堂崎遺跡	五島市	○		○
江原貝塚	五島市			○
白浜貝塚	五島市			?
中島遺跡	五島市	○	○	○
宮下貝塚	五島市	○	?	○
赤島遺跡	五島市	○		?
大板部洞穴	五島市	○		
泊崎遺跡	五島市			?
供養川遺跡	平戸市	○	○	○
千重ヶ浜遺跡	平戸市	○	○	○
沖田遺跡	平戸市			○
沖ノ島遺跡	平戸市			○
宮ノ浦遺跡	平戸市			○
つくめのはな遺跡	平戸市	○		?
久次沢遺跡	平戸市	○		?
船神社遺跡	松浦市	○	○	○
榎田遺跡	松浦市			○
松ノ木遺跡	松浦市			?
湯の谷遺跡	松浦市			?
秋丸岩遺跡	松浦市			?
廣島海岸遺跡	松浦市			○
下り松遺跡	佐世保市			○
御堂池遺跡	佐世保市			?
目黒ヶ原D遺跡	佐世保市	○		?
樋川内洞穴	佐世保市	○		?
若谷口第1岩棚	佐世保市	○		○
飯田洞穴	佐世保市	○		○
大志観岩棚	佐世保市			○
平川原遺跡	佐世保市			○
越下洞穴	佐世保市			○
上原床岩棚	佐世保市			○
牟田堤遺跡	佐世保市			?
大門洞穴	佐世保市			○
宮の本遺跡	佐世保市	○		○
下本山岩棚	佐世保市	○		○
門前遺跡	佐世保市	○	○	○
小野F遺跡	佐世保市			○
飯塚子島遺跡	佐世保市			?
天神洞穴	佐世保市	○		○
肥前海岸遺跡	佐世保市	○		○
飯高遺跡	西海市			?
天久保遺跡	西海市			?
寺島遺跡	西海市			○
響滝清水遺跡	西海市	○	○	○
久留里遺跡	時津町		○	○
東上遺跡	長崎市			?
式見C遺跡	長崎市			○

遺跡名	所在地	鳥B式	西暦式	曾根式
手熊耳環C地点	長崎市			○
深堀遺跡	長崎市	○	○	○
辰ノ口遺跡	長崎市		?	
島石遺跡	長崎市		○	
葛原川遺跡	長崎市		○	
松浦遺跡	長崎市	○		
宮田A遺跡	東彼杵町			○
鎌打境遺跡	東彼杵町		?	
野島遺跡	大村市		○	
坂口遺跡	大村市		○	
大寺武雄遺跡	大村市		?	
下崎原古墳遺跡	諫早市		○	
貝津磯島B遺跡	諫早市		○	
浜田遺跡	諫早市		○	
西宮蟹貝塚	諫早市	○	○	○
小野多里遺跡	諫早市	○	○	○
小野堀口遺跡	諫早市		?	
小野寺方遺跡	諫早市		○	○
伊木方遺跡	諫早市	○	○	○
目島遺跡	諫早市		?	
龜崎遺跡	諫早市	○	○	○
我遺跡	雲仙市		○	○
百花台D遺跡	雲仙市	○	○	○
魚洗川D遺跡	雲仙市		?	
藤沢池D遺跡	雲仙市		?	
上ヶ池遺跡	雲仙市		?	
三ヶ下町遺跡	島原市	○	○	?
有室宮崎遺跡	南島原市		?	

佐賀県

遺跡名	所在地	鳥B式	西暦式	曾根式
長ノ原遺跡	鳥栖市	○		○
岸田遺跡	鳥栖市	○	○	○
牛原前田遺跡	鳥栖市			○
戦場古墳群	吉野ヶ里町		○	?
香田遺跡	みやき町		○	
坂北方遺跡	神埼市	○	○	○
船塚遺跡	神埼市		○	○
船塚A遺跡	神埼市		○	○
大門遺跡	佐賀市			○
金立岡田遺跡	佐賀市	○	○	○
川久保1区遺跡	佐賀市		○	○
六本黒木遺跡	佐賀市	○		○
鈴無遺跡	佐賀市			○
大久保三本松	佐賀市	?		○
小ヶ倉遺跡	佐賀市	○	○	○
西畑遺跡	佐賀市	○	○	○
東畑遺跡	佐賀市	○	○	○
九郎遺跡	佐賀市	○	○	○
龜ノ遺跡	小城市	○		○
千束遺跡	唐津市			○
伊岐佐中原遺跡	唐津市		○	○
高畑遺跡	唐津市	○	○	○
中尾二ツ枝	唐津市	○		○
曾本川原谷	唐津市	○	?	○
西唐津海蔵遺跡	唐津市	○	○	○
赤松海岸遺跡	唐津市	○	○	?
白蛇山古墳遺跡	伊万里市		○	○
金剛島遺跡	伊万里市		○	○
宮ノ前北遺跡	伊万里市	○	○	?
磯助平洞窟	鹿島市	○	○	?

福岡県

遺跡名	所在地	鳥B式	西暦式	曾根式
天神山貝塚	糸島市	○	○	○
今山遺跡	福岡市	○	○	○
西新町遺跡	福岡市	○		?
湯納遺跡	福岡市	○		
仏石古墳群	福岡市			○
田村遺跡	福岡市	○	○	
四箇古川遺跡	福岡市			○
四箇遺跡	福岡市	○	○	○
内野遺跡	福岡市	○		
大坪南遺跡	福岡市			○
中山遺跡	福岡市	○	○	○
臨山A遺跡	福岡市	○	?	?
粟尾B遺跡	福岡市			○
野中遺跡	福岡市	○		○
性原A遺跡	福岡市	○	○	○
松原遺跡	福岡市	○		
梅林遺跡	福岡市			?
松原K遺跡	福岡市		?	
中村町遺跡	福岡市	○	○	○
大瀬池遺跡	那珂川市		○	
中瀬・ヒナタ遺跡	那珂川市			○
深原遺跡	那珂川市			○
観音山古墳群	那珂川市			○
門田遺跡	春日市			○
松木遺跡	那珂川市			○
船田遺跡	春日市	○		○
入道町遺跡	那珂川市			○
四郎五郎池遺跡	那珂川市			○
栗原の森遺跡	大野城市	?		○
原口遺跡	太宰府市			○
日辰遺跡	太宰府市			○
カヤノ遺跡	太宰府市			○
水城遺跡	太宰府市			?
宮ノ本遺跡	太宰府市			○
原遺跡	太宰府市	○		
宝満山遺跡	太宰府市	○		○
岡田地区遺跡群	筑紫野市			○
原遺跡	筑紫野市	○		
原田榎本ノ一遺跡	筑紫野市			○
原田辻遺跡	筑紫野市	○		
城ノ原遺跡	筑紫野市	○		
大島遺跡	筑紫野市			○
金山遺跡	筑前町			○
塔ノ上遺跡	朝倉市			○
結原野田遺跡	朝倉市			○
下野外堀遺跡	朝倉市	○		
金巻遺跡	朝倉市			○
外之原遺跡	朝倉市	○		
神倉遺跡	朝倉市			○
山ノ神遺跡	朝倉市	○		○
上瀬川遺跡	朝倉市	○	○	○
橋田遺跡	朝倉市			○
天瀬遺跡	朝倉市	○		○
干潟向畦ヶ池遺跡	小郡市			○
横隈山遺跡	小郡市			○
津古東宮原遺跡	小郡市			○
津古脇田遺跡	小郡市	○		
水洗遺跡	久留米市	○	○	○
筑後国府跡	久留米市			○
市ノ上北原遺跡	久留米市			○
筑後国分寺跡	久留米市			○
横道遺跡	久留米市			○

遺跡名	所在地	竪石式	西南津式	管堀式
持田遺跡	久留米市	○		
野口遺跡	久留米市		○	○
安国寺遺跡	久留米市	○	○	
木塚遺跡	久留米市	○		○
竹童遺跡	うきは市	○		○
大塚遺跡	うきは市			○
法華寺遺跡	うきは市	○		
鳥越遺跡	うきは市			○
古畑遺跡	うきは市			
下北島久清遺跡	筑後市	○		○
長崎山田遺跡	筑後市			
古島塚遺跡	筑後市			○
二川貝塚	みやま市			○
大塚遺跡	みやま市			○
毛無貝塚	大牟田市		?	
上ノ高塚遺跡	大牟田市			○
橋本貝塚	北九州市	○	○	○
黒崎貝塚	北九州市		○	○
黒崎城跡	北九州市			○
穴生古塚敷遺跡	北九州市	○		
太夫丸遺跡	北九州市	○		○
カキ遺跡	北九州市			
菊水町遺跡	北九州市	○		
新池坂本遺跡	北九州市	○		
上機代遺跡	北九州市	○		
丸ノ内遺跡	北九州市	○		
長野屋敷遺跡	北九州市			
中賀ミカシ遺跡	北九州市	○		
貫川遺跡	北九州市			
上賀根遺跡	北九州市	○	○	
約瀬南遺跡	北九州市	○		
約瀬原遺跡	北九州市	○		
平尾古御花壇遺跡	北九州市	○		
さつき松原遺跡	宗像市	○		○
伊ノ島社前所前遺跡	宗像市			○
山鹿貝塚	芦屋町	○		
元松原遺跡	岡垣町	○	○	○
新延貝塚	鞍手町	○		
日出橋遺跡	豊後市	○	?	○
中泉遺跡	豊後市	○		○
通賢川河床遺跡（入道ヶ池）	小竹町	○		
通賢川河床遺跡（竹の下）	小竹町	○		○
目尾遺跡	飯塚市	○		
阿蘇・市遺跡	飯塚市	○		○
ヒイ田遺跡	飯塚市	○		
向田遺跡	飯塚市	○	○	
内野地区遺跡	飯塚市	○		
船田遺跡	飯塚市			○
市津河床遺跡	福岡市	○		
観音寺遺跡	添田町	○		
後遺跡	添田町			
ズイベガ原遺跡	添田町			○
合田遺跡	赤村	○		
上伊良原遺跡	みやこ町	○		
下伊良原遺跡	みやこ町			
下伊良原田ノ谷遺跡	みやこ町			
松丸D遺跡	飯上町	○		
西八田平原遺跡	飯上町	○		
小原岩陰遺跡	飯上町	○		○

大分県

遺跡名	所在地	竪石式	西南津式	管堀式
給男穴	中津市	○	○	○
岩ノ下岩陰遺跡	豊後高田市	○	○	○
羽田遺跡	国東市	○	○	
ウラミノ遺跡	国東市	○		
原遺跡	国東市	○		
成仏岩陰遺跡	国東市	○		
川原田岩陰遺跡	杵築市	○	○	
エゴノチ遺跡	日出町	○		○
北原遺跡	由布市	○	○	
かわじ池遺跡	由布市	○	○	○
山下池遺跡	由布市	○		
横尾貝塚	大分市	○		○
九池遺跡	大分市	?		
東大遺跡	大分市	○		
大分川河川敷遺跡	大分市	○		
町妻遺跡	大分市	○		
黒山遺跡	大分市	○		○
久木小野遺跡	臼杵市	○		
藤原山遺跡	日田市	○		
中尾原遺跡	日田市	○		
大肥古竹遺跡	日田市	○		
手嶋遺跡	日田市	○		○
大肥下河内遺跡	日田市	○	○	
大塚遺跡	日田市			○
古塚敷遺跡	日田市	○		○
平塚遺跡	日田市	○		○
西遺跡	日田市	○		○
島ヶ塚遺跡	日田市	○		?
大約台遺跡	日田市	○		
平塚遺跡	日田市	?		
山田遺跡	日田市	○		
手作台遺跡	日田市	○		
中西遺跡	玖珠町	?		
野矢原遺跡	九重町	?		
二日市別穴	九重町	○		
下雲生B遺跡	竹田市		○	
石井入口遺跡	竹田市	○		○
内河野遺跡	竹田市	○		
三反田遺跡	竹田市	○		○
竜宮別穴	竹田市	○		○
山ノ神谷遺跡	竹田市	○		
右京遺跡	竹田市	○		
野鹿別穴	竹田市	○	○	○
横野遺跡	竹田市			○
小塚遺跡	竹田市			○
千人塚遺跡	豊後大野市	○	○	○
上塚遺跡	豊後大野市	○		
井野遺跡	豊後大野市	○		
宮地前遺跡	豊後大野市	○		○
横井遺跡	豊後大野市	?		
小牧A遺跡	豊後大野市			
大恩寺稲荷岩陰遺跡	豊後大野市	○	?	?
シゲツキ遺跡	豊後大野市		○	
池在遺跡	豊後大野市			○
森の木遺跡	佐伯市	○		
神ノ原遺跡	佐伯市			○
横塚遺跡	佐伯市	○		○
上田原遺跡	佐伯市	○		

研究論文

中尾田Ⅲ類の細分

— 春日式土器から太型凹線文土器への変化の方向性 —

山中俊樹

要 旨

中尾田Ⅲ類土器にはその全体像に不明瞭な部分が多かった。しかしながら近年、木佐木原遺跡をはじめとした鹿児島県始良市域においてその出土事例が目立つ状況にあり、当該期の土器編年について、再検討を行える状況となってきた。本稿では、木佐木原遺跡発掘調査報告書での分類と始良地域での遺跡の引き算をもとに、春日式土器南宮島段階から並木式にかけての細分・変遷案提唱を行なった。

キーワード：中尾田Ⅲ類 細分と編年 縄文中期末葉

はじめに

「中尾田Ⅲ類土器」。末尾に「式」と付けられていない型式名が示すように、中尾田Ⅲ類土器（以下「中尾田Ⅲ類」とする）をとりまく九州中期後葉から末葉にかけての土器編年研究は混沌とした状況が続いている。それはその検討資料の少なさ、地域性の煩雑さによるものであり、特に春日式と並木・阿高式土器の型式転換期をつなぐとされる、中尾田Ⅲ類期においてはそれが顕著である。しかし、近年の発掘調査成果により、春日式後半段階～阿高式期にかけての資料は南部九州で大幅に増加している状況にある。

本稿では、特に近年中尾田Ⅲ類が多くに出土している鹿児島県始良市をはじめとして、中尾田Ⅲ類土器の分類を行う。また、その分類案と前後の土器型式資料との比較・検討を行うことで、中尾田Ⅲ類における変

化の方向性について、予察を行う。

1. 中尾田Ⅲ類土器を巡る研究史

(1) 中尾田Ⅲ類の設定

中尾田Ⅲ類土器は鹿児島県霧島市中尾田遺跡発掘調査報告（鹿児島県教育委員会 1981）においてアカホヤ上層出土Ⅲ類として報告されたものを指す土器型式概念であり、徳永貞昭氏（徳永 1994）によって中期末様の土器型式として提唱された土器型式である（図 1）。これは 1990 年前後に生じた九州地方における縄文中期土器編年パラダイム¹⁾の転換の流れの中で設定されたものである。そのため、中尾田Ⅲ類は提唱当時から、太型凹線文様式の初期段階様式である、並木式土器の祖型式を意識され、設定されていた（徳永 1994、三輪 1996）。

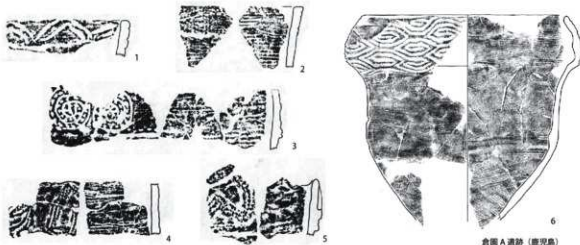


図 1 中尾田遺跡出土Ⅲ類資料 (1~5, S=1/6) と大平式土器 (6, S=1/8)

(2) 中尾田Ⅲ類の型式学的概念

中尾田Ⅲ類の型式学的概念としては、口縁部を折り返すか、粘土紐を貼り付けて肥厚させ、その部分を文様帯とするもの（眞邊 2010、26 頁）という認識で概ね統一されている。

ただ、鋸歯文を主文様とする類似性などから九州東南部を中心に分布する大平式（図 1-6）との類似性が指摘されており、多少の混同も見受けられた。だが、眞邊氏（眞邊 2006）や徳永氏（徳永 2010）、相美氏（相美 2017）によって、その異同について詳細に論じられている。特に相美氏はその違いについて過去の研究史を概観した上で、口縁部下端の接合痕の有無や文様帯幅の違い、文様要素における突帯の有無などを挙げている。以上の観点は実見等により分別可能であるため、両者は型式学的な違いがあるとしている。

(3) 中尾田Ⅲ類の編年の位置付け

前述のとおり、中尾田Ⅲ類は、並木式の粗型式として、中期末葉に設定された土器型式である。この前段階には、春日式土器南宮島段階（春日式土器の最後段階であり 4 段階目）が位置付けられている。つまり、春日式→中尾田Ⅲ類→並木式という型式的順序が想定され（東 1993、矢野 1993、徳永 1994、三輪 1996）、近年まで研究が進められてきた。

しかしながら、中尾田Ⅲ類を取り巻く前後の型式との関係については、単純な前後関係を疑問視する論もある。

例えば、富井氏（富井 2001）は並木式土器を主題とした論考で中尾田Ⅲ類土器について触れており、安直な前後関係を疑問視する立場をとっている。まず、中尾田Ⅲ類の前段階とされている春日式土器の後半段階、轟木ヶ迫段階と南宮島段階については出土状況等の観点から、時期差ではなく器形的な組成差である可能性

があることを示唆している。また、並木式土器については、佐賀県鳥栖市平原遺跡において、九州北部地域に多く見られる並木式の古相と中尾田Ⅲ類が共存関係的に出土していることを根拠として、中尾田Ⅲ類土器が並木式土器の古相と時期を同じくして存在していたと論じている。ただ、南部九州に多く見られる並木式新相については、中尾田Ⅲ類と時期的な隔りがあると述べている。

また、当初は並木式の粗型式土器として中尾田Ⅲ類の設定を行った徳永氏も、九州縄文研究会の要旨集において並木式土器の研究史を総括する上で、粗型式としていた中尾田Ⅲ類の型式観について触れている。富井氏や並木式古相の分布が南九州に偏るとする水ノ江氏（水ノ江 1999）の論考を踏まえ、中尾田Ⅲ類と並木式土器古相との関係については、その系譜の前後関係ではなく、共時性を認めるものであると指摘している。その上で、並木式の出自については九州北部を中心に一から探索する必要があるとした。（徳永 2010）。

また、大平式土器について詳細な分析を行った相美氏（相美 2017）も中尾田Ⅲ類土器について触れており、中尾田Ⅲ類と並木式の古相は併行関係にあったとしている。相美氏は中尾田Ⅲ類が主体的に出土する鹿児島県南さつま市所在の上焼田 A 遺跡（金峰町教育委員会 2003）を用いてその位置付けを検討しており、主体となる中尾田Ⅲ類とともに滑石を多量に含む並木式古相もわずかに出土していることから相美氏はそれを西九州からの搬入品と捉え、中尾田Ⅲ類土器と並木式土器古相が併行関係にあったとする。なお、中尾田Ⅲ類と春日式土器との関係については前後関係であるとしている（図 2）。

以上のように、中尾田Ⅲ類の編年上の位置付けについては、設定当初は春日式土器と並木式土器のヒアタスを埋めるものと考えられていたが、昨今の資料増加

鹿児島県	南九州東半域	南九州西半域	西九州	中九州	北九州	東九州	瀬戸内地域			
瀬戸内下層式	春日式 北半域・南谷タイプ		船元式							
			春日式 南谷タイプ							
	大平式 古段階	春日式 轟木ヶ迫段階		(+)	春日式 轟木ヶ迫段階	+	船元式 並木目・直式			
		春日式 南宮島段階		(+)	春日式 南宮島段階					
		中尾田Ⅲ類		(+)	中尾田Ⅲ類					
	大平式 中段階				並木式 古段階		矢野美田式 古段階			
					並木式 新段階					
	大平式新段階									
		宮之迫式		阿高式						

※瀬戸内地域は矢野氏の編年観に拠った

図 2 相美氏（2017）の編年試案

やそれに伴う議論の深化により、春日式後半段階や並木式と前後関係もしくは共時的である可能性も示唆されるようになってきたのが現状である。

(4) 中尾田Ⅲ類の分類・細分案

春日式から並木式にどのようにして変容したのか、つまり並木式がどのようにして成立したのかを探るためには、その祖型もしくは古段階に關係の近いとされる中尾田Ⅲ類の分析が重要になってくる。これまでどのような分類・編年案が提示されたのか、少し振り返ってみよう。

中尾田Ⅲ類の分類は、三輪氏による凹線文土器から縁帯文土器にかけての系統の流れを検討した論文において示された(三輪 1996)のが初出である。そこで三輪氏は、中尾田Ⅲ類を以下の3つに分類した。

①屈曲・肥厚する口縁部に二枚貝施文を施す土器(中尾田Ⅲ a-1 類)(図 1-1・2)、②口縁部に沈線文・押引文を施す土器(中尾田Ⅲ a-2 類、Ⅲ a-3 類)(図 1-3・4)、③口縁部に突帯を貼付文様の描き、その上に二枚貝刺突文を施す土器(Ⅲ b 類)(図 1-5)、以上3形態である。そして、①が阿高式土器の交互凹点文、②が大平式土器に、③が並木式土器にそれぞれつながるとしている。うち、②については大平式土器そのものであり、また①の中でも、口縁部肥厚帯下端に凹点文を施すものは、凹点文のないものよりも新出の土器であると位置づけている。

他に、眞邊氏も中尾田Ⅲ類の分類を行っている(眞邊 2006・2010)。氏は中尾田Ⅲ類を施文具の違いから分類しており、施文具には甕状工具と貝殻による2通りの施文がみられると指摘している(眞邊 2006)。また、その後発表した論考においては、文様の形態から①二枚貝刺突によって並行線文や鋸歯文を描くもの、②甕状工具によって連続刺突文・渦文や鋸歯文・曲線文などの沈線文を描くもの、③口唇部にさらに粘土紐を鋸歯状に貼り付けるもの、の3タイプに分類しているが、これらの分類をもとにした春日式から並木式までの変遷観については言及していない。

そのような中、近年発掘調査がなされた鹿児島県始良市木佐木原遺跡の報告書において中尾田Ⅲ類の分類が行われている。それについては、後で詳述する。

(5) 中尾田Ⅲ類の分布について

中尾田Ⅲ類土器は、南九州を中心とした分布が認められ、中でも鹿児島県西半に出土分布が集中している(図 3)。宮崎平野、日南海岸沿岸、志布志湾周辺

ではその出土がほとんど見られず、都城盆地においてもその出土量は「客体的」と評価される。

また、佐賀県・長崎県などの九州北部においても若干量の出土が確認できるが、散発的なものとどまっており、南九州よりも量比は圧倒的に少ない状態にある。さらに現在の熊本県にあたる中九州では、球磨川支流の川辺川流域を除いてほとんど見られない状況である。中尾田Ⅲ類は以上のように九州内において分布の勾配が見られる状況にあるのが現状である。また、宮崎県の日向灘を中心とした東南九州では大平式が、西南九州に多く出土する春日式、中尾田Ⅲ類、並木式と併行する形で一時期をなしていたという見方が近年定着している(図 2)(相美 2017)。



図 3 中尾田Ⅲ類土器の出土遺跡分布図

(6) 中尾田Ⅲ類土器研究をとりまく問題点

以上、中尾田Ⅲ類に関わる研究史についてまとめたが、中尾田Ⅲ類の分析については低調な状況が続いており、それ故に各一群の位置付けが不安定な状況である。

これを解決するには、近年出土資料が増加している中尾田Ⅲ類の分類を主とした属性分析を行うこと、つまり中尾田Ⅲ類の再検討が有用である。中でも、鹿児島県始良市所在木佐木原遺跡では、春日式の後半段階～並木式が連続するように確認でき、大平式土器もまた出土している。また、研究史でも述べた通り、木佐木原遺跡の報告書総括において、分類案とその変遷観が提示されている。本論では、その分類案の検証を行うことで、当該期における編年観の糸口を見出すことを目的とする。

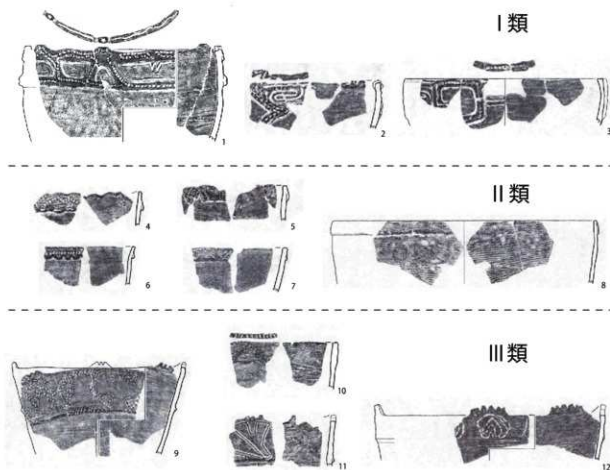


図4 木佐木原遺跡出土中尾田Ⅲ類の分類

2. 木佐木原遺跡について

木佐木原遺跡は鹿児島県姶良市蒲生町に所在する遺跡であり、県道改築に伴って2015年から2016年にかけて本発掘調査が実施された。

本発掘調査では、縄文時代中期後葉から古代までと、中世、近世の遺物・遺構が検出されている。その中でも、特に縄文時代中期後葉から後期初頭にかけての遺物が多量に出土しており、注目される。

当該期における遺構は検出されていないが、中尾田Ⅲ類をはじめとして、春日式後半段階から阿高式土器にかけての相当数の土器が見られることから、当遺跡における当時の文化的な密度は相当なものであったと考えることができる。

当遺跡から出土した中尾田Ⅲ類には、春日式土器の後半段階に程近いもの、また並木式や阿高式・大平式土器と親類性が高いと考えられる土器が見られる。これらは春日式の後半段階から並木式や大平式への変化の方向性を見出すことができる資料であり、当遺跡における中尾田Ⅲ類の分類を通して、春日式と並木式のヒアタスを説明できる可能性を秘めている。

加えて、木佐木原遺跡の発掘調査報告書では、口縁部の形態から中尾田Ⅲ類が3類に分類されており、その分類に基づいた変遷観についての言及がなされている。

本稿では木佐木原遺跡報告書のその中尾田Ⅲ類の分類案とその変遷観について、他の姶良市・霧島市域における出土状況と比較することで、各分類の時期的単独性が担保されるかについて検証していく。

以上をもって、春日式後半段階から並木式・大平式期における変化の方向性について見出すことが本論の目的である。

なお、今回分類の対象とする資料は、口縁部に肥厚帯を持つ、木佐木原遺跡報告書における3類土器(=中尾田Ⅲ類)とする。

3. 木佐木原遺跡における中尾田Ⅲ類の分類

まず、木佐木原遺跡発掘調査報告書では、口縁部文様帯の形態から中尾田Ⅲ類が以下の3つに分類されている。(図4)

Ⅰ類：刺目目隆帯を貼り付けるタイプ(1-3)

2 類：口縁部文様帯（肥厚部）の幅が狭いタイプ（4-8）

3 類：口縁部文様帯（肥厚部）の幅が広いタイプ（9-12）

報告書の総括ではこのうち 2 類・3 類について、2 類→3 類と言った変遷を辿れる可能性があるとしているが、それを型式的な時期差と見るかについては今後の課題としている。また、1 類については、以前東氏（東 1994）によって紹介されていた協和式土器に類するものであると考えられている。

木佐本原遺跡報告書で主張される 2 類→3 類という方向性は、前型式である春日式土器南宮島段階と後継型式と考えられる並木式新段階とを比較しても齟齬がないと考えられ、首肯できる（図 5）。さらに、3 類土器には、並木式土器と折衷関係にあるようなもの（図 7-18）も見られることから、3 類が並木式と近いものであると考えられることは必然的であろう。

ただ、報告書でも述べられている通り、各分類が時期差を示すものなのか、また時期差だとしても 1 類がどの時期に属するものか、検証を行う必要がある。それについては以下において周辺遺跡における出土状況から検討したい。

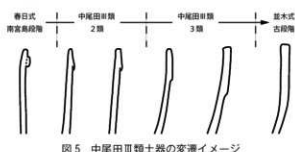


図 5 中尾田Ⅲ類土器の変遷イメージ

4. 始良市周辺における中尾田Ⅲ類細分案の検証

土器の各分類においてその時期差を見出そうとする時、所謂「遺跡の引き算」を行うことが有効である。例えば、A 遺跡において出土していない土器 X が近隣の B 遺跡においてまとまった数量確認される場合、A 遺跡で使われていなかった土器 X が B 遺跡では使用されていたこととなり、土器 X は A 遺跡の土器と時期の差が見られると言うことになる。また、土器の地域差をあまり考慮しなくても良い近隣の遺跡どうしでの作業を行うことにより、時期差の蓋然性は高まる。以下では、この作業を念頭において、各分類が時期差であるかどうか、特定の小地域の遺跡間で検討していきたい。

分析対象とするのは、始良市内の 4 遺跡と、霧島市所在の中尾田遺跡を含めた計 5 遺跡である（便宜的に

「始良地域」と呼称する）。木佐本原遺跡が所在する始良市では近年、前田遺跡をはじめとして縄文時代中期後葉における発掘調査事例が近年増加傾向にあり、中尾田Ⅲ類も一定数のまとまった量が確認されてきている状況にある。また隣接自治体である霧島市に所在する中尾田遺跡は他の比較対象遺跡である 4 遺跡と遠く離れておらず、中尾田Ⅲ類もまとまって出土している。以上の遺跡を対象として、遺跡の引き算を行いたい。

各遺跡における中尾田Ⅲ類の前後型式の出土状況を概観する（表 1）。

木佐本原遺跡では、前後型式である春日式の南宮島段階と並木式土器双方が出土しており、両型式がまとまって出土しているのが特徴である。このような状況にあるのは木佐本原遺跡のみである。また、中尾田遺跡においては、春日式土器南宮島段階の出土が認められないもの、並木式土器が多く出土している状況にある。逆に、前田遺跡、中原遺跡、南宮島遺跡の 3 遺跡では、春日式土器南宮島段階が多く出土しているものの、並木式土器は少量の出土にとどまる状況が見られる。

表 1 始良地域の各遺跡における中尾田Ⅲ類出土状況

	前田遺跡	南宮島遺跡	中原遺跡	木佐本原遺跡	中尾田遺跡
春日式土器南宮島段階	31	29	31	74	0
中尾田Ⅲ類 1類	15	6	42	101	27
中尾田Ⅲ類 2類	0	0	0	89	27
中尾田Ⅲ類 3類	0	0	0	9	1
並木式土器	1	0	1	51	35
大平式土器	0	0	1	32	4
合計	47	35	75	356	94

この状況を踏まえて、中尾田Ⅲ類各型の遺跡での出土量を見ると、春日式土器・並木式土器の双方がまとまって出土する木佐本原遺跡、春日式のない中尾田遺跡は 2 類・3 類とも同数程度の出土量がある。逆に並木式土器がなく、春日式土器が一定量見られる前田遺跡、中原遺跡、南宮島遺跡の 3 遺跡からは、中尾田Ⅲ類の 3 類がほとんど出土していないことがわかる。前型式である春日式南宮島段階が一定量出土しており、中尾田Ⅲ類の 2 類も一定量の出土がみられるという状況は、春日式南宮島段階と 2 類の類似性が高いことが遺跡の出土状況からも補強されたということである。また、後継型式の並木式が出土する遺跡でしか中尾田

Ⅲ類の3類が出土していないことも、3類と並木式の類縁性を担保するものである。

加えて、1類土器も、3類土器と並木式土器の双方が出土する中尾田遺跡と木佐木原遺跡でしか見られない。これは、1類土器が3類土器と時間的に近く、2類土器とは時間的に離れている可能性を示唆するものであろう。

以上の結果から次が結論として導き出される。

始良地域を対象とした小地域内の遺跡の引き算により、中尾田Ⅲ類の2類と3類には、それぞれに時間的な差異が存在すること。

2類が春日式土器に近く、3類が並木式に近い型式であるという時間的な変遷が裏付けられたこと。

最後に、1類は新段階である3類と時期を共にする可能性も高いこと、この3点である。

ただ、1類の分析における総数が少ないため、この分析では断定が難しい。これについては、他地域での分析結果も含めて判断する必要があるため、今後の課題としたい。

5. 春日式土器から並木式への変化の方向性

以上より、春日式土器から並木式土器における土器型式変化の方向性について言及したい。

春日式後半段階から阿高1式・並木式においては、春日式南宮島段階→中尾田Ⅲ類古段階（前章検討の2類）→中尾田Ⅲ類新段階（前章検討の3類・1類）→並木式土器といった変遷を辿る（図7）。この中で、春日式南宮島段階と中尾田Ⅲ類古段階については、中尾田3類古段階が多く見られる中尾田遺跡で春日式土器がみられことから、双方が時期差を持つ可能性が高い。

ただ、中尾田Ⅲ類新段階と並木式土器との前後関係

については昨今議論となっているが、双方の単独性や共同性を本論で検証することは難しい。単独性を遺跡の引き算からは見出せなかったからである。

一方、中尾田Ⅲ類古段階と、並木式古段階については、時期差を持つ可能性が高いと考えられる。前章の前田・中原・南宮島遺跡での分析結果と、並木式土器が検出されない上水流遺跡（鹿児島県埋蔵文化財センター）の大型集石遺構5号において、中尾田Ⅲ類古段階のみが出土する状況（図6）から裏付けられる。

また昨今、相美氏（相美2017）の研究から、大平式土器の開始が東九州では春日式後半段階まで遡らせる編年案が提唱されており、これについても各地の出土状況をもって吟味を重ねながら確認を進めていくことが必要である。しかし、これについては当地域における遺跡間の出土状況から検証することが難しい。ただ、今回対象とした遺跡からは相美氏が古段階に置くような、口縁部が強く「く」の字状に屈曲するような土器は見られない。このことから、少なくとも当地域においては、相美氏が大平式土器の古段階に比定する土器は当地域において用いられていなかった可能性が指摘できる。今後の発掘成果による変更も否定できないが、現状少なくとも当地域では春日式期後半段階において、春日式が単独で存在していたことを指摘できそうである。

上記を鑑みると、始良地域を中心とする九州西南部においては、春日式土器から並木式土器が一連の流れの中で、中尾田Ⅲ類を挟みながらおよそ一系統的に変化していったと理解できる。その変化の様相を模式的に表した図が図8である。

口縁部文様帯の幅や、器形は漸次的に変化していく中で、口縁部突起や調整・口唇部の断面形状などについては、中尾田Ⅲ類の古段階と新段階の間で一つの面

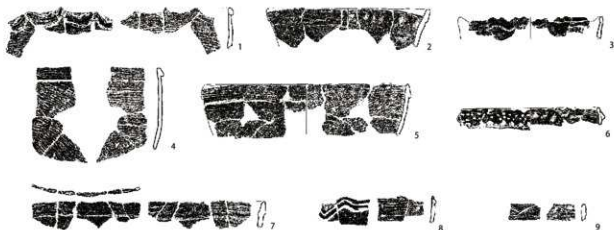


図6 上水流遺跡出土の中尾田Ⅲ類古段階資料（S=1/6）

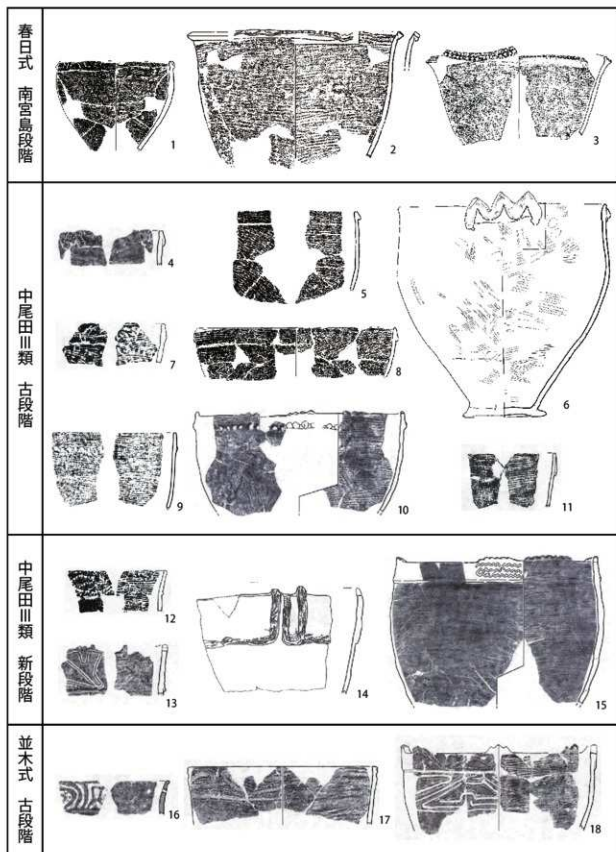


図7 春日式南宮島段階から並木式までの土器変遷図 (S=1/6)

1・5・6・8：上水流遺跡、2：小迫遺跡、3：天神河内第1遺跡、4・13・16・17・18：木佐木原遺跡、
7・12：中尾田遺跡、9：中原遺跡、10・15：山中遺跡、11・14：上田遺跡

期が見れる。中尾田Ⅲ類の新段階において、並木式土器に近い特徴が各属性に現出するのである。中尾田Ⅲ類の新段階の資料に凹線の施される資料は多くないものの、各属性の特徴から、並木式土器～後期阿高系土器まで連続と展開される太型凹線文様式の発生に大きく関わった勃興期の土器と位置付けられよう。

おわりに

以上、中尾田Ⅲ類の変化の方向性について、周辺の土器型式との関係を意識しながら一定の考察を行った。

今回行った分析はあくまでも始良市域周辺という1地域から出土した土器の出土状況の検証を行ったのみにとどまる。そのため、今後は周辺型式である大平式土器や並木式土器との出土状況を絡めながら、つぶさに見ていかなければならない。

また、中尾田Ⅲ類新段階としたものの中には、阿高式土器の2式以降と酷似した文様を持つ土器も含まれている。このような資料については、阿高式に近い年代を示す可能性が高いが、本論では詳細な分析ができなかった。こちらも今後の課題とする。

謝辞

本論を執筆するにあたり、資料調査にあたり、鹿児島埋蔵文化財センターの東和幸さま・関昭恵様には大変お世話になりました。謹んで御礼申し上げます。

また、矢野先生、ご退官おめでとうございます。学生時代から先生には大変お世話になりました。先生が

いなければ、南九州で縄文土器を定点とした、心ときめく日々を送ることも想像が付きませんでした。大変感謝申し上げます。退官された後も、引き続きの益々のご発展をお祈りしております。

注

- 1) 1980年頃までは、春日式が縄文前期、並木式土器が縄文中期前葉、阿高式が縄文時代中期中葉～後葉に比定されていた。しかし、春日式土器と瀬戸内地方を在地とする里木Ⅱ式土器との伴同関係が見出された前谷遺跡での発掘調査を代表とする1980年代中ばからの調査事例によって、春日式土器が縄文時代中期後葉におかれるようになり(東1989)、それにともなって並木式など他の土器群の時期設定変更を迫られた中期土器研究史上の転換期。

参考文献

- 始良市教育委員会 2023『前田遺跡』始良市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
 始良町教育委員会 1977『南宮島遺跡』
 鹿児島県教育委員会 1981『中尾田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
 鹿児島県教育委員会 2003『中原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(54)
 鹿児島県立埋蔵文化財センター2020『木佐木原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書

属性	春日式			中尾田Ⅲ類		並木式・大平式		阿高式
	前谷段階	露木ヶ道段階	南宮島段階	古段階	新段階	古段階	新段階	I式
器形・文様構成								
口縁部突起	貼付突帯				撫で付け			
調整	貝殻条痕							
			ナデ					
口縁部の断面形状								
								
磨石の侵入率								

図8 春日式土器～阿高式の各属性の変容模式図

(203)

- 相美伊久雄 2017「大平式土器再考—東南部からみた九州縄文中期後半期の様相—」『鹿児島考古』第 47 号 鹿児島県考古学会
- 土岐耕司 2016「春日式土器の分類・変遷と長崎市深堀遺跡出土資料の検討」『西海考古』第 6 号 西海考古同人会
- 徳永貞紹 1994「並木式土器の成立とその前夜」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会
- 徳永貞紹 2010「並木式土器研究の現在地」『九州縄文時代中期土器を考える 発表要旨・資料集』第 20 回九州縄文研究会佐賀大会 九州縄文研究会
- 富井眞 2001「西日本縄文土器としての並木式土器の評価—阿高式・中津式との関係—」『古文化談叢』第 47 号 九州古文化研究会
- 東和幸 1989「春日式土器の型式組列」『鹿児島考古』第 23 号 鹿児島県考古学会
- 東和幸 1991「鹿児島県における縄文時代中期の様相」『南九州縄文通信』No.5 南九州縄文研究会
- 東和幸 1994「春日式土器と並木式土器・阿高式土器」『南九州縄文通信』No.8 南九州縄文研究会
- 東和幸 1999「九州地方 中期（春日式）」『縄文時代』第 10 号（第 2 分冊）縄文時代文化研究会
- 眞邊彩 2006「縄文時代中期土器研究の現状—研究史と中尾田Ⅲ類土器・大平式土器の整理—」『鹿児島考古』第 40 号 鹿児島県考古学会
- 眞邊彩 2010「九州南部における中期土器の現状と課題—中期後葉～中期末の様相—」『九州縄文時代中期土器を考える 発表要旨・資料集』第 20 回九州縄文研究会佐賀大会 九州縄文研究会
- 水ノ江和同 1999「九州地方 中期」『縄文時代』第 10 号（第 2 分冊）縄文時代文化研究会
- 三輪晃三 1996「九州阿高式系・緑帯文系土器群の研究—縄文中・後期の土器ホライズンの形成とその背景—」『奈良大学大学院研究年報』1 奈良大学大学院
- 矢野健一 1993「縄文時代中期後葉の瀬戸内地方」『江口貝塚Ⅰ』愛媛大学法文学部考古学研究報告第 2 冊 愛媛大学法文学部考古学研究室
- 矢野健一 1994「北白川 C 式併行期の瀬戸内地方の土器」『古代吉備』第 16 集 古代吉備研究会

'cord mark' をめぐる研究史

高野紗奈江

要 旨

日本で最初の学術的発掘調査のおこなわれた大森貝塚から出土した土器には「cord mark」が付いていた。今日では当たり前のように「縄文」と呼ばれており、時代の名称にもなっているが、縄文が施された土器は弥生・古墳時代まで認められる。縄文の正体を解明した山内清男は、土器に系統はあるが縄文には系統はないと考えた（山内 1958）。果たして縄文に系統は存在しないのか、筆者は疑問を持ち続けている。縄文の系統を追究する手始めに、「cord mark」をめぐる研究史を整理して、批判的に検証した。

キーワード：縄文時代、日本列島、cord mark、縄文原体、山内清男

はじめに

1万3千年以上の長期にわたり日本列島で展開した縄文文化は、土器に縄目文様を施し続けた。この時代の名称にもなっている「縄文」は、草創期末より土器に認められる。早期には押型文原体（木の枝に彫りこみをした原体）の施文が主流となるが、その間も縄文は細々と継続して、前期には東北地方でもっとも縄文は華やいだ。縄文土器のなかで一般的に広く知られている中期の火焙型土器（信濃川流域にのみ分布する）には縄文の施文はほとんど見られないが、その他の地域の土器には縄文施文がある。後期になると日本列島の東西で縄文施文は二分する。西日本一帯では後期後葉になると縄文は土器から失われる一方、東日本では土器に縄文施文が継続されて、続く弥生時代・古墳時代まで認められる。

縄文原体の正体を突き止めた山内清男は、土器に系統はあるが縄文（原体）には系統は存在しないと考えた（山内 1958）。西日本では後期後葉に消失するが、東日本ではその後も弥生・古墳時代の土器にまで縄文施文は認められる。これらの縄文が縄文時代の縄文と別の系統であるのかどうか具体的な検討はなされていない。山内は多種多様な縄文原体の構造を解明して、原体構造を符号と段階で表記する方法を編み出した（山内 1930・1958・1979）。のちの研究者たちは山内の築いた秩序に基づき研究を進めている。

山内は縄文原体の構造を明らかにしただけではない。縄文原体の構造は時期（時間）と地域（空間）によって異なることを明示して（山内 1979、附表Ⅰ～Ⅲ）、

土器に残された縄文から人々の関係性を読み解く方法も示唆した。けれども後の研究者は、この示唆を知りつつも積極的にあつかうことはできなかった。その理由は、山内清男の遺した縄文原体研究があまりにも先見の明を有していたからであり、この分野（ここで指すのは縄文原体研究に限っての意味である）に立ち入る隙を残さなかったためと理解する。特に直系の弟子は山内に敬意を抱いており、孫弟子に至っても簡単に踏み込める分野ではなかった。そして筆者はひ孫の世代となり、ようやく山内の研究を正面から捉えて、増加した資料との対比と検証をおこなえる時がきた。

では山内の述べたことが古くなったのかと言えば、そうではないのである。土器の調査を通じて気づいたこと、このことにはまだ誰も気が付いてはいないだろうと筆者が考えたことも、山内の学位論文にあたりとすでに記されていることが多くある。それは一つや二つではない。筆者は山内清男原理主義者ではないことを断言しておくが、縄文原体研究においては山内の考察と指摘が今日も生き続けているのである。

縄文原体は縄文土器のひとつの属性であるが、原体そのものは土器から独立した単独の物体である。原体そのものは未だに発見例がないため、土器に残された痕跡から原体を復原して比較考察する必要がある。縄文原体は土器をただ漫然と眺めているだけでは復原することのできないモノであり、原体製作技術は当時の縄文社会・文化において人から人に伝承されていた可能性が高い（高野 2017）。

1. 回転施文説明前

1877 (明治10) 年12月、日本で最初の学術的発掘調査がおこなわれた大森貝塚は「日本考古学発祥の地」と呼ばれる。発掘した Edward S. Morse は出土した土器文様を報告書で「cord mark」と記した (Morse E.S. 1879)。同報告書を日本語に訳した矢田部良吉は、これを「索紋」と表記した (矢田部 他 1879)。山内清男は「序説2 縄紋研究史」のなかで Morse が索紋と席紋 (mat impression) を区別していたことに触れて「氏自身はその理由を発表しては居ない」、「アメリカに於ける類似例を cord mark と称して居たものか、また自身の発案によるものかはまだ明らかでない」 (山内 1979、共に4頁) と述べた。cord mark の別の訳語として「縄紋」があり、1886 (明治19) 年頃から白井光太郎が用いていたが、「縄紋」の語は誰が用い始めたか明らかでないが、大正頃の事である」と述べている (山内 1979、4頁)。

今日定着している「縄紋 (文)」表記の初出に関しては紆余曲折あった。江坂輝弥は『人類学会報告 第4号』で白井の報告した「中里村貝塚」を初出としたが (江坂 1950)、芹沢長介は『人類学会報告 第3号』に掲載された白井の「石炭考」が初出であると指摘した (芹沢 1956)。その後、「石炭考」初出説が概説書等で広く用いられるようになり定説となった (江坂 1957・1974・1975、芹沢 1975、小林 1978)。しかし、これも誤りであることを渡辺兼庸が明らかにした (渡辺 1980)。1883 (明治16) 年8月の探訪誌「武蔵國久良郡石川中村穴居記」で白井は「縄紋土器」と記しており、その複写が1932年9月に刊行された雑誌「ドルメン」に掲載されている (白井 1932)。渡辺は『ドルメン』に掲載された図と文字を明示して、「これこそが刊行された『縄紋土器』名称の初出であろう」 (渡辺 1980、326頁) と指摘した。白井光太郎が「縄紋」を山内のいう明治19年頃以前から用いていたことは確かである。けれども「縄紋」の発案が誰であったのか、明確な証拠はない。「索紋」と「縄紋」の表記の異なりが意図することを渡辺は、矢田部と白井が当時用いることのできた英和辞典にあたり、「Cord」の訳を比較検討している。

1890年代から1920年代にかけては三宅米吉、若林勝男、坪井正五郎、岸上謙吉、中山平次郎、松村暁、松本彦七郎、鳥居龍藏、大山柏といった面々が「編物・織物・網代・撚り糸の押捺など、主に平面的な原体を想定して cord mark を研究した」 (三宅 1892、若林 1893、坪井 1893・1894・1895ab・1899、中山 1918ab・1919、松村 1920、松本 1919、鳥居 1924、大山 1927、

Kishinouye 1912)。この間 cord mark は、索紋・縄紋・席紋・布紋とさまざまな名称で呼ばれた。

2. 回転施文明後

(1) 説明前夜「斜行縄紋に関する二三の観察」

縄を粘土の上で転がすことによって cord mark が生まれることを突き止めたのは、山内清男である (山内 1979)。1930 (昭和5) 年に「史前学雑誌」に発表した「斜行縄紋に関する二三の観察」では、無節、単節、複節、異節の斜行縄文の分類から、右撚りと左撚りからなる根本的2種の存在、横位・縦位の押捺方向までを論じている (山内 1930)。この時点ではまだ cord mark が縄の回転で生じることに、山内は気づいていなかった。「山内清男論」の中で佐原眞は、「1923~24年ころから、山内は縄紋の正体を解決しようと、繊維製品を数多く蒐め、自らも作り、ゴム粘土に押しつけて縄紋の再現に努めた。『斜行縄紋に関する二三の観察』(1930年) は、解決寸前のところまで来ている」 (佐原 1984、237頁) と記した。この論文で山内は、徹底した縄文土器の観察から得られた cord mark の所見を的確に言語化しており、回転施文であることを知らずに書いたとは想像できない域に達している。実際、山内の弟子の一人である岡本東三は、回転施文を前提とした分類であると学生時代に理解していた旨を述べている (岡本 2022、20頁)。また山内はすでに、cord mark が縄文土器型式の設定と同一に役立つものであるという主眼で、土器型式との関係を記述している (山内 1930)。けれどもそうした印象とは裏腹に、「この時までは原体を捉えて居なかった」 (山内 1979、6頁) と山内自身が残している。

(2) 「偶然」と必然

「昭和6年偶然の機会から、回転押捺によって縄が斜行縄紋を作り、軸に縄を巻絡したものが縞線紋を作ることを知り、その時までに収集してあった縄紋の種類は大半実験的に作り得るようになった」 (山内 1979、6・7頁)、この一文に見られる「昭和6 (1931) 年偶然の機会」() 内西暦は筆者加筆) が、後に議論をよぶ。イギリス王立人類学協会から出ている月刊学術雑誌「マン」No.34 (1929年) に Nicholson W.E. の「The Potters of Sokoto, N. Nigeria」が掲載されており、山内はこの論文を読み、回転施文であることを知ったのではないかと芹沢長介は自著で述べた (芹沢 1975)。これについて小林達雄は「芹沢長介は、これより2年前 (1929) にアフリカのソコト族の土器に回転施文の

縄文のあることが雑誌「マン」に報告されているので、勉強家の山内は密かに読んでいてヒントを得たのではないかという嫌疑をかけている(小林 1978, 21 頁)と記した。当時、山内は 1970 年に亡くなっており、事の真相を確かめることができない中であった。

そして没後 9 年後に『日本先史土器の縄紋』が塚田光の手によって刊行される。山内の縄文研究の全貌が明らかとなった約半年後、芹沢は『考古学雑誌』第 66 巻(1980 年)の新刊紹介でふたたび「ニコルソンの回転縄紋についての発表は、山内博士の『偶然』の発見よりも 2 年早いのである。博士がニコルソンの報告を読まれたことがあったのかどうか。これも現在では謎に包まれてしまっているが、万一博士がそれにヒントを得たのであったにしても、その縄紋原体の研究の偉大さには、髪の毛と筋ほどの傷さえもつかないであろう」(芹沢 1980)と記した。

これに対する書評として塚田は「上述のような論法は、山内博士が存命中に言うべきことで、そうであれば、山内博士自ら、説明も反論もすることが出来たはずである」(塚田 1980, 97 頁)と一蹴した。さらに妻山内清子氏から提供された草稿を掲載した。この草稿は塚田が『日本先史土器の縄紋』を編集しているときに清子氏から渡されたもので、冒頭には「序言」の文字が見える。草稿には「……今細い棒又は糸に、糸を巻きつけて斜位の圧痕をならべるならば、又はかくの如きものを多数斜位に張り、これを粘土上に押捺するならば、斜縄紋と甚だ近似する圧痕を得るであろう。予もモルルスになつてかくの如き考案も或は可能と思ったのであるが、精査の結果種々の困難にホー羞し確信を得るに至らなかった。最近予は中里貝塚の土器の縄紋に関して最後の観察を試みつつあったが、五月⁷⁷日渐く斜縄文の成生機転を明にすることが出来た。机上にあった縄を粘土上に回転しつつ押捺したところが偶然斜縄紋が出来上がったのである。末端線、結束線等も亦この縄の末端及び結束によって生じ、各種の条は捻糸の撚りによって生ずることも亦直ちに実験することが出来た。尚この回転押捺の原理を諸種の捻糸文にも応用し得るのである¹⁸⁾。かくて所謂縄紋の大多数は、そのまゝ原体の押捺ではなく、縄又は縄を巻き付け又は組んだものの押捺と解することが出来るようになった。私は昨年本誌に寄せた『斜行縄紋に関する二三の観察』と題する小報文の中に、今回の新所見によって抹殺すべき部分を生じたので至急訂正を試みたいと思う。特に斜縄紋に関する部分を選んで簡単に記さうと思う」(塚田 1980, 97-99 頁)とあった。この

草稿は 1931 年に書かれたもので「斜行縄紋に関する二三の観察」を発表した翌年には、回転施文を突き止めていたことを裏付けている。文中に登場する「本誌」とは『史前学雑誌』のことで、直ちに訂正するつもりであったことがわかる。草稿で登場した註「(8)」では欧米の文献が記述されているが、そこに Nicholson の文献はない。塚田は「今回二枚を抽出したのは、芹沢氏の『謎』や『嫌疑』に山内博士が回答出来ないで、それに相応すると思われるものを提供する為である」(塚田 1980, 100 頁)と綴った。

一般的には以下の内容が浸透しているように思う。「1931 (昭和 6) 年、29 歳。伊東信雄によると偶然が真相解明の動機となる。喉にルゴール液を塗る時などに使う金属製の綿棒。医学部の研究室(同僚と雑居)でその綿棒の螺旋の部分を何気なくくりあげてゴム粘土の上に転がしてみた。斜行する平行条が生じた!これがヒントとなり、ついに懸案の縄紋原体の謎は解き明かされたのであった」(佐原 1984, 237 頁)、山内の弟子の一人であった佐原眞の書いた文である。佐原は中学生の頃より山内のもとを出入りしていた。

「(略) 今度準備して居るのは捻糸紋の生成機転で、特に珍しいものではない。(略) アメリカでは Holmes など欧州では Götz などの書いて居るように捻糸紋が捻糸を軸に巻き付け又は絡げたものの回転圧痕だと云うことを述べるだけです。これは前報三貫地の網縷のものにも適用し得るしほとんど全部の捻糸の押捺(紋様としての加へられた直接の圧痕は別です)もこの方法によるものと考へられます。その関係で前報訂正の意味で貴誌へ御送りする次第です。(略) 以上は小生のバテントではないのですが、斜行縄紋の生成の原理は各国に特許を得るでせう。この方法は縄紋自体の回転押捺によって生じます。この方は前報の訂正の意味で史前学雑誌に送る手筈です。両方並行させて書いて居ます。斯くの如くして日本縄紋土器の縄紋面は総面積数千ワーカーに達するでせうが、その大部分(或は研究が進めば全部でせう)縄それ自体又は絡縄輪の回転によって生じたと云うことになるのです。縄紋を布紋だの蓆だのと云う考は当然解消されるでせう。そして縄紋を蓆として行はれた欧亞文化連絡は一先ず停止です。(略)」(佐原 1984, 237 頁)、これは山内が八幡一郎に宛てた手紙の控えとして紹介された。ただし、いつ書かれた手紙であるのか詳細は記されていない。けれども文面から上述の塚田の提示した草稿と同時期であることが「前報の訂正の意味で史前学雑誌に送る手筈です」からわかり、「両方並行させて書いて

居ます」より何か別の論考もしたためていたことが読み解ける。「小生のパテントではないのですが」の文言には、手紙の文面でも個人の取得権に重きを置いていたことを看取できる。パテント（特許権）の侵害を嫌う山内清男の人物は、塚田・佐原をはじめとする当時交流のあった多くの研究者が、今日まで語り継ぐところである（塚田 1980、佐原 1984、山内先生没後 25 年記念論集刊行会 1996）。

草稿と手紙の文面にもあるように、山内は回転施文に気が付いたの直ちに cord mark の復原に着手して大半の復原を成し得ていた。しかし公表は急がなかった。「私は縄紋の原体とその回転圧痕についての研究は昭和 8、9 年頃完成に近い状態になった。そして草稿、図版を揃えて居たが、他日 Monograph として出版する考えで詳細は発表しなかった。唯縄紋が回転によって作られることについて、数行の記事をついでに書いたことはある」（山内 1979、7 頁）、その言葉通り『日本遠古之文化』補注付き新版（1939 年）の註 38 が具体的な記述の最初であろう（大貫 2023）。『日本先史土器の縄紋』（1979 年）が刊行されるまでは、『縄紋土器の技法』（『世界陶磁全集』1958 年）と『縄文』（『日本原始美術』1964 年）で縄文施文法に関する成果の一部が公表されるのみであった（山内 1958・1964a・1979）。

（3）「嫌疑」の真相

Nicholson の研究については大貫静夫が詳細な報告をしている（大貫 2023）。1929 年発行の雑誌『Man』を原本で所蔵していたのは京都帝国大学、東京帝国大学、大山史前学研究所など限られた研究機関であった。1970 年にリプリント版が発行されてようやく、東北大学にいた沢尻も Nicholson の報告を目にしたのだろうと大貫は推察した（大貫 2023）。また、山内が引用している外国の参考文献の年代を検討し、1924-1933 年までは東北大学に赴任していたことから「再び東京に戻る 1933 年まではたまたま上京した際に閲覧した可能性があるが、いつでも自由に閲覧できたわけではなかったろう」（大貫 2023）と推測した。しかし後に事実として、八幡一郎に教えられて 1934 年発行『Man』6 月号に掲載された Braunholtz H.J. の "Wooden Roulettes for Impressing Pattern on Pottery" を山内が知るに至っていることから（山内 1935・1967）、山内は cord mark が縄の回転施文によって生じることを「Nicholson 29 報告とは無関係に発見した。その後いつの時期に知ったかにもかわらず山内が沈黙したのは、

山内の知的先取権への強い拘りが背景にあったと思う」（大貫 2023、298 頁）と述べた。

「山内の縄紋施文法発見については、外人文献がヒントになったのでないか、と疑った人もあり、これに噛みついた人もある。プライオリティの侵害、無断引用をあれほど憎悪した山内が、彼自らみだしたと云っているのだから、彼の創案と信じたい。いずれにせよ、世界的な金字塔にとって、動機は小さなことである。ヒントや思い付きは誰でもみつかったり、うかべることができる。問題は、これを発展させいかに体系化するかである。評価はこの完成されたものを対象とすべきであろう」（佐原 1984、238 頁）、筆者も同様の見解を持っている。

筆者は山内が記すように、思いがけず縄を転がしたところ偶然に斜行縄紋が生じたのだと考えている。杉山壽榮男をはじめ同時期に密、網代、平織など平面的な原体も想定される中で（杉山 1928・1942）、山内は徹底した土器の観察からこうした見解に違和感を持ち続けた。それゆえに「斜行縄紋に関する二三の観察」（山内 1930）が存在する。その直後に「偶然」縄を粘土に転がし、「偶然」斜行縄紋が生じる出来事を引き寄せた。常に疑いを持って追究し「斜行縄紋に関する二三の観察」を脱稿した後も納得していなかったためと想像する。仮にその後、海外の文献に斜行縄紋に関する内容が記されていることを知ったとしても、山内の成し遂げた体系的な縄文原体研究は次元を異にしている。山内は回転施文で cord mark ができることを理解した後わずか 3 年程で、大半の縄文を復原するに至ったと記している。さりとて流すように記述しているが、これは驚異的なことである。縄文原体は左右の撚りの組み合わせの他、軸の選択（縄や棒）、またその本数、巻き付け方（右巻き、左巻き、中央始点、端部始点、用いる条数など）、結び目の作り方諸々、これらの項目の組み合わせ方により原体は数百種類にも及ぶのである。回転施文であることを知っただけでは、こうした複雑な種類の原体を網羅的に解明することは決してできない。加えて、土器型式との関係性にまでも言及しているのである。そして、煩雑性を避けるため撚り方向に符号を与え、構造を階層化した点も特筆すべきことである。

（4）「縄紋」と「縄文」の表記

Edward S. Morse の記した「cord mark」を「縄紋」と表記した白井光太郎は「紋」の字を用いた（Morse 1879、白井 1932）。「縄文」は神田孝平が 1888 年『東

京人類学雑誌」のなかで用いたのが最初だとされるが(長谷部 1948、大村 1994)、建築学会との関係も検討した里見純子は、高橋健自が初出であると結論づけた(里見 2015)。1920 年から 30 年代(大正末期から昭和初期)にかけては「縄紋」の表記が優勢であったが、1941 年に日本古代文化学会が創設されて以降は「縄文」の表記が増えた(大村 1994)。

大村裕は山内清男が遺した論考にあたり使用された「縄紋」と「縄文」の登場数と用いられた前後の内容から、山内が「紋」と「文」の字を意図的に使い分けていたことを唱えた(大村 1994)。山内のいう「縄紋」とは「文様」の構成要素の一つ(縄の回転圧痕)なのであって、単独では「文様」にはなりえず(大村 1994、108 頁)。「縄紋」を「文様」とは区別するために縄の回転圧痕を示す「じょうもん」では「縄紋」と表記していると指摘した。山内の書き残したものに基づく徹底した分析であり、蓋然性は高いように思われる。しかし当の山内自身は、そのように使い分けていることを書き残してはいない。また山内が文様と文様帯をどのように理解していたかを理解するため重要になる「V 文様帯系統論」(山内 1964b、157-158 頁)は、難解な部分もあり内容の理解と解釈で今日も議論の絶えないところである(今村 1983、大塚 2000 73-81 頁、西脇 2008)。仮に山内が「紋」と「文」を使い分けていたとして、その使い分けの理由が今日の学術水準に照らした時に意味を有するものなのかどうかも含めた十分な検討をおこなっていないため、筆者は現代広く用いられる「縄文」を用いることにした。

(5) 撚り方向の符号と表記

「撚り方向は右撚と左撚がある。これには考えなければならない問題がある」(山内 1979、11 頁)、わが国で古来右撚りとされるものが海外では左撚りで、わが国で古来左撚りとされるものは海外で右撚りであることを山内は理解していた。そして植物の蔓の巻き方(植物学)、巻貝の検討(動物学)、ネジの検討(工学)から縄を「進行方向に追跡して clockwise のもの」の撚を R、この反対を L と定めた(近年 S、Z の符号が一部で用いられて居る)(山内 1979、12 頁)と述べた。考古学分野においては、この山内の定義が浸透しており、出土遺物の報告書でもこの理解のもとに記されている。

しかしこれとは異なる表記が存在する。織物・撚糸業界である。「縄文の布ー日本列島布文化の起源と特質ー」(初版 2012 年、増補版 2018 年)の著者、尾関清子は序章第 2 節「糸の撚り方向」において「日本古来

の右撚り = 英語表記の左撚り = S 撚り、日本古来の左撚り = 英語表記の右撚り = Z 撚りとなり」(尾関 2018、9 頁)、「S 撚り、Z 撚りは JIS (1952) 繊維用語であり、ISO (国際標準化機構) にも記載される国際共通の呼称である」(尾関 2018、9 頁)と説明している。そして「考古学の世界でも S・Z を使用すれば、少なくとも上述してきたような混乱は避けられるのではないだろうか」(尾関 2018、13-14 頁)と述べた。

確かに不統一は混乱を招くだろう。尾関自身が自著「縄文の布」で考古資料をあつかったが、撚りの用語は S 撚り・Z 撚りを用い、文章の流れによっては日本古来の撚りの表記である右撚りと左撚りを用いたと断っている。表記が統一されることに越したことはないが、縄文原体は右撚りと左撚りが複雑に組み合わさって撚られたものもあり、これらをすべて大文字 S・Z、小文字 s・z で表記することは、山内が定義した R (right の頭文字)、L (left の頭文字) で縄文原体の構造復原を務めてきた先行研究者にとって煩雑なため、かえって混乱を招く事態となるだろう。各大学の考古学実習等で広く用いられている「特論ー縄文施文入門」(佐原 1981)をもとにこれから、縄文原体の作り方を学ぶ後進の者たちにとっても理解が追いつかないことと想像する。

3. 「日本先史土器の縄紋」の縄文原体と粘土板

(1) 山内清男の縄文原体研究

日本先史考古学の体系化を成し遂げた山内清男(1902-1970)は、日本を代表する考古学者である(佐藤 1974、佐原 1984)。山内が遺した数々の業績の中でも「縄文原体」の解明は、傑出した存在として現在も位置付けられよう。1931 (昭和 6) 年、縄文は縄の回転撚擦によって生じることを突き止めて以来、1933・34 (昭和 8・9) 年頃にはほぼすべての縄文原体とその縄目文様を解明していた(山内 1979)。しかし、この成果は大学での講義を除き、「縄文土器の技法」(山内 1958)が発表されるまで公表されることはなく、開示された内容も一部にとどまっていた。

1961 (昭和 36) 年 3 月 31 日、山内は学位請求論文「日本先史土器の縄紋」を京都大学へ提出する。けれども博士論文の全容が公表されるのは、山内が亡くなって 9 年後の 1979 (昭和 54) 年であり、長い歳月を経てようやくの公開であった。

(2) 山内清男 著「日本先史土器の縄紋」

「日本先史土器の縄紋」(山内 1979)は、縄文時代・



図1 山内清男の縄文原体関連資料 (1) (高野編 2024 より)

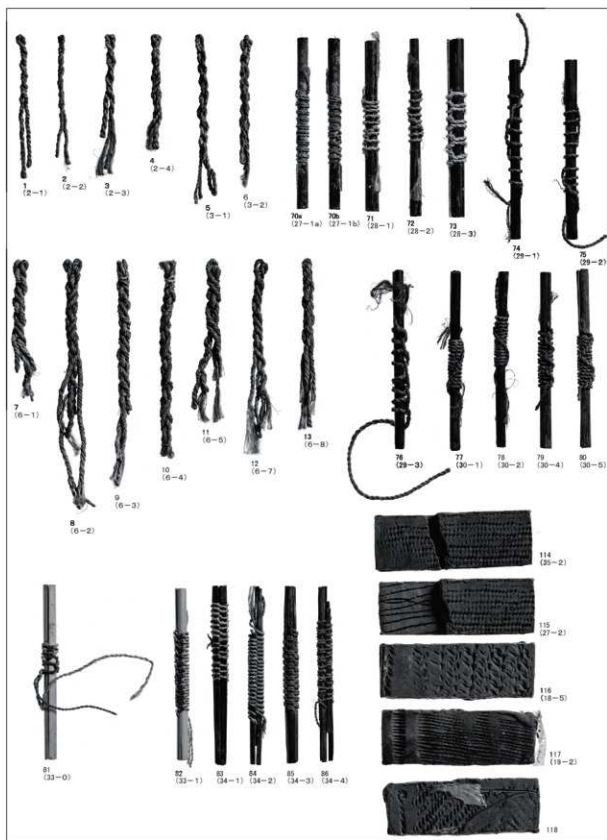


図2 「日本先史土器の縄紋」所載の縄文原体と粘土板（高野編 2024 より）縮尺 1/2

文化を研究する者、特に縄文土器研究者にとってはバイブル的存在といっても過言ではない。縄文原体を読解する方法やルールを秩序立てて解説し、縄目構造に符号と名称を与えた。その論理の一貫性は完璧に近く、今日でも縄文原体の理解は山内が築いた礎の上に成り立っている。

1984(昭和59)年、奈良(国立)文化財研究所へ移管された山内清男資料の中に、『日本先史土器の縄紋』の「模形写真」に掲載された縄文原体および粘土板のあることが2016年にわかった。油粘土には劣化が認められるものの縄文原体の多くは保存状態も良好で、博士論文に掲載されていない縄文原体も複数含まれていた(図1・2)。「模形写真」はモノクロ写真のため、色の違いはほとんど判読できないが、実物の縄文原体の一部では、色分けされた縄を用いて製作されている。また、山内が縄文原体の構造を突き詰めるために検討した痕跡を複数の製作原体に認めることができた。これらの資料の概要と調査結果については『縄文原体資料 山内清男コレクションⅠ』2024(奈良文化財研究所史料95冊)を参照いただきたい(高野 編2024)。

おわりに

以上、「cord mark」をめぐる研究史を述べてきた。最後はむすびにかえて今後の縄文原体研究の展望を述べたい。縄文原体は縄文文化・社会の探究に貢献できる要素を数多く含んでいるが、それらがまだ十分に生かされていないのが現状である。その理由の一つは、すでに発掘されたが埋もれている資料も含めて「縄文」を調査研究対象とするには、研究者個人の努力に頼るには限界があるという点である。筆者自身が縄文の調査を続けながら感じているのは、全地域・全縄文施文を目にして調査したいが、かけられる時間と努力には限りがあるということである。ひとつの遺跡で500点から最低2週間は、1000点なら1ヵ月かかる調査である。土器に残された縄文からは当時の技術・資源利用・嗜好・目的を読み解くことができる情報に満ちているにも関わらず、そうした情報がこれまで縄文時代研究へ十分に生かされてこなかったのは一重に、調査観察の難易度にあると筆者は理解する。こうした現状を踏まえて、土器に残された縄文が縄文時代研究全般へ生かされるためには効率よく縄文を判定できることが求められると考えた。

そこで人工知能(AI)を取り入れた縄文の識別研究に着手している(高野・杉山2023)。土器に施文された縄文の写真から縄文原体の種類・構造が解説され、

節あるいは条にのこる痕跡から用いられた繊維素材が解説されるようになれば、あらゆる地方のあらゆる時代の資料の縄文も携りに用いられた技術と素材が解説できるようになる。これは「縄目」ということでいえば縄文時代に限られることなく、日本列島東日本の弥生時代から古墳時代の土器にみられる縄文から、さらには「縄目」という共通項をもつ瓦の縄紋きにも生かされる可能性がある(単軸絡条体)。

人工知能(AI)の解析は縄文原体の携りの技術(130通り)に関しては正解率8割を得ているが、縄を携った素材に関してはやや難航している(高野・杉山2023)。誰もが使える技術を開発して、それがその時の資料に生かされることを切望する。現在よりも負担なくより多くの縄文を詳細に調査できる時が近い将来に訪れれば、データを反証して新たな見解の述べられる時が到来するはずである。縄文原体に着目する研究は後々まで、日本列島内外の文化・社会を明かにする研究へ貢献し続けていくだろう。

引用文献

- 今村啓爾 1983「文様の割りつけと文様帯」『縄文文化の研究』第5巻 縄文土器Ⅲ、雄山閣、pp.124-150
- 植田 真 2012「山内清男『縄文講義ノート』解題」『縄文時代』第23号、pp.163-172
- 植田 真 2020「縄文原体記号表記における山内式略記法の課題と試論」『国学院大学博物館研究報告』第36輯、国学院大学博物館、pp.83-94
- 上野謹五郎 1938「土器の縄紋」『科学』第8巻第4号、pp.165-169
- 江坂輝弥 1950「縄文式文化について(その一)」『歴史評論』第4巻第5号、p.78
- 江坂輝弥 1957「先史時代Ⅱ縄文文化」(考古学ノート2)日本評論社、p.4
- 江坂輝弥 1974「日本考古学100年史・縄文時代」『月刊考古学ジャーナル』100号、p.23
- 江坂輝弥 1975「縄文式土器」ブック・オブ・ブック日本の美術2、小学館、pp.86-88
- 江坂輝弥 1978「南関東の縄文文化」大野晋・祖父江孝男編『日本人の原点Ⅰ』至文堂、p.125
- 大塚達朗 2000「縄紋土器研究の新展開」同成社
- 江坂輝弥 1980「縄文土器文化研究小史」『月刊考古学ジャーナル』174号、pp.21-25
- 大貫静夫 2023「山内清男の『縄紋』とアフリカの縄文」春成秀爾 編『何が歴史を動かしたのか』第1巻 自然史と旧石器・縄文考古学、雄山閣、pp.289-300

- 大村 裕 1993a 「ある学史の一断面－『日本先史土器の縄紋』の刊行と塚田光」『下総考古学』13、下総考古学研究会、pp.31-49
- 大村 裕 1993b 「解題」『下総考古学』13、下総考古学研究会、pp.63-67
- 大村 裕 1994 「『縄紋』と『縄文』－山内清男はなぜ『縄紋』にこだわったのか?」『考古学研究』第41巻第2号、考古学研究会、pp.102-110
- 大村 裕 2022a 「山内清男の方法論－山内論文の読み方－」『早稲田大学津八郎記念博物館 研究紀要』第23号、早稲田大学津八郎記念博物館、pp.33-44
- 大村 裕 2022b 「I. 山内清男の『縄紋』研究について」『続 日本先史考古学史の基礎研究－山内清男の学問とその周辺の人々－』六一書房、pp.1-23
- 大村 裕 2022c 「IX. 山内清男は W・E・ニコルソン「北部ナイジェリア、ソコト地方の焼き物器」(『MAN』29 巻 1929 年 3 月号)をどう評価していたのか?」『続 日本先史考古学史の基礎研究－山内清男の学問とその周辺の人々－』六一書房、pp.173-186
- 大山 柏 1927 「神奈川県下新磯村字塙坂遺物包含地調査報告」史前研究会小報 第1号
- 岡本東三 2021 「遺されしモノへの想い－山内清男資料の顔末記－」谷川達 編「山内清男コレクション受贈記念 山内清男の考古学」早稲田大学津八郎記念博物館、pp.16-20
- 岡本東三 2022 「山内清男『論文集』・『博士論文』刊行とその後」『早稲田大学津八郎記念博物館 研究紀要』第23号、早稲田大学津八郎記念博物館、pp.15-24
- 尾関清子 2012 「縄文の布－日本列島布文化の起源と特質－」雄山閣
- 尾関清子 2018 「縄文の布－日本列島布文化の起源と特質－」【増補版】雄山閣
- 可見通安 2008 「縄文の施文原体と文様」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション、pp.965-980
- 小林達雄 1978 「縄文土器の名称と正体」小林達雄 編「日本の美術 6 縄文土器」第145号、pp.20-21
- 佐藤達夫 1974 「学史上における山内清男の業績」『日本考古学選集 21 山内清男』築地書館、pp.2-11
- 里見純子 2015 「『縄紋』から『縄文』への転換の実相」春名章二 編「岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要」第39号、pp.213-232
- 佐原 眞 1956 「土器面における横位紋様の施紋方向」『石器時代』第3号(同 2008 「縄紋土器と弥生土器」学生社、pp.158-176、再録に拠る)
- 佐原 眞 1981 「特論－縄文施文法入門」『縄文土器大成 3－後期』講談社、pp.162-167
- 佐原 眞 1984 「山内清男論」『縄文文化の研究』第10巻 縄文時代研究史、雄山閣、pp.232-240
- 篠原和大 1994 「南関東弥生後期における縄文施文の二つの系統」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第12号、東京大学文学部考古学研究室、pp.169-207
- 白井光太郎 1886a 「石叢考」『人類学会報告』3号、人類学会
- 白井光太郎 1886b 「中里村貝塚」『人類学会報告』4号、人類学会
- 白井光太郎 1926 「モース先生と其の講演」『人類学雑誌』第41巻第2号、pp.57-59
- 白井光太郎 1932 「武蔵国久良郡石川中村穴居記」『ドルメン』第1巻第6号、pp.1-15
- 杉山壽榮男 1928 「日本原始工藝概説」工藝美術研究会
- 杉山壽榮男 1942 「日本原始纖維工藝史(原始篇・土俗篇)」雄山閣
- 芹沢長介 1956 「日本文化」『日本考古学講座』3、河出書房、pp.45-46
- 芹沢長介 1957 「五 出土した遺物」『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』明治大学文学部研究報告考古学 第二冊、明治大学文学研究所、pp.38-86
- 芹沢長介 1975 「縄文」陶磁体系 1、平凡社
- 芹沢長介 1980 「山内清男著『日本先史土器の縄紋』」『考古学雑誌』第66巻第1号、日本考古学会、pp.118-121
- 高野紗奈江 2017 「変容する縄文原体とその背景－比叡山西南麓縄文遺跡群出土の後期土器を素材にして－」『考古学研究』第64巻第2号、pp.40-60
- 高野紗奈江 2021 「縄文原体」阿部芳郎 編「季刊考古学 土器研究が拓く新たな縄文社会」第155号、雄山閣、pp.67-70
- 高野紗奈江・杉山淳司 2023 「AIによる深層学習を活用した『縄文』の素材同定」『日本文化財科学会第40回記念大会 研究発表要旨集』日本文化財科学会第40回記念大会実行委員会事務局、pp.94-95
- 高野紗奈江 編(金田明大 監修) 2024 「縄文原体資料 山内清男コレクション I」奈良文化財研究所史料第95冊、奈良文化財研究所、明新社
- 田中 琢・佐原 眞 1993 「考古学の散歩道」岩波書

店

- 谷川 遼 編 2021『山内清男コレクション受贈記念 山内清男の考古学』早稲田大学會津八一記念博物館
- 塚田 光 1980『山内清男著「日本先史土器の縄紋」の新刊紹介（芹沢長介）を読んで』『考古学雑誌』第66巻第3号、日本考古学会、pp.95-104
- 塚田 光 1993『山内清男 著「日本先史土器の縄紋」刊行の諸事情』『下総考古学』13、下総考古学研究会、p.60
- 坪井正五郎 1893『西ヶ原貝塚探検報告 其四』『東京人類学会雑誌』第93号、pp.109-119
- 坪井正五郎 1894『西ヶ原貝塚探検報告 其六』『東京人類学会雑誌』第98号、pp.313-319
- 坪井正五郎 1895a『貝塚土器底面の網代紋』『東京人類学会雑誌』第112号、pp.379-381
- 坪井正五郎 1895b『北海道石器時代土器と本州石器時代土器との類似』『東京人類学会雑誌』第116号、pp.45-50
- 坪井正五郎 1899『日本石器時代の網代形編み物』『東京人類学会雑誌』第161号、pp.440-444
- 戸田哲也 2022『山内清男の網別型式について』『早稲田會津八一記念博物館 研究紀要』第23号、早稲田大学會津八一記念博物館、pp.25-31
- 鳥居龍藏 1924『諏訪史』第1巻、信濃教育会諏訪部会、p.299
- 中村五郎 2021『山内清男の足跡、聞書と共に』谷川 遼 編『山内清男コレクション受贈記念 山内清男の考古学』早稲田大学會津八一記念博物館、pp.12-15
- 中村五郎 2022『山内清男と先史考古学・人類学』『早稲田會津八一記念博物館 研究紀要』第23号、早稲田大学會津八一記念博物館、pp.3-14
- 中村嘉男 1979『山内清男著「日本先史土器の縄紋」』『考古学研究』第26巻第3号、考古学研究会、pp.85-89
- 中山平次郎 1918a『貝塚土器の席紋と其類似紋』『考古学雑誌』第8巻第12号、pp.693-709
- 中山平次郎 1918b『貝塚土器の縄紋と古瓦の縄紋』『考古学雑誌』第8巻第12号、pp.742-743
- 中山平次郎 1919『遺物上より見たる古代の北九州文化』『歴史と地理』第3巻第2号、pp.52-67
- 西脇對名夫 2008『文様帯系統論』小林達雄 編『総覧 縄文土器』アム・プロモーション、pp.1156-1161
- 長谷部言人 1948『縄文と結縛崇拝』『日本考古学』第1巻第2号（江坂輝弥編『長谷部言人集』日本考古

- 学選集 第15巻、築地書店、1975年、再録に拠る）
- 松村 暁 1920『琉球荻堂貝塚』東京帝国大学理学部人類学教室研究報告 第3編
- 松本彦七郎 1919『宮戸島里濱貝塚の分層の発掘成績（続）』『人類学雑誌』第34巻第10号、p.342
- 三宅末吉 1892『雜案數件』『東京人類学会雑誌』第74号、pp.258-270
- 矢田部良吉・寺内章明・Morse, Edward Sylvester 1879『大森介塚』東京大學法理文學部
- 山内清男 1930『斜行縄紋に関する二三の觀察』『史前学雑誌』第2巻第3号、pp.187-199（『山内清男・先史考古学論文集』第5冊、先史考古学会、1967年、pp.213-224 再録に拠る）
- 山内清男 1935『古式縄紋土器研究最近の情勢』『ドルメン』第4巻第1号、pp.36-44（『山内清男・先史考古学論集・第二冊』、先史考古学会、1967年、pp.85-96 再録に拠る）
- 山内清男 1958『縄紋土器の技法』『世界陶磁全集』第1巻 河出書房、pp.278-282（『山内清男・先史考古学論文集』第5冊、先史考古学会、1967年、pp.225-232 再録に拠る）
- 山内清男 1964a『縄紋式土器・総論 III 縄紋』『日本原始美術 I』講談社、pp.153-155
- 山内清男 1964b『縄紋式土器・総論 V 文様帯系統論』『日本原始美術 I』講談社、pp.157-158
- 山内清男 1967『日本先史土器図譜』（再版・合冊刊行）先史考古学会
- 山内清男 1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
- 山内先生没後25年記念論集刊行会 1996『画龍点睛 - 山内清男先生没後25年記念論集 -』山内先生没後25年記念論集刊行会
- 若林勝邦 1893『陸奥国上北郡貝塚村貝塚調査報告書』『東洋学芸雑誌』第146号 584-591号
- 渡辺兼庸 1980『縄文土器』名称の初出』『考古学雑誌』第66巻第3号、pp.89-94
- Braunholtz, H.J. 1934 "Wooden Roulettes for Impressing Pattern on Pottery", *Man*, 34 Jun. p.81
- Kishinouye, kamakichi. 1912 "Prehistoric Fishing in Japan", *Journal of the College of Agriculture, Imperial University of Tokyo*. Vol.II, No.7 pp.327-382
- Morse E.S. 1879 "Shell Mounds of Omori", *Memoirs of the Science Department, University of Tokyo*
- Nicholson, W.E. 1929 "The Potters of Sokoto, N. Nigeria", *Man*, 29 March, pp.45-50

研究論文

彦崎 K2 式土器の研究

— 瀬戸内地方における縄文時代後期中葉土器群の変化とその背景 —

小泉翔太

要 旨

本論は、瀬戸内地方の縄文時代後期中葉に位置づけられる彦崎 K2 式土器について、有文土器の型式学的検討から成立と展開過程を明らかにしたうえで、その背景にある地域間関係の動態を隣接地域の土器型式との関係性のありかたから論じるものである。

これまで、彦崎 K2 式の成立段階には永井 V 式・津島岡大 IV 群・四元式の三つの段階が設定されており、彦崎 K2 式も古・新の二細別が可能であることが指摘されてきた。しかし、成立段階の土器群は、器種や属性の量比によって年代差が指摘されるものの、各々が相当程度に重複する部分を有しており、細分あるいは統合できる余地を残していると考えられた。また、彦崎 K2 式の細別のうち、特に新段階に当たる内容は近畿地方の元住吉山 I 式との型式学的異同が問題となっていた。

本論では、瀬戸内地方の後期中葉土器群を対象に、型式学的な分類・変遷の検討によって個別器種の成立・変遷過程と、器種間および他地域の土器型式との関係について分析をおこなった。さらに、各器種・類型の年代差と組成の変化について、出土状況の検討から検証をおこなった。これらの分析により、瀬戸内地方の後期中葉土器群は、永井 V 式—四元式—彦崎 K2 式（古・新）—元住吉山 I 式の、4 型式 5 段階に編年できることを示した。

これをもとに、当該期の土器群の様相と変遷過程について、器種間の関係性と他地域の土器型式との影響関係に焦点を当てて考察を加えた。瀬戸内地方では、後期中葉前半に隣接する地域の影響を受容しつつ、器種間関係が再編されることで、土器様相に大きな変化が生じ、それをもとに地域的独自性が顕著な彦崎 K2 式の成立に至る過程が復元された。しかし、彦崎 K2 式新段階には、再び近畿地方の影響が強まって地域的独自性が低下し、元住吉山 I 式に至ってはほぼ近畿地方と同様の土器様相へと変化することを指摘した。

以上のように、彦崎 K2 式の成立と展開には、東西地域との地域間関係の変化と瀬戸内地方の地域的独自性の生成が目まぐるしく展開してゆくことが読み取られ、後期中葉の画期性の一端を具体的に示した。

キーワード：対象時代：縄文時代、後期中葉

対象地域：瀬戸内地方

研究対象：縄文土器、彦崎 K2 式

はじめに

彦崎 K2 式¹⁾は、瀬戸内地方の縄文時代後期中葉に位置づけられる土器型式である。その端緒は、山内清男による瀬戸内地方土器編年案の提示にあり、この編年案をもとにした「彦崎 K II（竹原）」の概説（鎌木・木村 1956）を経て、現在に引き継がれている。

しかし、この彦崎 K2 式土器を具体的にどのような範疇でとらえるのか、研究者によって若干の齟齬が生じている。その要因としては、第一に基準資料となった岡山市彦崎貝塚の調査内容や資料の全体像が長らく不明であったという、資料的な制約があった。これに加えて、後期中葉という時期的な特徴にも関係している。当該期の西日本の土器群は、後期初頭の磨消縄文

土器群から前葉の緑帯文土器群に至る連続的・広域的な型式変化とは対照的に、大きな型式学的断絶をもって成立・展開することが知られる（泉 1981b、岡田 2008・2020、福永 2020）。彦崎 K2 式もその一つであり、前段階および後続段階の土器群とのつながり、あるいは断絶のあり様について、議論を深めてゆく必要がある。

本稿では、彦崎 K2 式土器について、主として型式学的な分析によって地域的特徴や広域的な類似性を示す要素の特定を進める。これにより、瀬戸内地方における縄文時代後期中葉土器群の系譜と構造を具体的に示すことで、当該期にみられる西日本縄文文化の画期性を評価するための一助としたい。

1. 研究史と課題の整理

(1) 彦崎 K2 式の内容と位置づけ

彦崎 K2 式の提唱 瀬戸内地方には、明治期より先史時代の貝塚が多く分布することが学会に知られていた。しかし、明治・大正期における調査・研究の主眼はもっぱら古人骨の蒐集にあったため、考古学的な検討はごく限られていた。1930 年代に入って貝塚等の資料が報告されるとともに、土器編年研究に関わる論考も漸増した。後期土器に関わるものとして、三森定男による諸型式の提唱（三森 1936）や、佐々木謙・小林行雄による元住吉山式土器の広域類似性の指摘（佐々木・小林 1937、図 1）が挙げられる。

山内清男は、高島黒土遺跡や福田貝塚における自身の発掘調査成果と、酒詰伸男ら東京大学人類学教室による彦崎貝塚の発掘調査出土資料をもとに、1951（昭和 26）年の原始文化第 3 回研究会にて岡山県の縄文後晩期土器編年案を口頭で発表した。ここでは後期に福田 K1（中津）式、福田 K2 式、彦崎 K1 式、彦崎 K2 式、福田 K3 式の 5 型式が設定されたという（鎌木・木村 1956、加納 1999）。この成果は鎌木義昌と木村幹夫の概説（鎌木・木村 1956）に引き継がれ、後期の土器型式の「基本的なもの」として中津（福田 K1）、福田 K II、彦崎 K I、彦崎 K II（竹原）、福田 K III の型式名が、「不確実」として津雲 A、馬取が記載され、各型式が概説された。このとき、彦崎貝塚の出土資料が未公表であったためか、彦崎 K I に代わって津雲 A が図示され、彦崎 K II の解説には竹原貝塚出土土器（木村 1953）が用いられた²⁾。鎌木義昌と高橋護による概説でも、土器型式の内容に関する説明に大きな変化は見られないが、遺跡の存続期間をまとめた図表において、彦崎 K I 式と K II 式の間に「未銘名」とする空白期が置かれている（鎌木・高橋 1965）。

型式内容の整理と新資料の検討 1980（昭和 55）年に、間壁忠彦は竹原貝塚の資料等を用いて彦崎 K II（竹原）式の内容を整理し、さらに周辺地域の型式との対比をおこなった（間壁 1980）。ここでは、形態的特徴として薄手の器壁である点、口縁部肥厚がほとんど見られない点、凹底・丸底ぎみの平底である点など、文様意匠の特徴として横位の直線的な磨消縄文を主体とする点、LR 縄文が主体であり、結節縄文・附加条縄文や巻貝擬縄文もみられる点などを挙げている。また、隣接地域との併行関係では、近畿地方の一乗寺 K I 式・元住吉山 I 式と、九州地方の西平式およびこれに類する中四国西部の岩田第二類、伊吹町式に対比させる考えを示した。そして、彦崎 K II（竹原）式が、

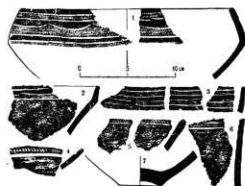


図1 瀬戸内の元住吉山式とされた土器
（佐々木・小林 1936 を改変）

瀬戸内中部のごく限られた分布圏をもつ地域性の強い土器型式として位置づけている。また同論中では、南西四国の諸型式との対比等から、彦崎 K II（竹原）式の細別可能性も示唆する。

高橋護は岡山県史の解説のなかで、かつて「未銘名」とした空白期に該当する資料として「船津原第 1 貝塚下層など」を充てるが、具体的な資料の提示は無いままであった（高橋 1986）。これに関連して、下澤公明は船津原遺跡出土土器について、V 類を未命名、VI 類を彦崎 K II 式に対応させ、彦崎 K II 式直前の土器群の抽出を図っている（下澤 1988）。

泉拓良は近畿地方を中心とした西日本の後期土器編年を再構築してゆくなかで、瀬戸内地方の土器編年にも触れている（泉 1981）。泉は、彦崎 K II 式が近畿の北白川上層式 3 期から一乗寺 K 式にまたがって関連性を有する土器型式であることを指摘し、北白川上層式 3 期に四国・片柏式や「彦崎貝塚出土の結節縄文をもつ波状口縁の土器」を、一乗寺 K 式には主体となる土器は不明としつつ広島県渋谷貝塚 X 類の一部とそれぞれ対比させる考えを示した³⁾。そして、元住吉山 I 式に関しては、広島県大宮遺跡などの事例から瀬戸内地方にも「そのものが分布する」とし、佐々木謙・小林行雄の指摘を追認している。

千葉豊は、後期土器編年の諸課題を論じるなかで、彦崎貝塚の東大調査資料の提示をおこない、彦崎 K1・2 式の型式内容の整理をさらに進めた（千葉 1992、図 2）。千葉は、彦崎 K2 式の内容を幅広く捉え、佐々木・小林や泉が元住吉山式とした土器群も包摂する概念として再提示した。そのうえで、後述の水井 V 式や津島岡大遺跡出土土器を古段階、彦崎貝塚の資料群を中段階、元住吉山 I 式に類似した資料群を新段階とする、3 段階細別を提示した。

こうした研究の進展と相前後して、1990 年代前半

に彦崎 K2 式の成立にかかわる良好な資料群の調査・報告が相次いだ。1990 (平成 2) 年、永井遺跡の膨大な後期土器が報告され、渡部明夫は出土地・層位と型式学的な検討にもとづき、後期前葉から末葉を永井 I ~ IX の 9 時期に細別する編年案を示した (渡部 1990)。渡部は、津雲 A 式を永井 I 式、彦崎 K I 式を永井 II ~ IV 式、彦崎 K II 式を永井 V ~ VI 式、元住吉山 I 式を永井 VII 式に対応させており、彦崎 K I ~ II 式の細別を具体的に示したものと評価できる。

平井勝は、百間川沢田遺跡四元地区の出土土器について検討をおこなった (平井 1993)。平井は、四元地区出土資料の諸特徴が彦崎貝塚出土資料に見られない点を指摘し、これらを四元式として彦崎 K2 に先行する位置付けを与えた。さらに、四元式と永井 V 式、津島岡大遺跡との関連にも触れ、内湾口縁の深鉢 A 類の組成や、広口口縁の深鉢 B 類の口縁部形態・文様の型式学的な位置づけ、縄文の撚り方向や結節縄文の有無などから、永井 V 式→津島岡大遺跡→四元式という編年の序列を提示した。

津島岡大遺跡第 5 次調査では、25a 層・27b 層の 2 層から当該期の資料がまとまって出土した。阿部芳郎は、これらの土器を津島岡大後期第 IV 群 (以下、津島岡大 IV 群と呼称) として分類し、型式と層位による検討から四元式に先行する位置付けを与えた (阿部 1994)。また、その系譜に関して、口縁部外面施文の深鉢に着目し、津雲 A 式から未命名型式を介して連続する可能性を指摘した。同報告で、橋本雄一は口縁部内面に施文する深鉢を取り上げ、その内面文様 (内文) の系譜を九州地方の鐘崎式に求めた (橋本 1994)。そして、文様属性の数量的変化から、永井 V 式から彦

崎 K2 式にかけての変遷を追認した。

基準資料・標識遺跡の再評価 2000 年代には、山内清男が編年研究の基準とした高島黒土遺跡 (矢野ほか 2004) や彦崎貝塚の東大調査資料について報告 (山崎・高橋 2007) と再検討 (山崎 2007) がなされたほか、彦崎貝塚の範囲確認調査 (田島編 2006) 等も行われ、学史的に重要な資料の実態が明らかとなった。

高島黒土遺跡の再報告に際し、原稿・メモ等の諸史料も公開された点は、研究史上特筆すべきである。その中で、山内が残したメモに「彦崎 K1-2 中間 (の式)」との記述があり、高島黒土遺跡の資料によって未命名の型式が仮設されていたことが明らかになった。整理を担った矢野健一らは、8 群 d 類土器と分類した、口縁部外側が肥厚し縄文を施文する一群がこれにあたるものと推定している (矢野ほか 2004)。

(2) 研究史の到達点と課題

以上の研究により、彦崎 K2 式がどのような土器群であるかについては、間壁による竹原貝塚出土資料をもとにした検討を基礎としつつ、基準資料をもとにした千葉や山崎の論考により、一定の共通見解が得られている。

また、彦崎 K2 式の直前段階に関しては、永井 V 式・津島岡大 IV 群・四元式の設定によって、年代的な分離と土器群の様相把握が可能である。さらに、彦崎 K2 式も細別が可能であることが、複数の観点から指摘されている。

いっぽうで、これまでの検討は遺跡単位でのまとまりを前提とした議論によって組み立てられてきた。特に彦崎 K2 式直前段階の検討では、編年は量比の変化



図2 彦崎貝塚の彦崎 K2 式土器 (千葉 1992)

によって傾向として示されるが、その対象とされた各遺跡の出土資料群は包含層や土器だまり、流路といった開放環境下での堆積物であり、資料の性格や時間幅は一定でない。型式学的観点からは、各々が相当程度に重複する部分を有しているように思われ、細分あるいは統合できる余地を残していると考えられる。

また、彦崎 K2 式の新相とされる時期については、近畿地方の元住吉山 I 式と同型式とする考え（泉 1981）と、彦崎 K2 式に含める見解（間壁 1980、千葉 1992・2010）の二者がある。すなわち、両者の型式学的な異同の把握が、各型式の理解を深めるうえで不可欠となる。

さらに、彦崎 K2 式の広域編年との対比、およびその背景にある地域間関係については、十分に議論が及んでいない。冒頭述べたように、後期中葉の西日本では土器の型式変化に画期が認められる。これらは、各地域で個別に生じたものではなく、一定の連動性が認められる（泉 1981、福永 2020）。すなわち、当該期の各地域の土器型式変化にみられる画期性は、地域間関係の変化と密接に関連しているものと予想される。したがって、彦崎 K2 式が隣接する土器型式群とどのような関係性にあったかを捉えることが肝要である。

本稿では、瀬戸内地方の後期中葉土器群を対象に、

型式学的分析から当該期の各器種の変遷および器種構成・器種間関係の変化を明らかにする。これにより、瀬戸内地方における縄文時代後期中葉土器群の編年を示し、その背景にある地域間関係の動態を考察する。以上の検討により、当該期にみられる西日本縄文文化の画期性の実態追究を試みる。

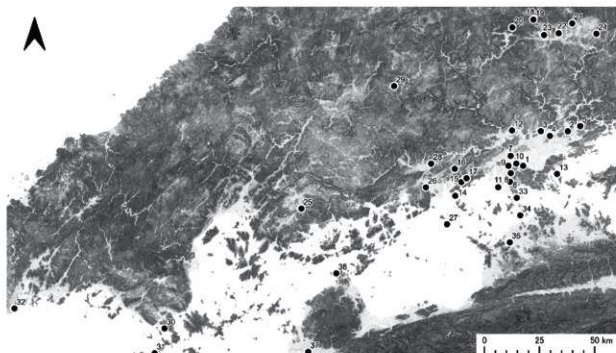
2. 分析

(1) 型式学的検討

本稿で分析対象としたのは、瀬戸内地方に所在する 37 遺跡から出土した、後期中葉に比定される土器資料である（図 3）。これらの土器について、器形および文様の施文される範囲との関係から器種を設定し、各々の細部形態や文様構成、文様意匠などの属性により、細別と型式学的組列の検討をおこなう。

屈曲深鉢 屈曲等によって口縁部・頸部・胴部の三帯に区分される有文深鉢を「屈曲深鉢」とする。口縁部の形態と文様構成によって、I～IV 類に細分する。

屈曲深鉢 I 類は口縁部が肥厚して作出され、主文様と区画文様が配されるもの（図 4-1～4、以下図 4-省略）。口縁端部内面が玉縁状を呈する点も特徴である。（1・2）は口縁部の区画文と単位文の分離が顕著で、口縁部幅も狭いのに対し、（3・4）は単位文が不明瞭



1. 彦崎貝塚 2. 竹原貝塚 3. 津島岡大遺跡 4. 百間川沢田遺跡 5. 新庄西畑田遺跡 6. 溝渚遺跡 7. 船倉貝塚 8. 広江・浜遺跡 9. 福田貝塚 10. 船津原遺跡 11. 上水島遺跡 12. 南清手遺跡 13. 出崎船越遺跡 14. 高島黒土遺跡 15. 津雲貝塚 16. 東大戸（助実）貝塚 17. マキサヤ遺跡 18. 久田原遺跡 19. 久田堀之内遺跡 20. 上野遺跡 21. 龍坂里ヶ坪遺跡 22. 京免遺跡 23. 六番丁塚遺跡 24. 石ヶ坪遺跡 25. 和田平遺跡 26. 洗谷貝塚 27. 平治島北の浜遺跡 28. 大宮遺跡 29. 常楽崎遺跡群 30. 岩田遺跡 31. 田ノ瀬遺跡 32. 月崎遺跡 33. 大洲浜遺跡 34. 砂津ナカダ浜遺跡 35. 永井遺跡 36. 江口貝塚 37. 井門Ⅱ遺跡

図3 分析対象遺跡の位置

化して横位展開の傾向が強まり、口縁部も幅広化する型式変化を想定できる。後者は、後述する屈曲深鉢Ⅱ類と近い特徴を示すようになる。

阿部芳郎はこの類の系譜を津雲A式(図6-1・2)等の狭義の緑帯文土器に求めた(阿部1994)。しかし、山崎真治が指摘するように、彦崎K1式では肥厚口縁の土器は退化化しており(山崎2007)、これらを繋ぐ類型も想定しがたい。また、津雲A式の膨隆・屈折口縁に比べて、屈曲深鉢Ⅰ類は平板的な肥厚で、頸部からスムーズな屈折部を作出している。こうした特徴は、口縁部内面の玉縁状肥厚とあわせて、四国南部・片柏式や九州東北部・北久根山式併行の有文深鉢(図6-3~5)にみられる口縁部成形技法と類似しており、これらとの関連で捉えるべきものと考えられる。ただし、屈曲深鉢Ⅰ類は沈線による主文様・区画文の構成をとるのに対して、片柏式等では平行線文・クランク文を基調としており、この間にも乖離が大きい。現状では、これらの具体的な成立過程は課題とせざるを得ないが、瀬戸内~九州の広い範囲において、狭義の緑帯文土器とは異なる系譜下の肥厚口縁をもった土器群があらたに出現するものと考えられる。

屈曲深鉢Ⅱ類は口縁部がゆるく内湾して作出されるもの。口縁部の文様構成によって細分する。Ⅱa類は多重沈線文・区画文・平行沈線文などが配されるもので、四元式の標徴となる類型である(5~10)。単位文は小J字文が通有で、これを頂点とした三角形区画文が横位に連続する構成をとる。胴部まで遺存する例は少ないが、四元例(7)から、胴部にも口縁部と同様の文様が展開するものと想定される。器形や文様施文域の構成は、近畿地方の北白川上層式3b期⁶やこれに併行する北陸西部のもの(図6-6・7)と近似し、その影響下で成立したものと捉えうる。しかし、単位文と区画文の連繋が強く、沈線の多重化が乏しいほか、口縁部を丸くおさめる点に差異が認められ、地域的な変異が明確である。このうち文様構成に関しては、北久根山式併行の有文深鉢(図6-8・9)と近く、いずれもその系譜を後述する広口浅鉢Ⅰ・Ⅱ類を介して、九州・鐘崎式(図6-10・11)に求める。(9・10)は、文様意匠が直線化・硬直化し、平行線化が進展している点から、新相に位置づけられる。(9)に新出属性の多段結節縄文が見られる点も、これを補強しよう。

Ⅱb類は口縁部直下に1条の沈線がめぐり、それ以下を縄文帯とするもの(11~13)。彦崎K2式を標徴する類型である。胴部まで遺存する例がないが、大阪府淡輪遺跡の例(図6-12)から、胴部を縄文のみ

とするのが通例と想定される。縄文の撚り方向がLR優勢となる点や、内湾する口縁部形態からみて、Ⅱa類と同様に北白川上層式3b期の深鉢からの影響がうかがえるが、縄文帯を主たる文様とする点で後述の広口深鉢Ⅰ・Ⅱ類と近縁で、より地域的な様相の顕著な類型と捉えられよう。直線的な文様構成をとる点や、結節縄文・押引沈線など新出属性がみられる点から、Ⅱa類の新相に併行すると考えられる。

屈曲深鉢Ⅲ類は口頸部が後をもって内屈したのち、口縁部がゆるく内湾して作出されるもの(14~17)。平行帯を基調とする文様構成で、磨消縄文帯を有し、沈線内刺突や結節縄文・絡け縄を多用する。Ⅰ・Ⅱa類から、主文様となる単位文が簡略化・小型化したことによって、横位の連繋がより顕著化したものと理解することができる。この点、Ⅱa類新相と共通性が高く、Ⅱb類と同様にこれらに併行するものと考えられる。Ⅲ類の諸特徴は、岡田憲一が「細下層期」の標徴とした内湾内屈口縁深鉢(図6-13、岡田2020)と共通するもので、瀬戸内で成立した本類が近畿へと波及したものと考えられる。他方、四元例(16)の胴部文様にみる三角形文は、九州東北部・松丸式との類縁関係を指摘できよう(図6-14・15)。

屈曲深鉢Ⅳ類は口頸部がく字形に屈曲するもので、多段の磨消縄文帯を配するもの。沈線文のみのものをⅣa類(18~20)、単位文として隆帯文を付すものをⅣb類(21・22)とする。Ⅳa類は、Ⅲ類と文様構成が類似し、口縁部幅が狭くなって文様意匠も直線的に硬直化したものとして、連続的な型式変化をうかがえる。また、こうした型式変化の方向性から、縄文・擬縄文帯と無文帯が多段に重畳する(18・19)は古相、縄文・擬縄文帯が上下一対に整理された(20)は新相に位置づけられる。

Ⅳb類は、近畿地方の一乗寺K式の標徴となる有文深鉢(図6-16)と同様の特徴をもつ。貼付隆帯文は上述の類型にはみられない新出の属性であり、近畿地方の影響によって出現するものと考えられる。ただし、瀬戸内では出土数が少なく主体的な器種ではない可能性がある。

屈曲深鉢Ⅴ類は口頸部がく字形に屈曲するもので、口縁部の上下端に平行沈線がめぐり、中央部を無文帯とするもの。沈線文の単位文をもつものをⅤa類(23・24)、隆帯文のものをⅤb類(25~27)とする。Ⅴ類は近畿地方の一乗寺K式から元住吉山I式(図6-17・18)との共通性が高く、特にⅤb類では縄文施文が乏しい点を除き、近畿地方のものと弁別することが

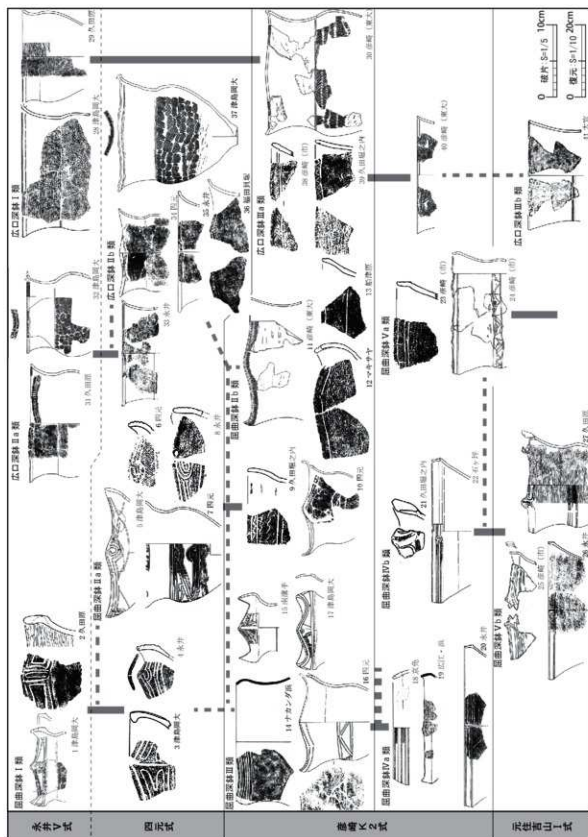


図 4 瀬戸内地方の後期中土器群の分類と変遷 (1) (各報告書等より引用)

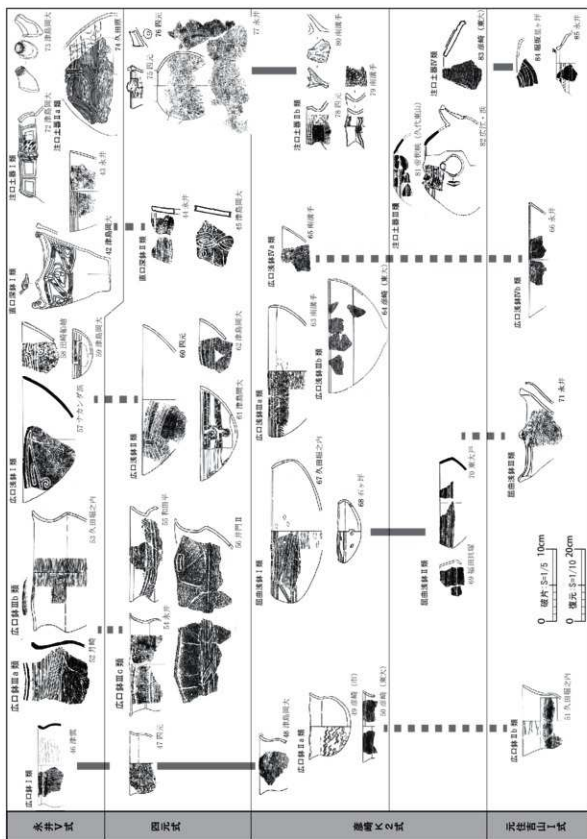


図5 瀬戸内地方の後期中葉土器群の分類と変遷 (2) (各報告書等より引用)

困難である。近畿での型式変化（深井・岡田 1994、小泉 2014）を参照すると、V a 類が V b 類より先行するものと想定される。また、V b 類でもノ字状・I 字状の隆帯文を付す（25・26）は古相に、指頭状に発達した（27）は新相に位置づけられる。

広口深鉢 頸胸部界にくびれをもち、口頸部が外反して立ち上がる有文深鉢を「広口深鉢」とする。口縁部の形態と文様構成によって、I～IV 類に細分する。

広口深鉢 I 類は口縁部外面に縄文のみを施文するもの（28～30）。胴部も縄文のみで、斜縄文のほか、異方向回転による羽状縄文もみられる。口縁部形態に着目すると、外面肥厚が明瞭で、縄文施文部が四角く突出するような形態を呈するもの（28・29）から、肥厚が失われて口縁部付近に狭い縄文帯を有するもの（30）へ型式変化すると考えられる。この変化は漸移的で、中間的な様相を示すものも多いため、個々の位置づけには困難が伴う。

広口深鉢 II 類は、口縁部内外面に肥厚し、内面に沈線文をもつもの。胴部は I 類と同様に縄文のみが施される。口縁部内面の文様構成によって細分する。II a 類は内面に 2 条以上の平行沈線を配し、縦位短沈線文や J 字文等の単位文を配するもの（31～33）。文様意匠や文様構成に屈曲深鉢 I 類・II a 類との共通性が高く、これらと共時的な関係にあるものと考えられる。

II b 類は、内面に 1 条の沈線を巡らせ、クランク文や J 字文、玉抱き文など小ぶりの単位文を配するもの（34～37）。II a 類の口縁部文様が縮小したものとも理解できるが、それだけでなく、内文の文様意匠は、橋本雄一の指摘するように鐘崎式（図 6-10・11）との関連性をうかがえる（橋本 1994）。加えて、クランク文・鉤状文の系譜を考えるうえで、平城 II 式とされてきたものの一部（図 6-20）にみられる口縁部内面文様との関連についても考慮すべきであろう⁹⁾。

広口深鉢 III 類は口縁部の肥厚が無いもので、内外面に幅の狭い縄文帯を巡らせるもの。施文原体によって細分し、結節縄文・絡け縄を含む縄文施文のものを III a 類（38～40）、キザミ施文のものを III b 類（41）とする。III a 類は胴部も縄文施文のみとするのが通有であり、II b 類が口縁部の肥厚と内文を喪失することで成立するものと考えられる。いっぽう III b 類は胴部に平行磨消縄文帯をもつ点で、屈曲深鉢 V 類と共通性を有し、かつ元住吉山 I 式（図 6-19）とも強い縁縁関係を示す。III b 類にキザミという新出の属性が用いられる点も考慮すると、III a 類の形態的特徴を基礎としつつ、他類や他型式からの影響によって III b 類が新たに成立する

ものと考えられる。

直口深鉢 体部に屈曲がなくバケツ形に開く形態の有文深鉢を「直口深鉢」とする。器形、文様構成ともに関東地方の堀之内 2 式に系譜を求めることができる。文様構成によって I・II 類に細別する。

直口深鉢 I 類は、多重沈線によって横位展開の文様をほどこすもの（図 5-42・43、以下図 5-省略）。津島岡大例（42）は全形のわかる好例で、突起文の形態から関東・堀之内 2 式新段階に併行する位置づけを与えられる。しかし、内面文様が発達せず、体部文様意匠も関東地方のものとは懸隔が大きい。いっぽう近畿地方の北白川上層式 3a 期や北陸西部の同様の器種には類似するものがみられる（図 6-21・22）ことから、堀之内 2 式後半に併行する段階で、北陸以西において在地化が進化したものの影響が瀬戸内地方まで波及するものと捉えたい。

直口深鉢 II 類は、条線文によって文様をほどこすもの（44・45）。小破片のみで全体の文様構成が判明するものを欠くが、平行帯や連鎖状のモチーフから、堀之内 2 式末～加曾利 B1 式初頭の関東～信越地方のものとも共通する特徴をもつ。関東地方の編年研究を参照すると、I 類よりも後出する位置づけを与えよう。

広口鉢 頸胸部界にくびれをもち、口頸部が外反して立ち上がるもので、口径より器高が小さく扁平なプローションとなる有文鉢を「広口鉢」とする。口縁部および胴部の形態と文様意匠によって細別する。

広口鉢 I 類は、口縁部外面に縄文のみを施文するもの。広口深鉢 I 類と同様の特徴を有し、型式変化についても外面肥厚が明瞭なもの（46）から、肥厚を失っていく変化（47・48）が想定される。

広口鉢 II 類は、口縁部の肥厚がみられないもの。胴部が球形で縄文のみをほどこす II a 類（49・50）と、平行磨消縄文帯によって施文する II b 類（51）に細分する。II a 類は I 類の口縁部肥厚と縄文施文が失われることで成立するものと考えられ、一部に広口深鉢 III 類の影響によって内面施文をもつものもみられる（50）。II b 類は胴部に平行磨消縄文帯をもち、広口深鉢 III b 類と同様に元住吉山 I 式（図 6-26）に対比することができる。

広口鉢 III 類は、強く屈曲する胴部上半に多重沈線文・磨消縄文による文様意匠を展開するもの。九州北東部の鐘崎式～北久根山式併行の有文鉢と同様の特徴を示す。器形および胴部文様構成によって細分する。III a 類は、口頸部が短く外折し、胴部には磨消縄文または多重沈線により横位展開の文様意匠を配するもの

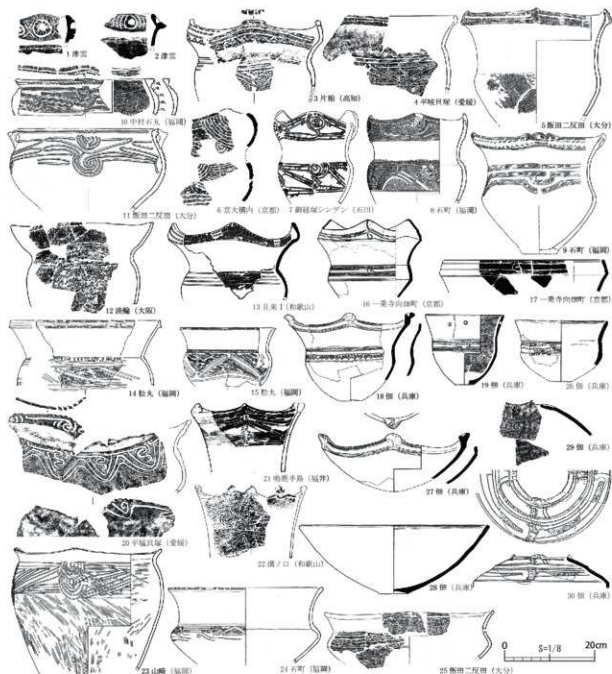


図6 彦崎 K2 に関連する資料 (各報告書等より引用)

(52)。鐘崎Ⅱ・Ⅲ式から直接的に系譜するが、文様意匠の直線化・硬直化が著しく、「鐘崎式最新相」(水ノ江・前迫 2010、図 6-23) とされた段階に位置づけうる。

Ⅲ b 類は頸部が長く外反し、胴部には縄文地に沈線文による文様意匠を配するもの(53)。事例数は少ないが、頸部の長い形態や、縄文地とする点で平城貝塚例(図 6-20)や片柏式(同 3・4)との関連性がうかがえる。

Ⅲ c 類はⅢ b 類と同様に頸部が長く外反するもので、強く屈曲する狭い胴部上半に磨消縄文意匠を配するも

の(54~56)。北久根山式併行の有文鉢に対比でき、両者に地域の変異は認めがたい(図 6-24・25)。

広口浅鉢 体部に屈曲がなく、口縁部がゆるく内湾しつつ立ち上がる皿形またはボウル形の有文浅鉢を「広口浅鉢」とする。文様施文手法と文様構成によってⅠ~Ⅳ類に細分する。

広口浅鉢Ⅰ類は、2条沈線の細い磨消縄文帯によって L 字や鉤手状入組文が付帯する逆三角形意匠や方形区画文を横位に展開するもの(57~59)。文様意匠は九州の小池原上層式~鐘崎式の浅鉢に系譜を求める

ことができ、この文様が外面上方に幅狭化してゆくことで成立するものと考えられる。

広口浅鉢Ⅱ類は、多重沈線の磨消縄文帯によって横位連繋の文様意匠を施文するもの（60～62）。Ⅰ類の文様意匠が多重線化することで成立すると捉えられるが、こうした意匠は前述のように屈曲深鉢Ⅱ類とも共通性が高い。

広口浅鉢Ⅲ類は、平行沈線の磨消縄文帯によって文様意匠を描くもの。文様構成によって細分し、屈曲深鉢Ⅲ類と同じく多段の平行磨消縄文帯をもつものをⅢa類（63）、屈曲深鉢Ⅱb類と同じく幅広い縄文帯をもつものをⅢb類（64）とする。いずれも組成に占める割合は低く、型式変化も捉えがたいことから、有文深鉢から派生的に生じた器種と理解できる。

広口浅鉢Ⅳ類は、皿形を呈し口縁部内面に文様を施文するもの。施文原体によって細分し、結節縄文・絡け縄を含む縄文施文のものをⅣa類（65）、キザミ施文のものをⅣb類（66）とする。広口深鉢Ⅲ類の細分と対応するもので、同等の型式変化が想定される。Ⅳb類は元住吉山Ⅰ式（図6-28）に対比できる。

屈曲浅鉢 体部が開口口縁部が屈曲するものを「屈曲浅鉢」とする。口縁部形態と文様構成によって、Ⅰ～Ⅲ類に細分する。

屈曲浅鉢Ⅰ類は、口頭部界で内屈し、ゆるく湾曲しつつ立ち上がるもの（67・68）。平行帯を基調とする磨消縄文意匠をもち、屈曲深鉢Ⅲ類と形態・文様意匠の共通性が高い。また、（67）は九州北東部・松丸式（図6-15）の胴部文様意匠と類似関係がうかがえる。

屈曲浅鉢Ⅱ類は、口頭部がく字形に屈曲するもので、多段の磨消縄文帯を配するもの（69・70）。屈曲深鉢Ⅳ類との共通性が高く、その型式変化を参照すると屈曲浅鉢Ⅰ類からの連続的な型式変化を想定できる。

屈曲浅鉢Ⅲ類は、口頭部がく字形に屈曲するもので、口縁部の上下端に平行沈線がめぐり、中央部を無文帯とするもの（71）。屈曲深鉢Ⅴb類と同様の特徴を有し、元住吉山Ⅰ式（図6-27）に対比しうるものである。

注口土器 口縁部がすぼまる壺形の器形で、注口部を有するものと考えられるものを「注口土器」とする。器形および文様構成によって、Ⅰ～Ⅳ類に細別する。

注口土器Ⅰ類は、口縁部が内湾して皿形を呈するもの（72）。その他の器種にはみられないような区画文と隆帯文をもち、独自性が強く系譜関係も明らかでない。これに対応する注口部として、付け根が下膨れ状を呈して先端部に縄文帯を有するもの（73）を想定するが、類例の増加をまって改めて検討する必要がある。

注口土器Ⅱ類は体部が球形または擬位に間延びしたゆるい算盤玉形を呈し、口頭部が立ち上がるもの。細長い筒状の注口部が取り付け。体部には、曲線的な文様意匠を配する。文様描出技法によって細別し、櫛歯状工具による条線文のものをⅡa類（74～77）、多重沈線の磨消縄文によるものをⅡb類（78～80）とする。Ⅱa類は、形態・文様ともに堀之内2式末～加曽利B1式に盛行する注口土器とよく類似し、その影響が瀬戸内地方にも顕著であったことがうかがえる。条線文の縁取りが無く、体部に屈曲のある（74）が古相に、沈線によって条線文の縁取りがなされる（77）が新相に位置づけうる。Ⅱb類は、形態や文様構成はⅡa類からの系譜を引くが、平行磨消縄文や区画文といった、在地的な意匠に転換したものと考えられる。

注口土器Ⅲ類は、体部中半で屈曲し、上半がドーム状を呈するもので、体部上半に平行磨消縄文帯による文様意匠を展開するもの（81・82）。一乗寺K式の注口土器（図6-29）に類似し、巻貝擬縄文や二枚貝キザミを多用する点も共通性が高い。

注口土器Ⅳ類は、体部中半で屈曲する算盤玉形を呈し、体部上半に段をもつもの（83～85）。体部上半に平行磨消縄文帯による文様意匠をもつ。注口土器Ⅲ類とは形態・文様に共通性が認められ、これが扁平化して中間に段が形成されることで成立するものと考えられる。一乗寺K式から元住吉山Ⅰ式にかけて盛行する注口土器（図6-30）と同様の特徴をもち、Ⅲ類とともに近畿からの影響によって出現・展開するものと考えられる。

（2）出土状況の検討

各器種の分類と変遷について、これまで基準資料として位置付けられてきた資料群と、一括性のある資料および層位の出土事例から検討をおこなう（表1）。

まず、彦崎 K2 式の基準資料となった彦崎貝塚の東大調査資料をみると、屈曲深鉢Ⅱb・Ⅲ類、広口深鉢Ⅰ・Ⅲa類、広口鉢Ⅰ・Ⅱa類、広口浅鉢Ⅲb・Ⅳa類、注口土器Ⅲ・Ⅳ類が主たる器種となっており、まとまりをもつ資料と評価できる。したがって、これらを彦崎 K2 式の中核的な器種と捉えて良いだろう。南溝手遺跡出土土器は、包含層からの出土ではあるが、屈曲深鉢Ⅱb・Ⅲ類、広口深鉢Ⅲa類、広口鉢Ⅰ・Ⅱa類、広口浅鉢Ⅲb・Ⅳa類、注口土器Ⅱb類が組成し、彦崎 K2 式のなかでも古段階にまとまるものと位置づけられる。

次に、彦崎 K2 式に先行するものと位置づけられて

その祖型となる九州・鐘崎式に文様系譜を求めることができる。九州系の有文鉢・浅鉢は、彦崎 K1 式期から瀬戸内地方の土器組成に含まれており、それが有文深鉢の文様へ転化されるような、器種間関係の再編がおこなわれたと理解できよう。他方では、直口深鉢や注口土器にみられるように、近畿地方を介して関東・堀之内 2 式後半～末に位置づける器種が流入していることも明らかである。ただし、関東のものとの類似度は低く、近畿から東海・北陸西部の同類の土器群に対比しうるもので占められる。すなわち、永井 V 式では、従来の器種構成を引き継ぎつつも器種間関係の再編がみられ、さらに他地域の影響も広く受容して異型式由来の器種が並立しており、新たな土器群の成立へと至る過渡的段階としての様相を見出すことができる。

永井 V 式の広域編年上の位置としては、広口鉢Ⅲ類から九州北部・鐘崎式最新相（水ノ江・前迫 2010）と、直口深鉢・注口土器Ⅰ類から近畿・北白川上層式 3a 期と、それぞれ接点を有すると考えられる。したがって、近畿地方よりも瀬戸内地方において口縁部文様の再出現が先行する可能性があるが、北久根山式や片粕式の成立過程とともに、改めて検討する必要がある。

永井 V 式から四元式へは、連続的な型式変化を示す器種が多く、型式としての安定性がうかがえる。そのなかで、四元式の標徴となる屈曲深鉢Ⅱ a 型の成立には、近畿・北白川上層式 3b 期の有文深鉢からの影響が明確で、前段階に引き続き近畿から新たな器種の流入が続いていることが読み取られよう。しかし、ここでも文様意匠の点では地域的独自性を維持しており、有文浅鉢Ⅱ類に用いられる九州系磨縄文意匠が取り入れられている。したがって、永井 V 式にみられた過渡的様相が四元式にも引き続き認められ、在地的な特徴をもつ器種と、他地域に系譜する器種が並立する様相が顕著に認められる。

このように、永井 V 式から四元式にかけて、在地的な様相を基礎としつつ、東西両地域の影響を取り入れることで展開した土器群は、彦崎 K2 式段階に至って、これを標徴する屈曲深鉢Ⅱ b 類や、同種の文様意匠をもつ広口浅鉢Ⅲ b 類が成立し、地域的独自性がいっそう明確化する。また、屈曲深鉢Ⅲ類は、従前の屈曲深鉢Ⅰ・Ⅱ a 類の要素が混交することによって成立したものと理解したが、近畿・一乗寺 K 式の成立にあたっては、「細下層期」（岡田 2020）にこの屈曲深鉢Ⅲ類が瀬戸内から近畿に影響を与えることが重要な契機となる（岡田 2008・2020、小泉 2014）。他方で、九州地方との関わりは潜在化する傾向を示し、従前の広口鉢Ⅲ

類にみような直接的な器種の受容としてではなく、文様意匠レベルでの限定的な影響関係に留まってゆくことが指摘できる。

彦崎 K2 式新段階に至ると、地域的独自性が継続して認められる屈曲深鉢Ⅳ a 類や屈曲浅鉢Ⅱ類が組成として含まれるものの、他方で近畿・一乗寺 K 式と共通性の高い屈曲深鉢Ⅳ b・Ⅴ a 類や注口土器Ⅲ・Ⅳ類が顕在化してくる状況がうかがえる。すなわち、相対的に地域的独自性が低下し、近畿地方で成立・展開してきた器種の受容によって類縁関係が漸増していくことが読み取られよう。

続く元住吉山Ⅰ式の段階では、組成する有文器種はいずれも近畿地方との地域差を見出すことが難しく、同一型式の範疇に収まるような様相へと収斂する。こうした実態に鑑みれば、この段階まで彦崎 K2 式の範囲を拡大して、地域型式名を冠する必要性は低く見積もられよう。なお、当該期には遺跡数が非常に少なく、土器様相をうかがうことのできる資料も僅少である。今後の資料増加によって、地域性の検討などを改めておこなう必要があらう。

後続する後期後葉・四線文土器期は、遺跡数が乏しいことが指摘されており、後期における遺跡動態の画期として評価されている（山本 2020・山口 2024）。土器様相の点でも、引き続き瀬戸内地方の地域的独自性は低調で、近畿地方と同型式の範疇に収まるように看取される。本稿の検討結果からみると、この後期後葉の状況は、後期中葉後半の彦崎 K2 式新段階に端を発するものと考えられよう。この点で、彦崎 K2 式の成立と展開は、単に土器様相だけに転換がみられるだけでなく、地域間関係の動態や遺跡形成・集落動態においても転換期となるものと位置づけられよう。

おわりに

本稿では、瀬戸内地方の縄文時代後期中葉に位置づけられる彦崎 K2 式土器の成立と展開について、有文土器の型式分類と変遷から検討をおこなった。その結果、永井 V 式から元住吉山Ⅰ式にかけての 4 型式 5 段階の編年を示し、各段階の土器群の様相から地域間関係の動態を復元した。彦崎 K2 式の成立と展開には、東西地域との地域間関係の変化と瀬戸内地方の地域的独自性の生成が目まぐるしく展開してゆくことが読み取られ、後期中葉の画期性的一端を具体的に示すことが出来たと考える。

いっぽうで、本論では主として瀬戸内地方と近畿地方・九州北部との対比を取り扱ったが、隣接する山

陸地方や四国西南部の土器編年との詳細な対比を成しえていない。これらの地域との関係性を明らかにすることで、さらに西日本における後期中葉土器群の画期とその評価を進めることができよう。また、遺跡群の動態をはじめ集落構造や生業戦略については、ほとんど触れることが出来なかった。今後の課題とした。

謝辞

本稿は、2014 年度に提出した修士論文の一部をもとに、大幅に加除修正をおこなったものである。本稿を成すにあたっては、以下の方々に指導・助言を頂いた。泉拓良先生、上原真人先生、矢野健一先生、千葉豊先生、吉井秀夫先生、(故) 阪口英毅先生、(故) 木下哲夫氏、瀬口眞司氏、岡田憲一氏、森本隆寛氏、妹尾裕介氏、木村啓章氏、高野紗奈江氏、福永将大氏

また、資料調査に際して、下記の機関・個人に便宜を図って頂いた。

愛南町教育委員会、大分県教育委員会、岡山県古代吉備文化財センター、岡山市瀬戸歴史文化資料館、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、香川県埋蔵文化財センター、笠岡市教育委員会、京都大学考古学研究室、京都大学総合博物館、東京大学総合研究博物館、奈良文化財研究所、安東康弘氏、田島正憲氏

以上、未筆ながら記して感謝申し上げます。

献辞

矢野健一先生のご退官を心よりお祝い申し上げます。矢野先生には、関西縄文文化研究会の活動をはじめ、杉沢遺跡の発掘調査や特殊講義等の場を通じ、様々な機会にご指導を賜りました。本稿の元となった修士論文も、かつて関西縄文研にて発表をさせて頂いたものです。また、私がとある不躰なお願いに上がった際には、「人生とはルールのあるゲームであり、ゲームに負けたときは、その負けを受け入れなければならない」と説いて下さり、それが大切な人生の転機ともなりました。矢野先生の益々のご活躍を祈念して小論を献じるとともに、今後とも変わらずご指導賜りますようお願い申し上げます。

註

- 1) 本稿では、彦崎 K 式の細別として算用数字の彦崎 K1・K2 式を用いることとし、研究史における説明に限って各論者の表記のままとする。
- 2) 千葉豊が指摘するように、木村幹夫が提唱した「竹原 A 下層式」(木村 1953) と同等のものと理解で

きる(千葉 1992)。

- 3) 平井勝は、出崎船越遺跡出土土器を報告するなかで、この点を追認している(平井・保田 1988)。
- 4) 近畿地方の北白川上層式 3 期の型式呼称については議論のあるところだが(玉田・岡田 2010)、本論では狭義の緑帯文土器の様相をこの段階を「北白川上層式 3a 期」(小泉 2019 の「3 期古」に相当)、内層口縁深鉢を特徴とする広義の北白川上層式 3 期を「北白川上層式 3b 期」と仮称する。
- 5) ここでは平城式をめぐる議論には踏み込まないが、筆者は平城Ⅰ式と平城Ⅱ式は系譜差をもつものと理解しており、特に平城Ⅱ式とされる土器群は複数型式にまたがる時間幅を有するものと考えている。

参考文献

- 阿部芳郎 1994 「後期第Ⅳ群土器の型式学的検討」『津島岡大道跡 4』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 石井 寛 1984 「堀之内 2 式土器の研究(予察)」『調査研究集録』5 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 泉 拓良 1981 「近畿地方の土器」『縄文文化の研究 4 縄文土器Ⅱ』雄山閣
- 泉 拓良 1989 「緑帯文土器様式」『縄文土器大観 4 後期 晩期 続縄文』小学館
- 大飼徹夫 2007 「縄文後期・愛媛県「平城式土器」の型式分類」『縄文時代』第 18 号 縄文時代文化研究会
- 岡田憲一 2008 「近畿地方最後の縄の系譜」『文化財学としての考古学』泉拓良先生還暦記念事業会
- 岡田憲一 2020 「『平行磨消縄文土器群』の成立」『関西縄文時代研究の泉を拓く』関西縄文文化研究会
- 岡田憲一・深井明比古 1998 「縄遺跡出土縄文土器の編年」『縄遺跡』兵庫県教育委員会
- 加納 実 1999 「第 3 回原始文化研究会の岡本勇先生のメモ」『土曜考古』第 23 号
- 鎌木義昌・木村幹夫 1956 「中国」『日本考古学講座 3 縄文文化』河出書房
- 鎌木義昌・高橋護 1965 「縄文文化の発展と地域性—瀬戸内—」『日本の考古学Ⅱ縄文時代』河出書房
- 川越哲志ほか 1984 「福山市宇治島北の浜遺跡の第 1 次発掘調査」『内海文化研究紀要』第 12 号
- 木村剛朗 1995 「四国西南沿海部の先史文化」『縄多埋文研』
- 木村幹夫 1953 「岡山県上道郡竹原貝塚について」『吉備考古』第 87 号
- 小泉翔太 2014 「北部地区、南部地区出土土器の位置

- づけ」『京都市一乗寺向畑遺跡出土縄文時代資料
一考察編一』京都大学大学院文学研究科考古学研
究室
- 小泉翔太 2019「北白川上層式の様式構造について
一京大植物園遺跡出土土器の再検討から一」『東海
からみた後期前業土器群その 2』東海縄文研究会
- 幸泉満夫 2014「津雲 A 式土器の型式学的研究」『古
文化談義』第 71 集 九州古文化研究会
- 幸泉満夫 2016「彦崎 K1 式土器の型式学的研究」『古
文化談義』第 75 集 九州古文化研究会
- 小南裕一 2013「東北九州における縄文後期中業土
器に関する一考察」『私の考古学』丹羽祐一先生退任記
念事業会
- 佐々木謙・小林行雄 1937「出雲国森山村崎々鼻洞窟
及び権現山洞窟遺跡」『考古学』第 8 巻 10
- 澤下孝信 2016「縄文・後期中業の様相一北久根山式
土器を中心として一」『研究紀要』第 20 号 下関市
立考古博物館
- 潮見 浩 1960「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の
研究」『広島大学文学部紀要』第 18 号
- 田中良之・松永幸男 1984「広域土器分布圏の諸相一
縄文時代後期西日本における類似様式の並立」『古
文化談義』第 14 集九州古文化研究会
- 玉田芳美・岡田憲一 2010「近畿」『西日本の縄文土器
後期』真陽社
- 千葉 豊 1987「備前市新庄西畑田遺跡採集の縄文土
器」『古代吉備』第 9 集 古代吉備研究会
- 千葉 豊 1989「緑帯文系土器群の成立と展開」『史林』
72 巻 6 号
- 千葉 豊 1992「西日本縄文後期土器の二三の問題」『古
代吉備』第 9 集 古代吉備研究会
- 千葉 豊 2007「高知平野における縄文後期前・中業
の土器編年」『縄文時代』第 18 号 縄文時代文化研
究会
- 千葉 豊 2010「山陽」『西日本の縄文土器 後期』真
陽社
- 千葉 豊 (編) 2010「西日本の縄文土器 後期」真陽
社
- 橋本雄一 1994「彦崎 K2 式に先行する土器群について」
『津島岡大遺跡 4』岡山大学埋蔵文化財調査研究セン
ター
- 林 潤也 2002「北久根山式土器をめぐる諸問題」『四
国とその周辺の考古学』
- 平井 勝 1993「縄文後期・四元式の提唱一彦崎 K2
式に先行する土器群について一」『古代吉備』第 15
集 古代吉備研究会
- 平井 勝・安田義治 1987「玉野市出崎船越遺跡出土
の遺物」『古代吉備』第 9 集 古代吉備研究会
- 福永将大 2016「北久根山式土器の再検討」『九州考古
学』67 九州考古学会
- 福永将大 2020「東と西の縄文文化一縄文後期社会構
造の研究一」雄山閣
- 福永将大 2024「西平式土器の成立と展開」『東アジア
の新たな地平 上』中国書店
- 前田敬彦・千葉豊 1999「海田市且来 I 遺跡出土の縄
文土器」『古代文化』第 51 巻第 3 号
- 間壁忠彦 1980「縄文後期彦崎 K (竹原) 式をめぐる」
『倉敷考古館研究集報』第 15 号
- 水ノ江和同 1992「西平式土器に関する諸問題」『九州
考古学』第 67 号
- 水ノ江和同・前田亮一 2010「1. 九州」『西日本の縄文
土器 後期』真陽社
- 山口雄二 2024「中部瀬戸内地域における凹線文系遺
跡をめぐる論点」『中四国の凹線文系土器群』中四国縄
文研究会
- 山崎真治 2007「彦崎諸型式の再検討」『彦崎貝塚の考
古学的研究』東京大学総合研究博物館
- 山下大輔 2002「関西大学博物館所蔵の津雲貝塚出土
資料」『関西大学博物館紀要』8 関西大学博物館
※発掘調査報告書等は省略

西北部九州沿岸における縄文貝塚研究試論

福永将大

要 旨

本稿は、西北部九州沿岸における縄文貝塚をケーススタディとして、出土した貝類の膨大なデータに対して多変量解析（主成分分析）を行い、出土貝類による貝塚の分類やその性格の時空間的変動の把握を試みるものである。

九州における縄文貝塚の研究は古く、これまで多くの研究成果の蓄積がある。しかし、出土貝類の分析について言えば、環境変動や時空間的変動を特徴的に示すような特定の貝類に着目して議論されてきており、分析的な課題があると考えられる。そこで本稿では、西北部九州沿岸に所在する縄文貝塚 11 遺跡から出土した貝類すべてを対象として主成分分析を行い、できる限り情報を失うことなく、データを集約的に分析することとした。

分析の結果、対象とした多くの貝塚は、出土貝類の質的・量的な状況から、同じグループとしてまとめられる一方、縄文時代後期に属する桑原飛騨貝塚・天神山貝塚・岐志元村遺跡・赤松海岸遺跡・佐賀貝塚の 5 つの貝塚に関しては、それぞれ異なった挙動を示し、他の貝塚と区別されることがわかった。これら 5 つの貝塚は、いずれも縄文時代後期以降に形成された貝塚で、多様な貝類を採集しており、かつ各貝塚ごとに特徴的な貝を採集している点が共通している。こうした分析結果から、縄文時代後期以降に貝類採集活動の変異を見出し、各地域で採集可能な貝類を、あまり特定の貝種に固執することなく、幅広く採集するようになった可能性を指摘した。

キーワード：縄文時代、西北部九州、貝塚

はじめに

貝塚は、当時の古環境や生業活動を復元するための情報の宝庫と言える。そのため、縄文時代の研究では古くから分析対象として注目されてきており、九州においても例外ではない。貝塚から出土する土器・石器・骨角器などの人工遺物はもちろんのこと、貝塚を構成する貝類や魚骨、獣骨などの食料残滓物としての自然遺物も重要な研究対象とされてきた。

本稿では、これらの中でも特に貝類に着目して分析を行う。貝塚から出土する貝類は多様性に富み、そのデータ量は膨大である場合が多い。そのため、これまでの研究では、環境や採集活動の変化を示す特定の貝類やその構成比に着目して議論されることが多かったように思う。こうした先学の研究成果によって、縄文時代における古環境や生業活動の時間的・空間的様態が明らかにされてきた一方で、議論の中では捨象されてしまった貝類が存在することも確かである。貝塚から当時の古環境や生業活動を復元する上で、出土した貝類すべてのデータを対象とした定量的分析が理想的であることは言うまでもなからう。

以上の問題意識より、本稿では、西北部九州沿岸における縄文貝塚をケーススタディとして、出土した貝

類の膨大なデータに対して多変量解析（主成分分析）を行い、出土貝類による貝塚の分類やその性格の時空間的変動の把握を試みる。

1. 九州縄文貝塚研究の現状と課題

九州における縄文貝塚の研究は古く、1879（明治 12）年のエドワード・S. モース氏による熊本県大野貝塚の調査にはじまる。その後も、小林久雄氏が熊本県阿高貝塚と御領貝塚の分析から九州縄文土器編年の構築を試みるなど（小林 1931）、九州縄文時代研究の進展は、貝塚の調査研究によるところが多かったといっても過言ではない。しかし、貝塚の体系的な研究、特に貝塚から出土した自然遺物などの検討に基づいて、当時の古環境や生業活動が盛んに議論されるようになるのは、1970 年代以降になってからであった。

山崎純男氏は、貝塚から出土する貝類や魚骨、獣骨などの食料残滓物としての自然遺物の研究の重要性を説き、自然遺物の構成変化から、縄文時代の自然環境への適応過程の把握を試みている（山崎 1975a）。貝類構成比や、貝の捕獲と処理などの分析結果を踏まえ、九州における貝塚の発展段階を、第Ⅰ段階：貝類捕獲の開始期～第Ⅱ段階：貝類捕獲の増大（貝塚形成の開

始とその発展期)→Ⅲ段階:貝類捕獲の専断的色彩の濃い時期(貝塚の大規模化)→Ⅳ段階:貝塚形成の衰退期、の4つの段階にまとめた(山崎 1975a・2007)。

また、山崎氏は糸島半島を対象として、貝塚の類型化を試みている(山崎 1975b)。貝類をはじめとする自然遺物の検討を通して、桑原飛船貝塚・元岡瓜尾貝塚など今津湾周辺部に位置する貝塚群と、糸島半島西北部に位置する天神山貝塚とで大きく2大別し、前者を内湾砂泥性貝類主体の内湾性貝塚、後者を岩礁性(外洋性)貝類主体の外洋性貝塚として類型化した。内湾砂泥性貝類と岩礁性貝類の構成比の時間的変化から、海進・海退による自然環境の変化を読み取り、当該地域における生産活動の変遷についても考察している。

木村幾多郎氏は、遠賀川下流域の貝塚密集地域の分析を中心に、九州の貝塚をA類型～D類型の4つに分類している(木村 1980・1987・1994)。本稿の内容とも関係するため、貝類に関する内容を中心に、この4類型について以下詳述しておく。

A類型:奥湾性貝塚といふべきもの。古遠賀湾のような奥深い湾の最奥部に位置する貝塚で、汽水～淡水域に属する。遠賀川流域ではこのタイプの貝塚が縄文時代早期末～後期にかけて形成される。ヤマトシジミが貝種の90%近くを占めて変化することはなく大量の貝の堆積が認められる。岩礁性小巻貝類は含まない。福岡県新延貝塚や熊本県御領貝塚が該当する。

B類型:ある程度広さをもった内湾に面し、マガキ・オキシジミ・ウミナなど内湾砂泥性貝類を伴うが、岩礁性小巻貝類は無い、少ない。このタイプの貝塚は縄文時代中期または後期から形成される。福岡県榎坂貝塚や永犬丸貝塚、桑原飛船貝塚、元岡瓜尾貝塚などが該当する。

C類型:内湾と外海を、または外海に開く狭い入江をささげる砂丘上に位置し、主要活動領域は内湾に向き、内湾的性格を持つが、外洋的性格も合わせ持っている。福岡県山鹿貝塚が本類型の代表例であり、縄文時代早期末から前期初頭に貝塚の形成が始まり、後期中頃まで継続する。前半期はハマグリ・イソシジミなど砂質底に生息する貝類が主体で、コシダカガンガラ・スガイなど岩礁性小巻貝類が伴う。後期になると内湾の後退砂泥化に伴ってマガキを主体とする貝層になり、岩礁性小巻貝類が少量伴う。そのほかに福岡県崎島貝塚や天神山貝塚、佐賀県葉畑遺跡、長崎県有喜貝

塚などが本類型に該当するが、それぞれに貝類構成に若干の差異が認められる。

D類型:背後に砂質及び砂泥質の内湾を持たず、外海に直接または、外海に開く狭い小湾に面して立地する。貝種のほとんどをスガイ・サザエ・レイシ・オオコシダカガンガラ・クマノコガイなど岩礁性小巻貝類が占め、A類型～C類型と比較して、貝類の分類学上の種名リストは群を抜いて多い。本類型は遠賀川下流域には存在しないが、西北九州(長崎県・熊本県・福岡県・沖ノ島など)の貝塚の多くが含まれる。

木村氏は、こうした貝塚の分類作業を通して、九州における縄文時代漁撈活動の時空間的変異について、当時の環境変動を踏まえながら考察した。また、上記D類型と類似した遺跡は、韓半島東南部海岸域にも認められることから、主に漁撈活動を通じて環対馬海峡を舞台にした両地域間の交流についても論じている(木村 1987・1994)。

1990年代以降、福岡県浜の町貝塚(吉留ほか 2010)や佐賀県東条遺跡群(西田編 2016)の発掘調査研究成果によって、縄文時代早期の貝塚が注目され、九州における貝塚形成開始期に関する議論も進展した。また、2001年と2016年に九州縄文研究会によって貝塚の集積がなされたことも重要である(九州縄文研究会 2001・2016)。こうした基礎データの蓄積によって、九州における縄文貝塚の研究基盤は十分整ったと言えるが、近年、九州における貝塚研究は低調であることは残念である。

以上、研究史を概観してきたが、山崎氏・木村氏の研究成果は、九州縄文貝塚研究の到達点と評価できる。ここで示された貝塚の分類や発展段階については、今



第1図 分析対象遺跡

第1表 出土貝類と生息域

生息域	貝名	生息域	貝名
浅海	砂底 イタヤガイ	岩礁 マツハガイ	
	砂底 ランニン	岩礁 レインガイ	
	岩礁 ナミマガシワモドキ	岩礁 レインガイダマシモドキ	
	岩礁 メガイアツビ	岩礁 インダタニガイ	
	砂底 ネズミノテガイ	岩礁 イボニシ	
	砂底 テウセンハマグリ	岩礁 エガイ	
	砂底 カサガイ	岩礁 オオコシダカガンガラ	
	砂底 キュウシウナシノコ	岩礁 カリガネエガイ	
	砂底 コタガイ	岩礁 クロガイ	
	岩礁 イセヨウラクガイ	岩礁 コノコガイ	
瀬間帯下部～水深数10m	砂底 シフガイ	岩礁 コシダカガンガラ	
	細砂 ツメタガイ	岩礁 コウロギガイ	
	岩礁 カハクツミギクガイ	岩礁 スガイ	
	岩礁 スキノレガイ	岩礁 タマキガイ	
	岩礁 ヒメヨウラクガイ	岩礁 トマヤガイ	
	岩礁 イガイ	岩礁 ナミマガシワガイ	
	岩礁 クロアツビ	砂底 アラムシロガイ	
	岩礁 マダカアツビ	砂底 ウミナ	
	砂底 パイ	砂底 ムシロガイ	
	砂底 アカニシ	砂底 ホンウミナ	
瀬間帯	泥底 ゴマツダマガイ	細砂 クチキレガイ	
	岩礁 キクザルガイ	砂底 イボウミナ	
	砂底 アサリ	砂底 イソシジミガイ	
	泥底 サルボウガイ	砂底 オオノガイ	
	泥底 ハイガイ	砂底 ショウキガイ	
	砂底 ハマグリ	砂底 ヘナタリ	
	岩礁 オオアカツギボ	泥底 オキシジミガイ	
	岩礁 アツツネガイ	泥底 フトヘナタリ	
	岩礁 オオヘビガイ	汽水域～瀬間帯 砂底 カワエ	
	岩礁 クロスウガイ	汽水域 イシマキガイ	
汽水域	岩礁 クロツシボ	汽水域 オカミミガイ	
	岩礁 ケガキ	汽水域 カノコガイ	
	岩礁 ササエ	汽水域 カワザンショウガイ	
	岩礁 タイワンタマキガイ	汽水域 ヒロクチカノコガイ	
	岩礁 ツナノハガイ	汽水域 ヤマトシジミ	
	岩礁 ヒメコボガイ	汽水域 カワニナ	
	岩礁 ヘナアカツギボ	汽水域 テリメンカワニナ	
	岩礁 マガキ		

層の時期比定に不安はあるものの、赤松海岸遺跡や佐賀貝塚といった、遠賀川下流域や糸島半島以外でも貝塚が認められるようになる。縄文時代前期から貝塚形成が継続する山鹿貝塚や新延貝塚を除き、黒崎貝塚や永大丸貝塚、桑原飛棚貝塚、岐志元村遺跡など、貝塚の形成時期が短いことは注目される。縄文時代前期から貝塚が形成される楠橋貝塚や天神山貝塚では、中期まで貝塚形成が継続しない点を踏まえると、前期から後期にかけて長期にわたり貝塚形成が継続する山鹿貝塚や新延貝塚が特殊な事例で、短期的な貝塚形成は九州縄文貝塚の特徴の一つとして指摘できる可能性がある。

新延貝塚や赤松海岸遺跡の評価が難しいものの、縄文時代後期中葉の北久根山式第2型時期までには、分析対象地域において貝塚は消滅するようである。

(2) 貝塚出土貝類の主成分分析

縄文貝塚11遺跡から出土した貝類を対象に、主成分分析を行った。対象とした貝類は全部で75種類であり、第1表に各貝類の大まかな生息域をまとめている。対象とした貝塚の中で、貝層が時期別に分層されている場合は、その分層単位ごとに区別して分析を行っ

た。該当する貝塚は山鹿貝塚、新延貝塚、天神山貝塚である。山鹿貝塚は前期・中期・後期の3つの貝層を、天神山貝塚は早期・前期・後期の3つの貝層を区別した。また、新延貝塚は1980年報告と1995年報告を区別し、前者は前期・中期・後期の3つの貝層に、後者は南貝層前期・南貝層前期～中期・南貝層中期・南貝層後期・Bレ後期の5つの貝層に分けて分析を行っている。

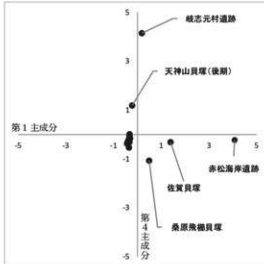
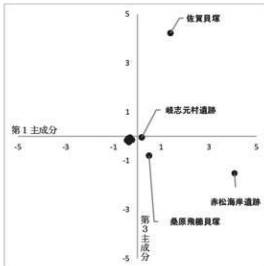
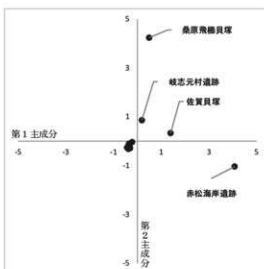
主成分分析を行った結果、10個の主成分が抽出された。第1主成分は固有値18.251で寄与率24.334%、第2主成分は固有値17.538で寄与率23.283%、第3主成分は固有値11.672で寄与率15.563%、第4主成分は固有値8.216で寄与率10.955%となり、第4主成分までで累積寄与率は74.236%となる(第3図左側)。よって本稿では第4主成分までを対象にして分析を進めることとした。

第3図右側には、横軸に第1主成分を、縦軸にそれぞれ第2主成分・第3主成分・第4主成分をとり、二次元展開した図を示した。これら3つの図から、中心に多くの貝塚が集中し、その周辺に少数の貝塚が分散する傾向を共通して読み取ることができる。

第1主成分は、イタヤガイ・コシダカガンガラ・イボニシ・オオヘビガイ・アラムシロガイと強い正の相関を、ヒロクチカノコガイ・カノコガイ・オカミミガイ・カワザンショウガイ・チョウセンハマグリと強い負の相関を示している。正の相関を示す貝種は岩礁性の巻貝が目立ち、赤松海岸遺跡で特徴的に多量に出土しており、佐賀貝塚でも多く出土している。よってこれら2遺跡は正の得点が高くなったと考えられる(第3図右側上)。一方、負の相関を示す貝種のうち、ヒロクチカノコガイ・カノコガイ・オカミミガイ・カワザンショウガイなどは汽水域に生息する貝である。こうした汽水域に生息する貝種を多く出土する遺跡ほど、第1主成分得点は小さくなると考えられる。

第2主成分は、ツメタガイ・イボウミナ・アサリ・ハイガイ・ナミマガシワモドキ・ネズミノテガイ・クチキレガイ・オオノガイ・カワエ・オキシジミと強い正の相関を、キクザルガイ・タイワンタマキガイ・コウロギガイ・ヒメヨウラクガイ・アツツネガイ・カバトゲウミギクガイ・ケガキ・ムシロガイ・イセヨウラクガイ・トマヤガイと強い負の相関を示す。正の相関を示す貝種は砂泥性の貝が目立ち、桑原飛棚貝塚、

	主成分負荷量				
	1	2	3	4	5
イタヤガイ	0.983	-0.093	-0.120	-0.095	0.004
コシダカダンガラ	0.976	-0.190	-0.005	0.024	0.044
イボニシ	0.936	-0.141	0.301	-0.068	0.083
オオヘビガイ	0.935	-0.226	-0.267	-0.055	-0.002
アラムシロガイ	0.914	-0.195	-0.348	-0.047	0.048
シラオガイ	0.912	-0.231	-0.324	-0.050	-0.003
キクザルガイ	0.911	-0.232	-0.327	-0.050	-0.003
タイワンタマビキガイ	0.911	-0.232	-0.327	-0.050	-0.003
コウロギガイ	0.911	-0.232	-0.327	-0.050	-0.003
ヒメヨウラクガイ	0.911	-0.232	-0.327	-0.050	-0.003
アワブネガイ	0.911	-0.232	-0.327	-0.050	-0.003
カハレザウミギクガイ	0.911	-0.232	-0.327	-0.050	-0.003
ケガキ	0.911	-0.232	-0.327	-0.050	-0.003
ムシロガイ	0.911	-0.232	-0.327	-0.050	-0.003
イセヨウラクガイ	0.911	-0.232	-0.327	-0.050	-0.003
トマヤガイ	0.895	-0.207	-0.346	0.005	0.231
イガイ	0.872	0.001	0.485	-0.019	0.044
サザエ	0.782	-0.069	0.612	-0.087	0.010
マツハガイ	0.123	0.986	-0.180	-0.124	0.022
ツメタガイ	0.118	0.958	-0.145	-0.206	0.013
イボウミナ	0.112	0.950	-0.177	-0.219	0.028
アサリ	0.108	0.946	-0.178	-0.242	0.030
ハイガイ	0.110	0.946	-0.176	-0.239	0.031
ナミマガシワモドキ	0.110	0.946	-0.176	-0.239	0.031
ネズミテガイ	0.110	0.946	-0.176	-0.239	0.031
クチキレガイ	0.110	0.946	-0.176	-0.239	0.031
オオノガイ	0.110	0.946	-0.176	-0.239	0.031
カワアイ	0.102	0.946	-0.181	-0.245	0.040
オキシジミガイ	0.116	0.945	-0.179	-0.240	0.031
アカニシ	0.139	0.941	-0.188	-0.233	0.033
ウミナ	0.106	0.938	-0.192	-0.261	0.015
マガキ	0.022	0.859	-0.201	-0.300	-0.030
カワニナ	0.544	0.828	0.092	0.075	-0.063
スガイ	0.114	0.784	-0.099	0.562	-0.214
フナナタリ	0.186	0.773	-0.132	0.581	-0.112
クボガイ	-0.047	0.633	-0.185	-0.083	0.576
ヘナタリ	0.311	0.073	0.944	-0.069	0.014
オオアカフジツボ	0.311	0.073	0.944	-0.069	0.014
クロフジツボ	0.311	0.073	0.944	-0.069	0.014
ヘソアキウボガイ	0.311	0.073	0.944	-0.069	0.014
レイシガイダマシモドキ	0.311	0.073	0.944	-0.069	0.014
クロアワビ	0.311	0.073	0.944	-0.069	0.014
マダガアワビ	0.311	0.073	0.944	-0.069	0.014
メガイアワビ	0.311	0.073	0.944	-0.069	0.014
カリガネガイ	0.426	0.103	0.887	-0.079	0.090
テンガンシ	0.336	0.407	0.835	-0.151	0.024
オオコシダカダンガラ	0.369	0.506	0.756	-0.157	0.103
レイシガイ	0.470	0.585	0.643	0.202	-0.055
タマキビガイ	0.033	0.188	-0.015	0.968	-0.136
スソキレガイ	0.042	0.191	-0.009	0.927	-0.314
バビ	0.055	0.346	-0.042	0.911	-0.203
カガミガイ	0.059	0.325	-0.035	0.890	-0.308
エガイ	0.239	0.103	-0.122	0.875	-0.287
クマノガイ	0.421	0.181	0.256	0.839	-0.112
インダタミガイ	0.295	0.530	0.044	0.778	0.130
ハマグリ	0.061	0.666	-0.119	0.706	-0.146
ヒメウボガイ	-0.038	-0.006	0.001	0.264	0.942
キュウシュウナミコ	-0.049	-0.008	-0.031	0.266	0.941
クロズケガイ	-0.049	-0.008	-0.031	0.266	0.941
コタマガイ	-0.049	-0.008	-0.031	0.266	0.941
ツタハガイ	-0.082	-0.038	-0.039	0.250	0.932
シオフキガイ	-0.072	0.045	-0.053	0.216	0.896
ナミマガシワガイ	-0.103	-0.039	-0.058	-0.138	-0.106
ホソウミナ	-0.065	0.027	-0.070	-0.139	-0.090
サルボウガイ	0.099	0.266	-0.171	-0.215	-0.078
ゴマフダマガイ	-0.081	0.158	-0.086	-0.172	-0.092
オカミミガイ	-0.153	-0.109	-0.048	-0.116	-0.099
チリメンカワニナ	-0.110	-0.069	-0.040	-0.093	-0.061
カワザンショウガイ	-0.134	-0.102	-0.039	-0.096	-0.095
イシマキガイ	-0.102	-0.053	-0.041	-0.092	-0.083
ヤマトシジミ	-0.103	-0.057	-0.038	-0.085	-0.082
カノコガイ	-0.189	-0.136	-0.057	-0.125	-0.129
ヒコクチカノコガイ	-0.198	-0.136	-0.063	-0.142	-0.123
イソシジミガイ	-0.067	-0.064	-0.011	-0.033	-0.052
テウセンハマグリ	-0.119	-0.087	-0.036	0.088	0.443
固有種	18251	17538	11672	8216	6401
寄与率	24.334	23.363	15.563	10.955	8.535
累積寄与率	24.334	47.717	63.281	74.236	82.770



第3図 主成分分析の結果

黒崎貝塚、永犬丸貝塚で特徴的に出土するもので、特に桑原飛棚貝塚で多量に出土している。また、負の相関を示す貝種は、今回対象とした貝塚では赤松海岸遺跡でしか出土しておらず、岩礁性の貝が多い。

第3主成分は、オオアカフジツボガイ・クロフジツボガイ・ヘソアキフジツボガイ・レイシガイダマシモドキ・クロアワビ・マダカアワビ・メガイアワビと強い正の相関を、アラムシロガイ・シラオガイ・キクザルガイ・タイワンタマキビガイ・コウロギガイ・ヒメヨウラクガイ・アワブネガイ・カバトゲウミギクガイ・ケガキ・ムシロガイ・イセヨウラクガイ・トマヤガイ・ケガキと強い負の相関を示す。正の相関を示す貝種は岩礁性の貝が多く、そのほとんどは佐賀貝塚でしか出土していない貝種である。また、負の相関を示す貝種は、第2主成分で負の相関を示す貝種と多くを重複しており、赤松海岸遺跡で特徴的に出土する貝種である。

第4主成分は、タマキビガイ・スソキレガイ・バイ・カガミガイ・エガイと強い正の相関を示し、カワニナ・マガキ・オキシジミ・ハイガイ・カワアイ・アカニシと強い相関を示す。正の相関を示す貝種は、岐志元村遺跡で特徴的に出土するもので、タマキビガイは天神山貝塚の縄文後期の貝層から、カガミガイは桑原飛棚貝塚からも多量に出土している。負の相関を示す貝種は、対象とした貝塚で広く出土が認められるものの、桑原飛棚貝塚での出土量は他に比べて群を抜いて多い。

以上見てきたように、各主成分は特定の生息域や生態を示す貝類と相関を示すというよりは、各遺跡で出土する貝類の偏在性に起因して抽出されていることがわかる。よって、第3図右側の二次元展開図からは、桑原飛棚貝塚・天神山貝塚（後期貝層）・岐志元村遺跡・赤松海岸遺跡・佐賀貝塚の5つの貝塚は、他の貝塚では出土しない貝類が特徴的に出土する、あるいは特定の貝種が他に比べて圧倒的な数量で出土することによって、他の貝塚と区別し得ることが読み取れる。そして、これら桑原飛棚貝塚・天神山貝塚（後期貝層）・岐志元村遺跡・赤松海岸遺跡・佐賀貝塚の5つの貝塚も、分散してプロットされることから、それぞれ個別の挙動を示していることがわかる。

4. 若干の考察

改めて今回の分析で明らかになったことをまとめると以下の通りである。

- ① 縄文時代後期になると貝塚の形成が盛んになり、遠賀川下流域や糸島半島以外でも貝塚が認められるようになる（第2図）。

- ② 分析対象貝塚から出土した貝類を主成分分析にかけた結果、抽出された主成分は、特定の生息域や生態を示す貝類と相関するというよりは、各遺跡で出土する貝類の偏在性と相関する（第3図）。
- ③ 主成分分析の結果、多くの貝塚は同じグループとしてまとめられることがわかった（第3図）。
- ④ 桑原飛棚貝塚・天神山貝塚（後期貝層）・岐志元村遺跡・赤松海岸遺跡・佐賀貝塚の5つの貝塚は、多くの貝塚と同じグループとしてまとめることはできず、それぞれ個別の挙動を示す（第3図）。
- ⑤ 桑原飛棚貝塚・天神山貝塚（後期貝層）・岐志元村遺跡・赤松海岸遺跡・佐賀貝塚は、いずれも縄文時代後期に属する貝塚であり、かつ、遠賀川下流域より西側に位置している（第1・2図）。

木村幾多郎氏をはじめ、これまで先学によって遠賀川下流域の貝塚は複数類型に分類されてきたが（木村1980；藤丸1994）、本稿の分析では当該地域の貝塚を有意に区分することはできなかった。特に、山鹿貝塚において前期～中期の貝層と後期の貝層の間で、ハマグリ減少やマガキの増加といった変異が指摘されてきたが（木村1980；田中1985；藤丸1994）、そうしたあり方も本稿の分析結果から読み取ることができない。この要因として、本稿では貝塚出土貝類すべてを対象としたため、先学で注目されてきた特定貝種に依拠した当該地域における貝層間・貝層間の変異が均された可能性がある¹⁾。

本稿の分析結果では、遠賀川下流域の貝塚間に見られる変異よりも、桑原飛棚貝塚・天神山貝塚（後期貝層）・岐志元村遺跡・赤松海岸遺跡・佐賀貝塚の5つの貝塚にそれぞれ見られる特色のほうが目立つたものとして抽出されたと評価できる。

際立った特色を示す5つの貝塚のうち、赤松海岸遺跡と佐賀貝塚は、木村氏の貝塚分類におけるD類型に相当する（木村1987・1994）。D類型の特徴として、貝種のはほとんどを岩礁性小巻貝類が占め、他の類型と比較して、貝類の分類上の種名リストは群を抜いて多いことが指摘されている。その理由として、木村氏は、砂泥質底に生息する貝類の多くは同一種が群生する傾向にあり同一貝種を選択し易いのに対して、岩礁性小巻貝類は群生するといっても各種が混在し、労働力・肉量の関係からして特定種だけを選択する必要がなかったため、としている。確かに赤松海岸遺跡や佐賀貝塚では多様な岩礁性小巻貝類が認められ、木村氏の説明は首肯できる。

一方で、上述した5つの貝塚のうちの桑原飛棚貝塚

や岐志元村遺跡は、岩礫性小巻貝類も出土しているが、砂泥に生息する貝類も多数出土しており、木村氏による貝塚分類のD型には該当しない²⁾。しかし、両貝塚ともに出土貝類の多様性は豊富であり、その点において赤松海岸遺跡や佐賀貝塚、そして天神山貝塚（後期貝層）とも共通している点は興味深い。

本稿の分析で抽出された桑原飛梯貝塚・天神山貝塚（後期貝層）・岐志元村遺跡・赤松海岸遺跡・佐賀貝塚の5つの貝塚は、いずれも縄文時代後期以降に形成された貝塚で³⁾、かつ、多様な貝を採集しており、各貝塚ごとに特徴的な貝を採集しているという点を評価すべきと考える。そうした目で見ると、主成分分析の結果から読み取ることではできないが、遠賀川下流域で後期以降に新たに形成された黒崎貝塚や永大丸貝塚でも、ゴマフダマガイやアサリ、ナミマガシワガイ、ホソウミナ、イボウミナなどが出土しており、同地域の山鹿貝塚や新延貝塚、楠橋貝塚と比較して、出土貝種はやや多様性に富んでいるようだ⁴⁾。

縄文時代後期以降、各地域において採集可能な貝類を、あまり特定の貝種に固執することなく、幅広く採集するようになったことが、本稿の分析結果から読み取ることができるのである。

おわりに

本稿では、西北部九州沿岸における縄文貝塚を対象として、出土した貝類すべてに対して主成分分析を行った。その結果、多くの貝塚は同じグループとしてまとめられる一方、桑原飛梯貝塚・天神山貝塚（後期貝層）・岐志元村遺跡・赤松海岸遺跡・佐賀貝塚の5つの貝塚に関しては、他の貝塚とはそれぞれ異なった挙動を示し、出土貝類の質的・量的な違いによって、他と区別されることがわかった。こうした分析結果から、縄文時代後期以降、各地域で採集可能な貝類を、あまり特定の貝種に固執することなく、幅広く採集するようになった可能性を指摘した。

本稿で提示した仮説は、あくまでも貝塚出土貝類のみを対象に分析した結果から導き出したものに過ぎない。当該仮説を検証する上で、先学でも扱われてきた遺跡の立地環境や石器・骨角器といった漁獲具、魚骨・獣骨など他の自然遺物も含めた分析が必要であることは言うまでもなからう。また、山鹿貝塚や新延貝塚のように縄文時代前期から後期まで継続的に貝塚が形成される貝塚と、後期以降に新たに形成される貝塚との差異についても詳細に検討する必要がある。

本稿で見出した縄文時代後期以降の貝類の採集活動

のあり方が、当該期における居住・生産活動とどのような関係性にあるのか、今後追及していかねばならない。

謝辞

本稿をなすにあたり、貝塚から出土した貝類の生態や主成分分析の結果・解釈につきまして、九州大学総合研究博物館の伊藤泰弘先生と米元史織先生にご教示いただきました。また、芦屋町教育委員会、糸島市教育委員会、鞍手町教育委員会、福岡市埋蔵文化財センター（五十音館）には資料調査等でお世話になりました。末筆ではありますが、感謝申し上げます。

本研究は JSPS 科研費 JP 23K00918 の助成を受けたものです。

矢野先生に初めてお会いしたのは、2011年の集中講義で、先生が九州大学にいらっしゃったときでした。当時学部3年生で卒業論文のテーマを縄文時代にしようと思ったばかりの私にとって、先生のお話はとても刺激的で、ますます縄文時代研究の面白さ・深みにはまっていくなりました。先生の今後益々の活躍とご健康を祈念いたしまして、この小論を謹呈させていただきます。今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

註

- 1) 浜の町貝塚以西の貝塚を分析から除外し、遠賀川下流域の貝塚のみで同様に主成分分析も試みましたが、概ね同様の結果が得られたことを付記しておく。
- 2) 桑原飛梯貝塚は、木村氏の分類ではB型に含まれている（木村 1987・1994）。
- 3) 天神山貝塚の前期貝層は、遠賀川下流域の多くの貝塚と同じグループとしてまとめられる。当該貝塚における前期貝層と後期貝層における出土貝類の差異は、環境変動や貝類採集活動の変化を反映している可能性が高い。なお、山崎氏によって、当該貝塚の前期貝層では内湾砂泥性貝類が優越し、後期貝層になると岩礫性（外洋性）貝類の出現率が増加することから、海退現象による内湾の砂泥域の拡大を反映している可能性が指摘されている（山崎 1975b）。
- 4) 黒崎貝塚や永大丸貝塚では、山鹿貝塚・新延貝塚・楠橋貝塚と出土貝類の多くが共通しているため、主成分分析では一つにグルーピングされる結果となったと考えられる。

引用文献

- 木村幾多郎 1980「総括—自然遺物よりみた新延貝塚の漁撈、狩猟活動について」『新延貝塚 鞍手町埋蔵文化財調査会』
- 木村幾多郎 1987「北部九州の漁撈活動」『文明のクロソールド：Museum Kyushu』第24号、博物館等建設推進九州会議
- 木村幾多郎 1994「北部九州の狩猟・漁撈活動」『九州の貝塚—貝塚が語る縄文人の生活—』北九州市立考古博物館
- 九州縄文研究会 2001「第11回九州縄文研究会熊本大会 九州の貝塚 発表要旨・資料集」九州縄文研究会
- 九州縄文研究会 2016「第26回九州縄文研究会熊本大会 九州縄文貝塚の現状と課題2」九州縄文研究会
- 小林久雄 1931「阿高貝塚及御領貝塚の土器」『地歴研究』第7編第3～8号、熊本地歴研究会
- 田中良之 1985「北九州の縄文時代」『北九州市史 総論 先史・原始』北九州市

- 西田巖(編) 2016『東名遺跡群Ⅳ—東名遺跡群総括報告書—』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第100集、佐賀市教育委員会
- 藤丸詔八郎 1994「古遠賀湾・洞海湾周辺の貝塚」『九州の貝塚—貝塚が語る縄文人の生活—』北九州市立考古博物館
- 山崎純男 1975a「九州地方における貝塚研究の諸問題—特に自然遺物(貝類)について—」『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会
- 山崎純男 1975b「縄文時代遺跡の地域的検討—福岡県糸島半島の貝塚について—」『熊本史学』第46号、熊本史学会
- 山崎純男 2007「九州縄文時代生業活動の展開」『第17回九州縄文研究会福岡大会 九州における縄文時代早期前葉の土器相 発表要旨・資料集』九州縄文研究会
- 吉留秀敏・星野恵美 2010「浜の町貝塚第1次調査」『福岡市埋蔵文化財年報 VOL.23—平成20(2008)年度版—』福岡市教育委員会

施文技法からみた山陰中央部の凹線文系土器の成立過程

幡中光輔

要 旨

本稿は、山陰中央部における縄文時代後期後葉の凹線文系土器に焦点を当て、施文技法の検討から凹線文系土器の成立過程を探ることを目的としている。後期後葉は、各地で広域的に凹線文が展開する時期であり、これまでの研究では後期中葉の器構形成や文様構成を維持するなかで、施文描線が沈線から凹線に置換することが明らかにされている。そこで本稿では、近年良好な資料の蓄積が進む山陰中央部の京田遺跡および万場Ⅱ遺跡の出土土器に注目し、後期中葉から後葉にかけての施文技法の様相を検討することで、山陰中央部の凹線文系土器成立の背景に迫る。

まずは、京田遺跡および万場Ⅱ遺跡の後期中葉から後葉の施文技法の様相を整理し、両時期に共通の器種である広口口縁深鉢などで凹線文系土器の成立前後の時期に刻みを伴う沈線または凹線を持つ文様表現が多く認められる状況を確認した。そこで刻みと沈線・凹線の関係性から施文技法を4つの類型（A1 類～B2 類）に分類し、京田遺跡および万場Ⅱ遺跡の出土土器を対象に施文技法の変遷と展開を追究した。万場Ⅱ遺跡の遺構出土土器からはA1 類からB2 類、そしてB1 類と主体的な施文技法が変遷する様相が認められ、個別の土器には沈線を凹線で引き直した状況が確認できた。このことから、沈線の引き直しなどに起因する上書き行為の施文具に貝類工具が選択された可能性が考えられた。また、後期中葉において京田式期は沈線の引き直しが多く認められるが、権現山式期は引き直されない個体が増加する傾向にあり、後期後葉の元住吉山Ⅱ式期には引き直しが再び顕在化する状況が確認できた。この時期の引き直しに貝類工具が選択されたことにより、凹線文系土器が成立する一因となった可能性が高いと考察した。

今回検討した後期中葉から後葉の施文技法の変遷と展開は、当初沈線で描かれた文様が次第に凹線で更新される過程を具体的に反映すると考えられる。また凹線文系土器の成立は、地域ごとに凹線の受容や発現の様相が異なる可能性があるため、凹線文系土器成立の地域性について今後議論を深める必要がある。

キーワード：縄文時代、山陰中央部、凹線文系土器、施文技法

はじめに

山陰地方における縄文時代のなかで凹線文系土器が出現する後期後葉は、遺跡動態の分析（幡中 2021）から判断すれば、西日本で遺跡数が急増して新たな活動域を展開させていく中期末から後期初頭の様相とは異なり、新規の遺跡数が増加して活動域を大きく拡大させることなく、後期中葉までに醸成された既存の地域社会を母体として活動が展開する時期であったと考えられる（幡中 2024）。

こうした状況のため、後期後葉はこれまでに確認されている遺跡数が総じて少なく、また集落構造の分かる調査事例も乏しかったため、注目される機会はそれほど多くはなかった。しかし近年、特に山陰中央部の平野部や山間部での発掘調査などで新たな資料の蓄積が進んでいる。それによって後期の土器編年（柳浦 2010・2017）の進展や、凹線文系土器を取り扱った研究会の開催（中四国縄文研究会編 2024）などで議論が盛んに行われるようになり、いわゆる平行凹線文系土器

表 西日本各地の縄文時代後期の土器編年

	山陰中央部	瀬戸内東部	近畿地方
後期初頭	九日田式古段階	中津Ⅰ式	中津Ⅰ式
	九日田式新段階	中津Ⅱ式	中津Ⅱ式
	五明田式	福田 K2 式古段階	福田 K2 式古段階
	暮地式	福田 K2 式新段階	福田 K2 式新段階
後期中葉	成立期緑帯文土器 (北原本棚式～林原式)	成立期緑帯文土器	四ツ池式 芥川式
	崎々鼻Ⅰ式	津雲 A 式	北白川上層式Ⅰ期
	崎々鼻Ⅱ式	彦崎 K1 式	北白川上層式Ⅱ期
後期中葉	沖大式	四元式	北白川上層式Ⅲ期
	京田式	彦崎 K2 式古段階	一乗寺 K 式
	権現山式	彦崎 K2 式新段階	元住吉山Ⅰ式
後期後葉	元住吉山Ⅱ式併行	馬取式	元住吉山Ⅱ式
	宮滝式併行	福田 K3 式	宮滝Ⅰ・Ⅱ式
	滋賀Ⅰ式併行	滋賀Ⅰ式併行	滋賀Ⅰ式

成立によるホライズンの再編（家根 1981）とされ、磨消縄文土器が西日本を席巻する後期初頭とはまた異なった広域的な共通性が展開する後期後葉の社会とその様相を紐解く手掛かりが明らかになりつつある。

本稿では、表で示した山陰中央部および周辺地域の

後期の土器編年や近年の調査研究の成果を踏まえ、山陰中央部における後期後葉の凹線文系土器の成立過程について具体的な資料から検討してみたい。

1. 研究略史と本稿の目的

凹線文系土器は、近畿地方において兵庫県元住吉山遺跡の調査で直良信夫氏によりその存在が明確にされ(直良 1928)、それ以降に元住吉山Ⅱ式および宮滝式として型式設定されて広く知られるようになる(佐々木・小林 1937、永末 1944、坪井 1956 など)。そして凹線文系土器の様々な構成要素をもとに元住吉山Ⅰ・Ⅱ式および宮滝式の型式学的な検討が進められ(泉 1979、丹治 1980、和田 1999 など)、その後も大阪府向出遺跡や京都府一乗寺向畑遺跡などの調査報告で編年の位置づけが詳細に議論されている(岡田 2000、木村 2014)。

一方、中国地方についても広島県馬取西貝塚・東貝塚、岡山県福田貝塚の資料を標式とする馬取式および福田 K3 式が古くから知られている(鎌木・木村 1956)。その後、近畿地方との併行関係の議論や土器編年(泉 1989、千葉 2010)が進められるとともに、岡山県堀坂屋ヶ坪遺跡の資料をもとにした詳細な時期的変遷が豊島雪絵氏によって整理されている(豊島 2006)。なお、山陰地方ではサルガ鼻洞窟遺跡や権現山洞窟遺跡の凹線文系土器の資料が佐々木謙氏および小林行雄氏により紹介され(佐々木・小林 1937)、それらと同時期頃の土器群の存在は土器編年のなかで示されているものの(柳浦 2010・2017)、現在まで具体的な型式設定には至っていない¹⁾。また、豊島氏は凹線文系土器の文様要素の時期的変遷から中国地方と近畿地方の凹線文系土器における共通性の高さに注目している(豊島 2010)。

ここで凹線文系土器の成立についての議論に焦点を当ててみる。兵庫県個遺跡の層位的な資料群から詳細に変遷を検討した岡田憲一氏は、深鉢胴部境界に 1 条の凹線を施して区画とすることで凹線文の新規派生が生じた可能性を指摘する(岡田・深井 1998、岡田 2024)。さらに調整具として使用されていた貝類工具の施文への適応など施文具の多様化に伴い、それまで粗製土器として施文されなかった広口口縁深鉢の口縁部内面に二枚貝腹縁刻みを多用するなどの有文化、ひいては精製土器に限定されていた文様施文の位置づけの低下が文様要素としての凹線発生の背景にあると考えている²⁾。なお、すべての施文描線が齊一的に凹線が採用されたのではなく、当初は適応対象が限られて

いたことも指摘されている。

広口口縁深鉢は、近畿地方の後期中葉の元住吉山Ⅰ式に引き続いて後期後葉の元住吉山Ⅱ式でも存続するが、宮滝Ⅰ式になると減少し、宮滝Ⅱ式の段階ではほとんど姿を消すことが示され(岡田 2024)。中国地方でも類似した傾向にあることが想定されている(豊島 2010)。また山陰地方では、山陰中央部で権現山式期の器種構成が元住吉山Ⅱ式期に引き継がれ、広口口縁深鉢も同様に確認されるが、山陰西部では広口口縁深鉢がほとんど認められない(柳浦 2010)。なお、後期中葉の擬似的な結節縄文が山陰中央部から西部に展開・浸透して構築された土器様相の共通性を背景として、山陰西部に凹線文が元住吉山Ⅱ式期に波及し、宮滝式期に展開した可能性が示されている(韓中 2024)。

このようにしてみると、各地の後期後葉の凹線文系土器は、後期中葉の元住吉山Ⅰ式期と同様の器種構成や文様構成を維持するなかで施文描線が沈線から凹線に置換することで成立しており、凹線文系土器の成立過程は、沈線および凹線を中心とする施文技法に焦点を当てること、その一端が把握できる可能性があると考えられる。本稿ではそうした視点に立ち、凹線文出現の鍵を握る後期中葉から後葉の施文技法の変遷と展開を検討することで、山陰中央部の凹線文系土器成立の背景に迫りたい。

2. 山陰中央部の後期後半の施文技法とその変遷

(1) 後期後半の遺跡消長と土器出土量

まずは、山陰中央部における後期後半(後期中葉・後葉)の全体像を把握するため、主要遺跡の消長および土器出土量³⁾を俯瞰する(図 1)。遺跡消長をみると、凹線文系土器のみが出土する遺跡は少なく、大半の遺跡が後期中葉から連続して土器が確認されている様子が分かる⁴⁾。そのため後期中葉の集落は、多くの場合に後期後葉にも存続した公算が大きく、そのなかで後期中葉の土器の器種構成や文様構成を引き継ぎながら後期後葉の土器様相が展開する状況であったと推察される。

また土器出土量からみると、凹線文系土器を多量に出土する遺跡は限られるが、山陰中央部では比較的まとまって出土する遺跡が散見され、権現山式期から元住吉山Ⅱ式期への変遷が把握できると考えられる。

(2) 山陰中央部における後期後半の施文技法の変遷

山陰中央部で後期後半のまとまった資料が出土し、遺跡内で変遷が追えるのは、鳥根県の出雲平野西南部

に所在する出雲市京田遺跡と神戸川中流域遺跡群の飯南町万場Ⅱ遺跡である。ここではまず、京田遺跡および万場Ⅱ遺跡出土土器からみた後期後半の土器編年(図2)をもとに文様の施文技法の様相を確認する。

後期中葉の沖丈式期は、2段の縄文のほか結節縄文や多条縄文などの多様な縄文施文が盛行する。また、文施文の技法は、平行沈線と基調とする文様構成で充填縄文技法（先行して描いた沈線区画内に縄文を充填）がある程度認められるが、磨消縄文技法（縄文施文後に描出した沈線区画内を磨り消す狭義の磨消縄文技法）には結節縄文が施文される傾向があり、充填縄文技法は2段の縄文で占められている（越中2019）。

京田式期は、引き続き磨消縄文技法による縄文施文がなされる一方、充填縄文技法の割合が増加し、沈線

区内には巻貝回転や二枚貝などによる擬縄文の施文が出現する。この段階になると、磨消縄文技法では多糸縄文など比較的節の細かい縄文が増加し、結節縄文は多くの場合に縄文地として施文され、充填縄文技法には擬縄文がかなりの割合で用いられる。そのためこの時期は、充填縄文技法が次第に2段の縄文施文から擬縄文施文に代替する転換期に位置づけられる。なお平行沈線の施文位置は、口縁部外面や胴上部周辺に集約されて定形化する傾向がみられる。

凹線文出現直前の権現山式期には、2段の縄文施文は磨消縄文技法、充填縄文技法ともに若干存在するものの、結節縄文や多縄文などの施文は認められず、擬縄文施文による充填縄文技法にほぼ収束する。また、二枚目刻みによる施文は、一枚目背部による施文の刻

[illegible]

凡例：有文士器報告点数 ■ 1点~ ■ 10点~ ■ 50点~ ■ 100点~

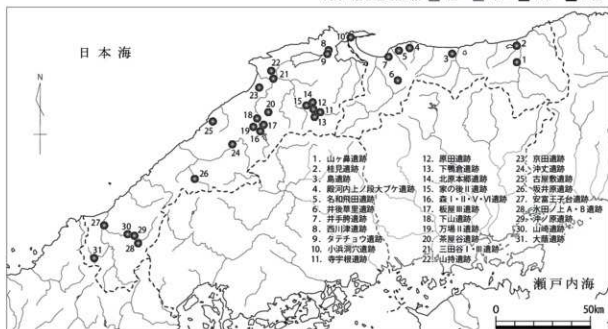


図1 山陰地方における後期後半の主要遺跡の分布と消長

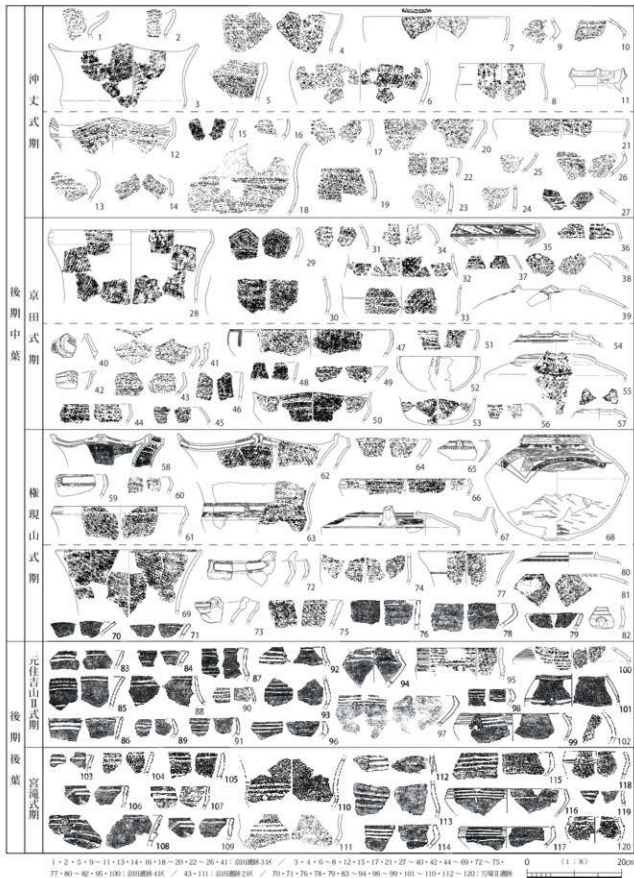


図2 山陰中央部における京田遺跡および万葉Ⅱ遺跡出土土器からみた後期後半の土器編年

合が増加するなどバリエーションが豊かになる一方、二枚貝による縦刻みが密に充填されていた京田式期よりも施文間隔が広がって一定になり、R 刻みや L 刻みなどの斜め刻みが席巻する。なお後半期になると、広口口縁の内面に斜め刻みと沈線を持つ深鉢や浅鉢が増加する。

凹線文が出現する元住吉山Ⅱ式期は、前段階における器種構成が引き継がれつつ、広口口縁深鉢や内屈口縁浅鉢の割合が増加し、基本的に凹線が施文されるが、沈線を描出する個体も認められる。権現山式期で普遍的な 2 本の平行凹線が施文されるものは減少し、口縁部内外面や胴上部に複数の平行凹線が展開して斜め刻みが施され、胴上部には斜め刻みを伴う 3 条以上の多重平行凹線が目立つ。これらの多重平行凹線内で沈線と凹線が混在する個体が確認され、沈線から凹線への過渡の様相が看取される。凹線内はミガキなどで調整される傾向にあり、やや深い凹線に仕上げられる様子が把握できる。なお、凹線内に巻貝刺突や巻貝断面による押圧が施された個体が認められ、粘土瘤などで隆起部を作出して巻貝刺突などを施す個体もこの時期に該当すると考えられる。

宮内式期は、基本的に斜め刻みが施文されなくなり、平行凹線が主体的に展開する施文技法となる。元住吉山Ⅱ式期の器種構成と大きく変わらないが、広口口縁深鉢が減少し、屈曲口縁深鉢の割合が増加する傾向にある。1~3 条の平行凹線が主流となり、比較的凹線が浅い個体が目立つようになる。またそれに伴って幅の広い凹線が主体的となり、断面「レ」字状の凹線も散見される。近畿地方の宮内式の指標とされる巻貝による扇状圧痕が認められるものの、それが明瞭な個体は比較的少ない。

3. 施文技法からみた凹線文系土器の成立過程

これまで京田遺跡および万場Ⅱ遺跡出土の後期中葉から後葉の土器について文様の施文技法の様相を確認したが、両時期に共通の器種である広口口縁深鉢などを中心に、凹線文系土器の成立とともに刻みを伴う施文描線が沈線から凹線に転換する状況が看取できた。

このなかで万場Ⅱ遺跡における刻みを持つ元住吉山Ⅱ式期の土器を個別にみると、口縁部外面に凹線を持つが、口縁部内面は刻みと沈線が施される個体(図 2-87・88)や、同一器面上に沈線と凹線が混在するなかで刻みが施されるもの(図 2-90・91)が認められ、沈線から凹線へと施文技法が変容する過渡的状況を具体的に反映する個体が一定量存在することが分かる。

(1) 施文技法の分類と分析対象資料

ここで刻みと沈線・凹線の関係性に注目し、施文技法を整理する。後期中葉の京田式期および権現山式期は、沈線が描かれた後に縦線文や刻みを充填する技法が主体的である。そのため、重複関係では刻みが上位になるが、沈線の引き直しなどがあった場合、最後に描出された沈線が上位となる。重複関係による施文技法の様相は、凹線と刻みが主に施文される後期後葉の元住吉山Ⅱ式期でも同様に認められ、凹線が先行して施文されると刻みが上位になる場合や、凹線の引き直しなどで凹線が上位になる場合が想定できる。

こうした視点を踏まえて刻みと沈線・凹線における施文技法の関係性を捉えると、4 つの類型(A1~B2 類)に分類することが可能である(図 3)。

これら施文技法の類型を踏まえ、改めて万場Ⅱ遺跡の資料に注目したい。万場Ⅱ遺跡は、後期後半の堅穴住居跡や多数の土坑などが確認された集落跡(図 4)で、権現山式期から宮内式期までの遺構出土土器がまとまる。そのため、万場Ⅱ遺跡の遺構出土土器を整理し、

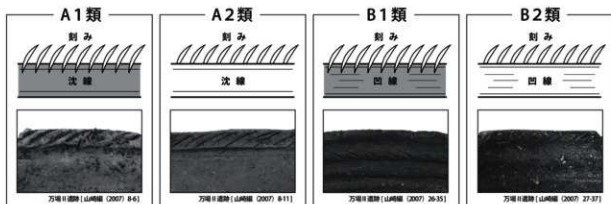


図3 刻みと沈線・凹線の重複関係からみた施文技法の分類

施文状況を詳細に検討することで、沈線から凹線への施文技法変容の一端を掴める可能性がある。

(2) 万場Ⅱ遺跡の遺構出土土器の施文技法

① 竪穴住居跡 SI35 出土土器

万場Ⅱ遺跡の竪穴住居跡 SI35 は権現山式期から宮滝式期までの土器が確認できる(図5)。権現山式期の口縁部内面施文が認められる図5-1～3は、沈線描出後に刻みが施されたA1類である。元住吉山Ⅱ式期では、凹線描出後に刻みを施文するB1類が認められ(図5-11・15・18)、権現山式期での沈線描出が凹線に置換した状況が看取できる。

その一方で、元住吉山Ⅱ式期には凹線が上位となるB2類が一定数存在することに注目したい(図5-8～10・12～14・16・19)。B2類は刻みが既に施文された段階で凹線が施されることを示す。器種構成や文様構成などが直前の権現山式期と変わらない状況において、口縁部外面に凹線を持つ元住吉山Ⅱ式期の広口口縁深鉢の口縁部内面に沈線描出後の刻みが施される個体(図2-87・88)の存在を考慮すると、B2類全てが凹線の施文後に刻みが施され、その後凹線によって引き直されたとは考えにくい。この点に関して有益な示唆を得られるのが、図5-14の浅鉢の施文状況である。図5-14は内外面施文に沈線と凹線が混在するなかで刻みが施されるが、施文状況を詳しく観察すると、器面上の複数の描線は当初沈線で描かれたものが、後に凹線によって引き直された表現となっている。

こうした状況を総合すれば、権現山式期から元住吉山Ⅱ式期にかけて、沈線の引き直しなどに起因する上書き行為の施文具に貝類工具が選択されたことが、凹線文系土器が成立する一因になった可能性を指摘できよう。また、元住吉山Ⅱ式期にはB2類のほか凹線の施文後に刻みが充填されるB1類が認められるため、この時期にB2類にみられた沈線の引き直しだけではなく、描線自体が沈線から凹線に代替したことでB1類が表出したとの仮説が成り立つ。

② 土坑出土土器

竪穴住居跡 SI35 出土土器から得た仮説を踏まえ、各土坑の出土土器に注目する。このうち、刻みと沈線・凹線の関係性が把握できる遺構出土土器(図6)を時期別に整理し、検討を進めたい。

まず権現山式期の土坑にはSK4・30・34・51が該当する。これらの遺構出土土器は、広口口縁深鉢を中心に沈線描出後に刻みが施されている状況が確認でき、

概ねA1類となっている。なお、権現山式期のA2類は遺構周辺出土土器で確認されている。

次に権現山式期から元住吉山Ⅱ式期の土器を含む土坑は、SK44・48・57・58である。遺構出土土器を観察すると、A1類のほかにB2類が存在することが分かり、元住吉山Ⅱ式期の前半頃にはB2類が主体的となっていた可能性が指摘できる。またこの時期には、図6-10・14のように内外面の施文に沈線と凹線が混在する個体が散見され、施文当初に描かれた沈線が次第に凹線で更新される過渡的な状況を反映する。

元住吉山Ⅱ式期や一部で宮滝式期の土器を含むSK2・37・41・43・45出土土器は、B2類に加えてB1類が展開する様子を示している。つまり、元住吉山Ⅱ式期の後半頃になると、施文当初から凹線を描き、その後刻みを施す技法が展開したと考えられる。

続く宮滝式期には、刻みを施す施文技法自体が衰退し、凹線のみが施文される土器群が普及する。

(3) 施文技法からみた凹線文系土器の成立過程

これまで万場Ⅱ遺跡における遺構出土土器の施文技法の詳細な検討を行い、凹線文系土器成立の状況を検討したが、これまでの検討結果を踏まえ、京田遺跡および万場Ⅱ遺跡の後期中葉から後葉にかけての施文技法の変遷(図7)をもとに、凹線文系土器の成立過程を整理する³⁾。

後期中葉の京田式期は、A類のうちA2類が優勢となり、充填縄文技法が席巻するなかで沈線描出後に刻みが施され、その後沈線が引き直される個体が多かったと考えられる。

権現山式期には、京田式期から一転してA1類が多数を占める状況が注目される。それまでの充填縄文技法の系譜を引き継ぎ、刻みと沈線の重複関係から、沈線描出後に刻みが施される施文技法であったと想定されるが、沈線の引き直しがなされない個体の割合が増加したことを示唆する。

そして後期後葉の元住吉山Ⅱ式期にはB類が出現し、刻みを施した後に凹線が施文されるB2類が比較的多くを占める。万場Ⅱ遺跡の遺構出土土器では、沈線と凹線が混在する器面上で凹線によって沈線が引き直される個体が確認できた。この状況から、元住吉山Ⅱ式期の前半頃に描線の引き直しが再び増加する傾向のなかで、引き直しの施文具に貝類工具が選択されて凹線表現が顕在化したと考えられ、凹線文系土器が成立する一因となった可能性が高い。こうした状況は、当初施文された沈線が次第に凹線で更新されていく過程を

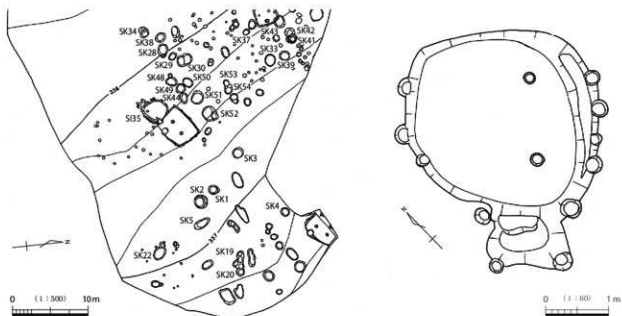


図4 万場Ⅱ遺跡の遺構平面図(左)と竪穴住居跡S135(右)

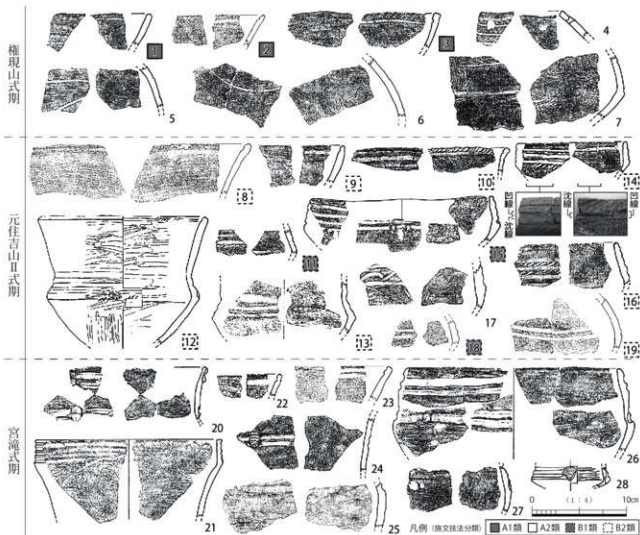


図5 万場Ⅱ遺跡の竪穴住居跡S135出土土器

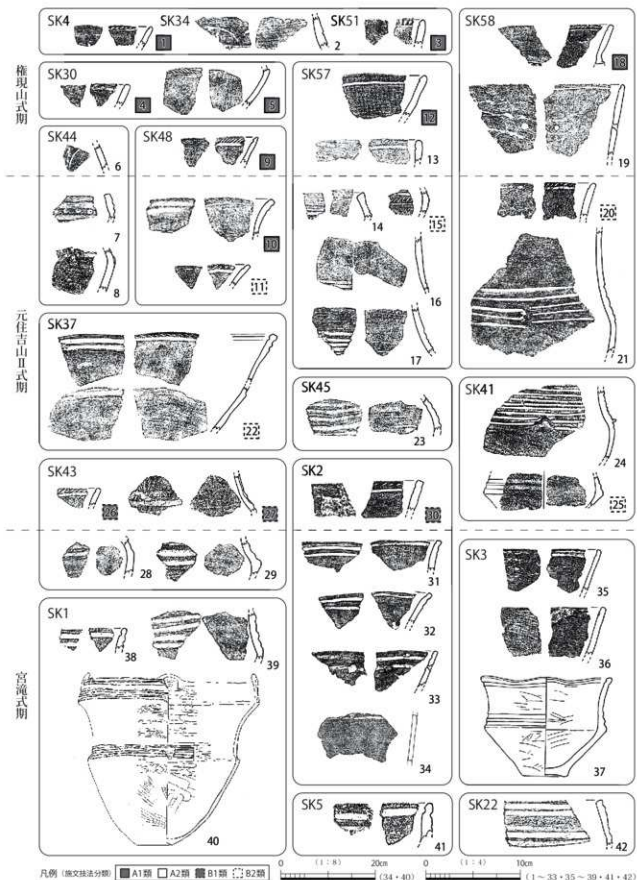


図6 万場Ⅱ遺跡の土坑出土土器

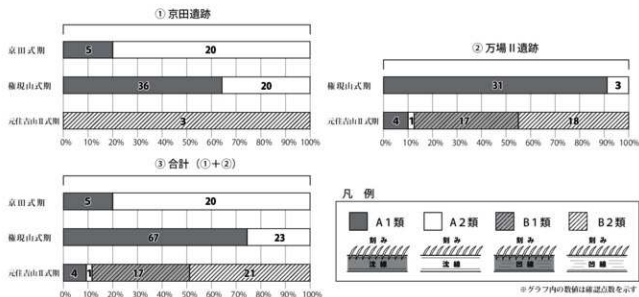


図7 京田遺跡および万場Ⅱ遺跡における後期後半の施文技法の変遷

具体的に反映すると考えられる。また同時に、凹線施文後に刻みが充填されるB1類も一定量認められるため、万場Ⅱ遺跡の遺構出土土器の変遷を考慮すると、元住吉山Ⅱ式期の後半期には沈線自体が施されなくなり、施文当初から凹線を描いて刻みを施す施文技法が成立して展開したと推察できよう。

おわりに

山陰中央部における凹線文系土器は、後期中葉からの彦崎K2式期以降に九州系土器の影響を受け、調整具である貝類工具が施文具にも採用されて擬縄文が施される状況が示されており(岡田2008b)、京田遺跡の土器編年(幡中2019)を確認すると、山陰中央部でも同時期頃の京田式期に擬縄文が採用されたと考えられる⁶⁾。

これまでの調査研究のなかでは、土器製作者の道具箱から縄や沈線施文具が失われ、調整具の貝類工具が施文具にも適応されたと想定されている(岡田・深井1998、岡田2008b、岡田2024)。なかでも重要なのは、貝類工具による施文具が描く凹線は、当初その適用範囲が限られ、その時点で土器製作者の道具箱には貝

類工具以外の施文具が残ることが指摘されている点である。今回の施文技法からみた凹線文系土器の成立過程の検討では、沈線の施文具および貝類工具の併用から、次第に貝類工具のみの使用へと収束する過渡的状況を具体的に可視化することができたといえる。

また近畿地方では、凹線文の出現が深鉢頸胴部の境界に1条の凹線を施して区画することで派生した可能性が示されている(岡田・深井1998、岡田2024)。それは凹線文が広域的に展開するなかで、各地で一律に沈線が凹線に置換されたのではなく、後期中葉からの土器様相に応じてそれぞれの地域で凹線の受容や発現の様相が異なっていた可能性を考慮する必要性を示しており、こうした凹線文系土器成立の地域性⁷⁾については今後議論を深めていくべき課題である。

謝辞

私は矢野先生から直接教を受けた学生ではなかったのですが、学生時代に岡山を拠点としつつも、関西の縄文社会を研究テーマに入れていたことから、京都で修士論文の成果を発表する機会を先生に与えていただきました。これがきっかけで、関西の縄文研究者と情報交換が盛んになるようになり、自分自身の知見を大きく広げられたように思います。その後も、遺跡の網羅的なデータベース作成を進めていた私の研究方針に賛同していただき、関西縄文文化研究会での発表の機会をいただくなど、数多くの学恩に深く感謝しています。矢野先生の今後益々のご活躍とご研究の進展を祈念いたします。

本稿は、2024年6月に開催された第34回中四国縄文研究会高知大会「中四国の凹線文土器群」での発表内容の一部を踏まえ、新たな視点をもとに起稿したものである。本稿をなすにあたり、中四国縄文研究会高知大会での発表や資料調査において、下記の方々や機関にお世話になった。記して感謝いたします（敬称略、五十音順）。

岡田憲一 小野祥寛 小泉翔太 坂本豊治 関島哲郎
深田 浩 守岡正司
飯南町教育委員会 出雲弥生の森博物館 鳥根県教育
庁埋蔵文化財調査センター

注

- 1) なお本稿では、型式設定されていない山陰中央部の元住吉山Ⅱ式併行期および宮滝Ⅰ・Ⅱ式併行期については、便宜的にそれぞれ元住吉山Ⅱ式期、宮滝式期と呼称する。
- 2) 凹線が出現する元住吉山Ⅱ式の器種構成や文様構成は基本的に直前段階の後期中葉の元住吉山Ⅰ式と同じであり（岡田2024）、また後期中葉で縄文施文に代替する擬縄文が九州北部の北久根山式や石町式の影響を受けて瀬戸内地方周辺に展開することで、施文具と調整具を兼ねた貝類工具の使用が広域的に普及し、凹線文系土器の成立に関与した可能性が示唆されている（岡田2008b）。
- 3) 図1に示した土器出土量を示す有文土器報告点数は、報告書掲載の有文土器を集計したものである。なお有文土器報告点数は、各調査の調査面積や報告書紙幅などに左右されて変動し、遺跡の実態を忠実に反映する訳ではない点には留意すべきだが、全体の遺跡消長のなかで一定の動向を把握するうえでは有効である。
- 4) この時期は活動域拡大の指標となる活動開始期（早期から晩期を通してその遺跡で活動が認められる最初の時期）の遺跡の確認数が少なくっており、後期後葉の元住吉山Ⅱ式期は山陰地方全域で特に減少が著しい傾向を示す（韓中2021・2024）。
- 5) 図7の施文技法の集計は、京田遺跡の報告書（守岡編2017、韓中編2019、深田・関山編2020）および万場Ⅱ遺跡の報告書（山崎編2007）掲載資料を対象とした。
- 6) 山陰西部では、鳥根県益田市のイセ遺跡や山崎遺跡などにおいて後期中葉の北久根山第二型式に相当する石町式期以前の土器に巻貝回転による擬縄文施文が確認されており、山陰中央部よりも早い

段階で擬縄文が展開したと考えられる。

- 7) なお、万場Ⅱ遺跡で注目した沈線から凹線への施文技法変容の過渡的状況を示唆する資料は、鳥根県奥出雲町の原田遺跡や岡山県津山市の堀坂屋ヶ坪遺跡などでも確認できる。そのため、中国地方では今回の検討で得られた凹線文系土器の成立過程は、一定の範囲内で地域性を持って展開した蓋然性が高い。

参考文献

- 泉 拓良 1979 「西日本の縄文土器」『世界陶磁全集 1 日本原始』小学館 142～172 頁
- 泉 拓良 1989 「縄文土器」『福田貝塚資料 山内清男考古資料 2』奈良国立文化財研究所史料第32冊 奈良国立文化財研究所 17～58 頁
- 岡田憲一 2000 「西日本縄文後期後葉土器編年序論—向出遺跡出土土器の研究—」『向出遺跡』一般国道26号（第2阪和国道）の建設に伴う発掘調査報告書・財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書第55集 財団法人大阪府文化財調査研究センター 317～351 頁
- 岡田憲一 2008a 「凹線文系土器（宮滝式・元住吉山Ⅱ式土器）」『小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器』アム・プロモーション 650～657 頁
- 岡田憲一 2008b 「近畿地方最後の縄の系譜—縄文時代後期における縄文原体の転換背景—」『泉拓良先生選歴記念論文集 文化財学としての考古学』泉拓良先生選歴記念事業会 159～172 頁
- 岡田憲一 2024 「列島西部凹線文ホライズンの成立と解体」『中四国の凹線文土器群』第34回中四国縄文研究会高知大会発表要旨集 中四国縄文研究会 1～14 頁
- 岡田憲一・深井明比古 1998 「個遺跡出土縄文土器の編年—特に元住吉山式土器について—」『個遺跡第2分冊』本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ・兵庫県文化財調査報告第176冊 兵庫県教育委員会 139～163 頁
- 鎌木義昌・木村幹夫 1956 「中国」『日本考古学講座』第三巻 縄文文化 河出書房 188～201 頁
- 木村啓章 2014 「中央地区出土土器の位置づけ」『一乗寺向畑町遺跡出土 縄文時代資料—考察編—』京都大学大学院文学研究科 考古学研究室 51～58 頁
- 佐々木謙・小林行雄 1937 「出雲国森山村崎ヶ鼻洞窟及び権現山洞窟遺蹟—中海沿岸縄文式文化の研究Ⅰ—」『考古学』第八巻第十號 東京考古學會 458

～479 頁

末永雅雄 1944『宮瀧の遺跡』奈良縣史蹟名勝天然記念物調査報告第十五冊 桑名文星堂

玉田芳美・岡田憲一 2010『近畿』『西日本の縄文土器後期』真陽社 191～220 頁

丹治康明 1980『宮瀧式再考』『藤井祐介君追悼記念考古学論叢』藤井祐介君を偲ぶ会 143～159 頁

千葉 豊 2010『山陽』『西日本の縄文土器 後期』真陽社 115～150 頁

中四国縄文研究会編 2024『中四国の凹線文系土器群』第 34 回中四国縄文研究会高知大会発表要旨集

坪井清足 1956『岡山縣笠岡市高島遺蹟調査報告』岡山縣高島遺蹟調査委員会

豊島雪絵 2006『堀坂地内遺跡出土の縄文土器について』『堀坂地内遺跡—経営体育成基盤整備事業堀坂地区に伴う発掘調査—』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 76 集 津山市教育委員会 82～85 頁

豊島雪絵 2010『中国地方における凹線文系土器について』『待兼山考古学論集Ⅱ—大阪大学考古学研究室 20 周年記念論集—』大阪大学考古学友の会 117～137 頁

直良信夫 1928『播磨國押部谷村元住吉山の遺蹟について』『人類学雑誌』東京人類學會 第四十三卷第五號 223～230 頁

幡中光輔 2019『山陰中央部における縄文時代後期中葉の土器編年の再検討』『京田遺跡 4 区』一般国道 9 号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告 39 出雲市教育委員会 191～212 頁

幡中光輔 2021『鳥根県の海水準変動と三瓶山噴火からみた縄文時代の遺跡動態』『海水準変動と遺跡動態』第 31 回中四国縄文研究会岡山大会資料集 中四国縄文研究会 23～36 頁

幡中光輔 2023『土器底部にみる製作技法の変遷と展開—縄文時代後期における出雲平野周辺の様相—』『縄文時代』第 34 号 縄文時代文化研究会

107～122 頁

幡中光輔 2024『山陰地方における凹線文系土器の成立と地域間交流』『中四国の凹線文系土器群』第 34 回中四国縄文研究会高知大会発表要旨集 中四国縄文研究会 49～64 頁

幡中光輔編 2019『京田遺跡 4 区』一般国道 9 号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告 39 出雲市教育委員会

深田 浩・園山 薫編 2020『京田遺跡 2 区 中上Ⅱ遺跡』一般国道 9 号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 国土交通省松江国道事務所・鳥根県教育委員会

守岡正司編 2017『のの子谷横穴墓群 京田遺跡 3 区』一般国道 9 号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3 鳥根県教育委員会

柳浦俊一 2010『山陰』『西日本の縄文土器 後期』真陽社 153～186 頁

柳浦俊一 2017『山陰地方における縄文文化の研究』雄山閣

家根祥多 1981『近畿地方の土器』『縄文文化の研究 4 縄文土器Ⅱ』雄山閣 238～248 頁

山崎順子編 2007『万場Ⅱ遺跡』中山間地域圏整備工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 飯南町教育委員会

和田秀寿 1999『宮瀧式土器の再検討』『考古学雑誌』第 84 巻第 2 号 日本考古学会 45～79 頁

挿図・表出典

図 1・3・7：筆者作成（図 1 は幡中 2024 を一部改変、図 3 の縄文土器写真は筆者撮影、縄文土器は飯南町教育委員会所蔵） 図 2：山崎編 2007、守岡編 2017、幡中編 2019、深田・園山編 2020 より作成 図 4～6：山崎編 2007 より作成（図 5 の縄文土器写真は筆者撮影、縄文土器は飯南町教育委員会所蔵） 表：岡田 2008a、玉田・岡田 2010、千葉 2010、柳浦 2010・2017、幡中 2019・2023 をもとに作成。

縄文時代晩期、合口土器棺の成立過程

— 棺形態分類とその機能 —

立岡和人

要 旨

近畿・東海・北陸地方の一部地域に限定分布する、縄文時代晩期の合口土器棺を集成検討し、その出現状況と要因を考察した。特殊な棺形態である合口棺を外蓋・内蓋・接口に細分類し、良好事例が多い滋賀県の合口棺の土器型式編年から、棺内容積を除々に増大させる時期的変遷をみだし、可能性の一つとして棺埋納年齢が胎児・新生児から乳児にまで拡大したと想定した。更に合口土器棺の出現は、近畿地方において土器棺墓が(再)出現した晩期前・中葉、滋賀県Ⅲa式・篠原式古～中段階当初からではなく、次段階の土器棺墓発展期といえる篠原式新段階であり、東海・北陸地方における出現と併行することを確認した。

キーワード：縄文晩期・篠原式新段階、近畿・東海・北陸地方、(外蓋・内蓋・接口)合口土器棺

はじめに

本稿は、近畿・東海・北陸地方の一部地域に限定分布する、縄文時代晩期に出現した合口土器棺を集成検討し、その出現状況と要因を考察するものである。まず土器棺「墓」分析の利点として、以下の3点を挙げておきたい(立岡 2000)。

1. 汎日本的に分布し、検出事例も多い。
2. 土器を主体とした棺構造のため保存状態もよく遺構検出が容易である。
3. 土器を主体としているため土器型式編年を用いての時期的区分が可能である。

以上の3点から導き出されることは、棺・容器としての、遺物的側面の重視である。つまり遺物中心の型式学を遺構にも応用した試みである。なお、本稿で扱う土器棺墓が果たして「棺」・「墓」であるのかという疑問もあるが、本稿では棺墓の前提で進める。また葬制という観点からは紙幅不足もあり、そういった意味を含め遺構(遺物?)形態に限定した「土器棺」という論点に限定したい。

1. 学史的検討と分析方法

(1) 学史的検討

近畿地方の縄文時代晩期墓制に関する本格的な考察は、滋賀県、北仰西海道遺跡の調査成果(葛原 1987)を受けた、中村健二氏による論考(中村 1991)から始まるといえよう。同論考では、近畿地方における晩期墓制をまとめ、晩期中葉(本稿でいう滋賀Ⅲ式3期～

篠原式期)に土器棺墓が群集化する理由として、再葬と土器棺墓が結びつき、頭蓋骨と一部骨を再葬する土器棺再葬墓がこの時期に広く普及したためとした。また既に、縄文時代晩期合口棺の分布も検討され、滋賀県北部・岐阜県西部・福井県南部の3県境付近に分布の中心があることを指摘していた(中村 1993a)。更に近畿地方が土器棺墓単棺を主体とした地域A(滋賀県・京都府南部の一部以西)と、合口棺が存在する地域B(滋賀県・京都府南部の一部)に二分されること、また地域Bに合口はか多様な土器棺埋設形態が見られるのは、大規模な墓地において複数の出自を表す必要性から、従来に無い棺形態が出現したとみなした(中村 1993b)。合口棺の成立要因を説明した唯一の論考である。

東海地方では、前田清彦氏による論考がまず挙げられる(前田 1993・2000)。前田氏は東海地方の晩期墓制の基礎的考察を行い、未検出の土坑墓を想定し重視するとともに、土器棺内容物を検討し再葬壺棺以前の晩期には乳幼児の単葬が多いことを指摘した。また本稿の棺形態分類においても大いに参考とした。1987年には既に、山本直人氏により石川県内の縄文時代土器棺墓が集成されている(山本 1987)。

九州地方では、1994年に坂本嘉弘氏により、九州地方における縄文時代後・晩期土器棺墓の出現と展開が論じられ(坂本 1994a)、滋賀県滋賀里遺跡の大洞BC式有文深鉢に無文浅鉢で蓋をした合蓋土器棺墓(255号壺棺)を、合口棺と認識し九州地方後期末に創

【埋位】埋設された土器口縁の開口中軸角度により、正・斜・横・逆位に分類。



【埋設構造】土器および土器片で構築された棺・容器構造。単・単蓋・合口・入子構造等に分類。



図1 本稿(立岡 2000)による土器棺分類

出された「九州型埋壺」の影響を受け出現したものとした。それに対し中村健二氏は、近畿地方は別系譜であると反論し(中村 1994)。再び坂本氏は前論を補足するかたちで答えている(坂本 1994b)。坂本-中村論争は、大きくは合口棺の近畿独自発生説を採る中村氏と、合蓋棺を含めた合口棺の九州発生伝播説の坂本氏との対立であるが、小さくは本稿でいう合蓋棺と合口棺の棺形態分類の誤認に発生するものである。本稿では、合蓋棺は九州地方から近畿地方へ伝播した可能性は高いものの合口棺とは別系統で、合口棺については近畿地方以東で独自発生したものとして認識する。

1995年には、山田康弘氏は九州地方の「埋設土器」を集成し、その用途が埋葬だけに限定されるものではなく多様性を持つ可能性が高いとし、再生を祈願されるものがすべて収納の対象になったとする「埋設土器祭祀」の存在を指摘した(山田 1995)。

2000年には、第2回関西縄文文化研究会「関西の縄文墓地」が開催された(関西縄文文化研究会 2000)。滋賀県・京都府・奈良県・和歌山県・大阪府・兵庫県ほか三重県に、愛知県・岐阜県・福井県を加えた地域の墓制関連遺跡が集成されるとともに、多数の研究報告・討論が展開された。その一つに、筆者による発表「近畿地方における縄文晩期土器棺の成立と展開」があった(立岡 2000)。長文となるが結論のみ引用すると、以下のとおりとなる。

- I. 縄文時代後期前葉に、埋壺から発達したと思われる正位の埋設土器(土器棺)が汎日本的に分布する。
- II. 後期中葉から晩期前葉にかけて、近畿地方では埋設土器(土器棺)は減少するが、東北地方・

九州地方北部で発展・増加する。

- III. 晩期中葉には九州地方北部から、中四国地方・近畿地方および北陸地方西部・東海地方西部を東限とする、斜・横位埋設を主体とした土器棺分布圏が成立する。その分布圏は、深鉢粗製化・無文化を通じた「汎西日本の土器圏」(家根 1996)に一致する。
- IV. 北陸地方東部・東海地方東部を西限とした東日本では、晩期中葉においても斜・横位埋設土器棺は見られず、後期以来の正位埋設土器棺のみ分布する。
- V. 以上の事実から晩期中葉という時期には、西日本において斜・横位埋設を主体とする新しい様相と、東日本における正位埋設のみの古い様相の土器棺分布圏に二大別できる。

ここにおいて、晩期中葉における「汎西日本の土器圏」に重なる、「汎西日本の斜・横位埋設土器棺圏」を設定した。また土器および埋葬に関わる土器棺が、汎西日本の規模で変わり、同一の圏内に一体化した以上、社会における大きな変化を想定せざるを得ないとし、これは従来からの晩期の設定基準となっている亀ヶ岡文化・土器福年に対立、あるいはその影響から離れ得る視点にも成り得るとした。

翌 2001 年には、山田康弘氏により中国地方の「土器埋設遺構」に関する論考が発表され(山田 2001)、時期的および数量的な検討とその資料数の少なさから、滋賀里式 3 期はともかく篠原式期の近畿地方の土器棺墓に、九州・中国地方の土器埋設遺構(土器棺)は関与し得ないとした。

(2) 棺形態分類

埋位 大分類としての埋位は、埋設された土器口縁部中心軸角度により、正位・斜位・横位・逆斜位・逆位に五区分したものである。便宜的に角度 60°ごとに分割する（斜位は正・左右横位の各間に、逆斜位は逆・左右横の各間に 30°）が、あくまでも目安である（図 1 上）。

棺構造 次の中分類を棺構造とし、土器及び土器片により構成された棺・容器形態を示す（図 1 下）。本稿では、単棺・単蓋棺・合蓋棺・合口棺を主体とし、その他に入子棺・組合棺や合底棺（土器片蓋）土坑墓等に細分する。これらの分類は、棺・容器の機能として何らかの内容物を入れたという想定のもとに設定したもので、内容積を重視したものである。

単棺：土器一個体を使用したもので、全ての棺構造の基本型となる。有機物の蓋も想定（坂詰 1958）されている。深鉢以外の器種である場合、単（壺）棺等、括弧内に器種名を入れる。

単蓋棺：単棺構造の本体に、容器としての形態をとどめていない土器片を蓋として用いるもの。

合蓋棺：単棺構造の本体に、浅鉢もしくは容器の形態をとどめる土器（深鉢胴底部など）を蓋として用いるもの。

合口棺：単棺構造の容器二つの口縁を合わせたもの。本稿において従来の合口棺を、深鉢口縁部と口縁部がきっちり合わさる接口と、外蓋と内蓋の 3 細分と新規設定した。外蓋合口棺とは、外側の蓋棺（＝副棺）深鉢が、内側の主棺深鉢口頸部を覆うもの（図 2 上左）。また、内蓋合口棺とは、外側の主棺深鉢が、内側の蓋棺（＝副棺）深鉢口頸部を覆うもの（図 2 上右）。深鉢口縁部と口縁部がきっちり合わさるものは、従来名称と分別するため接口合口棺とした（図 2 下）。基本的に主棺となる深鉢のほうが大きい、もしくは正位・斜位においては下位に位置するものが多いが、横位かつ同一規格の合口棺である場合は、どちらが主棺・副棺となるか判別は困難である。

その他参考として、組合棺（〔中村 1993b〕B 類に対応）・土器片蓋土坑墓（〔中村 1993b〕C 類）・合底棺（〔中村 1993b〕H 類）や、入子棺（〔前田 1993〕II D 類）を挙げておきたい。

また小分類として土器棺の属性を挙げ、時期（Ⅰ）内は報告書記載の型式名とし、本稿では（中沢 2007）を参考とした土器型式編年を基に分別した）、残存状況、開口位（主棺口縁）、長径（埋設時の形態で計測、Ⅰ）内数値は残存長径）、口径（主棺口縁、Ⅰ）内数値は残存口径）、器種構成（基本は蓋使用土器＋棺使用土器の順）、穿

孔欠損、内容物を、府県ごとに一覧表に挙げる〔土器棺集成表〕。

2. 地域的検討

(1) 近畿地方

滋賀県 近畿地方の合口棺の分布は、ほぼ滋賀県に限定される。合口棺は（全土器棺墓約 287 基中）49 基確認できる。湖西地域となる北仰西海道遺跡で、時期・埋位・棺構造の判明するものは、晩期中葉、篠原式期（古・中・新の細分不可）の斜位 5 基・横位 8 基（うち外蓋 1 基含む）、滋賀里Ⅳ式期の斜位（外蓋）1 基・横位 3 基、船橋・長原式期の横位 1 基となる〔集成表：滋賀 1〕。

湖北地域の堀部西遺跡では、船橋式期の横位 2 基（内蓋・接口 1 基）〔集成表：滋賀 5〕。杉沢遺跡では五貫森式期（船橋式併行）の横位（接口）1 基、馬見塚式期（長原式併行）の横位 2 基が確認できる〔同：滋賀 6、図 2 下〕。

湖東地域北部の六反田遺跡では、篠原式新段階の斜位（外蓋）2 基・横位（外蓋）1 基と、全てが篠原式新段階で（外蓋）合口棺であるのは注目される〔集成表：滋賀 10、図 2 上左〕。土田遺跡では、口酒井期（五貫森式併行）の横位 3 基（外蓋 1 基・内蓋 1 基・接口 1 基）、船橋式期（五貫森式併行）の横位（内蓋）2 基、五貫森式期（口酒井期・船橋式併行）の横位（接口）2 基、長原式期（馬見塚式併行）の横位 1 基である〔同：滋賀 12、図 2 上右〕。金屋遺跡では、口酒井期・船橋式期の横位 2 基（うち接口 1 基含む）がある〔同：滋賀 15〕。

対照的に、土器棺墓が多数確認されている湖東地域南部の上下 A 遺跡（全 25 基）や相原熊谷遺跡（全 30 基）、湖南地域の滋賀里遺跡（全 25 基）や穴太遺跡（全 7 基）では、合口棺は確認されていない。

京都府ほか 地域の空白域を挟んで、再び合口棺が確認されるのは、京都市の植物園北遺跡の突帯文期のもので、横位？合口棺？1 基で詳細不明である〔集成表：京都 2〕。中臣遺跡では、篠原式新段階の斜位（外蓋）1 基、晩期の横位（外蓋）1 基が確認されている〔同：京都 6〕。そして奈良県橿原市の曲川遺跡では、その可能性がある滋賀里Ⅳ式～船橋式期の横位 1 基が確認できるのみで詳細不明である〔同：奈良 6〕。

(2) 東海地方

三重県 合口棺は（全土器棺墓約 111 基中）12 基確認できる。時間的には、詳細不明だが篠原式併行かとも

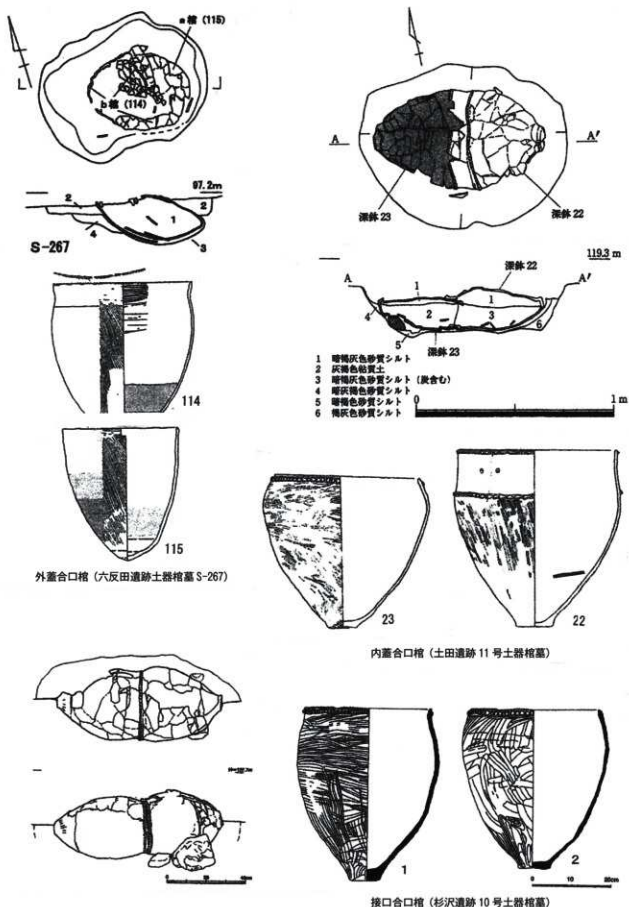


図2 合口棺の細分類 (外蓋・内蓋・接口合口棺) [縮尺 遺構 1: 20、土器 1: 10]

られる下川原遺跡のSX1（横位）[集成表：三重1]を筆頭に、西之山式期の大原塚遺跡SX43（横位（内蓋）合口+下部連結棺）[同：三重23]ほか詳細不明の北一色遺跡がみられるが、五貫森式期に10基と集中し、しかも全て横位埋設となる。単独出土の遺跡が多く、馬見塚式以後のものは見られない。詳細が判明するもので（外蓋）1基・（接口）1基以外は、（内蓋）合口棺が4基と多い。

岐阜県 合口棺は（全土器棺墓約93基中）14基確認できる。時期的には、稲荷山式期の六里遺跡SJ2（斜位（外蓋）合口棺）[集成表：岐阜22]、西之山式期のはいづめ遺跡第16号（横位（外蓋）合口棺）[集成表：岐阜18]、馬見塚式期？の羽沢貝塚第1号甕棺（横位（外蓋）合口棺・第3号甕棺（横位（内蓋）合口棺）[集成表：岐阜23]に代表される。稲荷山式から馬見塚式期にかけて、細別時期不明ながらもまぎれみられる。稲荷山式～西之山式期には（外蓋）4基・（接口）1基・詳細不明合口棺1基、西之山式～五貫森式期には（外蓋）1基・（接口）1基・詳細不明合口棺1基、馬見塚式期には（外蓋）1基・（内蓋）1基、以後は樫王式期？の詳細不明合口棺1基（畑遺跡第4地点合口甕棺）ほかとなる。

合口棺は六里遺跡3例が斜位埋設なのを除き、他は全て横位となる。合口棺計14基中、（外蓋）が6基と半数を占め、かつ（内蓋）が1例のみなのは地域差であろうか。なお（内蓋）1基を含む羽沢貝塚は岐阜県西南端、愛知県・三重県の3県境付近に位置する。

愛知県 合口棺は（全土器棺墓約449基中）31基と数は多いが、全体からの比率は低い。うち11基が麻生田大橋遺跡となり[集成表：愛知7A・7B]、同遺跡例は全て馬見塚式期でしかも横位埋設に限定される。その内訳は（外蓋）4基・（内蓋）2基・（接口）3基・詳細不明合口棺2基となる。馬見塚遺跡でも合口棺は計14基検出され[同：愛知49]、詳細が判明する五貫森式期は（外蓋）2基・詳細不明合口棺2基となるが、細別時期不明の（内蓋）2基・詳細不明合口棺8基には馬見塚式期が多数含まれているものとみられる。その他各遺跡の計6基の内訳は、五貫森式期の（外蓋）1基・詳細不明合口棺4基、樫王式期の詳細不明合口棺1基となる。樫王式期例は、今朝平遺跡の第2号甕棺墓（横位（？蓋）合口棺）である。

静岡県 合口棺は（全土器棺墓約23基中）3遺跡4基と土器棺墓全体を含め事例は少ない。しかも現時点で確認できる土器棺墓の出現範囲・時期が、静岡県西部（遠江）地方・晩期後葉の樫王式期から弥生中期前葉

の九子式期と、極めて限定される特徴を持つ。合口棺の内訳は全て横位で、水神平式期の（外蓋）合口棺1基・（接口）合口棺2基、九子式期の（接口）合口棺1基[静岡県集成表]となる。

（3）北陸地方

福井県 合口棺は（全土器棺墓約70基中）2遺跡6基が確認できる。時期的には、晩期中葉の佐間式期（篠原式新段階併行）とみられる、成仏・木原町遺跡の第31号土器棺（横位（外？蓋）合口棺・第33号（横位（？蓋）合口棺）が、合口棺出現期に該当する。第20号（横位（？蓋）合口棺）は晩期中・後葉と細別時期不明[集成表：福井5]、茶山崎遺跡は晩期とみられる横位合口棺が2基とされるが、時期共に詳細不明である。事例は少ないものの、福井県域は晩期中葉の佐間式期を主体とする横位合口棺の分布圏とみられるが、佐間式期から西之山式期が主体の舟寄福島通遺跡（全15基）にて、合口棺がみられないことには注意が必要である。

石川県 合口棺は（全土器棺墓約82基中）2遺跡4基が確認できる。御経塚遺跡、B1号埋設土器は晩期中葉の中屋3式期（篠原式新段階併行）、斜位（外蓋）合口棺とみられる。B8号埋設土器は晩期後葉の長竹式期、横位（外？蓋）合口棺+下部蓋とみられ底部欠損する。御経塚遺跡の土器棺墓全35基の中で合口棺は極少数例で、しかも両土器棺の時期幅も著しい[集成表：石川3]。そのほか御所の館遺跡で中屋式期とみられる、横位（外蓋・内蓋）合口棺が各1基みられる[同：石川7]。御経塚遺跡のB1号埋設土器の斜位という埋設形態は、後述する正位合口棺と横位合口棺との中間的形態を示すとともに、時期的に合口棺出現期に位置付けられ共に注目される。

富山県 合口棺は（全土器棺墓約36基中）1遺跡2基のみであり、かつ正位埋設という異質な棺埋設形態を示す。早上野遺跡の14号埋設土器は晩期後葉の長竹式期か、正位（外蓋）合口棺で重力の影響か、上部副棺が下部主棺胴部まで覆う、ある意味で入子棺状を呈す。26号埋設土器も晩期後葉の長竹式期か、正位（外蓋）合口棺で上記同様に入子棺状を呈す[集成表：富山1]。

富山県域の合口棺事例は2例と少なく、時期的にも晩期後葉の長竹式期と後出する。しかも2基とも正位埋設であることには、東日本（東北）的要素として注目したい。

新潟県 合口棺は（全土器棺墓約293基中）1遺跡2基と極少数で様相は不鮮明だが、富山県域と同様に正



図3 合口棺出土遺跡とその分布

位埋没を示す。村尻遺跡の第147号土坑は後期後葉の楯付土器併行期か、正位（内？蓋）合口棺で、上部副棺が下部主棺頸部まで落ち込む。土圧により下部棺に落ち込んだ可能性があり、（接口）合口棺であった可能性もあるが詳細不明である。第152号土坑は後期後葉の楯付土器併行期か、正位（内？蓋）合口棺としたが、第147号土坑と同様となる可能性がある〔集成表：新潟5〕。

3. まとめ

(1) 近畿地方の様相

時期別にまとめると〔近畿地方集成表を参照〕、合口棺が確実に出現する時期の篠原式新段階では、六反田遺跡の斜位（外蓋）2基・横位（外蓋）1基、中臣遺跡の斜位（外蓋）1基である。北仰西海道遺跡例は篠原式としが細分できなかったが、斜位5基・横位8基（うち外蓋1基含む）が確認できる。滋賀里Ⅳ式期は、北仰西海道遺跡の斜位（外蓋）1基・横位3基である。口酒井期は土田遺跡で横位3基（うち外蓋1基・内蓋1基・接口1基含む）。口酒井期・船橋式期（五貫森

式併行）は土田遺跡で横位（接口）2基・杉沢遺跡で横位（接口）1基・金屋遺跡で横位2基（うち接口1基含む）、滋賀里Ⅳ式～船橋式期は曲川遺跡で横位？1基？である。船橋式期は、堀西遺跡で横位2基（内蓋1基・接口1基）、土田遺跡で横位（内蓋）2基となる。長原式期（馬見塚式併行）は、杉沢遺跡で横位2基・土田遺跡で横位1基である。その他、滋賀里Ⅴ式（船橋式・長原式期）は北仰西海道遺跡の横位1基、突帯文期は植物園北遺跡の横位？1基、晩期は中臣遺跡の横位（外蓋）1基である。

合口棺の分布範囲を整理すると、滋賀県でもその北半部の湖北・湖西地域及び湖東地域北部を中心とする9遺跡49基、京都府京都市内2遺跡3基、奈良県でその可能性があるもの1基となっており〔近畿地方集成表を参照〕、中村健二氏の地域A・Bの二区分とおりとなる（中村1993b）。但し滋賀県内でも土器棺墓がまとまってみられる、湖東地域南部（上出A遺跡・相原熊谷遺跡）、湖南地域（滋賀里遺跡・穴太遺跡）で合口棺が見られないことには注意が必要である。京都府中臣遺跡例は分布西限となる確実な合口棺である

が、飛び石的な分布となる[図3]。

合口棺の分布及び時期的変遷をまとめると、以下のとおりとなる。

- I. 近畿地方における合口棺の出現(といえは滋賀県に限定されるが)、は、篠原式新段階と考えられ、斜位(外蓋)合口棺が多い[図2上左]。以後、合口棺は口酒井期・船橋式期から長原式期まで存続するが、近畿地方では、弥生前期、遠賀川式期には取り入れられず消滅するとみられる。
- II. 篠原式新段階では、(外蓋)合口棺は斜位4基・横位1基で、(内蓋)合口棺[図2上右]は見られない。それに対し、口酒井期～船橋式期では、(外蓋)合口棺は斜位1基・横位1基のみで、かつ(内蓋)合口棺が横位4基となり、明らかな転換がみられる。また(接口)合口棺[図2下]も出現する(6基)。
- III. 篠原式新段階である滋賀県六反田遺跡において、副棺となる外側の完形深鉢が、主棺となる内側の完形深鉢の口頭部まで覆う斜位(外蓋)合口棺(S267土器棺墓)[図2上左]がみられる。篠原式新段階の合口棺に斜位が多いこと、また次期の滋賀県IV式では合口棺に横位が多いことも、斜位(外蓋)合口棺から、横位(内蓋)・(接口)合口棺への変遷を示す傍証にも成り得よう。

更に要約すると、(1)篠原式新段階における斜位(外蓋)合口棺の出現成立、(2)口酒井期～船橋式期の横位(内蓋)合口棺への変換とともに、(3)口酒井期以後には横位(接口)合口棺へと、時期とともに変遷する過程を示す。つまり、合口棺は「出自を示す」ために発明されたのではなく、(外蓋)合口棺から(内蓋)・(接口)合口棺へと、時期とともに、その形態(及び機能・容量)を徐々に増大させるなかで出現した点を強調し小結としたい。

(2) 東海地方の様相

三重県では、未だ合口棺出土事例は計12基と十分とは言えず、詳細不明を除くと横位(内蓋)合口棺が4基とやや多くみられるが、これは五貫森式期を主体とした時期的要因によるものとみられる[三重県集成表]。(外蓋)合口棺は天保遺跡の1基、(接口)合口棺は蛇亀橋遺跡の1基のみである。大原堀遺跡は、稲荷山式から西之山式期の土器棺墓が12基みられるのに対し、西之山式期の横位(内蓋)合口棺が1基と極

めて限定される。

岐阜県も合口棺出土事例は計14基と少ないが、三重県と対照的に(外蓋)合口棺が6基と半数を占め、横位(内蓋)合口棺は1例(三重県境に近い羽沢貝塚第3号発掘例のみ)となる。六里遺跡は最古段階といえる稲荷山式期の斜位(外蓋)合口棺1基ほか、稲荷山～西之山式期の斜位(外蓋)合口棺2基がみられる[岐阜県集成表]。(外蓋)合口棺が優位なのは、稲荷山式から西之山式期を主体とした時期的要因ともいえるが、(内蓋)合口棺が1例だけなのは地域差となる可能性もある。今後の事例を待ちたい。

愛知県における合口棺出土事例は計31基と多いものの時期的偏りも大きく、全て横位埋設である[愛知県集成表]。五貫森式期の(外蓋)3基・詳細不明合口棺5基、麻生田大橋遺跡例に限定される馬見塚式期の(外蓋)4基・(内蓋)2基・(接口)3基・詳細不明合口棺3基と様々な形態があり、以後は詳細時期不明の(内蓋)2基・詳細不明合口棺8基を除くと、樫王式期の詳細不明合口棺1基(今朝平遺跡)となる。詳細時期不明分を考慮しても、樫王式期はわずか1基で水神式期は皆無というのは劇的な減少ではあるが、深鉢等の同一器種を用いた合口棺から、壺を主棺に用いた合蓋(壺)棺への変換を考慮したい。これは北陸地方においても同様とみられる。愛知県の全体的な合口棺の流れとしては、五貫森式期には(外蓋)が、馬見塚式期には麻生田大橋遺跡例に代表される各形態の増加と、馬見塚遺跡の時期不明分を考慮した(内蓋・接口)合口棺の存在が推定される。

静岡県における合口棺の事例は、前述のとおり晩期後葉以後が主体となり後出的で、その発生地とは成り得ないことが判明し、必然的に関東地方及び山梨県も遮断されることから、合口棺を含めた土器棺墓発生の候補地からも外れる。

滋賀県内事例の検討の結果、篠原式新段階における合口棺の出現と、篠原式新段階における斜位(外蓋)合口棺から口酒井期～船橋式期における横位(内蓋)合口棺・横位(接口)合口棺への転換、という二点を指摘した。三重県事例は未だ少ないものの五貫森式期における横位(内蓋)合口棺の優勢を、これに対し岐阜県は横位(内蓋)合口棺が少数という地域差(時期差)がみられる。また静岡県内事例からは、後出的で主たる分布域から外れる様相が読み取れた。

これら東海4県での合口棺の集成検討の結果、判明したのは出現期の合口棺事例が非常に少ないことである。これは想定外であった。三重県では、様相不明な

表 合口土器棺集成表

近畿地方 (滋賀県)		土器棺									
番号	遺跡名	遺構名	時期(報告書記載形式名)	埋没	地層	残存状況	開口部	高さ	口径	埋葬状況	参考・内装物
1-3	北近畿道津湖 【高島市田中津湖】	3号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-4		4号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-5		5号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?					無文深鉢+	透眼骨片
1-6		9号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-10		10号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-41		41号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-42		42号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-43		43号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-45		45号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-47		47号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-48		48号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-54		54号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-55	北近畿道津湖 【高島市田中津湖】	55号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-60		60号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-61		61号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-62		62号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-71		71号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-72		72号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-77		77号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-80		80号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-81		81号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
1-92		92号土器棺蓋	縄文式か	傾伏	合口棺?						
5-1	京都府 【京都市】	S2101	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
5-3		S2102	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
6-1		1号	五蓋式(馬耳式)	傾伏	合口棺?						
6-3		3号	五蓋式(馬耳式)	傾伏	合口棺?						
6-4		4号	五蓋式(馬耳式)	傾伏	合口棺?						
6-5		5号	五蓋式(馬耳式)	傾伏	合口棺?						
6-6		6号	五蓋式(馬耳式)	傾伏	合口棺?						
6-7		7号	五蓋式(馬耳式)	傾伏	合口棺?						
6-8		8号	五蓋式(馬耳式)	傾伏	合口棺?						
6-10		10号	五蓋式(馬耳式)	傾伏	合口棺?						
6-11		11号	五蓋式(馬耳式)	傾伏	合口棺?						
8	京都府 【京都市】	三ツ木遺跡(東山)	長方形	傾伏	合口棺?						
10-1		S248	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
10-2		S249	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
10-5		S267	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
12-6		6号土器棺蓋	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
12-8		8号土器棺蓋	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
12-10		10号土器棺蓋	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
12-11		11号土器棺蓋	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
12-14		14号土器棺蓋	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
12-15		15号土器棺蓋	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
12-16		16号土器棺蓋	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
12-17		17号土器棺蓋	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
15-3	京都府 【京都市】	S-503A	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
15-4		S-503D	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
18		水鏡遺跡(東山)	長方形	傾伏	合口棺?						
30-2		SX2	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
2-1	京都府 【京都市】	SX2	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
6-11		SX4	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
6-14		SX17	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
2-1	京都府 【京都市】	SX2	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
6-11		SX4	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
6-14		SX17	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
2-1		SX2	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
6-11		SX4	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
6-14		SX17	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
2-1		SX2	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
6-11		SX4	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
6-14		SX17	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
2-1		SX2	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
6-11		SX4	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						
6-14		SX17	口蓋片(口蓋片)	傾伏	合口棺?						

(奈良県)

番号	遺跡名	遺構名	特殊(報告書記載形式名)	埋没	埋没深	残存状況	開口部	長さ	口徑	遺構構成	穿孔	内容物

6-1	西川遺跡 (櫻井市)	土器群1	溝貫層Ⅱ～船橋式?	埋没	台口程か 埋??	上部断平か	東西	84+	34	深鉢+深鉢(1)		
-----	---------------	------	-----------	----	-------------	-------	----	-----	----	----------	--	--

東海地方 (三重県)

番号	遺跡名	遺構名	特殊(報告書記載形式名)	埋没	埋没深	残存状況	開口部	長さ	口徑	遺構構成	穿孔	内容物

1-1	下川原遺跡 (亀山市)	土器群基	溝貫式層Ⅰか溝貫式	埋没	(17)台口 程か	上部断平か				深鉢+深鉢か		
2-2	境尾谷遺跡 (いなべ市)	SX35	五瓦器式か	?	溝貫層か 台口程か					[遺]一糸安文土深鉢(10)+ [内]一糸安文土深鉢上平部(10)		
4	山田遺跡 (美濃町)	SX201	五瓦器式	?	台口程か					一糸安文土深鉢(10)+ 一糸安文土深鉢(10)		
5-5	志知南遺跡 (桑名市)	土器群基 SX109	五瓦器式新	埋没	(内)溝口 程+複合部	同一部断平	南東	184	44	[遺]一糸安文土深鉢(11)+[内] [内]一糸安文土深鉢(10)+[内] [内]一糸安文土深鉢(5)		
5-9	北一色遺跡 (鈴鹿市)	土器群基 SX129	五瓦器式新	埋没	(17)溝口 程	上部断平	北北東	82	42	[北]一糸安文土深鉢(17)+ [南]一糸安文土深鉢(16)		磨石片 (18)
11	北一色遺跡 (鈴鹿市)	台口段埋 残	溝貫式新段埋～西之山 式か	埋没か	(17)溝口 程							
15	高千穂遺跡 (津市)	SX3	五瓦器式	埋没	(内)溝口 程か	上部断平か	北東	54		[内]一糸安文土深鉢(10)+ [内]二糸安文土深鉢(10)		
18-1	柳屋橋遺跡 (松阪市)	段埋基SX1	五瓦器式	埋没か	台口程か					一糸安文土深鉢(22)+ 一糸安文土深鉢上平部(25)		
18-2		段埋基SX2	五瓦器式	埋没か	台口程か	残存不良				一糸安文土深鉢(18)+ 一糸安文土深鉢(24)		
18-3		段埋基SX3	五瓦器式	埋没	(内)溝口 程	上部断平	南南西			一糸安文土深鉢(12)+ 一糸安文土深鉢(?)		
18-4		段埋基SX4	五瓦器式	埋没	(溝口)溝口 程	上部断平	北北西			一糸安文土深鉢(10)+ 一糸安文土深鉢(22)		
19	天保遺跡 (松阪市)	SX1	五瓦器式	埋没	(溝口)溝口 程	上部断平	南北 N13° E	65	37	[北]一糸安文土深鉢(12)+ [南]一糸安文土深鉢(22)+ [南]一糸安文土深鉢(22)		
23-11	大原南遺跡 (松阪市)	土器群基 SX43	西之山式	埋没	(内)溝口 程+下段埋 基	一部断平	西南西 N6° W	70	42	[主]一糸安文土深鉢(33)+[下] [下]無文土深鉢(24)		

(岐阜県)

番号	遺跡名	遺構名	特殊(報告書記載形式名)	埋没	埋没深	残存状況	開口部	長さ	口徑	遺構構成	穿孔	内容物

11-1	伊勢遺跡 (各務原市)	台口段埋(東4 段)	縄文式	埋没	台口程か							
16-4	上原遺跡(後身 川町御蔵村)	土器群基S24	縄文式西～西之山式	埋没	(17)溝口程	上部2/3断 N12° W	北北西	(48)	(26)	無文土深鉢(1005)+無文土深鉢(1006)		
16-6	同上	土器群基S26	西之山式～五瓦器式	埋没	(17)溝口程	上部2/3断 N5° E	北北東			一糸安文土深鉢(1008)+ 一糸安文土深鉢(1005)		製片?
17-4	戸内村平遺跡 (後身川町御蔵村)	第7号土器群 基 S27	縄文式西～西之山式	埋没	(溝口)溝口 程か	上部断平か	南東 S40° E	80	48	[北]無文土深鉢(51)+ [南]無文土深鉢(51)+ [南]無文土深鉢(51)		
18-6	第6号 土器群基	池原		埋没	(17)溝口 程	残存不良	北北西 N17° W	72	40			
18-11	辻いのり遺跡 (後身川町御蔵村)	第11号 土器群基	西之山式～五瓦器式 下V式	埋没	(溝口)溝口 程	2/3断	北北東 N57° E	53		[東]一糸安文土深鉢(99)+ [西]一糸安文土深鉢(61)		
18-12	同上	第12号 土器群基	西之山式～五瓦器式 下V式	埋没	(外)溝口 程	上部断平	南西 N90° W	37		[外]無文土深鉢(75)+ [内]無文土深鉢(108)		
18-16	同上	第16号 土器群基	西之山式か	埋没	(外)溝口 程か	2/3断	北東 N43° E	51		[外]無文土深鉢(178)+ [内]無文土深鉢(68)		
22-1	六重遺跡 (大野町)	土器群段埋基 S11	堀原山式～西之山式 溝貫式	斜倒(40°)	(外)溝口 程	上部断平	南西 S40° W	50	40	[上]無文土深鉢(269)+ [下]無文土深鉢(272)		
22-2		土器群段埋基 S12	堀原山式	斜倒(38°)	(外)溝口 程	上部断平	北北東 N25° E	52	40	[上]無文土深鉢(271)+ [下]無文土深鉢(272)		大野石片 (273)
22-10		土器群段埋基 S110	堀原山式～西之山式 溝貫式	斜倒(30°)	(外)溝口 程	上部断平	北北東 N18° E	54		[上]無文土深鉢(300)+ [下]一糸安文土深鉢(304)+ [下]無文土深鉢(305, 303)		
22-11		土器群段埋基 S111	堀原山式	斜倒(25°)	(外)溝口 程か	完形	南	56		[上]一糸安文土深鉢(304)+ [下]無文土深鉢(305, 303)		
23-1	沼沢段埋 (津市市南東部)	第1号段埋	瓦器式か(短期後半)	埋没	(外)溝口 程	完形	南東	74	54	[副]バケツ形無文土深鉢(1)+ [主]一糸安文土深鉢(2)		底穴
23-3	同上	第3号段埋	短期後半	埋没	(外)溝口 程	一部埋没	南南東	(46)	48	[副]バケツ形無文土深鉢(4)+ [主]一糸安文土深鉢(5)		底穴

(愛知県)

番号	遺跡名	遺構名	特殊(報告書記載形式名)	埋没	埋没深	残存状況	開口部	長さ	口徑	遺構構成	穿孔	内容物

7A-14	森生田大橋 遺跡(豊川市 豊川町)	土器群基 S24	土+瓦器新～瓦器式	埋没	(外)溝口 程	上部断平か	北西 N27° W	56		[主]バケツ形無文土深鉢(42)+ [副]バケツ形無文土深鉢(13)		底部穿孔
7A-27		土器群基 S227	土+瓦器新式	埋没(28°)	(外)溝口 程	上部断平	南 S0° W	70		[主]低文系土深鉢(41)+ [副]バケツ形無文土深鉢(42)		底部側面 穿孔
7A-54		土器群基 S254	土+瓦器新式	埋没	(外)溝口 程	上部2/3断 平	西之西 N65° E	(50)		[主]バケツ形無文土深鉢(5)+ [副]バケツ形無文土深鉢上平部 (7)		
7A-59		土器群基 S259	土+瓦器新式～段王 式	埋没	(外)溝口 程	上部断平	東 N10° E	80		[主]バケツ形無文土深鉢(52)+ [副]バケツ形無文土深鉢(13)		
7B-8		土器群基S28	瓦器式	埋没	(溝口)溝口 程	上部2/3断 平	東-西方	74		[東]無文土深鉢(8-1)+ [西]無文土深鉢上平部(8-2)		
7B-28		土器群基 S278	瓦器式	埋没	(溝口)溝口 程	一部埋没	北北東-南 南西方	86	48	[北]低文系土深鉢(28-1)+ [南]低文系土深鉢(28-2)		
7B-34		土器群基 S284	瓦器式	埋没	(溝口)溝口 程	上部断平	北北東-南 南西方	88	40	[北]低文系土深鉢(34-1)+ [南]一糸安文土深鉢(34-2)		
7B-43		土器群基 S243	瓦器式	埋没	(溝口)溝口 程	完形	南-北方向	94	40	[北]低文系土深鉢(43-1)+ [南]低文系土深鉢(43-2)		
7B-90	森生田大橋 遺跡(豊川市 豊川町)	土器群基 S250	瓦器式	埋没	(外)溝口 程	上部断平	北北西-南 南西方	48	(36)	[北]無文土深鉢(50-2)+ [南]バケツ形無文土深鉢(50-1)		
7B-89		土器群基 S289	瓦器式	埋没	(17)溝口 程	(2)埋没	西之西-東 南東方	72		[北]バケツ形無文土深鉢(50-1)+ [南]バケツ形無文土深鉢(50-2)		

7B-1-29	麻生田大橋遺跡(豊川市麻生町)	土器群第32(19)	馬具塚式	横位	(外?蓋)合口口	ほぼ定形	西-東方向	62	36	【西棺】糸織文深鉢下半部(129-2) + 【東棺】ワツシ形糸織文深鉢(129-1)		
14	五真森遺跡(豊川市)	合口棺	五真森式	横位	合口棺か	ほぼ定形か	北西方向	88	37	無文深鉢(5) + 無文深鉢(6)		
25-3	中野中遺跡(豊川市田原町)	漆器箱第2号	縄文式	横位	合口棺					深鉢 + 深鉢		スクレーパー
38-12	神明遺跡(岡崎市)	土器群(12)	五真森式	横位	合口棺?					一糸織文深鉢上半部(2) + 無文鉢上半部(3)		
38-13		土器群(13)	五真森式	横位	合口棺?					深鉢か		
49-1		1号地1	五真森式新	(斜)横位	(外?蓋)合口口		北			【前棺】ワツシ形一糸織文深鉢(図版六二・4) + 【主棺】一糸織文深鉢(図版六二・12)		
49-2		1号地2			ワ真合口口							
49-4		1号地4			ワ真合口口		南北					
49-5		1号地5			ワ真合口口							
49-7		1号地7	五真森式	横位か	ワ真合口口		南西一北東					
49-9		1号地9			ワ真合口口							
49-10		2号地1			ワ真合口口		北北東					
49-12		3号地		横位か	漆器箱底面		東一西					
49-18		4号地1			ワ真合口口		南一北					
49-21		7号地		横位	漆器箱底面		西					
49-24		9号地2		(斜)横位	ワ真合口口		南一北					
49-25		台せ口土器棺	五真森式	(斜)横位	(外?蓋)合口口					【前棺】一糸織文深鉢(図版六二・5) + 【主棺】小型一糸織文深鉢(図版六二・4)		
49-39		54号(ハコ)土器棺		横位か	合口棺か	土器箱半か				無文深鉢(10)深鉢(12)か		
49-37		台せ口土器棺	五真森式	横位	合口棺か	土器箱半か				無文深鉢(土器箱半深鉢)47		
53-40		土器群第52(40)	五真森式	横位	(ワ真)合口口	土器箱南半	西南西一東北東	65	35	【外棺】ワツシ形無文深鉢(6) + 【内棺】ワツシ形無文深鉢(6)		
53-42	牛牧遺跡(名古屋市)	土器群第52(42)	五真森式新(馬具塚式)	横位	(外?蓋)合口口	定形	南西	58	33	【外棺】ワツシ形無文深鉢(6) + 【内棺】ワツシ形一糸織文深鉢(64)		

《静岡県》

番号	遺跡名	遺構名	位置	傾斜	開口方位	開口状況	土器群		器種構成	穿孔	内容物	
							高さ	口径				
2-2	源川遺跡 【静岡市】	土器群第35 SR66	【発見中】新築、丸字式	横位	(横口)合口口	定形	北北東、南南西方向	63	37	【棺A】糸織文深鉢(15段上) + 【棺B】糸織文深鉢(15段下) + 【副葬品】糸織文深鉢部片		指輪部分で馬車動物標定
4-3	沢上谷遺跡 【浜松市】	土器群SK382 【水神平式】	横位	(外)蓋合口口 + 副葬品深鉢	上部陥没	東南東		64	38	【東棺】糸織文深鉢(1106.81) + 【西棺】糸織文深鉢(102) + 【副葬品】糸織文深鉢部片(1107.1) + 土器箱内(1101.11-2) + 648		
4-4		土器群SK383 【水神平式か】	横位	(横口)合口口	上部2/3陥没					【東棺】糸織文深鉢(1028) + 【西棺】糸織文深鉢部片(1028)		
7-3	新前遺跡 【浜松市】	土器群SK85 【水神平式】	横位	(横口)合口口 + 土器箱	土器箱南半	北北東、南南西方向		54	34	【北棺】糸織文深鉢(369) + 【南棺】糸織文深鉢(310) + 【副葬品】糸織文深鉢(366-3) + 52		

北陸地方《福井県》

番号	遺跡名	遺構名	所在地(市町村)	位置	経緯度	残存状況	開口位	高さ	口径	器種構成	穿孔	内容物
1-1	北山崎遺跡(あわら市田舎津町)			横位	ワ合口口							
1-2				横位	ワ合口口							
5-13		第13号土器棺	美濃式か(晩期)	横位	(ワ真)合口口	上部南半	北北西 N30° W	62	46	【南棺】ワツシ形糸織文深鉢(13段) + 【北棺】ワツシ形糸織文深鉢(13段443)		体幹骨・体肋骨
5-20	成仏木遺跡(永平寺町)	第20号土器棺	晩期中・後葉(晩期)	横位	(ワ真)合口口	上部2/3陥没	北北西 N21° W	(54)				
5-31		第31号土器棺	晩期式か(晩期)	横位	(外?蓋)合口口	ほぼ定形	北東 N64° E	74	44	無文深鉢(13段5) + 無文深鉢(13段26) + 無文深鉢(13段217)		磨石1
5-33		第33号土器棺	晩期式か(晩期)	横位	(ワ真)合口口	土器箱南半	北 N67° E	70	48	無文深鉢(13段132) + 無文深鉢		

《石川県》

番号	遺跡名	遺構名	所在地(市町村)	位置	経緯度	残存状況	開口位	高さ	口径	器種構成	穿孔	内容物
3-10	細野遺跡(野々市市)	R1号埋土土器棺	機組中(機組39式)	(斜)横位	(外)蓋合口口	上部南半	東南東 S67° E	58	38	【前棺】ワツシ形無文深鉢(50段78) + 【主棺】無文深鉢(50段77)		
3-17		R8号埋土土器棺	晩期後葉(長竹式)	横位	(外?蓋)合口口	上部南半	南西 S34° W	78	56	【主棺】ワツシ形糸織文深鉢(53段40) + 【副葬品】無文深鉢(52段40) + 【下部蓋】糸織文深鉢部片(52段40)		底部欠損
7-8	御所の跡遺跡(白山市山田口村)	土器群K-12	中国式か	横位	(内)蓋合口口	定形	南南西	60	42	【前棺】無文深鉢(9段7) + 【主棺】無文深鉢(9段3)		
7-11		土器群L-12	中国式か	横位	(外?蓋)合口口	定形	東北東	68	30	【前棺】無文深鉢(9段7) + 【主棺】無文深鉢(9段4)		

《富山県》

番号	遺跡名	遺構名	所在地(市町村)	位置	経緯度	残存状況	開口位	高さ	口径	器種構成	穿孔	内容物
1-14	早戸上野遺跡(魚津市)	14号埋土土器棺	晩期後葉、長竹式	正位	(外)蓋合口口	上部南半	—	(38)	32	【前棺】ワツシ形糸織文深鉢部片(818) + 【主棺】ワツシ形無文深鉢(817)		石力骨(152)
1-26		26号埋土土器棺	晩期後葉、長竹式	正位	(外)蓋合口口	土器箱南半	—	(24)	(30)	【前棺】無文深鉢部片(842) + 無文深鉢(843) + 【主棺】無文深鉢部片(844)		底部欠損

《新潟県》

番号	遺跡名	遺構名	所在地(市町村)	位置	経緯度	残存状況	開口位	高さ	口径	器種構成	穿孔	内容物
5-40	村沢遺跡(新井市)	第141号土坑	晩期後葉(長竹式)	正位	(内)蓋合口口	上部南半	—	30	(30)	【前棺】深鉢 + 【主棺】深鉢		
5-42		第152号土坑	晩期後葉(長竹式)	正位	(内)蓋合口口	上部陥没	—	36		【前棺】深鉢 + 【主棺】深鉢		

が篠原式期とみられる下川原遺跡 SX1 (横位 (? 蓋)) が、岐阜県では稲荷山式期の六里遺跡 SJ2 (斜位 (外蓋)) がみられるのみで、数基まとまったり、あるいは時期継続してみられない。六里遺跡を有する岐阜県のみ、稲荷山式期から西之山式期に合口棺が数基まとまってみられるだけで、滋賀県の様相に近似する。むしろ、合口棺発生期とみられる篠原式から西之山式期の様相は、滋賀県のほうがより多く確認でき、出現地についてはより範囲が限定できるようになってきた。改めて、中村健二氏による「滋賀・岐阜・福井 3 県境における合口棺発生説」(中村 1993a・b) が注目を集める結果となった。

(3) 北陸地方の様相

新潟県の事例も少なく不明点が多いが、富山県の正位合口棺を鑑みると、正位合口棺の由来がより東日本 (東北地方) と関連づけられる可能性も想定した。つまり、東北地方の正位合口棺から、新潟・富山県を介し、石川県の斜位合口棺 (御経塚遺跡の B1 号埋設土器)、そして福井県の横位合口棺へという、合口棺の成立に東北方面の影響を想定したものだが、その可能性は低い。むしろ (石川) 福井・滋賀・岐阜 3 県境を中心とする地域における、篠原式新段階の斜位 (外蓋) 合口棺から口酒井期の横位 (接口) 合口棺への方向性を重視した、棺内容積拡大を目的とした合口棺の成立との関連性を見いだしたい。

北陸地方における合口棺の最古例は、石川県御経塚遺跡の B1 号埋設土器 (中層 3 式、斜位 (外蓋) 合口棺) である。これは列挙すると、滋賀県六反田遺跡のいずれも篠原式新段階の 3 基、S24B と S267 (斜位 (外蓋) 合口棺)・S24C (横位 (外蓋) 合口棺)、そして京都府中臣遺跡例 (篠原式新段階か、斜位 (外蓋) 合口棺か)、岐阜県戸入村平遺跡の土器棺墓 S27 (横位 (接口) 合口棺、稲荷山式～西之山式期か)、六里遺跡の 3 基、土器埋設遺構 SJ1・2・10 (稲荷山式～西之山式期、斜位 (外蓋) 合口棺) と時期的に併行する。いずれも篠原式 (新段階) から滋賀県Ⅳ式併行期となる、(桜井) 稲荷山式から西之山式期に位置付けられ、斜位 (外蓋) 合口棺を主体とする。未だ確認数は少ないものの、北陸地方においても合口棺出現期および地域が極めて限定できる見通しとなった [北陸地方集大成]。

おわりに

合口土器棺墓については、その卵形を呈す形態から再生観念を含め様々な想定がなされてきた。古くは昭和

和 13 年、かつての小林行雄氏も密着な観察とともに、縄文時代晩期、滋賀県杉沢遺跡の合口棺に弥生文化の影響を考えた (小林ほか 1938)。

本稿では棺形態分類でも述べたとおり、土器棺の「棺」としての容量を重視し、単棺あるいは単蓋棺と比較して、(接口) 合口棺の容量は 2 倍 (合蓋棺および外蓋・内蓋合口棺の場合は 1.5 倍) と単純に考えると、より大きい内容物を納めるためのもの、つまり棺内容積の拡大を意図したものともみた。

内容物については再葬の可能性もあり予断を許さないが、今回の再検討により、棺内容積の増加を棺内容物の増大、つまり胎児・新生児から乳児までの年齢層拡大の結果と捉えるならば、合口棺の出現は葬制という社会組織編入の仕組みが変化したためと考えられる。但し合口棺が分布する地域だけに限定されるが。

謝辞

恩師亡きあとと四半世紀、矢野先生にはずっとお世話になりました。そのご恩恵には及びませんが、感謝の気持ちとともに拙文を書かせていただきました。今後ともご指導のほど宜しくお願い致します。

参考文献

- 小林行雄・藤岡謙二郎・中村春壽 1938 「近江坂田郡春照村杉沢遺蹟－縄文式土器合口甕棺発掘報告－」『考古学』第 9 巻第 5 号 pp.221-235
- 坂詰秀一 1958 「縄文文化における甕棺葬の基礎的研究」『立正大学文学部論叢』9 pp.88-109
- 葛原秀雄 1987 「北伊西海道遺跡の調査」『今津町文化財調査報告書』第 7 集。今津町教育委員会 pp.85-87
- 山本直人 1987 「石川県の土器棺」『福岡遺跡』河内村教育委員会 pp.1-88
- 中村健二 1991 「近畿地方における縄文晩期の葬制について」『古代文化』43-1。古代学協会 pp.17-31
- 中村健二 1993a 「県境の遺跡」『滋賀文化財だより』184。財団法人滋賀県文化財保護協会 pp.1-4
- 中村健二 1993b 「土器棺墓よりみた近畿地方晩期後半の地域色について」『滋賀考古』第 10 号。滋賀考古学研究会 pp.9-28
- 前田清彦 1993 「土器棺墓からみた伊勢湾周辺の墓制」『突帯文土器から条痕文土器へー伊勢湾周辺地域における縄文文化の解体と弥生時代の始まりー』第 1 回東海考古フォーラム豊橋大会資料集 pp.122-143
- 坂本嘉弘 1994a 「理蓋から甕棺へー九州縄文埋蓋

考一」『古文文化談義』第32集。古文化研究会 pp.1-28

中村健二 1994『坂本嘉弘「埋蔵から発掘へー九州縄文埋蔵考一」を読んで』『古文文化談義』第33集。古文化研究会 pp.247-249

坂本嘉弘 1994b『拙稿「埋蔵から発掘へー九州縄文埋蔵考一」に対する中村氏のコメントに答えて』『古文文化談義』第33集。古文化研究会 pp.250-255

山田康弘 1995『九州の埋設土器』『熊本大学文学部論叢』第49号 pp.84-104

家根祥多 1996『縄文土器の終焉』『縄文土器出現』歴史発掘2。講談社 pp.134-154

関西縄文文化研究会 2000『関西の縄文墓地』第2回関西縄文文化研究会発表要旨・資料集 pp.1-112

立岡和人 2000『近畿地方における縄文晩期土器の成立と展開』『関西の縄文墓地』第2回関西縄文文化研究会発表要旨・資料集 pp.83-96

前田清彦 2000『埋蔵人骨からみた伊勢湾東岸地域の晩期墓制』『関西の縄文墓地』第2回関西縄文文化研究会発表要旨・資料集 pp.103-112

山田康弘 2001『中国地方の土器埋設遺構』『鳥根考古学会誌』第18号。鳥根考古学会 pp.53-80

中沢彦彦 2007『関西出土土器東日本系土器の再検討』『関西の突帯土器』第8回関西縄文文化研究会発表要旨・資料集 pp.113-125

報告書

滋賀県 ①. ①今津町教委 1985・1986・1987『今津町文化財調査報告書』第4・5・7集 / ②同 1989『今津町内遺跡調査概要報告書』 5. 滋賀県教委 1993『堀部西・丸岡塚・春近遺跡』 6. ①小林行雄ほか 1938『考古学』第9巻第5号 / ②伊吹町教委 1996『杉沢遺跡発掘調査報告書・谷海道遺跡』 / ③立命館大学文学部 2015『滋賀県米原市杉沢遺跡発掘調査報告一 2011・2012年度の調査一』 8. 中井均 1991『滋賀文化財だより』183 10. 滋賀県教委 2013『六反田遺跡Ⅱ』 12. 多賀町教委 2004『土田遺跡一第4次調査・第5次調査一』 15. 滋賀県教委 2000『金屋遺跡』 18. 五箇荘町教委 1985『本流遺跡・平坂遺跡』 30. 滋賀県教委 2011『七条浦遺跡・志那湖底遺跡』京都府 2. (財)京都市埋蔵文化財研究所 1989『京都市埋蔵文化財調査概要一昭和61年度一』 6. ①(財)京都市埋蔵文化財研究所

1983『京都市埋蔵文化財調査概要一昭和57年度一』 / ②同 1996『京都市埋蔵文化財調査概要一平成6年度一』奈良県 6. 奈良県立歴史考古学研究所付属博物館 1988『大和を掘る』1987年度発掘調査速報展覧

三重県 1. 名張市教委 2000『下川原遺跡第3次調査概要』 2. 三重県埋蔵文化財センター 2002『権現坂遺跡発掘調査報告』 4. 東員町教委 1991『山田遺跡発掘調査報告一縄文時代編一』 5. 三重県埋蔵文化財センター 2008『志知南浦遺跡発掘調査報告』 11. 鈴鹿市 1980『鈴鹿市史』第1巻 15. 一志町教委 1991『高寺遺跡発掘調査報告』 18. 三重県教委 1982『昭和56年度県営園地整備事業地城域埋蔵文化財発掘調査報告』 19. 三重県埋蔵文化財センター 1991『近畿自動車道(久居-勢和)埋蔵文化財発掘調査報告一第3分冊7一』 23. 三重県埋蔵文化財センター 2008『大原堀遺跡発掘調査報告一第2・3次調査一』岐阜県 11. 各務原市教委 1973『伊賀遺跡発掘調査報告書』 16. (財)岐阜県文化財保護センター 1998『上原遺跡Ⅰ』 17. (財)岐阜県文化財保護センター 1994『戸入村平遺跡』 18. 岐阜県教委 1989『はいづめ遺跡』 22. (財)岐阜県文化財保護センター 2018『六里遺跡・稲荷遺跡』 23. 南濃町教委 2000『羽沢貝塚発掘調査報告書』愛知県 7A. (財)愛知県埋蔵文化財センター 1991『麻生田大橋遺跡』 7B. 豊川市教委 1993『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』 14. 杉原莊介・外山和夫 1964『豊川流域における縄文時代晩期の遺跡』『考古学集刊』第2巻第3号 25. 足助町教委 1979『今朝平遺跡概観』 38. 新編岡崎市史編さん委員会 1987『新編岡崎市史』史料考古(上) 49. ①澄田正一・大参義一・岩野見司 1970『新編一宮市史』資料編一縄文時代 / ②一宮市教委 1975『馬見塚遺跡範囲確認調査報告』 53. ①守山市教委 1961『牛牧遺跡』 / ②(財)愛知県埋蔵文化財センター 2001『牛牧遺跡』静岡県 2. (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988『原川遺跡Ⅰ』 4. 浜松市教委 1990『郡田地区発掘調査報告書』下巻 5 7. 同上『福井県』1. 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2000『桑山崎遺跡Ⅱ』 5. 永平寺町教委 1994『金剛丸・成仏・木原町遺跡』石川県 3. 野々市町教委 1983・1989・2003・2009『野々市町御経塚遺跡・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』 7. 石川県教委 1975『御所の館縄文遺跡』富山県 1. (公財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2012『早月上野遺跡発掘調査報告』新潟県 1. 新発田市教委 1982『村尻遺跡Ⅰ』

縄文後晩期の近畿地方における小型石棒類の文様変遷

小野大輔

要 旨

小型石棒類は縄文後晩期に全国的に出現する呪術具と考えられる棒状の石製品である。かつて全国的な分類がなされ、その中で近畿・東海地方を中心に展開する型式として設定された「標原型石刀」は、標原式文様との類似性が指摘され、同時期に盛行したと考えられた。その後、標原式文様の時期的な位置付けは研究の進展で大きく変化した。それに伴って標原型石刀の年代観も変化していったが、明確な消長は示されずにいた。しかし近年、標原式文様終焉後の晩期中葉に位置付けられる標原型石刀の存在が指摘され、同時に小型石棒類において標原式文様が保存された可能性が指摘されている。この指摘を含め、晩期の無文と呼ばれる事象について取り扱うには、小型石棒類における文様の変化をとらえる必要がある。そこで、指摘の資料が存在する近畿地方において、小型石棒類における文様の変遷の提示を試みた。

検討の結果、標原型石刀として扱われてきた有文無頭小型石棒類は、晩期中葉まで継続することが明らかになった。また、晩期前葉と中葉で文様構成に大きな変化があることも明らかになり、標原式文様が用いられた晩期前葉からの文様構成を小型石棒類において引き継いでいるかは更なる検討を要する結果となった。一方で、有文無頭製品の終焉と前後して出現する有文有頭製品には標原式文様との共通点が比較的多い製品の存在が指摘できる。ただし、類似するという点で標原式文様と標原型石刀を同時期に比定できないことが明らかになった現在、異なる製品においてどこまでを同一の文様と捉えるかについては慎重になる必要がある。

キーワード：縄文時代 小型石棒類 標原式文様

はじめに

石棒においては、呼称に差はあるが石棒を大型と小型に分け、さらに横断面形状が片刃状のものを石刀、両刃状のものを石剣と呼ぶのが、現在では一般的である。これらの分類は鳥居龍蔵や八幡一郎の設定した基準が基となっている（鳥居 1924、八幡 1933、1934）。また、大野雲外は小型石棒、石刀、石剣を併せた分類の検討を行い（大野 1908）、現在では小型石棒、石刀、石剣の3種が大型石棒と一線を隔し、小型石棒類や刀剣形石製品などと総称されて扱われる場合が多い。これら小型石棒類の詳細な分類については、後藤信祐が行った全国的な集成と分類が基盤となっている（後藤 1986、1987）。後藤氏はこの中で「標原型石刀」を設定した。そして標原式文様との関連を指摘し、両者は併行する時期のものとしている。一方で、近年では必ずしも標原式文様の存続時期と併行しない製品の存在が近畿地方で指摘されている。本稿はこのような指摘を踏まえ、近畿地方における小型石棒類の文様変化を検討するものである。

1. 研究史の整理と課題

(1) 研究史

重複する箇所もあるが、現在の型式設定を確認するためにも、あらためて研究史を示す。小型石棒類の研究は大野氏以降、戦後まで低調であったが、東北地方の石刀を皮切りに再び扱われるようになる。近畿地方について、泉拓良は近畿地方出土の小型石棒類が、東日本のものと比べて特異であることを指摘した（泉 1985）。泉氏は直線的な形態を持ち、柄部に直線や斜格子、弧状文を線刻するものを「近畿型石剣」と称した。その後、後藤氏によって全国的な集成と分類が行われ、各地方の概要がおおよそ把握できるようになった。後藤氏によれば、近畿地方では東正院型石棒¹⁾が後期前葉から中葉にかけて少数現れ、後期末から晩期初頭になると標原型石刀（a型）²⁾が主体となる。そこには、若干の山本新型石刀³⁾が含まれ、凸帯文土器出現期には消滅することが示された。後藤氏の全国的な型式設定と変遷の提示以降は、地方に限定した研究が主流となる。近畿地方では秋山浩三や、寺前直人によって小型石棒類の変遷が示されている。

秋山氏は後期から晩期の石刀について横断面形状を

基にその変遷を示した。石刀の横断面形状は、後期においては形状に統一性がないものの、晩期前・中葉にかけて左右対称の形を示す「定形化」が進み、晩期後葉には定形化が崩壊するというものである（秋山 1991）。これにより、破片資料が多い近畿地方の石刀について大まかな年代決定が可能となった。

寺前氏は、弥生時代の「小形石棒」の存在を検証することを目的に晩期前半から弥生時代にかけての小型石棒類の変遷を示した。近畿・東海地方を対象として、文様、頭部形状、精粗を基にして分析を行い、晩期前・中葉に複雑な文様を持つ精製品が盛行し、晩期後葉以降は単純な文様や無文の粗製品が継続することを示した。また、所謂標原型石刀は、晩期前葉に限定される可能性を指摘した（寺前 2018）。

（2）課題

これまでの研究により、近畿地方では小型石棒類の変遷がある程度明らかで、大まかな時期比定も可能である。また、晩期を通じた文様変化の傾向も示されている。ただし、時期の段階が主に晩期前・中葉と中葉・後葉に二分するなど、標原型石刀自体の変遷や寺前氏の示した複雑な文様の精製品が盛行する晩期前・中葉における変遷は未だ不明瞭である。筆者は次の観点からこの点を検証する必要があると考える。

標原型石刀の時期比定に関して、後藤氏は明確でないことは断った上で、土器に施される「標原式文様」と関連させ、後期末葉から晩期中葉に位置付けた。その後の研究で、標原式文様は概ね滋賀Ⅱ式に限定され、一部は滋賀Ⅰ式まで遡る可能性が示された（大塚 1995）。この標原式文様の消長について、宮地聡一郎が次のような指摘している。宮地氏は、晩期後葉に九州南部で認められる干河原文様について、標原式文様との関連を指摘している。そして二者の時間的な隔たを繋ぐものとして、木器等に文様が保存されていた可能性を指摘した。その中で、晩期中葉に比定できる標原型石刀が存在することから、石刀に標原式文様が保存された可能性を指摘している（宮地 2017）。一方で、寺前氏が標原型石刀が晩期前葉に限定される可能性を指摘するなど、標原型石刀の消長には未だ議論がある。標原型石刀は、後藤氏が「把部に数条の沈線をめぐらすものほか、斜線文、斜格子文、綾杉文、弧線文、連結三叉文などが施され直刀を基本とする」と定義したように、様々な意匠のものが含まれていることを考慮すれば、文様がどのように変化したのか把握した上で検証される必要がある。

以上の観点から、標原型石刀の時期比定においても、晩期の無文文化と呼ばれる現象の実態を明らかにする点においても、小型石棒類における文様の変化を明らかにする必要がある。本稿ではこれらを解決する一環として、晩期中葉の標原型石刀の存在が指摘された近畿地方において有文小型石棒類の文様変遷の解明を試みる。

2. 研究の対象と方法

（1）研究の対象

対象は近畿 2 府 4 県で出土した有文小型石棒類である。ここで言う有文小型石棒類には、単に横位沈線を数本刻む製品は含めず、繁雑な文様を持つものを対象とした。また、小型石棒類の基準には議論があるが、近畿地方においては幅中光軸によって基準が検討されている（幅中 2010）。本稿もこれに従い、原則として横断面の長さが 5 cm 以下のものを小型石棒類として集行を行った。資料数は 26 遺跡計 52 点である（図 1）⁴。

（2）研究の方法

既に述べたように、標原型石刀と標原式文様が必ずしも同一時期のものとして扱えない可能性が指摘されている。従って、現状では小型石棒類の文様と土器など他の製品に施された文様の変化を同一に考えるべきではなく、あくまでも小型石棒類の文様を本位として文様変化の検討を行った。検討にあたっては、基本的には集行資料の中でも施文部が概ね完存し、文様構成が明らかなものとして対象とした。また、近畿地方で出土する小型石棒類は、包含層や河道跡から出土したものが多いため、共体土器が広い時期にわたり、帰属時期を絞り込めない例も少なくない。そこで本稿では、対象の小型石棒類が出土した遺跡や調査における土器の出土量を念頭に、帰属する可能性が高い時期をできる限り絞り込むこととした。以上を踏まえ、ある程度の幅で時期決定が可能な資料を基に文様の関連性を検討し、小型石棒類における文様変化の提示を目指した。

3. 文様の分類

対象資料を分類すると、大きくは頭部を持つものと持たないものに分類できる。本稿では前者を無頭製品、後者を有頭製品と称する。また、文様が多岐に渡る無頭製品は、文様構成で分類を行った。具体的には、ある 1 種の文様を施文するものを単体文とし、Ⅰ～Ⅴ類に分類した。また、Ⅰ～Ⅴ類の文様を組み合わせるものを複合文とし、それぞれⅠ～Ⅱ類のように単体文表

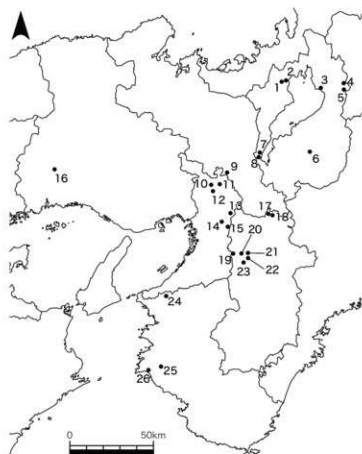


図1 対象資料の分布と資料一覧

番号	遺跡名	対象資料数	出典
1	弘部野	1	1
2	北河内海邊	2	1, 2
3	宮司	1	3
4	伊吹	1	4
5	杉沢	1	5
6	藤生	1	6
7	穴太	1	7
8	滋賀里	5	8, 9
9	上里	5	10
10	耳原	1	11
11	郡家川西	1	12
12	郡	1	13
13	史良岡山	1	14
14	日下	1	15
15	馬場川	4	16, 17, 18
16	香山	1	19
17	大塚生ツグダ	1	20
18	藤原門前	1	21, 22
19	竹内	1	23
20	西岡城	1	24
21	西分	1	25
22	藤原	12	26
23	観音寺本馬	4	27, 28
24	川辺	1	29
25	下谷々1	1	30, 31
26	田井・西川	1	32

記を組み合わせて示した。さらに、このほかの特徴で一群として抽出できるものを単体文のⅥ類として示した。以下に、その分類と概要を示す³⁾。

(1) 無頭製品

I類 対向する弧線文のみを持つもので、4例出土している。1条の横位沈線で区画を作り、弧線文を充填するもの(1)、弧線文と2条の横位沈線でつくられる細い区画に刻みを施すもの(19、24)、弧線文を平面部と側縁部に交互に配置するもの(26)がある。1は弘部野遺跡から出土したもので、出土状況が明らかでないが、後期末葉から晩期前葉に比定されている。26は田井・西川遺跡の落ち込み堆積土から出土したもので、伴出土器は滋賀里Ⅱ式に比定される可能性がある1点を除き、後期末葉の宮滝式や滋賀里Ⅰ式に比定される。19は竹内遺跡出土品で、土器による時期比定は困難である。24は川辺遺跡の包含層から滋賀里Ⅲa～Ⅳ式の土器と共に出土した。I類は概ね後期後葉から晩期前葉に比定し得る資料が多い。

Ⅱ類 斜格子文のみを持つもので、5例出土している。

文様帯の作り方で分類でき、区画線を持たないもの(22-10)、区画線が1条で文様帯が隣り合うもの(8-1、15-1)、文様帯同士の間細い無文帯を持つもの(2、9-3)がある。22-10は藤原遺跡のものである。調査年代が古いこともあり、伴出土器の特定はできないが、同一調査出土土器は約7割が滋賀里Ⅱ式から藤原式であることが判明している(藤原考古学研究所 2011)。9-3は上里遺跡の流路18-1215から出土した。伴出土器は滋賀里Ⅲa式から藤原式中段階であるが、この流路は取水源として使用された後、藤原式頃に投棄場として利用されたと考えられている(京都市埋蔵文化財研究所 2010)。多くの小型石埴類は使用後に投棄された状態で出土していると考えられることから、本例は藤原式古・中段階のものであると考えられる。従って、Ⅱ類は晩期中葉には確実に存在したと言える。

Ⅲ類 Ⅲ類は斜線文のみを持つものである。4例あり、すべて右下がりの斜線を有し、文様帯同士の間細い無文帯を設ける。9-1は上里遺跡の流路19-1155から、滋賀里Ⅲa式から藤原式古段階の土器と共に出土している。この流路は、流路18-1215と同じく取水源とし

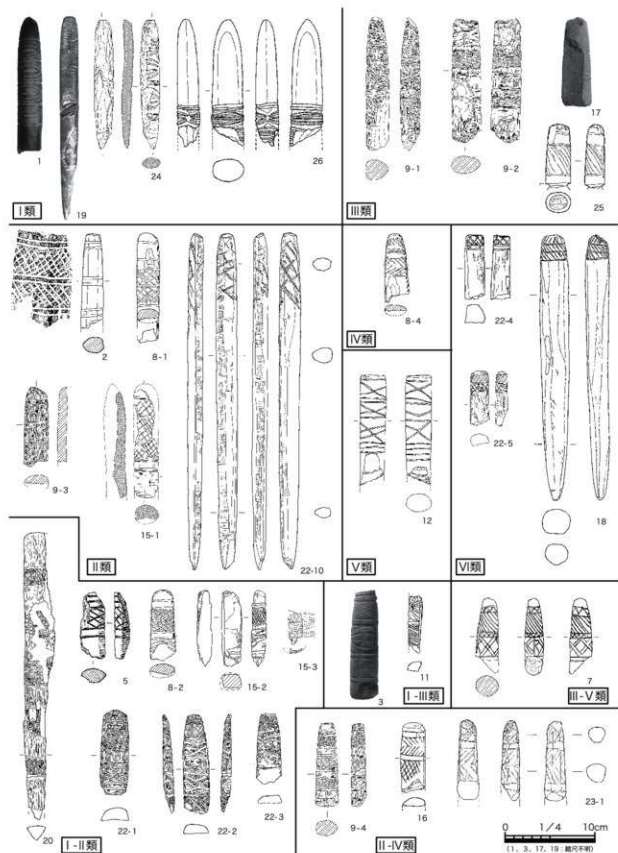


図2 無頭製品における文様の分類

で使用された後、投棄場になったと考えられていることから、篠原式古段階のものと考えられる。9-2は流路 18-1215 出土のもので、篠原式古・中段階のものである。他は出土状況等が明確でなく、詳細は不明である。

IV類 矢羽状文のみを持つものである。今回の集成では滋賀里遺跡の 1 例 (8-4) のみ確認した。2つの文様帯にそれぞれ矢羽状文を施し、文様帯同士の間には無文帯を設ける。Ⅲ D 貝塚黒色砂混泥土層から出土しており、埋没は篠原式以降と考えられる。

V類 X 字状の文様を持つものである。郡遺跡の 1 例 (12) のみである。文様帯の作り方は細い無文帯を設ける箇所と設けない箇所があるなど一定でない。各文様帯は上段は両面に X 字文を施し、中段は片面に X 字文が施され反対の面は V 字状の線刻を施す。下段は片面は X 字状文を施し、反対の面は斜格子文状になっている。後世の遺構から出土しており、伴出土器に縄文土器は報告されていない。

VI類 I～V類が、基本的に数条の文様帯を設け、一定の範囲を施文していたのに対し、VI類は端部付近のみに細い文様帯をつくり施文するものである。3 例確認した。文様は斜線文や斜格子文、X 字状文など多岐に渡るが、いずれも端部から 3 cm 程度の範囲にのみ施文する点で共通する。いずれも単独の出土や出土状況が不明瞭な資料で、土器による時期比定は難しい。ただし、I～IV類の多くが端部に施文を持たない中で、竹内遺跡出土の I 類 (19) は端部に斜線や弧線が施文されている。このような端部に施文を持つものはいずれも奈良盆地周辺の遺跡で出土しており、何かしら関連性を有する可能性がある。

I～II類 弧線文と斜格子文を持つものである。8 例確認でき、今回の分類の中でも最も点数が多い。文様帯が 1 条の区画線で区切られるもの (15-3) と文様帯の間に細い無文帯を挟むもの (8-2、22-1)、弧線文が七宝繁文状になっているもの (22-2、22-3) などがある。20 は西坊城遺跡から出土した。斜格子文と直線的な弧線文で構成され、他の製品に比べて粗雑な印象を受け、施文範囲が広い特異なものである。弧線が七宝繁文状になるものは標原遺跡でしか確認されず、標原遺跡に特徴的なものの可能性がある。時期が明確な資料はないが、馬場川遺跡や標原遺跡など晩期前・中葉を主体とする遺跡から出土している。

I～III類 弧線文と斜線文を持つものである。2 例あり、いずれも文様帯間に細い無文帯を持つ。3 は宮司遺跡出土品で、出土土器には凸帯文土器がほとんどな

く、北陸地方の八日市新保式や御経塚式などが多い(長浜市史編さん委員会 1996) ことから、晩期前葉のものと考えられる。

II～IV類 斜格子文と矢羽状文を持つものである。3 例あり、いずれも文様帯間に細い無文帯をもつ。9-4 は上里遺跡流路 18-1215 出土で、篠原式古・中段階のものである。23-1 は観音寺本馬遺跡観音寺Ⅲ区の土器溜まり 5 から出土した。宮地氏が晩期中葉の標原型石刀として指摘した資料である。伴出土器は篠原式古・中段階に限られ、中でも古段階が多く出土している。16 は香山遺跡から出土した。伴出土器は特定できないが、遺跡は篠原式期に盛期を迎えるようである。

III～V類 斜線文と X 字状文を持つものである。穴太遺跡から出土した 1 例 (7) のみである。文様帯間に細い文様帯を持ち、そこに鋸歯状文を施す。出土土器から、滋賀里Ⅲ a 式以降のものと考えられる。

その他無頭製品 ここでは、その他の文様構成が明らかな無頭製品を挙げる。

4 は伊吹遺跡出土の石剣である。完形品で各所に斜格子文や矢羽状文、弧線文を用いた施文がされる。不時発見で、縄文土器は中期の船元式とみられる破片が出土しているが、一緒に須恵器等も出土している。細い文様帯を端部以外にも持つなど、他の無頭製品と比べても特異な文様構成をしている。

8-5 は、滋賀里遺跡から出土した。京都大学による 1948 年調査の際に出土したものである。他の無頭製品が基本的には文様帯を 2 ないし 3 つ持つのに対し、5 つの文様帯を持つ点で類がない。各文様帯は無文帯を挟まず隣り合う。上下端の文様帯はやや細い。斜線文、対向弧線文、斜格子文、矢羽状文の 4 種類の文様



図3 その他無頭製品

が施文されている。出土状況は明らかでないが、当時の調査では滋賀里Ⅲa式が多く出土している（家根1981）。

22-9は標原遺跡から出土した。文様帯を区画せず、横位沈線を多数刻み込むものである。詳細な時期はやはり不明だが、横断面が定形化していないことから無頭製品の中でも古相のものの可能性が考えられる。

（2）有頭製品

近畿地方で出土した有文有頭製品は6点である。6は麻生遺跡から出土した。載頭円錐型の頭部に横位沈線を7条刻む。遺跡内で出土した土器は五貫森式や馬見塚式で、晩期後葉に位置付けられる。13は、更良岡山遺跡から出土した。球形の頭部に2条の横位沈線で区画を作り、その中にX字文を横位に連続施文する。出土位置が明らかでなく、調査では後期前葉の中津式土器などが出土しているのみである。14は日下遺跡で出土した。円柱形の頭部に三叉文を彫り込む。戦前に採集されたもので詳細は不明である。21は四分遺跡から出土した。頭部にX字文を両側面に施す。同調査で出土した縄文土器は晩期のもので、凸帯文土器が多い。23-2、3は観音寺本馬遺跡のものである。23-2は観音寺Ⅰ区土器溜まり2から出土した。横断面の長さが5cm以上あり、小型石棒類の基準を超えているが、精製品であることも考慮して小型石棒類の範疇に含めた。円柱形の頭部に横位に連結する1字状の線刻で隅丸方形の区画をつくり、区画内に1条の横位沈線を刻む。篠原式中・新段階のものである。23-3は観音寺Ⅰ区土器溜まり8から出土した。扁平な頭部にX字文を両側面に刻み、それにより区画された部分に横位沈線を1条ずつ刻む。篠原式中・新段階のものである。

4. 小型石棒類における文様の変遷

（1）遺跡間の検討

今回の資料から最も状況が明確なのは晩期中葉である。Ⅱ-Ⅳ類は概ね篠原式中・新段階のものと特定でき、上里遺跡の出土状況から、Ⅱ、Ⅲ類が晩期中葉に存在したことも明確である。一方で、伴出土器から確実に晩期前葉と特定できる資料は認められない。そこで注目されるのは資料の時期が晩期中葉に限定される上里遺跡と、晩期前・中葉を主体とする標原遺跡での文様傾向の差である。上里遺跡では、Ⅱ、Ⅲ、Ⅱ-Ⅳ類の3種が認められ、標原遺跡は、Ⅰ、Ⅵ、Ⅰ-Ⅱ類が認められる。両遺跡の違いは、標原遺跡のみに対向



図4 有文有頭製品

弧線文を伴うⅠ類やⅠ-Ⅱ類、端部のみ施文を持つⅥ類が認められることである。すなわち、これらの資料は、晩期前葉のものと考えられる。また、同じくⅠ-Ⅱ類が出土した馬場川遺跡や滋賀里遺跡の資料をみると、どちらも文様帯間に細い無文帯を持たない資料（8-1、15-3）が存在する。これら無文帯を持たない資料は、晩期中葉の資料には認められないことから、晩期前葉に限定される可能性が高い。この点から、Ⅰも晩期前葉に位置付けられ、Ⅰ類は晩期前葉に存在したと考えられる。従って、晩期前葉には少なくともⅠ、Ⅱ、Ⅵ、Ⅰ-Ⅱ類が存在したと考えられる。

（2）無頭製品における文様の変遷

以上の検討を踏まえ、無頭製品における文様は次のように変遷したと考えられる。

今回扱った資料の中で、後期に遡る可能性が高いのはⅠ類の26である。伴出土器に晩期前葉の土器が少数含まれていることは留意されるが、大半は後期後葉のものである。弧線文を平面部と側縁部に交互に配する形は、他のⅠ類と大きく異なるものの、弧線文が小型石棒類において先行して用いられるようになったこと、後期末葉には文様を持つ小型石棒類が存在した可能性を示している。

晩期前葉については、Ⅰ、Ⅱ、Ⅵ、Ⅰ-Ⅱ類が存在する。弧線文は後期末葉から継続し、新たに斜格子文を施すものや、端部のみ施文するものが出現する。既にⅠ類が先行して存在することから、単体文の製品が先行して発生し、それを組み合わせることで複合文の製品が発生すると考えられる。従って、出現の順番としては、Ⅰ→Ⅱ→Ⅰ-Ⅱ類と推測されるが、どの程度の時期差を持つかは明らかでない。また、後述する晩

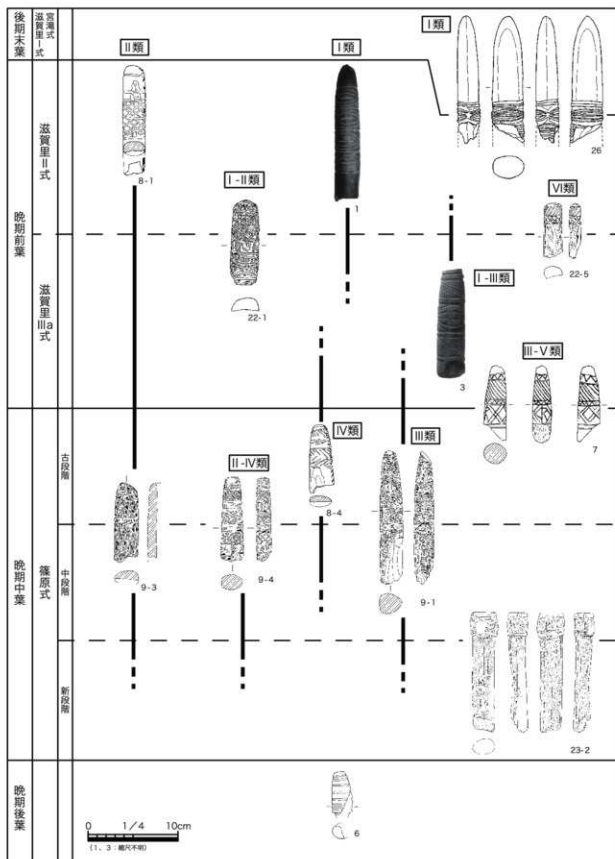


図5 小型石棒類における文様の変遷

期中業と異なり、文様帯間に細い無文帯を持たない資料が数点確認できる。晩期前業のうちに無文帯を持つよう変化し、晩期中業までにはそれが完全化されたと考えられる。Ⅵ類は端部に施文を持つ点でⅠ類の19と共通し、晩期前業の資料の一部にこのような端部施文を持つものが含まれるとみられる⁶⁾。

このほか、Ⅰ～Ⅲ類も晩期中業の資料に認められないことから、現状では晩期前業に属するものと考えられる。これに従ってⅢ類も同時期には既に出現していた可能性が高い。さらに、遊里遺跡の8-5は、Ⅰ～Ⅳ類の単体文全てを包括しており、他に例がないが、文様帯間に細い無文帯を持たない点、弧線文を持つ点、8-5が出土した調査では遊里Ⅲa式が多く出土している点から、現状では晩期前業のものとして認めた。よって、矢羽状文の出現は晩期前業にまで遡ることになり、単体文Ⅰ～Ⅳ類は晩期前業には出現していたと考えられる。

晩期中業は、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅱ～Ⅳ類が確実に存在する。新たに斜格子文と矢羽状文を組み合わせたⅡ～Ⅳ類が出現する。一方で、Ⅰ類をはじめとする対向弧線文を持つ文様は認められない。また、晩期後業に属する文様を持つ小型石棒類は認められず、晩期中業で有文無頭製品は消滅したと考えられる。

現状で晩期前・中業のいずれに属するか判断しかねる文様はⅤ類(12)やⅢ～Ⅴ類(7)である。7は無文帯が鋸歯状文で加飾され、細い文様帯として顕現するものである。同様の細い文様帯を持つものとしては、Ⅰ類の19や24があるが、文様帯を区切るような規則的な配置がされていないことは留意される。Ⅵ類との関連も想定できるが、Ⅲ類の出土時期もあくまで推測に留まり、Ⅴ類も位置付けが難しく、構成文様の出現時期がいずれもはっきりとしない。現状では晩期前・中業の資料として扱うに留める。

以上のような課題は残るものの、近畿地方において無頭製品の文様は図5のような変遷を辿ると考えられる。

(3) 有文無頭製品の終焉と有文有頭製品の出現

以上の文様の変遷で示した通り、有文無頭製品の終焉は晩期中業と考えられ、晩期中業でも後半と考えられる。ここで注目されるのは、観音寺本馬遺跡での有文製品の出土状況である。有文無頭製品と有文有頭製品がそれぞれ異なる土器溜まりから出土しており、伴出ししない。伴出土器は竊原式中段階が重複しているため、断言はできないものの、両者は同一時期に存在し

なかった可能性が指摘できる。いずれにしても、晩期中業のある段階で有文無頭製品は終焉を迎え、これに前後して有文有頭製品が出現したようである。この有文有頭製品は6のように晩期後業のものがあり、晩期後業まで少数ながら継続するようである。6は横位沈線をも7本配した単純なもので、全体資料数が少ないものの加飾性は減じているような印象を受ける。また、X字文や方形の区画文を持つ装飾性の高いものは奈良盆地南部に集中して認められる。

おわりに

以上、近畿地方における小型石棒類の文様の変化を示した。更なる検討が必要な箇所もあるが、現在可能な限りの文様変遷を示せたと考えている。この結果、無頭製品では晩期後業に對向弧線文を持つものが出現していた可能性が指摘できた。また、これまで晩期前・中業の製品が一括の時期のものとして扱われることが多かったが、明確に文様構成が変化していることも明らかになった。特に、晩期中業に矢羽状文が台頭し、一方で、對向弧線文は消失するなど、晩期前業の文様構成から大きく変化している点は注意される。細部では、晩期前業のある段階で、細い無文帯を配する文様構成が成立した可能性が高い。このような変遷を経て、晩期中業で最後に有文無頭製品が姿を消す。寺前氏が讃良郡糸里遺跡の資料を基に指摘するように、晩期後業にも横位沈線のみを持つ小型石棒類が存在することは確かなため、厳密な意味での標原型石刀は晩期後業まで継続した可能性があるが、本論で扱った複雑な文様を持つものは晩期中業までのものと言ってよい。そして、有文無頭製品の消滅と前後して、有文有頭製品が出現する。ただし、無頭製品と比べればその量は圧倒的に少ない。

標原型文様との関連性については、従来指摘があった通り、有文小型石棒類が標原型文様終焉以降も継続することは明らかである。晩期中業において無頭製品で盛行する文様は、斜格子文や斜線文、矢羽状文であり、標原型文様の特徴である三角形刺込文やこれに類する文様は持っていない。一方で、晩期前業に對向弧線文を持つ資料が限定される点は、標原型文様の消長と合致する。標原型石刀と標原型文様との関連性は、その点で指摘できるが、土器における標原型文様の消滅後にこれを保持したかという点については更なる検討が必要である。一方で、晩期中業に近畿地方に出現する有文有頭製品は注意される。23-2のように沈線と隅丸方形の陽刻部を作り出すものがあり、楕円形の

陽刻部を作り出す標原式文様と共通点を持つとも解釈できる。当該製品と標原式文様は時間的な隔たりを有するが、これら有文有頭製品は、後藤氏の型式分類で言う「小谷型石刀」であり、晩期前・中葉の東海・北陸地方で盛行するものである（後藤 1986）。小型石棒類の文様と標原式文様の関係や、より細かな小型石棒類の文様変遷を探るには、東海・北陸地方の資料を踏まえた検証が必要である。その際も器種間における文様の類似が、直ちに同一のものを指すわけではないという立場は保持した上で検証する必要がある⁶⁾。

謝辞

本稿は平成 30 年度及び令和 2 年度に立命館大学文学部・大学院文学研究科に提出した卒業論文・修士論文の一部を加筆修正したものである。卒業論文・修士論文執筆にあたっては、矢野健一先生、木立雅朗先生、高正龍先生、長友朋子先生にご指導いただいた。また、関西縄文文化研究会において発表の機会を頂き、数々のご指摘・ご指導をいただいた。資料の実見等にあっては、標原考古学研究所、京都市埋蔵文化財研究所、滋賀県文化財保護協会、東大阪市教育委員会のお世話になった。末筆ながら、記して感謝いたします。

注

- 1) 「直径 3cm 前後、長さ 30～60cm 程度の石棒で文様などが全く施されていない」（後藤 1986）
- 2) 後藤氏は標原型石刀を a 類、b 類に分けて示している。b 類は主に九州地方で確認できるものである。本稿では煩雑になるため、標原型石刀 a 類を指して「標原型石刀」と称する。
- 3) 把頭がほぼ球形を呈するもので、刀身断面形態が II Aa（後と反対の側縁が曲面で結ばれる）のもの（後藤 1986）
- 4) 図 1 に示した遺跡番号は、以降で示す資料番号と共通している。弘部野遺跡のように、対象資料が 1 点のみであれば、遺跡番号のみを付した。滋賀里遺跡のように、対象資料が複数ある場合は、「8-1」のように、遺跡番号の後ろに番号を付した。また、以降の図で示す資料の実測図、写真はすべて出典資料から引用した。
- 5) 本稿で示す分類は、あくまで文様の分類するにあたって便宜的に示したものである。型式としての設定にはさらなる要素の検証が必要であり、小型石棒類は製作遺跡毎に製作する型式が異なることが明らかになってきており（長田 2012）、製作遺

跡の資料に基づいた型式設定が行われる必要がある。

- 6) 竹内遺跡と川辺遺跡の出土遺物の類似性から、2 遺跡は同一の集団による集落だったか、同じ文化圏下にあった可能性があるとの指摘がある（黒石 1999）。これに従えば、弧線文に細い文様帯を伴う形態は、地域的な特徴として示される可能性がある。
- 7) 杉山寿栄男は、東北地方の石刀の柄部文様について、土器との共通性を指摘した。その際に、若干の文様の違いがあるのは、施文する対象が異なることで、表現が規制された結果であるとしている（杉山 1927）。たしかに同じ文様を意識した集団によるものと考え、多少の違いを同様のものとして扱うべきかもしれないが、その違いをどこまで許容するかは慎重な検討が必要である。

引用文献

- 秋山浩三 1991 「縄文時代石刀の変遷～京都府瑞穂町中台遺跡の採集例をめぐって～」『京都考古』第 62 号 京都考古刊行会 pp.1-7
- 泉 拓良 1985 「縄文時代」『図説 発掘が語る日本史』第 4 巻近畿編 新人物往来社 pp.80-83
- 大塚達朗 1995 「標原式紋様論」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』13 東京大学文学部考古学研究室 pp.79-141
- 大野雲外 1908 「石剣の形式に就て」『東京人類学会雑誌』第 23 巻第 263 号 東京人類学会 pp.164-167
- 長田友也 2012 「石棒の製作と流通」『季刊考古学』第 119 号 雄山閣 pp.79-84
- 黒石哲夫 1999 「川辺遺跡の縄文時代晩期の遺構と遺物について - 紀ノ川下流の縄文時代晩期の集落跡 -」『紀伊考古学研究』第 2 号 紀伊考古学研究会 pp.39-48
- 後藤信祐 1986 「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究（上）」『考古学研究』33 巻 3 号 考古学研究会 pp.31-60
- 後藤信祐 1987 「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究（下）」『考古学研究』33 巻 4 号 考古学研究会 pp.28-48
- 杉山寿栄男 1927 「日本原始工芸図版解説」工芸美術研究会
- 寺前直人 2018 「弥生時代小形石棒類の型式学的研究」『待兼山考古学論集Ⅲ』大阪大学考古学研究室 pp.119-140

鳥居龍藏 1924「石棒」『諏訪史』第1巻 信濃教育会
諏訪部会 pp.93-98

幡中光輔 2010「大型石棒から小型石棒類へー近畿地方における石棒祭祀の転換と社会背景ー」『縄文時代の精神文化』（第11回関西縄文文化研究会資料集）
関西縄文文化研究会 pp.23-34

宮地聡一郎 2017「西日本縄文晩期土器文様保存論ー九州地方の有文土器からの問題提起ー」『考古学雑誌』第99巻2号 日本考古学会 pp.1-50

家根祥多 1981「晩期の土器 近畿地方の土器」『縄文文化の研究』第4巻 縄文土器Ⅱ 雄山閣 pp.238-248

八幡一郎 1933「石刀の分布」『人類学雑誌』48巻4号 日本人類学会 p.233

八幡一郎 1934「石棒、石剣、石刀」『北佐久郎の考古学的調査』信濃教育会北佐久郎教育会 pp.64-70

資料出典

- 1 小林青樹編 2001「縄文・弥生移行期の石製呪術具2」（考古学資料集17）
- 2 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1984「北仰西海道遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅺ-2』
- 3 長浜市史編さん委員会編 1996「湖北の古代」（長浜市史1）長浜市
- 4 伊吹町教育委員会 1992「伊吹遺跡」『伊吹町内遺跡分布調査報告書』
- 5 小林行雄・藤岡謙二郎・中村春壽 1938「近江坂田郡春照村杉澤遺跡ー縄文式土器合口甕棺発掘報告ー」『考古学』第9巻第5号 東京考古学会
- 6 滋賀県教育委員会文化財部文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会 1987「麻生遺跡」『ほ場整備関係遺跡調査発掘報告書Ⅺ-5』
- 7 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1996「穴太遺跡発掘調査報告書Ⅰ」
- 8 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1973「湖西線関係遺跡調査報告書」
- 9 滋賀県資料研究会編 2023「滋賀県遺跡資料図譜」真陽社
- 10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010「上里遺跡Ⅰ」（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第24冊）
- 11 茨木市教育委員会 1982「耳原遺跡発掘調査概報」
- 12 高槻市 1977「高槻市史」第1巻 本編Ⅰ
- 13 茨木市教育委員会 1993「信賀遺跡発掘調査概要

報告書」

- 14 四條市教育委員会 2000「更良岡山遺跡発掘調査概要報告書」
- 15 藤岡謙二郎 1942「中河内郡孔舎衛村日下遺跡」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第12輯
- 16 松田順一郎 1986「馬場川遺跡の石刀・石棒」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.2 No.2 東大阪市文化財協会 pp.1-8
- 17 東大阪市教育委員会 2010「東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報ー平成21年度ー」
- 18 東大阪市教育委員会 2011「東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報ー平成22年度ー」
- 19 香山遺跡発掘調査団 1991「香山Ⅱ」（新宮町文化財調査報告14）新宮町教育委員会
- 20 奈良県立橿原考古学研究所 1999「大柳生遺跡群第7・8次」『奈良県遺跡調査概報1998年度』第1分冊
- 21 奈良県立橿原考古学研究所 1992「阪南門前遺跡」『奈良県遺跡調査概報1991年度』第1分冊
- 22 松田真一 2017「奈良県の縄文遺跡」青垣出版
- 23 奈良県立橿原考古学研究所 1977「竹内遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1976年度』
- 24 奈良県立橿原考古学研究所 2003「西坊城遺跡Ⅱ」（奈良県文化財調査報告書第90冊）
- 25 奈良国立文化財研究所 1980「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ」
- 26 奈良県立橿原考古学研究所 2011「重要文化財橿原遺跡出土品の研究」（橿原考古学研究所研究成果第11冊）
- 27 奈良県立橿原考古学研究所 2013「観音寺本馬遺跡Ⅰ」（奈良県立橿原考古学研究所調査報告第113冊）
- 28 奈良県立橿原考古学研究所 2017「観音寺本馬遺跡Ⅲ」（奈良県立橿原考古学研究所調査報告第121冊）
- 29 財団法人和歌山県文化財センター 1995「川辺遺跡発掘調査報告書」
- 30 野上町誌編さん委員会 1985「野上町誌」上巻
- 31 仲原知之 2009「紀伊風土記の丘寄贈・寄託の石棒類」『紀伊風土記の丘年報』第36号 和歌山県立紀伊風土記の丘
- 32 財団法人和歌山県文化財センター 2007「田井・西川遺跡」

研究論文

名古屋市熱田区玉ノ井遺跡の縄文時代晩期について

伊藤正人

要 旨

玉ノ井遺跡は、東海地方西部の伊勢湾東岸、愛知県名古屋市中に所在する縄文時代から中世の遺跡である。名古屋台地の東縁部に位置する遺跡は、縄文時代晩期前葉と末葉に伴う集落が発達様相を見せており、良好な埋葬人骨は尾張を代表する調査例となっている。低調期を挟む状況は、東海地方に限らない広域の動向に連動したものと考えられる。しかし、小規模調査の繰り返しによる成果は断片化しているため、集落立地や構造を論じるのは困難な状況である。本稿は、遺跡の重要性を認識するために、現時点の情報を集約して、遺跡の全体様相の把握を目指すものである。

キーワード：縄文時代晩期、東海地方、伊勢湾東岸、名古屋台地、玉ノ井遺跡、貝塚、集落立地

はじめに

玉ノ井（たまのい）遺跡は、愛知県名古屋市中熱田区玉ノ井町に所在する。南北約 200 m、東西約 300 m の遺跡範囲では 10 箇所以上で発掘調査が行われている。縄文時代から中世の遺跡として知られており、特に 2002（平成 14）年の名古屋市教育局（以下、市教委）第 3 次調査では、良好な埋葬人骨を伴う晩期の墓坑や土器棺墓、住居跡、貝屑等が調査されて、縄文遺跡の具体相が把握され、東海地方・愛知県における晩期研究・墓制研究の面から注目されるようになった。しかし、調査規模は狭小で、周辺では断片情報しか示されていない。縄文時代の遺跡としての重要性を認知し、理解を共有するために、情報を整理するのが本稿の趣旨である。

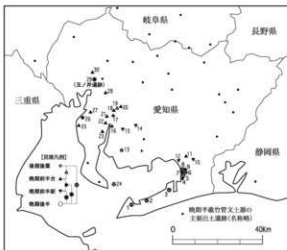
筆者は、1984（昭和 59）年 10 月から 2019（平成 31）年 3 月まで、名古屋市の考古学芸員を勤めた。主に埋蔵文化財の発掘調査や事務手続きを担当し、玉ノ井遺跡では試掘調査の経験もある。発掘調査現場を見学する機会も度々あり、遺跡の情報に接する機会は多かったと言える。ただし、独自の情報を持つ訳ではないので、名古屋市内の遺跡調査に関する経験と刊行された文献・報告書の内容を参照して、本稿を作成する。

玉ノ井遺跡出土土器の群としての様相は、土器型式との対応が厳密に把握できない場合が多いため、本稿では次の 4 期区分を基本とする。1 期：後期末～晩期初頭（寺津下層～寺津式）、2 期：晩期前葉（雷Ⅱ・元刈谷～桜井・稲荷山式）、3 期：同中葉（西之山～五貫森式）、4 期：同末葉（馬見塚～櫻王式、弥生前期を含む）。文章表現簡略化のための仮称である。

1. 立地と環境

図 1¹⁾は、東海地方西部の 2 期在地系土器出土遺跡と晩期貝塚を示す。三重県には表示遺跡が見られない。

玉ノ井遺跡は、名古屋台地と呼ぶ洪積台地上に立地する。台地北西端には名古屋城があり、南に約 7 km 伸びた南端近くには熱田神宮がある。台地面の傾斜は、西と南へ下がる。台地北東端部（千種区萱場付近）で標高²⁾ 20 m 前後、名古屋城本丸で約 14.5 m、熱田神宮拝殿前で約 9 m であり、台地周縁は段差を成して沖積低地に接続する。玉ノ井遺跡は、熱田神宮の北方約 300 m に位置する。現在の遺跡（埋蔵文化財包蔵地）



- | | | |
|---------------|----------------|----------------|
| 1 保美貝塚(田原市) | 11 尾張神社貝塚(豊川市) | 21 宮西貝塚(東郷町) |
| 2 伊川貝塚(○) | 12 平井橋山貝塚(○) | 22 石浜貝塚(○) |
| 3 古畑貝塚(○) | 13 松木宮貝塚(西尾市) | 23 宮の西貝塚(平田市) |
| 4 きんまい貝塚(豊橋市) | 14 堀内貝塚(安城市) | 24 神明社貝塚(南知多町) |
| 5 大西貝塚(○) | 15 東郷貝塚(○) | 25 東郷貝塚(知多市) |
| 6 水神宮貝塚(○) | 16 三井寺(高岡市) | 26 西郷貝塚(○) |
| 7 水神宮貝塚(○) | 17 本有谷貝塚(岡谷市) | 27 高ノ原貝塚(東海市) |
| 8 内田貝塚(○) | 18 中山山貝塚(○) | 28 寶貝塚(名古屋市) |
| 9 坂津寺貝塚(○) | 19 寺屋敷貝塚(○) | 29 玉ノ井遺跡(○) |
| 10 大蔵貝塚(○) | 20 宮東1号貝塚(○) | 30 岩井通貝塚(○) |

図 1 晩期の貝塚と半截竹管文土器出土主要遺跡の分布

分布図（図5）³⁾が示す遺跡範囲は、おおむね低層住宅密集地である。約100m北方には弥生時代の大集落・高蔵遺跡があり、南方には森後町遺跡、熱田神宮内遺跡が連なる。西側には国道19号線を挟んで東海地方最大級の前方後円墳である断夫山古墳がある。2007（平成19）年、熱田区役所跡地で確認・調査された旗屋遺跡は、15世紀の屋敷に伴う大溝など中近世の遺構が良好に残存していた（千田他2008）。弥生時代から中近世の遺跡は、付近一帯に広がるかと推定される⁴⁾。

以下、玉ノ井遺跡が形成された当時の微地形の復原を意識しつつ情報を整理する。

遺跡周辺の近代的測量図が示されたのは、1891（明治24）年の測量に基づき93年のことであった（図4）。遺跡付近はすでに宅地化しており、遺跡範囲内には「古澤村役場」が設置されていた。南方は空地地らしく10mの等高線が示されている。1886（明治19）年に現在の東海道線が開通し、96年に熱田駅が現在地に開設された。図4は移転前で、駅は図の右下隅にある。1904（明治37）年には、東海道線の東に陸軍の兵器工廠が開設された。翌年、東海道線の西側に熱田街道（大津町線）が築造され、08年には拡張して路面電車が敷設された。この工事で高蔵遺跡（貝塚）が発見され考古学界では話題となったが、記録の残る発見は限られていた。森後町遺跡の南でも道路・市電の建設で台地縁の遺跡が開削されたと推定するが、存在を裏付ける記録は見られない。電車の開通で利便性が高まり、玉ノ井遺跡周辺の宅地化も促進されたと考えられる。

表1には、上記の時期以降の情報をまとめた。測量精度は高まったはずだが、切り通した道路に開口の高さを合わせた土取造成、住宅建設が進む中で、その後の地形図に等高線の詳細情報は限られていた。遺跡周辺の微地形は基本的な特徴を残していたが、繰り返される緊急調査の中で意識されることは少なかった。

遺跡の名称は旧町名に由来し、現在の町名とは表記が異なる（No.2・8）。似ているため、史料の記載には町名（字名）や遺跡名の混同が多い。地名の由来が、18世紀の地誌『張州雜志』に記されている。「玉ノ井ノ里」とは、「大宮ノ北ニ水ノ湧出処有、玉ノ井ノ里ト名ク。清水今ハ不湧」、さらに「古老云」かつてあった「神宮玉ノ井彈正忠宅」が、地名（玉ノ井ノ里）の由来とする。慶長年間に彈正忠が亡くなると嗣子が無く、屋敷は途絶えたという。また、玉ノ井ノ里の「西ニ微々高キ所ヲ玉ノ上ト云」と記す⁵⁾。『名古屋市史』（名古屋役所1916）は、「名所」の項で以上の諸説を紹介するとともに「今熱田東町字玉の井なる山中某の

別荘、もと舊家岡本作左衛門の控、に玉井と称する名水存す」と記す⁶⁾。

玉ノ井彈正忠の屋敷の実際は不明だが⁷⁾、17世紀中頃には高倉社（高座結御子神社）と熱田神社（神宮）の間の広大な空白地の中央に「玉ノ井」のみを示した絵図がある⁸⁾。近世後半の絵図にもこの伝承に由来すると考えられる地名を記す例がある。「神領ノ内 玉ノ井」と記す天保年間（1830～44）書写の『尾張志付図熱田』（図2、名古屋市蓬左文庫1982）、及び「玉ノ井屋敷 百姓家」と記す文化元年（1804）の調べと伝わる『熱田神領字入図』（図3、名古屋役所1915復刻版⁹⁾）である。江戸後期には「玉ノ井」の地名が定着していたと推定される。両図の記載位置は異なっており、図2は現在の遺跡範囲の北西外側に、図3は西部部に記されている。いずれも広大な屋敷の内であった可能性も考えられるが、範囲の推定は困難である。湧水（玉ノ井）の位置も特定はできないが、「加藤安左衛門」の「扣への田」にある湧水を「玉の井の里」と呼ぶ伝承を紹介する記録もある¹⁰⁾。図3には、低地に該当する位置にも「折戸玉ノ井」と記されていて、玉ノ井（ノ里）の範囲が低地部にも及んでいた可能性を示している。現在のところ、加藤安左衛門の控（別邸）の田の位置も限定できないが、湧水に水を頼って田を営んだとすれば、東側の台地裾の可能性が高いと考えられる。その湧水を指して玉ノ井ノ里と名付けたのであれば、『張州雜志』が記す「西」の高き所「玉ノ上」は、図3が示す付近（玉ノ井遺跡東部から森後町遺跡東部）に該当する可能性がある。

図6の等高線は、発掘調査報告や地図情報¹²⁾、現地観察から推定した。玉ノ井遺跡の北側には、台地縁を挟んで東方に開く小さな谷筋が存在する。自然地形と捉えて、これを「玉ノ井小谷」と仮称する。また、玉ノ井遺跡と森後町遺跡の間付近を谷頭として、南西～西方に流下する図4にも表現された地形を「旅屋浅谷」と仮称する。図6の外側となるが、同様な地形は森後町南西部から南西方向にも見られる（森後浅谷）。森後町遺跡と熱田神宮の間、図の南東部から外側にも東向き谷地形（神宮北小谷）が推定される。

図2の「玉ノ井」記載がある区画南辺の道沿いに水路が描かれている。地形から、「玉ノ井」付近を境として、東西に降る流路を示すと推定される。この流路の詳細は不明であるが、1830年に当たる「文政十三年新堀川改修工事設計図」（名古屋役所1915）には東方の低地に「新溜池」を築き、図2の水路に該当する位置にその池に下る流路が計画されている。東に降

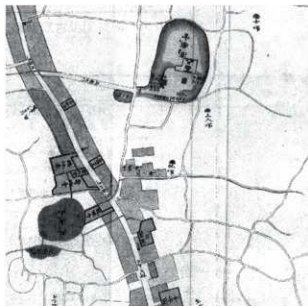


図2 『尾張志付図 熱田 (部分)』

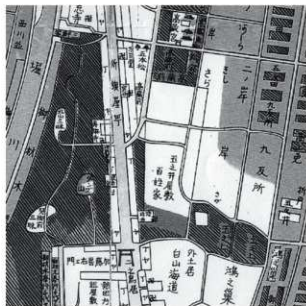


図3 『熱田神領字入図 (部分)』

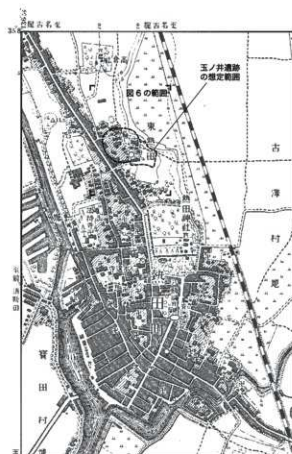


図4 『熱田 (二万分之一地形図) (部分)』



図5 『名古屋市遺跡分布図 (熱田区) (部分)』

図5の遺跡名 (下記においては熱田区を示す「12」を略す)

2: 高蔵遺跡 4: 高蔵1号墳 5~9: 同2~6号墳 10: 玉ノ井遺跡 11: 熱田神宮内遺跡 12: 新宮坂貝塚 13: 熱田神宮南門前貝塚 14: 熱田-B遺跡 15: 御浜御殿跡 18: 瓶屋横古墳 19: 断夫山古墳 20: 白鳥古墳 21: 熱田-C遺跡 22: 熱田-D遺跡 23: 森後町遺跡 24: 旗屋遺跡 25: 高蔵7号墳 27: 同8号墳

(遺跡範囲は2020年3月現在。市教委は2024年8月に断夫山古墳他の包蔵地範囲を拡大する等の変更を広報した。)

表1 玉ノ井遺跡の発見・調査等の歴史

番号	時期(年月日)	記号	GL高*	地山高*	内 容	出 典
1	明治時代～1942 (昭和17)年8月	—	—	—	「この辺に人骨が相当に遺存していることは以前より知られている。古者の跡に依ると工事の跡が人骨が出土している。」(飯室吉氏の報告)	飯1942
2	1939(昭和14)年 4月1日	—	—	—	1878(明治11)年の郡区町村制で「愛知県熱田村玉ノ井」、1907(明治40)年の名古屋市編入で「熱田東町玉ノ井」、翌年4区制で「南区熱田東町玉ノ井」。左記付で「玉ノ井」は「熱田区玉ノ井」となる。	木野他他修 1992
3	1942(昭和17)年 8月23日	—	—	—	「熱田区玉ノ井町坪井寺門外より、家園防空壕を店に作るべく掘ると人骨が表れた。」(中日新聞社2011は「玉ノ井町4丁目坪井寺南門」)	飯1942
4	同月25日	A	—	—	「假令の小栗氏にも通知し」「二十五日夕、坪井・飯氏の会員数名が作業に参加。人骨は「泉原の翌日」小栗次郎氏に「渡した」。位置は推定。	飯1942
5	同月26日	—	—	—	「床下を掘ったところ土器とともに人骨らしきものが現れはじめる」「二十六日愛知縣社会事業課小栗主事の協力を求め慎重に掘り出した。」(図7-4)	中日新聞社 2011
6	同12月4日	—	—	—	酒沼仲男氏が、東京帝国大学の高橋貞蔵調査報告のたぐい。小栗氏の案内で「玉ノ井山」といふ熱田山(現の山)の麓に「など」遺跡を発見。	酒沼1967
7	1951(昭和26)年頃	—	—	—	「道路工事の最中、余の掘られた土器や、弥生文化後期の各種土器が出土し、唐田正一・杉崎重氏等がこれを調査している。」	紅村1963
8	1957(昭和32)年 以前	—	—	—	田中俊氏が「玉ノ井町23」出土の「晩新石器」など所蔵する資料の記載がある(吉田1957)。採集地点・時期は不明だが、後に名古屋市博物館に寄贈された田中コレクションの土器が該当すると考えられる(川合2004, p.63)。	吉田1957 川合2004
9	1968(昭和43)年 以前	—	—	—	田中氏は、所蔵資料の展示解説の中で、「附近一帶に弥生期の集落もあったらしく」「切り通しの断面に露出した弥生期居住の床面とおぼしきところ」で出土した弥生後期土器(小型壺)を紹介している。	田中1968
10	1980(昭和55)年 7月13日	—	—	—	住友表示変更により、名古屋市熱田区「玉ノ井町」の一部は「玉ノ井町」が成立。	木野他他修 1992
11	1981(昭和56)年 3月	—	—	—	市教委が作成した遺跡分布図の「出土遺物及び遺跡の概況」欄に「弥生土器、山岳、須恵器」、時代欄に「弥生～中世」と記載。	市教委1981
12	1990(平成2)年	B	—	—	家屋の取り壊しと駐車場建設工事で、市民が民衆を発見、晩新前土器片や銅片などを発見。7月頃か、右記の文に「遺物多数を掲載」。	伊藤・川合 1993
13	1994(平成6)年 2月7日～3月5日	①	SW:7.8m SE:8.2m	SW:7.0m WM:7.4m	市教委1次調査。300m、環状5～8世紀の遺物を含む。11世紀末～15世紀の遺物を含む中世の遺跡など。コンテナ10箇所、調査範囲の土器の分布が約40。	尾野1995
14	2000(平成12)年 10月23日～11月10日	②	NE:8.4m SE:8.2m	NE:7.9m SE:7.6m	市教委2次調査。50m(住宅基礎部分のみ)。弥生中期、後期の方形周溝墓の遺り、同後期後半の弥生後期土器などを調査。調査範囲の土器の分布が約40。	木野2001
15	2002(平成14)年 1月15日～3月15日	③	NW:10.8m NE:10.6m SW:10.7m	NW:10.1m NE:9.9m SW:9.9m	市教委3次調査。228m、土坑墓13基(埋葬人骨主体・部分骨体)、幼児骨を埋める土器陪葬品、住居跡群など、晩新前土器と中世の土器と部分土器、及び平安時代前期以降、中世の土器が確認された。コンテナ10箇所の遺物が出土している。2005年に見解の中世の土器の分布が約40。(註2を参照)	細田他2003 細田・山崎 2005 川合2008
16	同4月1日	—	—	—	測量改正。日本測地院から世界測地院に移行。③調査区南東付定の経緯度、北緯35° 38' 36"、東経136° 54' 36"が、北緯35° 37' 50.2"、東経136° 54' 26"になった。右記の報告書に説明文がある。(註2を参照)	細田他2003
17	同4月22日～5月31日	④	SE:10.3m NE:10.1m	SE:9.9m NE:9.7m	市教委4次調査。90m、ほぼ全面に、弥生中期～平安時代前期の弥生後期土器が重なり、調査範囲の土器片が少なくなっている。	細田他2003
18	2005(平成17)年12月 22日～翌年1月31日	C	SE:10.3m NE:8.6m	SW:9.7m NE:8.2m	宅地事業面積977㎡のうちの及ぶ306㎡を民間調査会社に依頼。弥生後期～10世紀前半の弥生後期土器10軒が全体に点在する。他に中世の土坑墓1基など、調査の遺構・遺物は確認された。	高木2006
19	2006(平成18)年 6月22日	—	—	—	道路幅員の変更。南東方に拡大して、森後町遺跡の一部を取り込み隣接。変更前は、愛知県が公開する総合型地理情報システム「マップあひは」を参照。	市教委2006
20	2007(平成19)年 10月22日～11月16日	⑤	NE:10.0m SW:9.1m	NE:9.5m SW:9.0m	市教委5次調査。約78m、晩新の土器陪葬品、弥生後期～古墳初期の弥生後期土器3軒、船型土器・浮輪網紋文土器片など。	市澤2008
21	2010(平成22)年 1月18日～2月14日	⑥	SW:8.0m SW:8.0m	WM:7.3m	市教委6次調査。約30m、方形周溝墓または古墳の可能性のある溝3条など、古墳時代の遺物や土器など。浮輪網紋文など晩新土器少量。下呂石礫を素材とする石製貯水地を近隣に推定。	野澤他2012
22	同6月11日～8月31日	⑦	SW:8.9m	SW:8.5m NE:8.8m SW:8.5m	市教委7次調査。750m、南平により、ca.80～200mの表土直下の地山面、包含層は殆ど残らず、弥生後期～古墳初期の弥生後期土器2軒、方形周溝墓の遺構、遺物はコンテナ7箇所。晩新土器の土器少量。付着に石製貯水地を推定。	野澤他2011
23	同10月4日～11月5日	⑧	NW:10.2m SE:10.2m	SW:9.9m NE:9.5m	市教委8次調査。約50m及び側面の全断面。晩新土坑墓(埋葬人骨)3基、住居跡?、弥生後期弥生前期1軒、住居1基(土器の土器など)で埋められ、西見塚式土器土器片1000以上、人骨の痕跡・重宝文化同位体分析報告。	野澤他2012
24	2011(平成23)年 8月11日～9月9日	⑨	NE:10.4m SW:10.3m	NW:10.0m SW:9.8m	市教委9次調査。約140m、古代～中世の大規模な土坑墓1棟、遺構土器中に破片が見え、遺物量は少ない。晩新土器の土器片主体。	野澤他2012
25	同10月3日～11月4日	⑩	NW:10.2m SE:10.2m	SW:9.9m	市教委10次調査。約75m、新築基礎掘削深度までの調査。古代の弥生後期土器1軒、ほぼ全面に、須恵器・灰釉陶器を伴う弥生後期土器と推定された。土器片が古くは晩新土器少量、玉ノ井遺跡出土晩新土器8片などの土器片分析報告。	野澤他2012
26	2014(平成26)年 6月17日～7月20日	⑪	SW:7.5m SW:6.6m	NE:6.8m NE:6.2m	市教委11次調査。70m、中世の遺跡、これに重なる中世の遺跡、晩新土器と推定した中世の地下空間遺構などを調査。調査時代の遺構は、	小野2015
27	2015(平成27)年 5月17日～5月26日	⑫	SW:10.4m SW:9.6m	NW:10.0m SW:9.4m	市教委12次調査。60m、包含層残存は南端のみ。掘削深度制限により未掘層遺構多いが、ビット38基を掘出したのみで希薄。調査範囲の土器、土器1片。	野澤2016
28	2016(平成28)年 8月29日～9月9日	**	SW:8.1m SW:7.6m	NE:7.8m NE:7.3m	13次調査。33m、弥生後期の遺構遺跡2基、1基は方形周溝墓、1基は石に続く環状と推定。晩新土器少量、土器1片。調査は、市教委・事業者・民間調査会社の三者協定に基づいて実施した。いわゆる民間調査である。このほか、市教委が直接実施しない調査にも遺跡との通称番号を共通させている。	後藤2016

※報告書の断面図等から読み取れる地表(G.L.)面及び地山(熱田層)上面から、調査内を避けて、高低と低位の概数値(T.P.)を用いた。

※方位は、調査区の形状に対する概略位置を示す。主に両側断面に基づき、Wは中間付近を指す。

※報告書はT.P.値を用いた旨を記すが、N.P.値と推定するので、③については③と同じく-1.4mの数値を示した。

※表2(令和6)年、玉ノ井遺跡の③から南東約20mの地点で市教委14次調査が行われた。また、森後町遺跡・民間調査が行われた。



図6 玉ノ井遺跡の調査位置と推定復元等高線

る流路が玉ノ井小谷に該当する。「玉ノ井」として伝承された湧水（水場）とそれを含む谷筋、湧水あるいは谷から見上げる「玉ノ上」という基本構成は、縄文時代まで遡ったとしても違和感はない。玉ノ井遺跡周辺（玉ノ上）からは、精進川（のちの新堀川）が流下する入江を挟んで対岸の瑞穂台地やその奥（東）に続く八事丘陵を望むことができた。また、西方に見通しが開けば、沖積平野の形成が進む伊勢湾最奥部の海越しに養老の山々を遠望することもできた。同様に南を見れば、熱田岬の先には知多半島と鈴鹿の山々の間に光る伊勢湾が望まれたであろう。

2. 調査の経緯

表1を基に、縄文遺跡としての基本的情報を検討する。個々の調査の詳細は、報告書原本等を参照願う。

遺跡に関する最初の文字記録は、1942年No.3の人骨出土に関する新聞報道（中日新聞社2011）と思われる。同じ情報を示すNo.1（坂1942）は、42年以前からの人骨出土を記すが、新聞は「この附近は明治四十年大津町線が開通されたころ一帯の人家の床下から弥生式土器、人骨が多く発見され「高蔵貝塚」として有名になったところ」と説明して、人骨に関する知見が、現在の玉ノ井遺跡に関わるという確証を示さない。No.4の酒誌氏は、小栗鉄次郎氏（愛知県史蹟名勝保存主事）に「案内された玉ノ井八十五番地などというのも、みな熱田貝塚で、とくにこれ等を総括して熱田貝塚と呼ぶのである」と記す（酒誌1967）。小栗氏の認識を反映したと思われる¹³⁾。なお60番地（No.3）は坪井邸を含み、85番地はその南隣地と思われる¹⁴⁾。酒誌氏は、坪井邸の床下（A出土地）を確認した後、南東近隣の2軒でも床下の貝層を観察している¹⁵⁾。

No.3（A）の新聞は、小栗氏に取材して「約三千年以前、弥生文化をもつ先住民を埋葬」と記す。同じ人骨を、坂氏（坂1942）は「現在の地表より一尺六寸下に頭蓋骨がある「北北東枕の伸張葬」で、「足の指を缺く」以外は「殆ど全部」残存し、頭蓋骨は「完全に近く」、「犬歯が上下四本共抜き取られ」、「両手は腰に接して」、「右手は臀の下になり、両足は少し東方へ屈曲」と記す。周辺からは「弥生式土器の破片」「数種類の貝殻等」及び「奈良朝時代推定の布目瓦の小破片」が出土したという。写真（図7）は、不鮮明な上半身が写るのみで、小栗氏が弥生時代と見立てた根拠は把握できない。抜歯があり、遺跡内で弥生前期の遺物が明示されず、弥生時代の確実な貝層・埋葬人骨が見られないことから、縄文時代のもので、伸張葬は新

相と推定しておく。Aに貝層の報告はなく、近隣で貝層が観察された地点との地表高の関係は不明であるが、埋葬深度は貝層下に該当するものと思われる。Aや周辺で出土した「弥生」土器の詳細は不明だが、弥生中～後期土器・土器以外の無文の土器が、縄文土器と認識されなかった可能性も考えられる。坂氏の文章では、人骨は東大人類学教室への鑑定依頼を予定する小栗氏とのやり取りが記されている。酒誌氏は、玉ノ井実査前に「勝手で見えた頭蓋」と記すが（酒誌2010）、その後の所在は把握できていない。

玉ノ井遺跡が、高蔵遺跡とは別遺跡と認知されたのは、No.5～7の遺物採集当時のことと思われる。No.5で紅村弘氏は、1951年頃に杉崎氏が採集した土器片1点を図示している（図7-19）が、出土位置は不明である。紅村氏（紅村1956）は、「玉ノ井包含地」を「縄文式終末期Ⅱ」の遺跡として挙げており、この土器を根拠とした記述と思われる¹⁶⁾。田中氏（No.6・7）の遺物採集時期は不明だが、吉田富夫氏（吉田1957）の記述を参照して表1ではそれ以前とした。田中氏は、「半割竹管で引いた糸線と円点文をつけた土器は元刈谷式と呼ばれる晩期中葉のもの」と記している（田中1968）。同様な記述は1973年の解説にもあり、いずれも図7-8に引用した土器片（川合2004）を説明したものと考えられる。田中氏は解説文の見出しに、「昭和25～30年頃のこと」と掲げているので（田中1973）、No.6・7も1950年代前半の情報と思われる。「23」番地は、現在の遺跡範囲北西端付近に位置する。1950年前後は、国道拡幅に向けて家屋の移転が進んだ時期と思われる、遺物採集の機会があった可能性は高い¹⁷⁾。

図7-8は度々展示公開されたようだが、この頃には「晩期」という表現で括られて、同19との時期差（型式差）は意識されていなかった。それどころか1980年代には、縄文時代の情報が欠落するような扱いであった（No.9）。Aや周辺の情報は、戦中戦後の混乱の中で公式記録が残されないままに忘れられた感があった。90年代に入ってBの情報が把握され、①で遺跡の良好な残存が確認されると、発掘調査も繰り返し実施されるようになった。①以降に実施された14件の調査のうち12件で縄文時代の遺物が出土している。

図6には、玉ノ井以外の発掘調査区も記入した。高蔵遺跡¹⁸⁾では70件以上の発掘調査が行われて、弥生前期以降の集落遺構や墓域・古墳群など多くの遺構・遺物が発見されている。しかし、縄文時代の遺物はわずかな土器片が散見に出土するのみで、明確な遺構は把握されていない。現在知られる情報には、晩期

における玉ノ井の集中的な土地利用と、弥生前期における高蔵への拠点の遷移が示されている¹⁹⁾。

3. 縄文時代の玉ノ井遺跡

発掘調査は、①～③・Cの14地点、約2,310㎡で実施され、Cと①以外では縄文時代の何らかの情報が得られている。旧石器も出土しており、③では角錐状石器、⑦では剥片(石刃)を見るが、遺跡範囲内では草創期～後期中葉の情報は知られていない。弥生時代以降も居住や埋葬に関わる遺構など多くの情報があるが、ここでは冒頭で示した1～4期のみを対象とする。

1期の情報は限られ、後期末に遡る可能性がある住居や顕著な土器は、③でしか見られない。1～2期の在土器は、口縁部に横帯状の文様を配する他は装飾に乏しく、条痕調整が主体の胴部片では型式比定が困難である。③の5号住居址²⁰⁾は、床面出土の土器が「縄文時代後期末から晩期初頭」で、遺跡形成の端緒であるという(図7-1～3)。この時期の埋葬遺構が③では確認されていないので、墓域形成は5号住が「機能していた時期よりも下」とするが、調査区西端の2軒の住居と、おもに東半に集中する埋葬を把握した③の情報のみで強調すべき結論ではない。現状では、墓域

を伴う居住域が、③周辺で後期末頃から発達し始め、2期を通じて継続したと推定される。

2期の情報は③に豊富で、2号住居(図7-13・14)や埋葬人骨13体、土器棺墓3基(同12)等がある。こうした様相は、周辺にも広がっていたと考えられる。西隣のBでも、同時期の遺物が採集され(同5・6・16)、貝層が存在した可能性は高い。地山高を見ると遺構の集中様相が③に及んでいた可能性は低いが、少量の縄文時代遺物の主体は2期である。弥生以降の住居が密集する④や、大半が未掘の⑩でも同様なので、最高所周辺に2期の遺構・遺物が集中すると理解される。遺跡北部の⑦やNo.6でも2期の遺物は出土しており、集落周辺域の範囲は特定できない。

③の人骨は、埋葬姿勢がわかる10体は屈葬である。4歳前後(性別不明)、9歳前後(男性)²¹⁾の他、成人女性6体、男性2体で、頸部を観察できる成人骨全てに抜歯が認められた。土器棺墓3基には、3歳頃までの乳児(または死産児)が収められていた。2期の埋葬は、③東半に集中するが²²⁾、⑤には上半を削られた土器棺墓1基(元刈谷～稲荷山式)があるので、2期の墓域の範囲・構造推定も複雑である。

1～2期の貝層の分析では、ハマグリが最多で、他

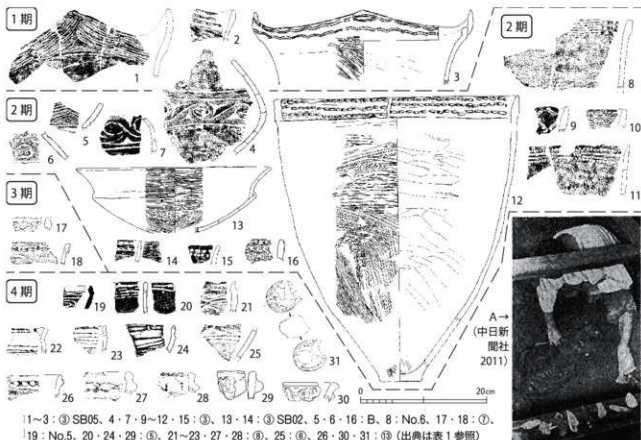


図7 玉ノ井遺跡出土人骨写真・土器実測図

に二枚貝ではオキシジミ、シオフキ、オオノガイ、マガキの比率が高く、巻貝ではアカニシが多く見られた。内湾砂底や干潟で採集できるもので、註15で示した85番地や後述の⑧と明確な差異は認められない。

③の魚骨分析(柳瀬・山崎 2005)は、2期の人々が、内湾や河口域で春から夏に來遊する魚種を中心に漁労活動を行なったことを把握した。マイワシなどの網漁及びクロダイ属やスズキ属などの刺突漁が想定され、大型のマダイは伊勢湾口〜湾外部で漁獲されたものが搬入された可能性が高いとのことである。台地下への通路が玉ノ井小谷とは限らないが²³⁾、水場や舟着場は必ず存在したと考えられるので、埋蔵文化財包蔵地の範囲に拘らない周辺情報の把握方針が求められる。

3期の遺物は、③⑦で少量の土器片を見るが、遺跡としては低調期である。2期と4期の間には、遺跡内の土地利用に断続期間があったと推定される。

4期の遺物は、稀薄ながら広範に分布する。明確な遺構は少なく、土器の量が最も多いのは⑧の弥生後期住居跡内の二次堆積貝層中である(図7-21~23・27・28)。晩期末葉の土器片を多く含む貝層は、「ハマグリ、オキシジミ、アカニシなどの破砕貝片を非常に多く含む」。屈葬人骨3体は、これらの土器が年代を示すと考えられる。抜歯がある成人女性の他は性別不明で、20歳前後と4歳前後である。⑧北部には平地式住居跡の可能性が示されたが、住居であれば墓(埋葬人骨)とかなり近接する。⑧の他、⑤⑦⑨には4期の土器が目立ち、④⑩⑪とC以外の地点では4期の土器が出土している。墓域を含む生活域の中心が高所西部の西向き緩斜面に遷地した可能性がある。⑬の腰部片(図7-31)は後頭部結髪土偶と考えられる²⁴⁾。

⑥及び⑦付近では4期に下呂石河川礫素材の石器製作が推定されている。下呂石の流通・利用は後期後半から盛んになるが、晩期にかけて石器製作技術の顕著な変化は捉えられないので、同様な石材が出土した③や⑧でも近隣での石器製作の可能性が指摘される。

③の情報量が突出していることは間違いない。③周辺に縄文時代の遺跡中心部が想定される。加えて⑤・⑧・Aの遺構の存在から、標高10mの推定等高線が示す範囲の北西部に、縄文時代の遺跡の主体部が展開していたと推定できる。③の東方には縄文の情報が少ないが、Cで縄文土器が出土しなかった状況は、土地利用が希薄だった可能性を示す。ただし、Cの東側は近代以前に削平が進んでいたと考えられ²⁵⁾、実際の確認は困難である。遺跡南縁の東西道路沿いの土取は近代以前に行われて、森後町まで繋がっていた10m等

高線が示す高まりは削開されている。遺跡南縁部に遺構面の残存は期待できないが、南方の森後公園周辺(森後町遺跡)で10m等高線が示す微高所付近の様相は把握されていないため、縄文時代遺跡の南端も未だ特定できていない²⁶⁾。C報告は古墳時代に関する所見の中で、Cが①〜④とは「浅い谷で分かれた」「彼方の土地利用の仕方が異なっている」と述べる。玉ノ井遺跡と森後町遺跡の境界付近を谷頭にする旗屋浅谷について、③が1.4m高い前提で「谷」を評価したものと推定している。その高さは誤認(註2参照)であるので、谷頭を③とCの間に想定する根拠は無く、両地点の間に明確な地形の区分は無かったと考えられる。浅谷が縄文集落の南縁を画した可能性は認めるが、微地形の推定復原には情報が不足している。

③の情報量が格段に豊富である状況は、この地点周辺の特異性に由来すると考える。④⑩や⑤・Cでは、弥生中期以降の住居跡が密集し、特に④⑩では著しい重複を見る。しかし、③では平安時代の住居跡6軒を認めたものの、それ以前の顕著な遺構形成が行われなかったことで、縄文の遺構が良好に残存したと考えられる。Cにも弥生時代〜古代の住居が散在し、かなり削平を受けている⑤にも弥生〜古墳時代の3軒の住居跡が残る状況を見れば、古墳時代以前の③付近は利用が規制されていた可能性が考えられる。

類似の規制は、⑨にも存在した可能性がある。隣地の⑧では縄文晩期の埋葬が明確でありながら、弥生時代には住居が建てられている。しかし、⑧よりも基盤が高く、遺跡中心域に近い⑨では、中世まで顕著な構築物の痕跡がない。縄文の遺構がなく、わずかな遺物しか残らない状況は、晩期の時点で何らかの規制が働いて、以降もその意識が引き継がれた地点であった可能性を感じさせる。ただし、貝層や顕著な墓域が形成された③と、空白域にも見える⑨の規制が等質であった、あるいは関連があったとは限らない。

西日本で後期後葉に凹線文土器が発達した頃、伊勢湾東岸から三河湾沿岸は地域の独自性を高めた。1〜2期に東北地方で発達した瘤付土器や大洞式土器の影響は、信州や北陸を経由して微弱に受容したが、在地土器は簡素な伝統を守り、玉ノ井遺跡もその動きに連動していた。3期に西日本からの影響が強まり突帯文土器が濃尾平野に進出すると、玉ノ井は低調期を迎えた。4期にはおもに信州からの影響で浮線文土器を伴う条痕文土器を用いる人々が活動したが、縄文文化の伝統は、やがて弥生(遠賀川系)文化と融合していった。玉ノ井の縄文晩期遺跡終焉の理解は、高蔵遺跡の成立

と切り離すことはできないであろう。

おわりに

文中、報告書記載に多くの誤りを指摘した。筆者も長年作成に関わり、同様のミスを繰り返してきた²⁷⁾。写し間違い、書き間違い、入力ミス、勘違い、思い込み。赤面の至である。誤りの指摘が本稿の目的ではないが、誤りを確認・修正しなければ期待する精度の分析はできなかった。他人を巻き込むつもりはないが、人はミスをする生き物である。時間や締め切りを追われる作業が解消されたとしても、ミスは消滅しないだろう。明らかな誤りは利用者各自の修正も可能だが、数値の微妙な誤差や基本情報の誤りは新たな誤りに繋がることもある。誤りとその修正結果を共有する工夫も求められている。

記録保存と呼ぶ埋蔵文化財発掘調査報告は累々と蓄積し、奈良文化財研究所が公開するデータベースの登録は、9万件を超えている²⁸⁾。玉ノ井遺跡の報告書10冊のうちPDF添付があるのは②～④の2冊である。本稿は、玉ノ井遺跡の情報を集約することで、遺跡への関心の高まりを期待した。詳細分析に至らず未完の擱筆となったが、市街地の下に埋れた遺跡の理解が深まり、可能な限りの保存に繋がることを願う。

矢野さんには、関西縄文文化研究会の活動を通じてお世話になってきた。ローカルな晩期遺跡の情報ではあるが、杉沢遺跡や宮崎遺跡を分析する際に、東海の情報のささやかな更新が一助となることを祈って、矢野さんの勇退を寿ぐ本誌に掲載を願ったものである。

末尾ながら、本稿の作成に際して次の方々にご教示・ご協力をいただいた。お名前を記して謝意を表する(敬称略)。伊藤厚史、川合剛、木村有作、額細茂、服部哲也、水野裕之、村木誠、山本祐子

註

- 1) 拙文掲載図(伊藤 2023)に修正加筆した。
- 2) 標高は東京湾の平均海面(T.P.)で記す。名古屋市内では、名古屋港基準面(N.P.)に基づく測量も行われる。N.P.=T.P.+1.412mで単純換算できるが、基準値や加減値の錯誤に要注意である。本稿作成に際して、玉ノ井3次報告(額細他2003)断面図の数値に疑義を感じたので、市教委文化財保護課に確認を求めた。同書の例言はT.P.を用いると記すが、3次分はN.P.であったと教示を受けた。4次分はT.P.で表記されていた。表1のNo.13(③)には修正値を示した。以下No.は表1の番号に対

応し、丸数字等の記号で地点を示す場合もある。

- 3) No.9(市教委1981)に、(市教委2006)の変更等を加筆した。玉ノ井遺跡の時代欄は「縄文～中世」と修正されたが、出土遺物の加筆はない。また、その後資料添付された熱田-C遺跡の範囲変更と旗屋遺跡以降の追加を加筆した。北山古墳は藤井康隆氏の推定(藤井2008)を参照した。児御前(このごぜん)古墳は、伊藤厚史氏の推定図(伊藤2020・24)を参照したが、存在に否定的な深谷淳氏の説(深谷2009)もある。図5下に説明を付加。
- 4) No.17の範囲変更は、No.16(C)予定地の試掘結果を踏まえた拡大である。愛知県教育委員会への具申は筆者が担当したが、地形的変化が見えない玉ノ井遺跡から森後町遺跡の間を埋めて、現状で段差が顕著な街区(道路)を境界とすることで、包蔵地としての取り扱いを明瞭化すべきと考えて、森後町遺跡の一部を玉ノ井遺跡に含めた。この作業のみを優先して、①による南西方向への拡張を含めなかったのは筆者の不手際である。
- 5) 名古屋南部史料刊行会編『名古屋南部史』(1952、臨川書店)によれば、1891年の町村廃合で東熱田村は東古渡村と合併して古澤村となり、役場は東熱田に置かれた。
- 6) 名古屋市蓬左文庫所蔵本を底本とする『張州雑誌』第3巻(1975、愛知県郷土資料刊行会)を参照した。
- 7) 山下勘次氏は、岡本家の別荘にあった玉ノ井(井戸)が、威徳院に残る旨を記す(山下1975)。同様の記載は、(堀田他1962)にも見られる。図6の②東隣地にある。
- 8) 野村辰美「熱田の町の人々」『新修名古屋市史』第三巻(1999、360頁)に屋敷に関する記述がある。1599(慶長4)年頃に起きた熱田の大火の復興に際して、徳川家康の指示で寺院(如法院)が移転し、その座主の新たな居宅に御正徳の屋敷が充てられたという。如法院は、江戸期を通じて森後町南部に位置していた。
- 9) 西加藤家伝来の「熱田之図」による。原図は戦災焼失して模写しか残っていないという。(堀田他1962)の改訂再版(1963)、三版(1977)に添付。
- 10) 復刻版は、模写図を全面改訂している。
- 11) 『熱田町旧記』を愛知県図書館貴重本デジタルライブラリーで参照。1699(元禄12)年成立で近代の写と推定される同書は「今清水不出」と記す。
- 12) 図6は、名古屋都市計画基本図(R2-R3)に加筆した。③報告p.4に用いた同図(S53-S57)が示

- す 10 m 等高線は、森後町遺跡内にしか存在しない。民地内の情報が欠落する市街地の地形図に対して、発掘調査記録（報告書）の地盤高情報はもっとも詳細である。
- 13) 見学直後の日録には「之も広い意味で熱田貝塚の一部なりとの事であったが」「別貝塚と考える方がよいかと思ふ」と記している（酒詰 2010）。
- 14) 坪井邸の位置は「名古屋市区住者全国 昭和 4 年調」「昭和 8 年調」を参照した。「番地」の位置は「名古屋市区住宅案内図帳 昭和 32 年版 熱田区」（1957、住宅協会）及び「名古屋市区全商工住宅案内図 熱田区 昭和 33 年新版」（1958、日本住宅協会）、「昭和 36 年版」（1961、住宅協会）を参照した。いずれも名古屋市中区中央図書館蔵書、以下番地に関わる典拠は同じく。
- 15) B の西部あるいは西側と思われる。1 軒は防空壕の「四圍に貝の断面が出て」おり、「アカニシ、ハマグリ、バイ、オキシジミ、オオノガイ、カキ」が「表土 15 種、貝層 25 種、貝層下土層の厚さは不明。土器は熱田と同じ彌生式らしい」。もう 1 軒は「表土 5 種、貝層 25 種、貝層下土層の厚さは不明。貝はアカニシが多く、ハマグリ、ツメタガイ、ウミナナ、オキシジミ、カキ、サルボウ」と記す（酒詰 2010）。
- 16) No.5 に名古屋大学の澄田氏の名前も見える。同大博物館がインターネット公開する収蔵資料に、「玉の井遺跡」の「弥生土器、貝殻」があり、澄田氏採集遺物の可能性がある。玉ノ井遺跡では、北村斌夫氏が遺物採集しており、名古屋市博物館に寄贈された「鹿形土製品」は弥生時代後期と推定されるものである（村木 2008）。
- 17) 註 14 で示した住宅地図の番地と、田中氏・吉田氏の情報が一致している確証はない。
- 18) 石黒良人氏は、高線遺跡を分析するために遺跡付近の等高線推定図を作成した（石黒 2011）。この図にも註 2 で触れた基準高の混乱が影響している。1 次調査の報告（村木他 2003）は、1981 年調査当時の N.P. で作成したと記すが、石黒氏は T.P. と捉えたようである。このため推定図中の 11 m 等高線は存在せず、10 m 等高線は 1 次地点周辺で収束すると思われる。また、その西方の 20 次地点周辺の 9 m 等高線が示す顕著な高まりも、存在しないと考える。20 次（服部 1999）とその南東近隣地点の報告書（廣田・杉山 2001）は、T.P. を用いたと明記する。しかし、周辺地形写真から両地点の標高値には誤差があると推定する。N.P. との誤差とは断定できず、筆者には原因を特定できない。市教委は、市内の調査記録について標高・座標の正否を確認し、情報を開示するべきである。正確な情報に拠らなければ、石黒氏や本稿のような作業は成立しない。
- 19) 玉ノ井の北約 1.5 Km の古沢町遺跡では 4 期の溝状遺構から条痕文土器が出土している。玉ノ井と同様に速賀川系土器は認められない（川合 2008）。
- 20) 5 号住居址は「平地式住居」と推定されている。市内では守山区牛牧遺跡で周堤を持つ晩期の平地式住居 2 軒が知られている（川合 2008）。牛牧遺跡では、平地式住居南方の一段高い地点に住居跡や土器棺墓群がある。最高所付近に立地する玉ノ井の場合、土砂の供給・堆積のメカニズム説明が平地式住居認識の前提と考える。
- 21) 「せまい土壌に押し込むように埋葬された」状況で、座葬の可能性がある。毛利俊雄「玉ノ井遺跡出土の縄文時代晩期人骨」（細田他 2003）より。
- 22) 2 号住居址の想定範囲内に位置する SK68 は縄文時代の土坑墓の可能性が残る。
- 23) 図 2～4 に、遺跡北側から続いて東へ降る道が描かれている。図 4 によれば森後町遺跡東側は旧地形の傾斜が緩く、道路築造で旧状の不明確な神宮北小谷に向かう浅谷が存在した可能性もあって、この道が古く通る可能性が認められる。
- 24) 報告では「土製品」。断面を正位と仮定するため、原因を左へ 25 度回転した。
- 25) C の東は大きく切り下げられ、図 6 の 10 m 等高線が東へ膨らむ付近には 1948～59 年に熱田区役所が置かれるなど、土地利用が活発であった。
- 26) 図 6 の立会地点では、方形周溝墓の可能性のある溝から弥生時代後期後半の土器が出土しているが、縄文時代の情報は知られていない（村木 2008）。
- 27) 本稿準備中にも、作成に関わった文章の誤りに気づいた。No.14 に引用した数値は誤りで、遺跡範囲外に位置した。表 1 には修正値を示した。なお同書では、巻末抄録の北緯・東経の数値が 3 次・4 次とも誤っている。記載値は岐阜県内に位置する。また、図 6 に示した調査区は各報告書の図示に基づくが、②の図は、報告書の座標値に誤りがあると考えた。Y 値を 2.5 m 減じ、図上で 1 mm 西に移動させたが、筆者の誤りの可能性もある。
- 28) 埋蔵文化財等の調査報告書は 90509 件、うち 33442 件に PDF 添付がある。2024 年 9 月 12 日現在。

参考文献 (名古屋市教育委員会は名教委と略す)

- 石黒立人 2011『「高蔵遺跡」近現代史序論』[南山大学人類学博物館所蔵考古資料の研究] 六一書房
- 市澤泰峰 2008『玉ノ井遺跡(第5次)』[埋蔵文化財調査報告書 58] 名古屋市文化財調査報告 74 名教委(以下、このシリーズは『埋文 58』報告 74、のように略す)
- 伊藤厚史 2020『再発見! なごやの歴史と文化』なごや歴史文化活用協議会
- 伊藤厚史 2024『見御前古墳(旗屋古墳)について』[研究紀要] 第 18 号 名古屋市見晴台考古資料館
- 伊藤正人・川合剛 1993『特別展 名古屋の縄文時代資料集』同上(以下、見晴台と略)
- 伊藤正人 2023『雷貝塚の基礎的理解』[東海縄文論集Ⅲ] 東海縄文研究会
- 尾野善裕 1995『石神遺跡・玉ノ井遺跡・高蔵遺跡(第7次)発掘調査報告書』名教委
- 川合剛 2004『名古屋市博物館資料図録 5 愛知の縄文遺跡』同館
- 川合剛 2008『牛牧遺跡』『玉ノ井遺跡』『古沢町遺跡』『新修名古屋市史 資料編 考古 1』名古屋市
- 藤嶋茂 他 2003『玉ノ井遺跡(第3・4次)』[埋文 44] 報告 58 名教委
- 藤嶋茂・山崎健 2005『玉ノ井遺跡出土の魚類遺存体』[研究紀要] 第 7 号 見晴台
- 紅村弘 1956『愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器との関係―土器型式の分類とその編年』[古代学研究] 第 13 号 古代学研究会
- 紅村弘 1963『玉ノ井遺跡』[東海の先史遺跡 総括編] 名古屋鉄道
- 後藤太一 2016『玉ノ井遺跡第 13 次発掘調査報告書』ナカジャクリエイテブ
- 坂重吉 1942『玉の井出土の骨に就いて會員諸賢へ報告』[尾張の遺跡と遺物] 第 44 号 名古屋郷土研究会(愛知県郷土資料刊行会 1982 復刻)
- 酒詰伸男 1967『貝塚に学ぶ』学生社
- 酒詰伸男 2010『酒詰伸男 調査・日録 第 4 集』東京大学総合研究博物館標本資料報告第 82 号 同館
- 千田利明 他 2008『旗屋遺跡』清水総合開発
- 高木祐志 2006『玉ノ井遺跡発掘調査報告書』二友組

- 田中稔 1968『熱田台地考古学資料展』[ライブラリーあつた] No.89 名古屋市熱田図書館
- 田中稔 1973『田中稔・考古資料展』[集成館パンフレット] No.18 荒木集成館
- 中日新聞社 2011『掘りだした三千年前の人骨』[名古屋新聞] 昭和 17 年 8 月 27 日夕刊
- 名古屋市教育委員会 1981『名古屋市遺跡分布図(熱田区)』名教委
- 名古屋市教育委員会 2006『同上』同上
- 名古屋市蓬左文庫 企画 1982『蓬左文庫所蔵古地図複製 No.10』名教委
- 名古屋市役所 1915『名古屋市史』地図編(愛知県郷土資料刊行会 1980 復刻)
- 名古屋市役所 1916『名古屋市史』地理編(同上)
- 野澤則幸 2016『埋文 74』報告 91 名教委
- 野澤則幸 他 2011『玉ノ井遺跡第 7 次発掘調査報告書』名教委
- 野澤則幸 他 2012『埋文 66』報告 83 名教委
- 服部哲也 1999『高蔵遺跡第 20 次発掘調査報告書』名教委
- 廣田吉三郎・杉山仁 2001『高蔵遺跡(五本松町 1202 番地)発掘調査報告書』アイシン開発他
- 深谷淳 2009『断崖山古墳の周濠』[研究紀要] 第 11 号 見晴台
- 藤井康隆 2008『高蔵遺跡』[新修名古屋市史 資料編 考古 1] 名古屋市
- 堀田一雄 他 1962『史跡あつた』(熱田研究よもぎの会編) 泰文堂
- 水野時二 他 監修 1992『なごやの町名』名古屋市計画局
- 水野裕之 2001『玉ノ井遺跡第 2 次発掘調査』[埋文 37] 報告 50 名教委
- 水野裕之 2015『玉ノ井遺跡第 11 次発掘調査報告書』[埋文 73] 報告 90 名教委
- 村木誠 他 2003『埋文 45』報告 59 名教委
- 村木誠 2008『玉ノ井遺跡』『森後町遺跡』『新修名古屋市史 資料編 考古 1』名古屋市
- 山下勘次 1975『熱田北部における旧本町通り界限』(私家版)
- 吉田富夫 1957『名古屋考古ガイド』[文化財叢書] 第 7 号 名古屋市経済局貿易観光課

